

成塚石橋遺跡Ⅲ

一級河川荒川河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

1991

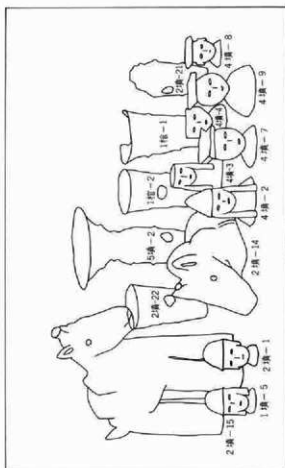
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

成塚石橋遺跡 II

一級河川蛇川河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 II

1991

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



巻頭カラー

序

太田市西北部の成塚地域に、県企業局が成塚住宅団地を造成したのに伴い、その付近を流れる一級河川蛇川の河川改修工事が併行して行われました。

ご承知のように、太田市は、東国最大規模を誇る国指定史跡、天神山古墳が物語るように、古代文化が栄えた地であり、埋蔵文化財が数多く分布しています。

蛇川の河川改修工事が行われる成塚地域も、付近に7世紀末に建立された寺井廃寺跡や胸形神社埴輪窯跡・県指定史跡二ツ山古墳・鶴山古墳等多くの埋蔵文化財があります。このため、河川改修計画時から埋蔵文化財発掘調査の必要性がさげられていましたが、昭和61年度に工事が着工されると同時に、河川改修対象地域の下流より埋蔵文化財発掘調査が行われました。昭和61・62年度に調査した分については昭和63年度に「一級河川蛇川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ、成塚石橋遺跡」として、調査報告書を刊行しました。

上流部分については、昭和63年・平成元年・平成2年度の3回にわたって調査が行われ、本年度に報告書刊行のための整理作業を行いました。本報告には、古墳時代の住居跡をはじめ、帆立貝式の1号古墳から出土した人物・馬形等の形象埴輪、円筒埴輪棺等、古代文化が栄えた太田市の歴史に新しい頁を加えるような調査成果が報告されています。

今回調査報告書を上梓するに際して、発掘調査・整理作業を通して始終ご指導・ご協力をいただいた県土木部河川課、県教育委員会文化財保護課、太田市教育委員会等に衷心より感謝の意を表すと共に、本報告書が県民・研究者の皆様に広く活用されることを願い序とします。

平成3年3月27日

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

例 言

1. 本書は、一級河川蛇川河川改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告書「成塚石橋遺跡」の第II集である。
2. 成塚石橋遺跡は、群馬県太田市成塚字諏訪1001-1、2番地他、字街道端1012-1、2番地他、字上新田1054-1番地他に所在する。
3. 発掘調査は、群馬県土木部河川課の委託により、㈱群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 調査を実施した期間は次の通りである。

発掘調査 第1次(昭和61・62年度)

昭和62年2月16日～6月30日(第I集として刊行済み)

第2次(昭和63年度) 昭和63年7月1日～昭和63年10月30日

第3次(平成元年度) 平成元年10月1日～平成元年12月31日

第4次(平成2年度) 平成2年4月4日～平成2年5月31日

整理作業 第1次(昭和63年度) 昭和63年7月1日～平成元年3月31日

第2次(平成2年度) 平成2年4月4日～平成3年3月31日

5. 調査組織は次の通りである。

事務担当 白石保三郎、邊見長雄、松本浩一、田口紀雄、上原啓己、神保侑史、住谷進、岩丸大作、巾隆之、国定均、笠原秀樹、須田朋子、小林昌嗣、吉田有光、柳岡良宏、野島のぶ江、並木綾子、今井もと子、松井美智子、角田みづほ

調査担当 第1次(昭和63年度)

相京建史、中山茂樹、小島敦子

第2次(平成元年度)

下城 正、中山茂樹、松村和男

第3次(平成2年度)

下城 正、高井佳弘、根岸 仁

6. 本書作成の担当者は次の通りである。

編 集 小島敦子(昭和63年度) 中山茂樹(平成2年度)

本文執筆 巾隆之、下城正、相京建史、中山茂樹、小島敦子で分担した。文責は文末に記した。関邦一、南雲芳昭の両氏に専門的立場から寄稿していただいた。

遺構写真 各年度の調査担当者

遺物写真 佐藤元彦(当事業団職員)

遺物観察 小島敦子、新井悦子、中山茂樹、福島恵理子

古墳出土遺物については、徳江秀夫に。近世陶磁器については、大江正行に。縄文土器については巾隆之に依頼した。

遺物実測 第1次 新井悦子、新谷さか江、高橋とし子、岩渕フミ子、田中富子、山口淳子、笹尾ヨシ子

第2次 福島恵理子、平野照美、大友幸江、茂木範子、長岡和恵、小菅優子、水出かおる

3次元測定機械班の、長沼久美子、佐藤美代子、高梨房江、尾田正子、千代谷和子、八峠美津子の応援を得た。

図版作成 当整理班 嘱託員、補助員。

7. 発掘調査および本書の作成にあたり、下記の機関及び諸氏より御助言、御協力を得た。記して感謝の意を表したい。(敬称略・五十音順)

県教育委員会文化財保護課、県企業局東毛開発事務所、太田市教育委員会。飯島静男、石関伸一、加部二生、木暮仁一、鹿田雄三、西田健彦。その他に、当事業団職員。

8. 出土遺物は一括して群馬県埋蔵文化財センターに保管してある。

9. なお調査にあたって、地元区長会には多くの便宜を図っていただいた。

また、下記の方々に発掘調査に従事していただいた。記して感謝の意を表します。

青木貞子、青木集一、阿佐見ふくの、阿部利一、石川志子、石川よね、石川芳江、石関将江、板垣てる子、井野芳雄、井野米子、井野ふみ、猪熊嶋治、内田三重子、浦野祐次、榎本のり子、大沢一江、大沢スミ、大沢光子、阿部静子、阿部セツ子、阿部芳子、岡ナツエ、岡ひろよ、岡好江、大関キン、大福地タイ、大福地次雄、尾林英夫、小鮎きみ江、小鮎春子、春日哲男、川井美代、川田高知、川端登美枝、川鍋はる江、神沢利子、亀井竹吉、鹿沼豊子、木村つや子、木村健雄、久保田とよ、久保田ひろみ、久保田房代、久保田みや子、栗原弘、黒沢ヨシ子、高坂とよ子、高坂ゆき、木暮あさひ、木暮さく、木暮信子、小暮シズ、後藤初治、近藤ハルイ、権田照子、坂下ベン、佐藤初子、佐藤ふじ子、島田家作、島田光恵、島田ヒサ、周藤きん、下境喜久野、下境秀雄、鈴木豊子、諏訪すぎ、須永こう、関根時太、関根きく江、関根権三郎、高木清江、高橋秀子、田島きみ子、田中幹子、田村愛子、津久井増江、戸崎美香、内藤美代子、中島園子、野村政子、萩原敏美、長谷川サワ子、羽鳥なほ子、原島よし子、馬場キヌ、榎沢よし子、深田純彦、福田たみ子、福田春江、星野アヤ子、星野みつ江、堀越きん、前原人見、松井きくの、馬淵豊子、村阿せい、村山松子、柳正幸、涌井満寿子。(敬称略・五十音順)

凡 例

1. 本書の挿図に入れた方位記号は座標北を表わす。
2. 平面図測量にあたって、5 mグリッドを設定した。グリッドの座標は、北西から南東方向へ数字の1から50、南西から北東方向へアルファベットのAからLの記号を用いている。グリッドの呼称は、西隣の座標を使用した。
グリッド基準線と国家座標の偏角は、45°53'15"である。
3. 本書で使用した国土地理院発行の地形図は、
2.5万分の1 「上野境」「桐生」である。
太田市発行の基本図は、
2500分の1 平面図 10番、11番である。
4. 遺構実測図の縮尺は下記の通りである。
竪穴住居跡 1/60 カマド・炉 1/30 古墳 1/100 旧河道
1/300 溝 1/80または1/160 土坑 1/40 堀立柱建物跡 1/60
井戸 1/40 道路状遺構 1/80
主要な遺構の縮尺率は、上記の通りであるが、その他の遺構、及び詳細図・全体図等については、それぞれの図に縮尺を記載した。
5. 遺構の記述は、住居、堀立柱建物、古墳、旧河道、溝、井戸、道路状遺構については遺構毎に、土坑は縄文時代の陥し穴以外は、形態分類毎に行っている。
竪穴住居跡の記述 第I集にほぼ準じ、備考のかわりに調査所見を加えている。
堀立柱建物跡の記述 竪穴住居跡に準じ、平面形を加えている。
古墳の記述 位 置 調査区とグリッドで表わし、隣接古墳についてふれている。
重 複 遺構の新旧関係について述べている。
形状・規模 平面形状や墳丘の各部位の大きさについて述べている。
葦 石 葺かれているかいないかを述べている。
周 堀 各部の幅や深さ、断面形状について述べている。
埋 没 土 周堀内埋没土について、主な挟雑物と、土層の色調や土質を中心にして述べている。
残存状態 墳丘及び墓域全体の残存状態について述べている。
遺物出土状態 埋没土中のどの部分からの出土かを中心に述べ、形象埴輪や朝顔形埴輪の出土について特にふれている。
調査所見 調査から考えられることがらについて述べている。
旧河道の記述 特別な項目をたてず、3つの河道ごとに位置・規模・遺物出土状態等について述べている。
溝・井戸の記述 第I集にほぼ準じている。
土坑の記述 陥し穴・A類・B類・D類・E類の形態に分類している。
道路状遺構の記述 位置、重複、形状・規模の他、走向と残存状態についてふれ、調査所見を加えている。

6. 遺物実測図中の縮尺は、1：4を基本としたが、石鏃などの小型のものは1：2の縮尺で表現してある。大型のものについては1：5の縮尺で表現している。
7. 遺構図及び遺物実測図中で使用したスクリーン・トーンは以下のとおりである。



8. 遺物実測図の表現法は、おおむね第三角法としたが、須恵器破片は第一角法によった。図中の中軸線が実線の場合は直接実測を、1点鎖線の場合は回転実測を表わす。
9. 埴輪の実測図における寛記号と透し穴については、図法上正面で表現できないものについては、その部分だけを側面か上面に展開させた。
10. 写真図版の倍率は、土器は1/3、大型品は1/7に近づけるようにした。小型のものは1/1に近づけるようにした。石器も同様である。ただ、器種によっては倍率の一定しないものもある。
11. 付図については、馬形埴輪の展開図と旧河道遺物出土状態図(器種別)、及び全体図を作成し、必要に応じて多色刷りにしてある。

目 次

序	
例言	
凡例	
I 発掘調査の経過	
1. 発掘調査の経緯と経過	3
2. 発掘調査の方法	4
3. 基本層序	6
II 検出された遺構と遺物	
1. 住居跡	7
2. 掘立柱建物跡	44
3. 古墳	46
4. 旧河道	94
5. 溝	122
6. 土坑	131
7. 井戸	144
8. 道路状遺構	147
9. 遺構外出土遺物	148
III まとめ	
1. 氈物分析報告	150
2. 旧河道について	
(1) 遺跡周辺の微地形と旧河道	154
(2) 旧河道遺物出土状態	156
3. 古墳について	
(1) 成塚古墳群における検出古墳の位置	159
(2) 主な古墳の埴輪樹立	162
4. 馬形埴輪の成形について	169
5. 群馬県における馬形埴輪の様相	174
観察表	195

挿図目次

図1	改修工事と発掘調査区	4	図62	2号古墳出土遺物5	66
図2	基本土層	6	図63	2号古墳出土遺物6	67
図3	58号住居	8	図64	2号古墳出土遺物7	68
図4	58号住居カマドと出土遺物	9	図65	2号古墳出土遺物8	69
図5	123号住居	10	図66	2号古墳出土遺物9	70
図6	123号住居と伊	11	図67	3号古墳	71
図7	123号住居出土遺物1	12	図68	3号古墳出土遺物	72
図8	123号住居出土遺物2	13	図69	4号古墳	73
図9	123号住居関連遺物	14	図70	4号古墳遺物出土状態	74
図10	106号住居と出土遺物1	15	図71	4号古墳出土遺物1	75
図11	106号住居出土遺物2	16	図72	4号古墳出土遺物2	76
図12	107号住居	17	図73	4号古墳出土遺物3	77
図13	107号住居出土遺物	18	図74	4号古墳出土遺物4	78
図14	108号住居と出土遺物	19	図75	5号古墳	79
図15	109号住居	20	図76	5号古墳遺物出土状態	80
図16	109号住居カマド	21	図77	5号古墳出土遺物1	81
図17	109号住居出土遺物	22	図78	5号古墳出土遺物2	82
図18	109号住居関連出土遺物	23	図79	5号古墳出土遺物3	83
図19	117号・118号住居	24	図80	6号古墳出土遺物1	83
図20	117号住居掘り方	25	図81	6号古墳	84
図21	117号住居出土遺物	26	図82	6号古墳出土遺物2	85
図22	120号住居	27	図83	6号古墳出土遺物3	86
図23	120号住居掘り方と出土遺物	28	図84	7号古墳と出土遺物	87
図24	121号住居	29	図85	8号古墳と9号古墳埋設土層	88
図25	121号住居掘り方と出土遺物	30	図86	8号古墳出土遺物	89
図26	122号住居	31	図87	9号古墳	90
図27	5区全体図と埋設土層	32	図88	9号古墳埋設土層と出土遺物	91
図28	5区埋設土層	33	図89	1号円筒埴輪	92
図29	5区埋設土層	34	図90	1号円筒埴輪遺物組合図	92
図30	110号住居	35	図91	1号円筒埴輪出土遺物	93
図31	110号住居出土遺物	36	図92	旧河道の形状と範囲	94
図32	113号住居	37	図93	第1河道の範囲	96
図33	113号住居出土遺物	38	図94	第1河道出土遺物1	97
図34	112号住居と出土遺物	39	図95	第1河道出土遺物2	98
図35	114号住居とカマド	40	図96	旧河道その他の出土遺物1	98
図36	114号住居出土遺物	41	図97	第2河道・第3河道の範囲	99
図37	115号住居と出土遺物	42	図98	旧河道遺物出土状態1	100
図38	111号・116号住居と111号住居出土遺物	43	図99	旧河道遺物出土状態2	101
図39	116号住居出土遺物	44	図100	旧河道遺物出土状態3	102
図40	1号掘立柱建物	45	図101	第2河道出土遺物1	103
図41	1号古墳	47	図102	第2河道出土遺物2	104
図42	1号古墳埋設土層	48	図103	第2河道出土遺物3	105
図43	1号古墳西くびれ部周囲内遺物出土状態	49	図104	第2河道出土遺物4	106
図44	1号古墳出土遺物1	49	図105	第2河道出土遺物5	107
図45	1号古墳出土遺物2	50	図106	旧河道遺物出土状態4	108
図46	1号古墳出土遺物3	51	図107	旧河道遺物出土状態5	109
図47	1号古墳出土遺物4	52	図108	旧河道遺物出土状態6	110
図48	1号古墳出土遺物5	53	図109	旧河道遺物出土状態7	111
図49	1号古墳出土遺物6	54	図110	旧河道遺物出土状態8	112
図50	1号古墳出土遺物7	55	図111	旧河道遺物出土状態9	113
図51	1号古墳出土遺物8	56	図112	第3河道出土遺物1	114
図52	1号古墳出土遺物9	57	図113	第3河道出土遺物2	115
図53	1号古墳出土遺物10・104号土坑出土遺物1	58	図114	第3河道出土遺物3	116
図54	104号土坑出土遺物2	59	図115	第3河道出土遺物4	117
図55	2号古墳	60	図116	第3河道出土遺物5	118
図56	2号古墳東周壁遺物出土状態	61	図117	第3河道出土遺物6	119
図57	2号古墳北周壁遺物出土状態	62	図118	第3河道出土遺物7	120
図58	2号古墳出土遺物1	62	図119	旧河道その他の出土遺物2	121
図59	2号古墳出土遺物2	63	図120	22号・24号溝と22号溝出土遺物	123
図60	2号古墳出土遺物3	64	図121	23号・25号溝と25号溝出土遺物	124
図61	2号古墳出土遺物4	65	図122	28号溝	124

図123	29号～33号溝・35号溝	125
図124	29号～33号溝・35号溝埋設土層	126
図125	29号・30号溝出土遺物	127
図126	34号溝	128
図127	38号溝	128
図128	36号溝	129
図129	37号溝	130
図130	39号溝	130
図131	土坑の規模と分類	131
図132	簡し穴①	133
図133	簡し穴②	134
図134	A類の土坑	135
図135	99号土坑出土遺物	136
図136	B類の土坑	136
図137	D類の土坑①	137
図138	D類の土坑②と96号土坑出土遺物	138
図139	D類の土坑③	139
図140	E類の土坑①	140
図141	E類の土坑②	141
図142	E類の土坑③	142
図143	E類の土坑出土遺物	143
図144	6号・7号井戸	144
図145	8号井戸	145

図146	9号井戸	146
図147	1号道路状遺構	147
図148	遺構外出土遺物①	148
図149	遺構外出土遺物②	149
図150	成塚石橋遺跡台地の地質断面	152
図151	成塚石橋遺跡の軽鉱物組成ダイアグラム	152
図152	成塚石橋遺跡の重鉱物組成ダイアグラム	152
図153	成塚石橋遺跡周辺の地形	154
図154	旧河道と微高地	155
図155	成塚周辺の古墳	159
図156	成塚古墳群と検出した古墳	160
図157	1号古墳埴輪樹立	166
図158	2号古墳埴輪樹立	167
図159	4号古墳埴輪樹立	168
図160	間佐古墳位置図	174
図161	雷電神社跡古墳後円部における配列模式図	177
図162	前方後円墳における埴輪配列図	181
図163	帆立貝式古墳・円墳における埴輪配列図	182
図164	馬形埴輪実測図①	183
図165	馬形埴輪実測図②	184
図166	馬形埴輪実測図③	185
図167	馬形埴輪実測図④	186

表目次

表1	土坑一覧表	132
表2	分析試料の重鉱物の割合	152
表3	成塚石橋遺跡の軽鉱物組成	152
表4	成塚石橋遺跡の重鉱物組成	152
表5	古墳探検記載の古墳	161
表6	検出古墳	161
表7	主な古墳における形象埴輪と朝顔形埴輪	163
表8	群馬県における馬形埴輪集大成表	187

付 図

付図1	成塚石橋遺跡2号古墳馬形埴輪展開図
付図2	成塚石橋遺跡旧河道平面図
付図3	成塚石橋遺跡旧河道遺物分布図
付図4	成塚石橋遺跡旧河道土師器遺物分布図
付図5	成塚石橋遺跡旧河道出土遺物接合図
付図6	成塚石橋遺跡B3和63年度調査区全体図
付図7	成塚石橋遺跡平成2年度調査区全体図

写真図版目次

PL 1	1. 調査区透視 2. 3区全景		
PL 2	1. 4区北半全景 2. 4区南半全景		
PL 3	1. 58号住居遺物出土状態 2. 58号住居遺物出土状態 3. 58号住居カマド 4. 58号住居全景		
PL 4	1. 123号住居全景 2. 123号住居増設土断面 3. 123号住居跡 4. 123号住居遺物出土状態 5. 123号住居遺物出土状態		
PL 5	1. 123号住居遺物出土状態 2. 123号住居遺物出土状態部分 3. 123号住居遺物出土状態部分 4. 123号住居遺物出土状態部分 5. 123号住居遺物出土状態部分		
PL 6	1. 106号住居遺物出土状態 2. 106号住居遺物出土状態 3. 106号住居全景 4. 106号住居貯蔵穴増設土断面 5. 106号住居カマド		
PL 7	1. 107号住居全景 2. 107号住居掘り方		
PL 8	1. 108号住居全景 2. 108号住居跡 3. 108号住居遺物出土状態 4. 109号住居増設土断面 5. 109号住居遺物出土状態		
PL 9	1. 109号住居遺物出土状態部分 2. 109号住居貯蔵穴遺物出土状態 3. 109号住居カマド 4. 109号住居床面 5. 109号住居全景		
PL 10	1. 117号・118号住居全景 2. 120号住居全景 3. 120号住居掘り方		
PL 11	1. 3区住居跡群全景 2. 117号住居カマド 3. 117号住居床下土坑 4. 117号住居貯蔵穴 5. 120号住居全景		
PL 12	1. 121号住居全景 2. 121号住居増設土断面 3. 121号住居遺物出土状態部分 4. 121号住居掘り方 5. 121号住居掘り方遺物出土状態		
PL 13	1. 122号住居全景 2. 1号獨立柱礎跡		
PL 14	1. 5区全景 2. 5区埋設土断面 3. 5区埋設土断面 4. 5区埋設土断面 5. 5区埋設土断面		
PL 15	1. 110号住居カマド 2. 110号住居遺物出土状態部分 3. 110号住居全景 4. 110号住居掘り方		
		PL 16	5. 110号住居カマド掘り方 1. 113号住居全景 2. 113号住居遺物出土状態部分 3. 113号住居カマド 4. 113号住居カマド掘り方 5. 113号住居掘り方
		PL 17	1. 111号住居全景 2. 111号住居掘り方 3. 112号住居全景 4. 112号住居掘り方 5. 112号住居カマド
		PL 18	1. 114号住居全景 2. 114号住居遺物出土状態部分 3. 114号住居カマド 4. 114号住居遺物出土状態部分 5. 114号住居カマド掘り方
		PL 19	1. 115号住居全景 2. 116号住居掘り方
		PL 20	1. 1号古墳全景 2. 1号古墳全景
		PL 21	1. 1号古墳増設土断面 2. 1号古墳増設土断面 3. 1号古墳東くびれ部埋設遺物出土状態 4. 1号古墳西くびれ部埋設遺物出土状態 5. 1号古墳後門部東堀 6. 1号古墳後門部東堀 7. 1号古墳前部全景 8. 1号古墳後門部全景
		PL 22	1. 2号古墳増設土断面 2. 2号古墳増設土断面 3. 2号古墳全景 4. 2号古墳東周堀遺物出土状態 5. 2号古墳北周堀遺物出土状態
		PL 23	1. 2号古墳馬形輪出土状態 2. 3号古墳全景 3. 4号古墳全景
		PL 24	1. 4号古墳全景 2. 4号古墳遺物出土状態
		PL 25	1. 4号古墳増設土断面 2. 4号古墳増設土断面 3. 4号古墳遺物出土状態部分 4. 4号古墳遺物出土状態部分 5. 4号古墳全景
		PL 26	1. 5号古墳増設土断面 2. 5号古墳全景 3. 5号古墳全景 4. 5号古墳周堀 5. 5号古墳遺物出土状態
		PL 27	1. 6号古墳増設土断面 2. 6号古墳増設土断面 3. 6号古墳全景 4. 6号古墳遺物出土状態 5. 6号古墳遺物出土状態
		PL 28	1. 7号古墳全景 2. 8号古墳全景
		PL 29	1. 9号古墳全景 2. 8号古墳増設土断面 3. 9号古墳増設土断面 4. 8号古墳増設土断面 5. 9号古墳増設土断面

P.L.30	1. 1号円筒棺全景 2. 1号円筒棺全景 3. 1号円筒棺全景 4. 1号円筒棺出土状態(復元)		2. 103号土坑 3. 113号土坑 4. 86号土坑 5. 80号・81号・82号土坑
P.L.31	1. 2区・3区旧河道全景	P.L.42	1. 88号土坑 2. 93号土坑 3. 94号土坑 4. 117号土坑 5. 108号土坑 6. 116号土坑 7. 114号・115号土坑
P.L.32	1. 3区旧河道 2. 2区旧河道 3. 2区旧河道		
P.L.33	1. 2区旧河道1面 2. 2区旧河道2面 3. 2区旧河道	P.L.43	1. 78号土坑・7号井戸 2. 6号井戸 3. 9号井戸 4. 8号井戸 5. 9号井戸
P.L.34	1. 旧河道埋没土断面 2. 旧河道埋没土断面 3. 旧河道K-39グリッド遺物出土状態 4. 旧河道J・K-40グリッド遺物出土状態 5. 旧河道J-41・42グリッド遺物出土状態 6. 旧河道J-44グリッド遺物出土状態 7. 旧河道J-46・47グリッド遺物出土状態 8. 旧河道I-49グリッド遺物出土状態	P.L.44	1. 1号道路状遺構 2. 1号道路状遺構 3. 成塚石橋遺跡説明板設置状況 4. 成塚石橋遺跡説明板設置状況 5. 成塚石橋遺跡説明板設置状況 6. 成塚石橋遺跡説明板設置状況
P.L.35	1. 22号・24号溝全景 2. 24号溝埋没土断面 3. 23号溝全景 4. 28号溝全景 5. 23号溝埋没土断面	P.L.45	58・123・106号住居出土遺物
P.L.36	1. 29号溝全景 2. 29号溝埋没土断面 3. 30号・31号・32号・33号溝全景 4. 31号・32号・33号溝埋没土断面 5. 35号溝全景	P.L.46	106・107・108・109号住居出土遺物
P.L.37	1. 34号溝全景 2. 36号溝全景 3. 37号溝全景 4. 34号溝埋没土断面 5. 39号溝全景 6. 38号溝全景 7. 38号溝全景	P.L.47	109・117号住居・9号井戸出土遺物
P.L.38	1. 105号土坑埋没土断面 2. 106号土坑埋没土断面 3. 105号土坑 4. 106号土坑 5. 110号土坑 6. 102号土坑 7. 109号土坑 8. 112号土坑	P.L.48	117・120・121・110号住居 113号住居出土遺物 114・115・111号住居・1号古墳出土遺物
P.L.39	1. 95号土坑 2. 97号土坑 3. 99号・100号土坑 4. 101号土坑 5. 104号土坑 6. 77号土坑 7. 83号土坑 8. 96号土坑	P.L.49	114・115・111号住居・1号古墳出土遺物
P.L.40	1. 76号土坑 2. 92号土坑 3. 98号土坑 4. 107号土坑 5. 111号土坑 6. 87号土坑 7. 89号土坑 8. 90号土坑	P.L.50	1号古墳出土遺物
P.L.41	1. 91号土坑	P.L.51	1号古墳出土遺物
		P.L.52	1・2号古墳・104号土坑出土遺物
		P.L.53	2号古墳出土遺物
		P.L.54	2号古墳出土遺物
		P.L.55	3・4号古墳出土遺物
		P.L.56	4号古墳出土遺物
		P.L.57	4・5号古墳出土遺物
		P.L.58	5・6・7・8号古墳出土遺物
		P.L.59	1号円筒棺・第1河道・旧河道その他出土遺物
		P.L.60	第2河道出土遺物
		P.L.61	第2・第3河道出土遺物
		P.L.62	第3河道出土遺物
		P.L.63	第3河道出土遺物
		P.L.64	第3河道出土遺物
		P.L.65	第3河道・旧河道その他出土遺物
		P.L.66	25・30号溝・96・79・80・117号土坑遺構外出土遺物

成塚石橋遺跡 II

I 発掘調査の経過

1. 発掘調査に至る経緯と経過

一級河川蛇川は、隣接する成塚石橋住宅団地造成に伴う関連事業として河川改修工事を実施することになった。群馬県教育委員会文化財保護課は、当該地が埋蔵文化財包蔵地であることから、昭和60年に河川課・太田土木事務所・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。その結果、工事に先立つ発掘調査を当事業団で実施することになった。

発掘対象面積が約10,600㎡にのぼること、調査時期の設定を増水の恐れのない季節に選定しなければならないこと、事業地内の家屋移転の時期が未定であることなどの問題があるため、単年度では終了できない見通しの中で発掘調査を開始せざるを得ない状況となった。また河川改修の工事工程をにらみながら実施しなければならなかったこともあって、結局昭和62年から平成2年度にかけて4次にわたる発掘調査を実施した。第1次調査は、昭和62年2月16日から6月30日の両年度にまたがり約4,000㎡の調査が行われた。古墳時代中期の集落が発見され、住居跡108軒や旧河川跡をはじめとする数多くの遺構が検出された。第2次調査は、昭和63年7月1日から10月30日の間、約3,800㎡の調査が実施された。当初第1次に接する上流部の調査を行う予定であったが、調査開始時点までに家屋移転ができないことや、遺跡地内を通る道路が近くの小学校の通学路に指定されており迂回路の設定が困難なことと、地域住民の生活道路となっていることなどが重なったため、以上の条件に支障のない地点を選んで調査を実施することになった。そのため発掘地点が上流部で2カ所になったのをはじめ、第1次で調査できなかった下流部の一部や、中流部に橋を架ける計画があたり右岸部の橋脚部分の調査を急執行わざるを得なくなるなど、こま切れの調査を断続的に行わなければならないことになった。上流部では、住居跡がなくなり集落が終了する状況になったかわりに、削平されているものの帆立貝式の前方後円墳をはじめとする古墳が4基発見された。古墳は遺跡地内を通る道路下に続き、舗装の下部は壊されていないことも判明した。下流部では古墳時代の住居跡4軒、右岸部でも同様に住居跡6軒を検出した。第3次調査は、平成元年10月1日から12月31日の間、約1,200㎡の調査を行った。第1次の上流部が対象となり、住居跡4軒と、道路下で前年度から続く古墳4基及び旧河川跡の続きが検出された。第4次調査は、平成2年4月4日から5月31日の間、約1,600㎡の調査を行った。第3次の上流部と一般市道成塚北金井線にはさまれた部分にあたり、第2次で検出した帆立貝式の1号古墳をはじめとする6基の調査を行い、人物・馬形等の形象埴輪群を出土したほか、新たに円筒棺I基が検出された。この第4次調査をもって、発掘調査は終了した。

整理事業は、予想以上に遺構・遺物が多かったことから、単年度での整理と報告書刊行はできないと判断し、2回にわたり報告書を刊行することになった。第I集は昭和61・62年度分の調査をまとめ昭和63年度に刊行したが、第II集は昭和63年度・平成元・2年度の3年間にわたる発掘調査の成果をまとめて、平成2年度に刊行することになった。

本事業を実施するにあたり、県文化財保護課・太田市教育委員会・県土木部河川課・太田土木事務所・企業局・企業局東毛開発事務所・シン航空写真株式会社文化財調査室群馬分室をはじめとする諸機関、地元区長・地域の皆さまの暖かいご配慮をいただいたことに厚く感謝申し上げます。(中)

1 発掘調査の経過

2. 発掘調査の方法

今回の一級河川蛇川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、昭和63年度、平成元年度、同2年度の3カ年計画で行われた。前回の調査で残った部分が、上流側に延長距離で180mあり、最下流部にも約100mあった。また、昭和64年度の段階で未買収地があったり、新たに橋梁建設のための橋脚部分の発掘調査の依頼があったり、調査区域がとびとびになった。そのため、各調査区を1区から5区までの通称名をつけて調査に入った。1区は、蛇川河川改修工事最下流部の約100mの地点である。2区は、蛇川に流入する小水路まで。3区は、未買収地の手前南側まで。4区はそれより北の東武鉄道踏切までとした。なお5区は、蛇川右岸の橋脚取り付け部分のことである。昭和63年度は、1・5区と2区のほとんど、3・4区の一部を調査した。平成元年度は、2区の残りりと3区の調査であった。平成2年度は、4区の残りを、住居の移転を待って調査に入った。

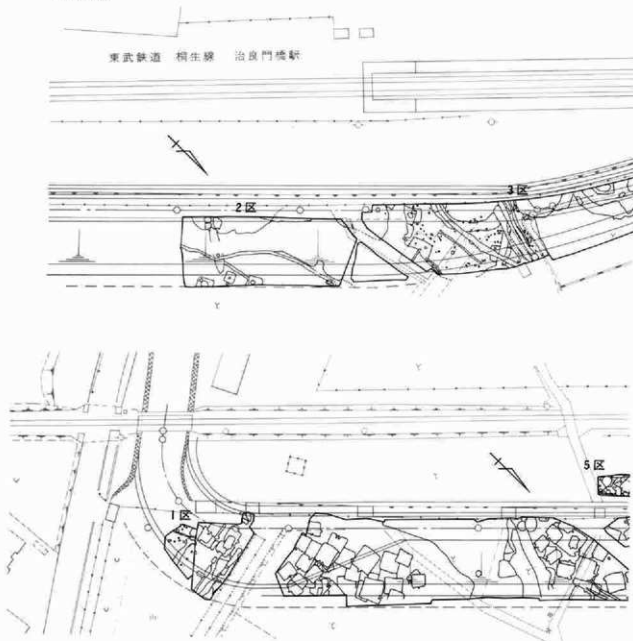


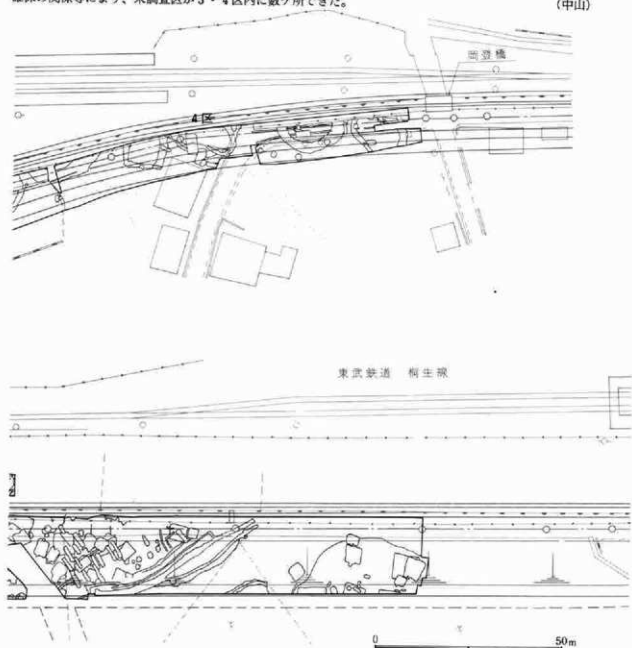
図1 改修工事と発掘調査区

遺構の測量にあたっては、前回調査と同じグリッドを設定した。

遺構の調査も、前回調査と同じ方法によったが、遺構の記録に関しては、一部縮尺40分の1の平面図を作成したものの、そのほとんどは20分の1の平面図を作成した。

安全対策に関しては、杭と安全ロープで柵を設けた。63年度調査では、大雨の後2区と3区の境にした水路から水がしみ出し、土の崩落及び2区調査区内中旧河川跡が水没にあった。そのため、緊急に土のうを積み上げ崩落を防止した。1区についても、蛇川の増水がひどく、あと20~30cmで道路を越えて川の水が調査区に入るところだったので、その後調査を集中的に行い、埋めどし時期を早めた。元年度においては、道路下の調査が行われたので、車・自転車等の進入・事故防止に極力注意をし、車止めを数ヶ所設けた。2年度は、通走路確保の関係から、4区に一部未調査区ができ、さらに安全柵についても、ロープと杭ではなく、鉄製のものを設け、安全確保と共に見学も道沿いに行えるよう工夫した。なお、電柱移設の遅れや、通走路確保の関係等により、未調査区が3・4区内に数ヶ所できた。

(中山)



3. 基本層序

基本となる層序は、各区共に基本的には同じである。

調査区は、畑または屋敷跡であったため、ローム層上面までは耕作によって攪乱されていた。したがって、旧地表面はほとんど残っていない。いわゆるローム層は、場所によって砂や砂礫混じりになる(3区・1区)。ローム層については、分析結果を載せておくので、参照されたい。なお、その結果によれば、風成の褐色火山灰土とまったく同じとは考えられないとのことである(本文中では、便宜上ローム層あるいはローム土の表現を用いる)。ローム層の下位は砂ないしは砂礫層になる。特に3・4区は、径20cm以上の円礫からなり、大間々扇状地礫層の一部と考えられる。それに対して1・2・5区の礫は、5~10cmの大きさの円礫であり、堆積の様相を異にする。さらに1区では、ローム層中に砂礫を挟んでいるのが観察された。

一方、ローム層より上位の土層であるが、大別して、FPを含む土層とAs-Bを含む土層とに分けられる。

これらは、そのほとんどが遺構の埋没土である。本県に分布する歴史時代の火山灰のうち、

As - A 39号溝埋没土中より確認されている。

As - B 古墳周堀・平安期旧河道埋没土最上層より、純層で検出。

(Hr) - FP 古墳周堀・土坑内埋没土中に、5~10mm程の粒径のものが散点するのが確認されている。

(Hr) - FA・As-C 不明。

(中山)

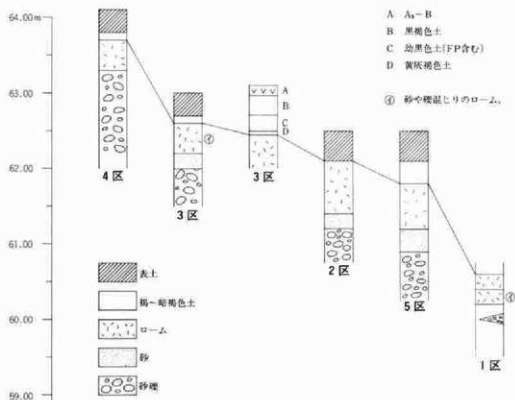


図2 基本土層

II 検出された遺構と遺物

今回の発掘調査で、18軒の住居跡、1軒の掘立柱建物跡、9基の古墳跡と1基の円筒埴輪棺、1条の河川跡、16条の溝、36基の土坑、4基の井戸、1条の道路状遺構が検出された。調査区内という限定された地域内での分布を見ると、古墳時代の遺構が主になる。この古墳時代には、調査区南半中央部にあたるが、小川が流れその両岸に点々と住居が営まれた。その後、この周辺は古墳が築かれる場所となり、住居は小川のさらに下流側へ展開した。もちろん、この古墳時代以前も以後も、人々の生活の跡はあるが、古墳時代と比較すると極端にその密度は低くなる。

河川跡（旧河道と呼称する）については、他の溝と比べて規模が大きいこと、大量に出土した遺物（主に古墳時代のもので、土器片だけで一万点以上）から、周辺の住居跡や古墳などとの関係が強いことをうかがうことができ、第I集の溝の項から独立させて記述することにした。

住居跡については、1区・2～3区・5区の区ごとに分けて記述する。5区は重複が激しいので、重複順に記載することにし、埋没土層図は5区全体図の中で一括して示した。

1. 住居跡

18軒の住居跡が検出された。1区で1軒、2～3区で10軒、5区で7軒である。ただ1軒全部が検出されたものは少ない。1部は調査区域外にかかり、1部は住居同士で切り合い、旧河道に侵食された住居跡もある。

(1) 1区

1軒検出されたが、この住居跡については一部第I集報告書でふれている。

58号住居（図3・4、表1、PL3・45）

位置 K-94・95グリッド 主軸方位 N75°E

重複 東壁上端に、後出する22号溝・24号溝が掘られている。

規模 縦3.10m 横3.04m 深さ0.30m 形状 隅丸方形

埋没土 上半は、ローム粒・ロームブロックを多く含む暗褐色土、下半は、ローム粒・焼土粒の混じる黒褐色土で埋没していた。

掘り方 掘り方底面は、ほぼ平坦である。掘り方調査時に、南東隅の貯蔵穴を検出した。掘り方充填土は、ローム粒と茶褐色土の混土层である。

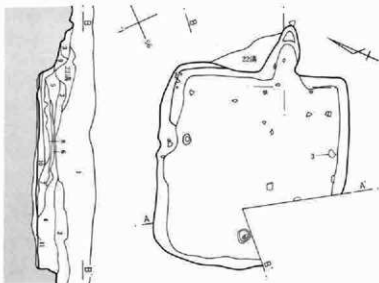
床面 貼床が施されている。掘り方充填土上面は堅く締まっており、硬化面がつくられていた。

貯蔵穴 南東隅に、縦40cm 横30cm 深さ24cmの、円形の貯蔵穴が掘られていた。

周溝 なし。

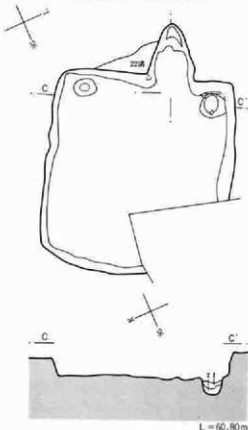
柱穴 なし。

II 検出された遺構と遺物



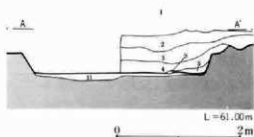
- 58住 1層 暗青灰褐色土。白色小軽石(φ1~3mm)をやや多く含む。しまりは良い。ローム粒子を少量含む。
- 2層 暗褐色土。白色小軽石を1層よりも多く含む。焼土粒子微量。
- 3層 暗褐色土。2層よりもやや暗い。
- 4層 暗褐色土。ローム粒子及びロームブロックの溶混をやや多く含む。
- 5層 暗褐色土。かなり黒味が強い。ローム粒子・焼土粒子・白色小軽石微量含む。
- 6層 暗褐色土。ローム粒子及びロームブロックを多量に含む。
- 7層 黒褐色土。焼土粒子微量。炭化物粒子を少量。ローム粒子及びロームブロックをわずかに含む。
- 8層 暗褐色土。黒褐色土ブロックと溶混・ローム粒子を少量含む。

- 58住 9層 明褐色土。ロームの溶混を多量に含む。しまりは極微。
- 10層 暗青灰褐色土。ローム及び硬い茶褐色土ブロックを多く含む。しまりは良い。
- 11層 ロームと茶褐色土の混土層。しまりは10層よりもさらに硬い。炭化物粒子微量。



- 58住 1層 黒褐色土。焼土粒・炭化物粒を多量に含む。
- 2層 ロームブロックと茶褐色土の混土。焼土粒多量に含む。

図3 58号住居



遺物出土状態 10数点の遺物が床面近くから出土しているが、破片が多い。南東壁際の須恵器杯形土器(図4-3)は、ほぼ完形で出土した。

カマド 位置 東壁中央よりやや南

規模 全長0.92m

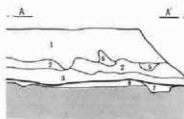
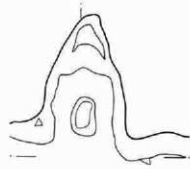
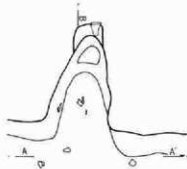
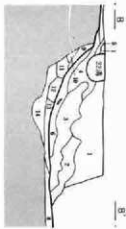
最大幅0.90m

焚き口幅0.50m

袖 明瞭には検出できない。左側にはやや粘土塊が残存していた。

遺存状態 燃焼部および煙道は、0.1mほど壁外へ伸びている。東端の浅くなった煙道部分には、壺形土器体部破片が出土している。最終使用灰面はよく残っており、燃焼部壁面もよく焼けていた。掘り方には、灰や焼土ブロックが入っている。底部には、ロームブ

2. 住居跡



L=60.80m

- 58住 1層 灰褐色土、白色パミス・焼土粒・炭化物粒を含む。しまりがある。砂質。
2層 茶褐色土。少量の焼土粒とローム小ブロックを含む。粘質。

- 3層 黄褐色土。焼土粒を含む。ワッド崩落土。
4層 灰褐色土。焼土粒を多量に含む。砂質。
5層 ロームブロック。
6層 焼土。
7層 黒褐色土。焼土粒・炭化物粒を多く含む。
8層 茶褐色土。焼土粒・灰を混じる。
9層 灰褐色シルト質土。焼土小ブロックを混じる。
10層 黄褐色土。焼土粒を含む。
11層 焼土と灰の混土層。
12層 焼土ブロック。
13層 黒褐色土。焼土粒を多く含む。
14層 黒色土。ローム小ブロックを含む。やや粘質。

ロックを含む黒色粘質土が充填した小穴が穿たれている。

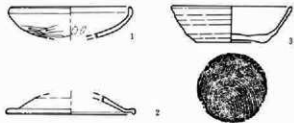
遺物出土状態、燃焼部内には土師器埴形土器破片が、崩落土と混じって出土している。

調査所見 本住居は、調査工程の都合から、2次に分けて掘らざるを得なかった。1次に調査した西南隅は、昭和63年度に刊行した報告書(Ⅰ集)に掲載している。本住居跡は、第2次調査で完掘できたので、今回の報告で改めて報告した。その際、平面図は合成できたが、西半部については、全景写真を撮影することができなかった。

時期は、平安時代である。

(小島)

0 1m



0 20cm

図4 58号住居カマドと出土遺物

(2) 2～3区

本調査区の住居跡は、旧河道左岸に4軒、右岸に5軒検出された。これらの住居跡の時期は、縄文時代の住居跡である123号住居を除き、いずれも隣接する旧河道の出土遺物と同じ時期であり、住居跡と旧河道との何らかの関係をうかがわせる。

II 検出された遺構と遺物

123号住居 (図5～9, 表1～3, PL4・5・45)

位置 3区。J・K-32・33グリッド 重複 29号溝・34号溝に先行する。

規模 長軸 5.37m 短軸 4.16m 深さ 0.33m 形状 歪みを持った方形

埋没土 砂質ロームの二次堆積土で、自然に埋没した様相を呈す。

床面 主柱穴間の住居中央部は非常に固く締っていた。周壁に沿った部分は軟弱であった。(硬化面は、スクリーンでその範囲を示した)

貯蔵穴 なし。 周溝 なし。

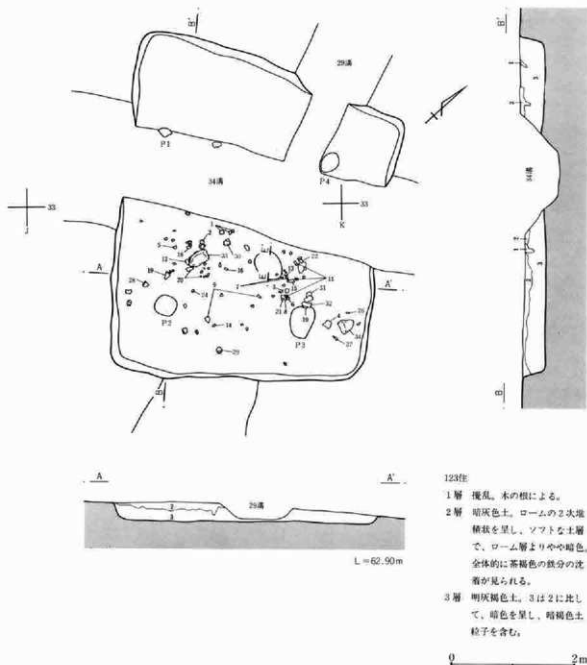


図5 123号住居

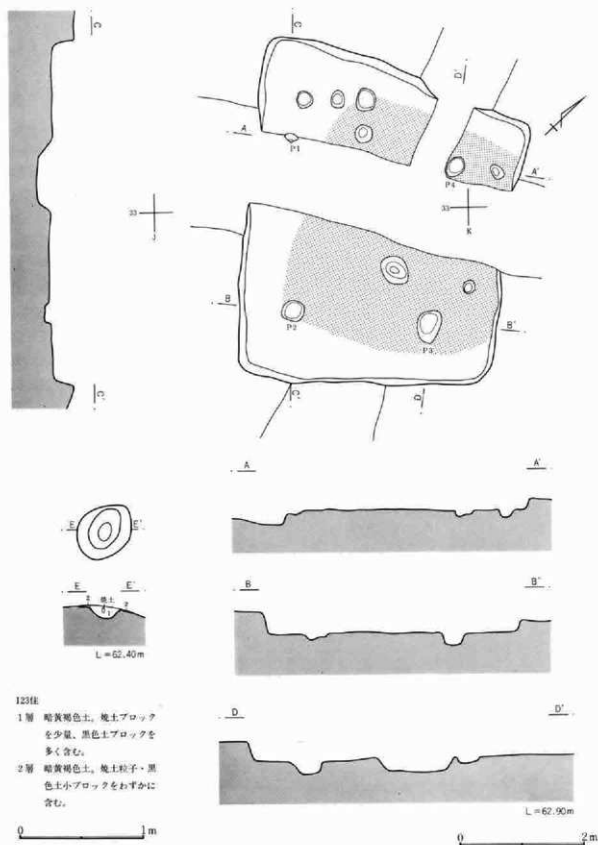


図6 123号住居と炉

II 検出された遺構と遺物

柱穴 4本柱と考えられ、北西隅の1本は34号溝によって切られ、直径・深さ共に不明である。主柱の他に小Pitが7本検出された。

Na	P 1	P 2	P 3	P 4
直径	不明	31cm	45cm	33cm
深さ	不明	10cm	20cm	10cm

遺物出土状態 炉周辺の住居中央に、土器や石器の細片が床面直上から覆土下部にかけて集中して出土した。なお、台石と考えられる、大型偏平の河原石2石が出土した。1石は炉の西方約1mの位置に、他の1石は、炉の東方約1.5mの位置より出土している。また、本住居に後出する29号溝、34号溝には本住居の遺物が多く流出していた。住居内遺物と接合するものもあるので、溝出土ではあるものの、本住居の遺物と判断し、ここに、いっしょに掲載する。

炉 位置 住居中央よりやや東方に寄る。

規模 長軸 0.5m 短軸 0.4m 深さ 0.23m

形態 楕円形の地床炉

遺物出土状態 覆土上層より、数片の土器細片が出土。

遺存状態 炉覆土中には、焼土ブロックが多く含まれていたが、炉の焼けは弱い。

調査所見 縄文時代前期、前半の住居と思われる。

(下城)

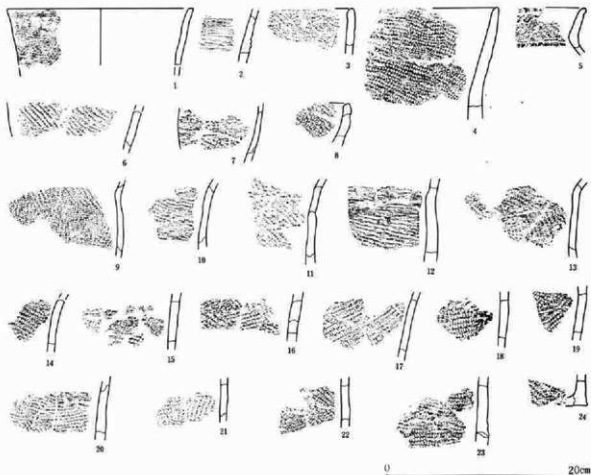


図7 123号住居出土遺物(1)

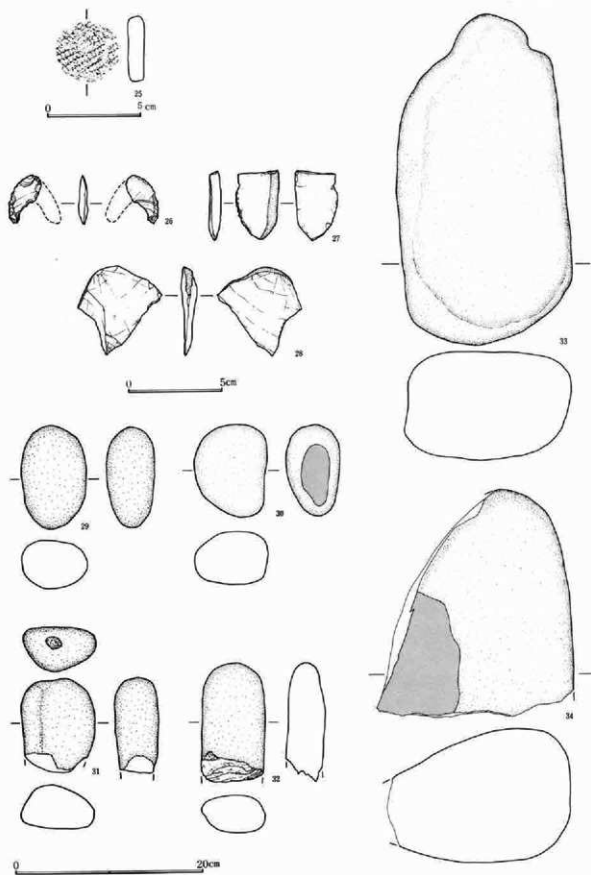


图8 123号住居出土遺物(2)

II 検出された遺構と遺物



図9 123号住居関連遺物

106号住居 (図10・11, 表3・4, PL6・45・46)

位置 2区。L-41・42グリッド

主軸方位 N42°E

重複 カマド上層を、23号溝が切っている。西半の大半は旧河道により侵食されており、平面形は、カマド及び貯蔵穴周辺の住居東南部が検出できたにとどまった。

規模 不明。

形状 不明(隅丸方形か?)。

埋没土 焼土粒、炭化物粒を少量含む、しまりのない茶褐色土で埋没していた。

掘り方 掘り方は施されていない。掘り込んだローム層上面を床面としている。

床面 硬く締まった床面である。部分的に地山中の礫層が露出している。

貯蔵穴 南東隅に長軸1.10m、短軸約0.7mの隅丸長方形を呈する貯蔵穴が検出された。深さは約0.60mである。埋没土上層から図10の4や11が出土している。

周溝 なし。

柱穴 なし。

遺物出土状態 床面直上で、多量の完形に近い土器が出土している。特にカマド右袖脇には、土師器杯形土器(1・3・5)や鉢形土器(8)、壺形土器(10・17)などが集中していた。4の土師器杯形土器は、貯蔵穴に落ち込むように出土した。また、旧河道に侵食された部分にも、本住居跡のものと考えられる遺物(12・13)が出土しているが、原位置とは考えにくい。

カマド 位置 東壁ほぼ中央と考えられる。

規模 全長0.65m 最大幅0.90m 焚き口幅 0.47m

袖 あり。住居内へ0.7~0.8m程のびる。

煙道 カマド東端が23号溝で壊されており、煙道は確認できなかった。

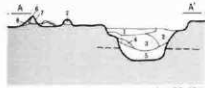
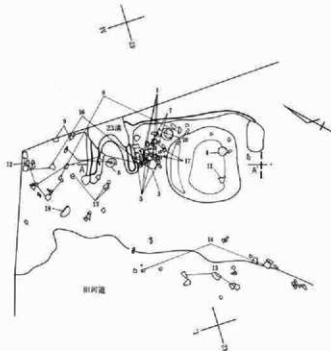
遺存状態 カマドは、あまり深く掘り込まれずにつくられている。両袖は黄褐色粘土で、つくられていた。

遺物出土状態 燃焼部中央に、土師器高杯形土器(6)が、倒立して出土している。支脚として転用されていたと考えられる。

調査所見 出土遺物から、古墳時代中期後半の住居と考えられる。

(小島)

1. 住居跡



- 106住 1層 灰褐色土、炭化物小アブロック・炭化物粒・黄色土粒を多量に混じる。
 2層 茶褐色土、少量の黄色土粒・炭化物粒・焼土粒を含む。
 3層 灰褐色土、炭化物粒・焼土粒と少量の黄色土粒を含む。
 4層 灰褐色土、黄色土粒を含む。
 5層 灰褐色土、小礫を含む。
 6層 焼土。
 7層 黒褐色土、焼土粒を含む。
 8層 黄褐色粘質土、焼土粒を含む。

0 2m

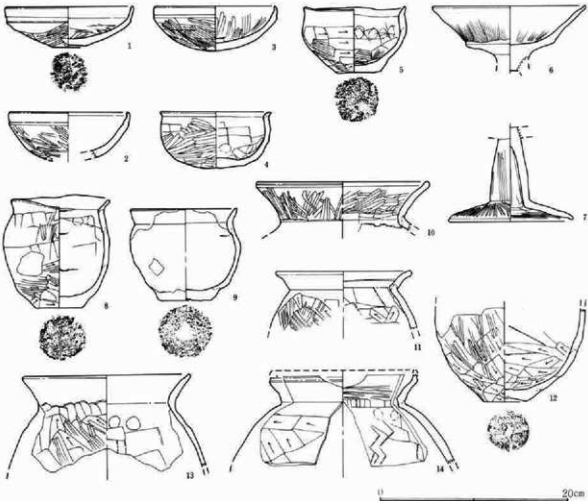


図10 106号住居と出土遺物 (1)

II 検出された遺構と遺物

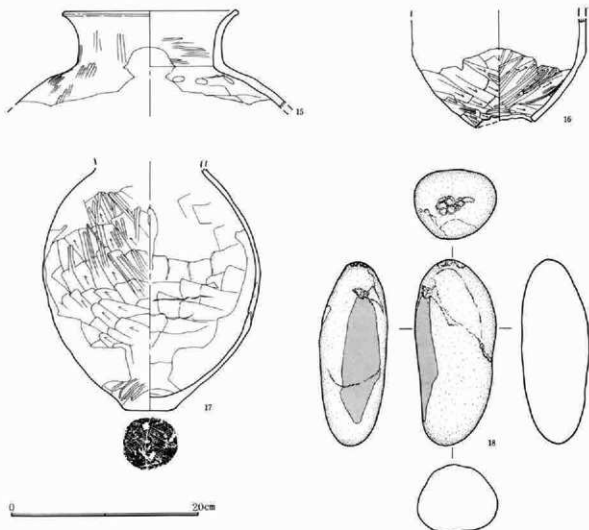


図11 106号住居出土遺物(2)

107号住居 (図12・13, 表4・5, PL7・46)

位置 2区。L-45・46グリッド 西壁方位 N32W

重複 東壁上半が25号溝によって切られ、東部の床面には6号井戸が掘り込まれている。

規模 縦3.70m 横2.50m+α 深さ0.42m

形状 東半が発掘区域外にあるが、調査した部分から推定して、隅丸方形と考える。

埋没土 埋没土は、焼土粒をわずかに含む、しまりのない茶褐色土である。壁際には、ローム粒・小ブロックが混入した褐色土があり、床の硬化面直上には、粘質の灰色土がうすく覆っている。

掘り方 あり。北部に、幅60cm程の帯状の掘り残しがある。掘り方内は、ほぼ10cmの厚さのローム粒を含む灰褐色粘質土で充填されている。

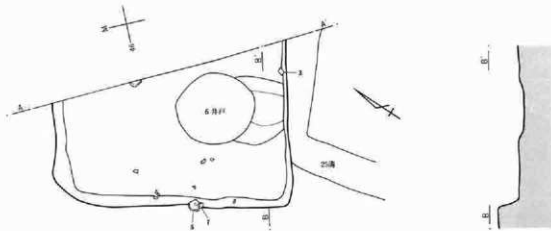
床面 貼床が施されている。東南部には硬化面が残っているが、西壁付近の床面は締まっていない。

貯蔵穴 調査範囲内では、検出できなかった。

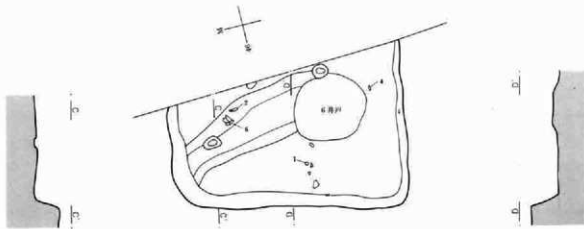
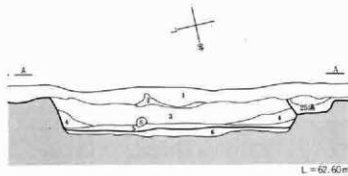
周溝 なし。 柱穴 床面では検出できなかった。

遺物出土状態 床面上には、須恵器杯形土器(3)等の小破片が出土するのみであった。掘り方充填土内に

1. 住居跡



- 107住
- 1層 灰褐色土。表土。軽石、焼土粒、小礫を含む。砂質。
 - 2層 黒色砂質土。
 - 3層 茶褐色土。焼土粒、炭化物粒、軽石を少量含む。
 - 4層 灰褐色土。炭化物粒、黄色土小ブロックを含む。
 - 5層 灰褐色土。ローム粒を含む。粘質。
 - 6層 茶褐色土。φ 1~2cmほどのロームブロックを多量に含む。



0 2m

図12 107号住居

II 検出された遺構と遺物

は、土師器甕形土器（6）や杯形土器（1・2）、埴形土器（4）等が出土している。なお、南西壁上端で出土した土師器高杯形土器（5）は、時期が異なるので住居埋没時に混入したものと考えられる。

カマド 調査範囲内では、確認できなかった。

調査所見 出土遺物から、古墳時代中期後半の住居と考えられる。

（小島）

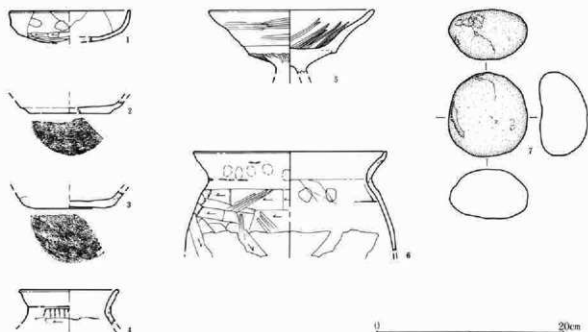


図13 107号住居出土遺物

108号住居 (図14, 表5, PL8・46)

位置 2区。L-47グリッド 主軸方位 N65°E

重複 東壁中央に、住居に先行する落ち込みがあるが、遺構とするには疑問がある。

規模 縦2.94m 横2.65m 深さ0.12m 形状 隅丸方形

埋没土 細かい焼土粒を含む、茶褐色土で埋まっている。検出できた壁高は、12cmと浅い。

掘り方 施されていない。掘り込んだ地山を、そのまま床面にしている。

床面 貼床は施されていない。ほとんど硬化面は検出できなかった。

貯蔵穴 なし。 周溝 なし。 柱穴 なし。

遺物出土状態 遺物の出土する範囲が、ほぼ住居プランとなった。床面は、遺物のレベルよりも5cmほど低く、遺物はやや浮いた状態で出土した。土師器杯形土器（1）1点のみ、床面直上から出土した。

炉 位置 中央部。

規模 長軸0.6m 横0.4m 深さ3cm

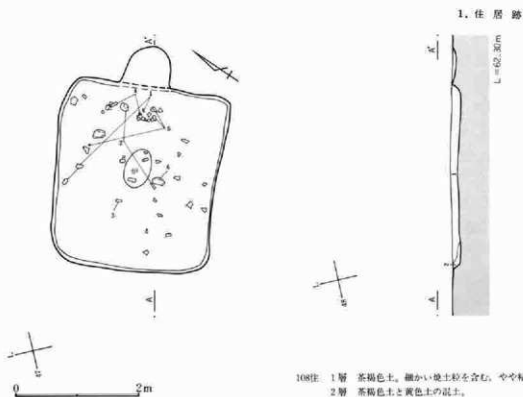
形態 楕円形

遺物出土状態 上層には、土器が出土しているが、炉にともなった遺物の出土はなかった。

遺存状態 住居中央部に焼土がやや集中する部分があり、炉の可能性を考えたが、あまり焼けていない。

調査所見 出土遺物から、古墳時代中期後半の住居と考えられる。

（小島）



108住 1層 茶褐色土。細かい埴土粒を含む。やや粘質。
2層 茶褐色土と黄色土の混土。

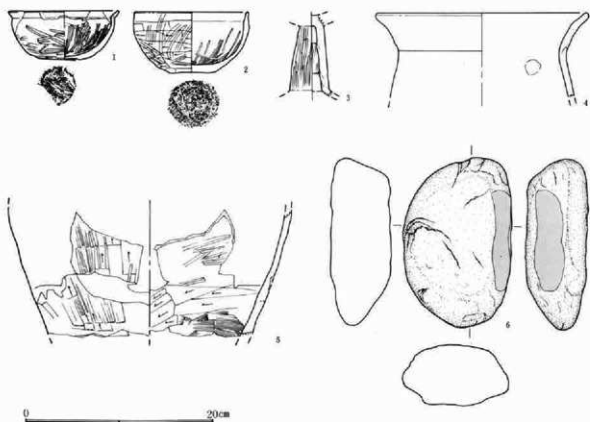


図14 108号住居と出土遺物

II 検出された遺構と遺物

109号住居 (図15~18, 表5~8, PL8・9・46・47)

位置 2区。L-48・49グリッド 主軸方位 N129°W

重複 9号井戸に先行する。 規模 縦4.25m 横2.80m+α 深さ0.33m

形状 隅丸方形と推定される。

埋没土 黄灰色シルト質土小ブロックを含む茶褐色シルト質土や、黄褐色シルト質土で埋まっていた。後出する井戸は、焼土粒や礫を含む黒褐色土で埋まっており、あきらかに、本住居は9号井戸に先行する。

掘り方 掘り方は施されていない。掘り込んだ地山をそのまま床面にしている。

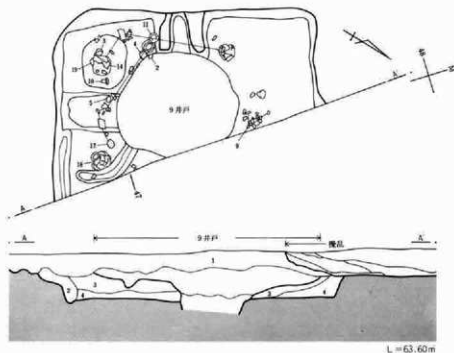
床面 貼床は施されていない。南半部は硬化面が検出されたが、北半部はあまり硬くない。また、南半部で貯蔵穴の東側には、幅25cmの三ヶ月状と幅60cmの楕円形の掘り残り部分があり、その間はやや凹んでいる。中は、硬化している。

貯蔵穴 南西隅に、長径0.86m、短径0.70mのほぼ楕円形を呈する貯蔵穴が検出された。深さは0.49mである。断面形は、ややすり鉢状を呈するが、底面は平らである。出土遺物は、ほぼ底面直上から土師器小型壺形土器(14)や杯形土器(3)が出土している。

周溝 南壁の東半にのみ検出した。幅25cm、深さ2~3cmである。

柱穴 なし。

遺物出土状態 本住居出土の遺物は、その出土状態から2通りに分けられる。1つは、9号井戸に破壊されていない、床面のほぼ直上から出土したものであり、ほぼ原位置で完形に近い形で出土した。土師器杯形土器(1・3・4・5・6)や高杯形土器(10・11・12・13)、壺形土器(17)、壺形土器(18・19)等がある。

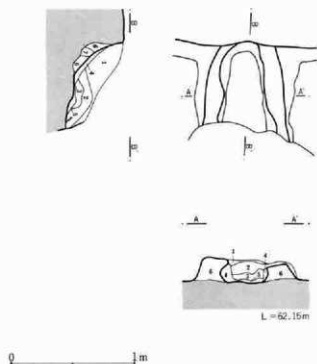


L=63.60m

- 109住
- 1層 茶褐色土、表土、炭化物粒、焼土粒を少量含む。
 - 2層 黒褐色土、しよりのない黄褐色土ブロックを含む。
 - 3層 茶褐色シルト質土、黄灰色シルト質土ブロックを含む。
 - 4層 黄褐色シルト質土。

0 2m

図15 109号住居



- 109住
- | | |
|----|---|
| 1層 | 黄褐色土。やわらかく、ボサボサした感じの土層。 |
| 2層 | 黄褐色土。1層よりやや固い。焼土粒、炭化物を含み、下部はど多い。 |
| 3層 | 焼土。炭化物φ5mm程度ものを2〜3点含む。 |
| 4層 | 赤褐色土。焼土粒・炭化物粒を多く含む。 |
| 5層 | 暗灰褐色土。灰まじりの土層。焼土・焼土粒はみられない。炭化物はわずかにあり、1層よりも、やわらかく、ボサボサしている。 |
| 6層 | 赤褐色土。焼土・灰まじりの土層。 |
| 7層 | 黄褐色土。ロームブロック。 |

図16 109号住居カマド

これらは、この住居に伴う遺物と考えられる。

もう一つは、9号井戸上層で、109号住居床面と同じくらいのレベルで出土したものである。これらは破片の状態であったが、ほとんどが完形に近い状態まで接合・復元することができた。

カマド 位置 西壁中央

規模 全長0.64m 最大幅0.84m 焚き口幅0.33m

袖 あり。9号井戸に切られているが、68cm以上は住居内に伸びている。

煙道 検出されなかった。(住居外へ伸びているとは考えられない)

遺存状態 袖をつくっているのは、焼土や灰が混じった赤褐色土であり、30〜40cmほどの高さで残存していた。燃焼部内両側面は赤く焼けていたが、底面の灰面の遺存状態はあまり良くない。

調査所見 9号井戸で出土した上層遺物は、住居床面直上から出土している土器群と同時期と考えられ、型式学的には本住居に伴う遺物と考えられる。しかし、土層観察からは9号井戸は109号住居に後出しており、住居床面を破壊して掘り込まれている。このことは、109号住居の遺物が、9号井戸掘削によって破壊されたが、9号井戸埋没過程で、109号住居の床面と同レベルの位置に再堆積した。

あるいは、9号井戸が破壊した109号住居の遺物は、9号井戸壁面に残っており、これが9号井戸埋没過程で、109号住居の床面と同レベルの位置に再堆積したかを想定させるが、いずれも決定的ではない。

本報告では、9号井戸上層で出土した遺物も、106号出土遺物と同様に、その住居跡に伴う遺物として扱った。

なお、出土遺物から、古墳時代中期後半の住居と考えられる。

(小島)

II 検出された遺構と遺物

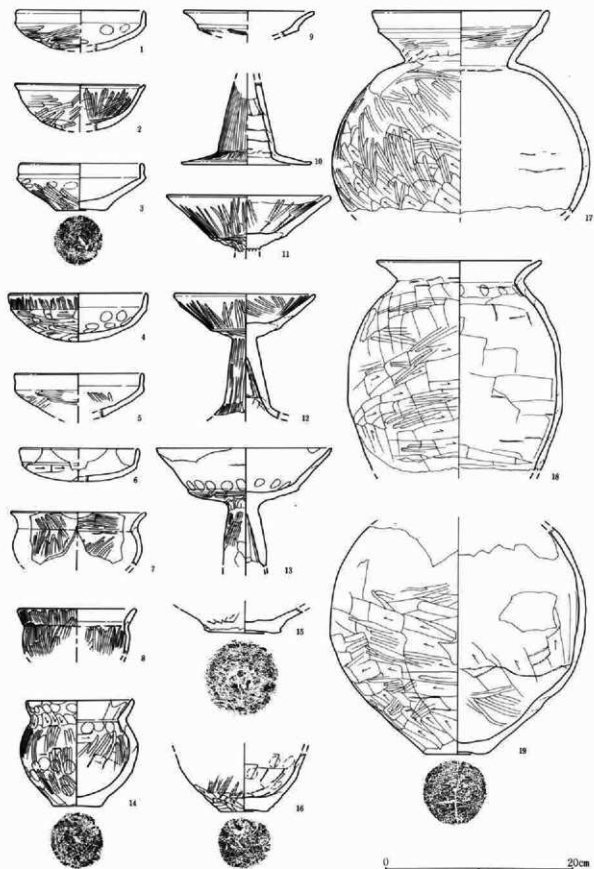


図17 109号住居出土遺物

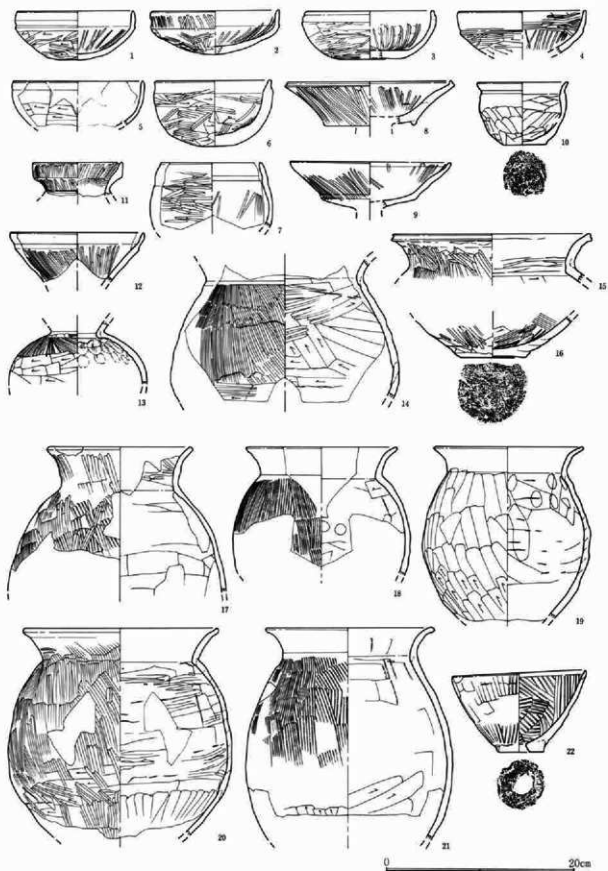


図18 109号住居関連出土遺物

II 検出された遺構と遺物

117号住居 (図19～21, 表8・9, PL10・11・47・48)

位置 3区 H・I-37・38グリッド 主軸方位 N30°W

重複 118号住居に後出し、旧河道支流・95号土坑に先行する。

規模 縦3.50m+α 横3.80m 深さ0.15m 形状 隅丸方形か?

埋没土 ロームと褐色土の小ブロックが混じり合った暗黄褐色土で埋没していた。

掘り方 あり。掘り方内は3～10cmの厚さの若干の暗褐色土を含む、黄褐色土で充填されている。掘り方底面には多数の小ピットがあり、凸凹している。また、北東部に長径1.2m・短径1.0mで深さ0.15mの床下土坑がある。

床面 貼床が施されている。掘り方を充填した黄褐色土が貼床である。床面は平らである。

- 118住 1層 暗黄褐色土。ローム粒子を多量を含む。粒子細かく、粘性やや高い。
2層 黄褐色土。風倒木収。
3層 暗褐色土。粒子細かく、粘性やや高い。

- 117住 1層 暗黄褐色土。ロームと褐色土の小ブロックが混じり合っている。
2層 暗赤褐色土。焼土とロームの粒子とブロックを多量を含む。
3層 黄褐色土。若干の暗褐色土を含む。
4層 暗褐色土。ロームブロックを多量、黒色土ブロックを少量含む。

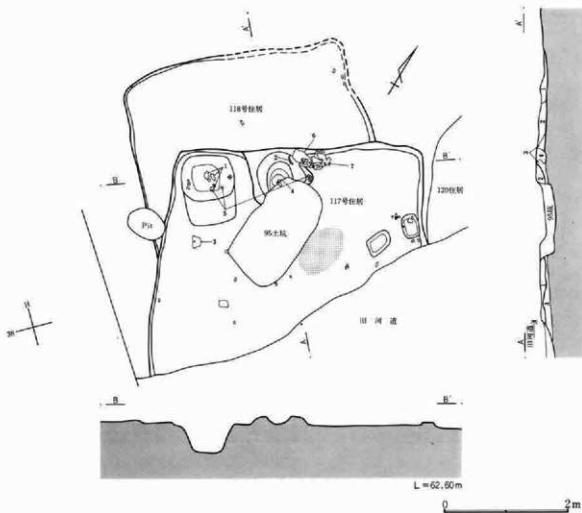


図19 117号・118号住居

I. 住居跡

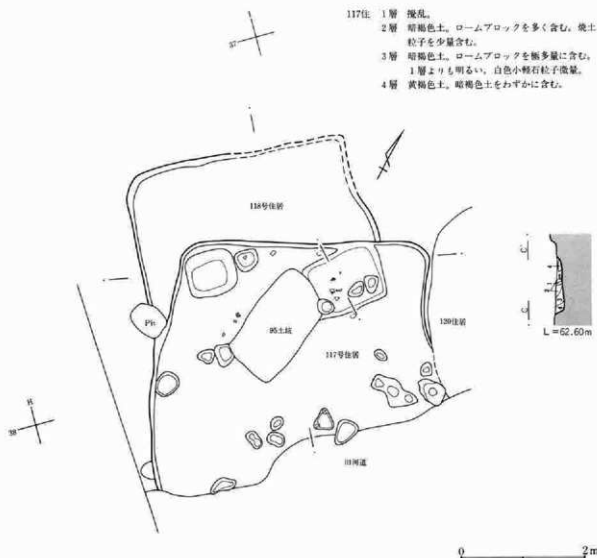


図20 117号住居掘り方

貯蔵穴 北西隅に長径0.8m・短径0.7m・深さ0.4mの隅丸方形を呈する貯蔵穴が検出された。底面は平らで、断面形は、逆台形状を呈する。貯蔵穴底面近くから、土師器杯形土器（1）が出土している。

周溝 なし。

柱穴 東壁近くに2つの浅いピットが検出されたが、柱穴とは認められない。掘り方の調査では、住居南半に多数の小ピットが検出されたが、いずれも柱穴とは認められず、柱穴はないと思われる。

遺物出土状態 カマド右袖脇から、土師器甔形土器（6）と甕形土器（7）が、ほぼ完形に近い形で出土している。また、右袖下から、土師器小型甕形土器（5）が出土している。

カマド 位置 北壁中央よりやや西寄り。住居外へ突出していない。

規模 全長0.90m+ α 最大幅1.00m 焚き口幅約0.40m

袖 あり。住居内へ0.5m～0.6m程のびる。

煙道 不明。

遺存状態 袖の用材は、焼土とローム粒子やブロックを多量に含む暗赤褐色土であり、10mほどの

II 検出された遺構と遺物

高さしか残存していなかった。燃焼部内は赤く焼けており、カマド前面には焼土の堆積している部分が見られた。

遺物出土状態 中央部底面より、土師器高杯形土器（4）が出土している。カマドの支脚として使用されたとと思われる。

調査所見 南半が旧河道支流によって侵食を受け、住居跡の全容を明らかにすることはできなかった。住居出土遺物から、古墳時代中期後半の住居と考えられる。（中山）

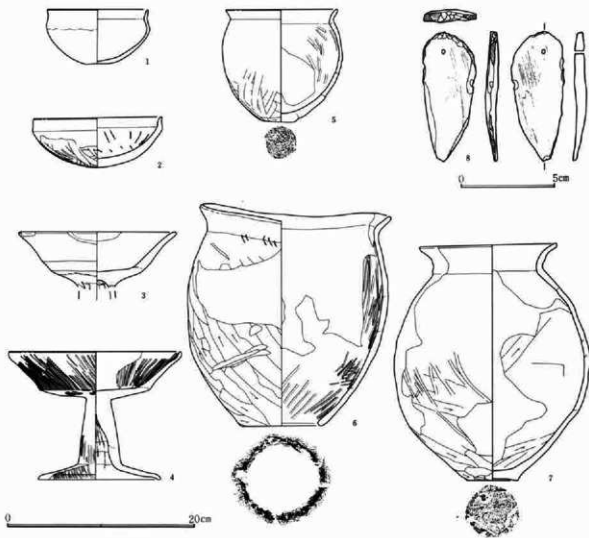


図21 117号住居出土遺物

118号住居 (図19, PL10・11)

位置 3区 H・I-37グリッド

西壁方位 N43°W

重複 117号住居に先行する。

規模 縦2.80m+α 横3.75m 深さ0.12m

形状 隅丸方形か?

埋没土 粘性のやや高い暗褐色土により埋没していた。

掘り方 なし。

床面 地山のローム上面を床にしている。

貯蔵穴 不明。

周溝 残存している住居跡にはなし。

柱穴 なし。

遺物出土状態 土師器壺形土器破片が床面直上からやや浮いた状態で5点ほど出土した。細片で復元できるものはなかった。

カマド 不明。

調査所見 住居の切り合い関係から117号住居より古い。北東隅の壁は風倒木により壊されている。(中山)

120号住居 (図22・23, 表9, PL10・11・48)

位置 3区 I-37・38グリッド

北壁方位 N65°E

重複 旧河道支流によって南半部を侵食され、西側2分の1を検出。108号土坑に後出する。

規模 縦3.30m+α 横3.50m 深さ0.15m

形状 隅丸方形か?

埋没土 ロームの小ブロックと炭化物を少量含む暗褐色土で埋没していた。

掘り方 あり。厚さ5~10cmのロームブロックを多量に含む、しまりの良い暗褐色土で充填されている。掘り方底面は、浅い小ピットが多数あり、凸凹している。西壁付近に床下の焼土坑が検出された。焼土坑の壁面はよく焼けていた。108号土坑に関しては、埋没土の違いから床下土坑とはとらえられなかった。

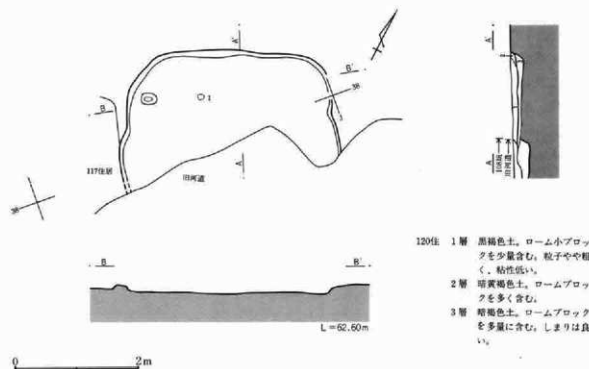
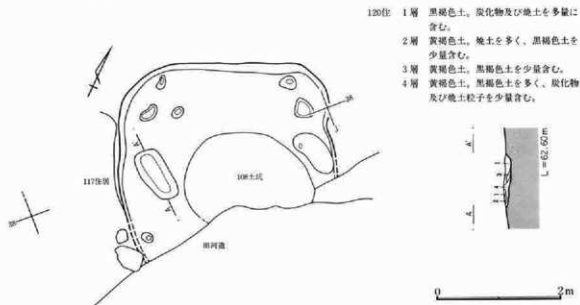


図22 120号住居

II 検出された遺構と遺物



床面 貼床が施されている。掘り方を充填している暗褐色土が、貼床である。平らな床面であったが、硬化面はなかった。

貯蔵穴 不明。

周溝 なし。

柱穴 ビットがいくつか検出されているが、柱穴は不明。

遺物出土状態 床面からやや浮いた状態で、土師器高林形土器

(1)が出土した。他には土師器の細片が20点ほど出土しているが、実測可能な遺物はなかった。

カマド 不明。

調査所見 カマドの存在は不明であったが、床面下から壁面の赤く焼けた炉的施設と考えられる焼土坑が、西壁近くに検出された。

長軸0.90m 短軸0.45m 深さ0.10m

出土遺物から、古墳時代中期後半の住居と考えられる。

(中山)

121号住居 (図24・25、表9、PL12・48)

位置 3区 J・K-36・37グリッド

西壁方位 N20°W

重複 旧河道により東半部分が侵食を受け、ほぼ西半分が検出された。

規模 縦5.90m 横4.50m+α 深さ0.35m

形状 隅丸方形か？

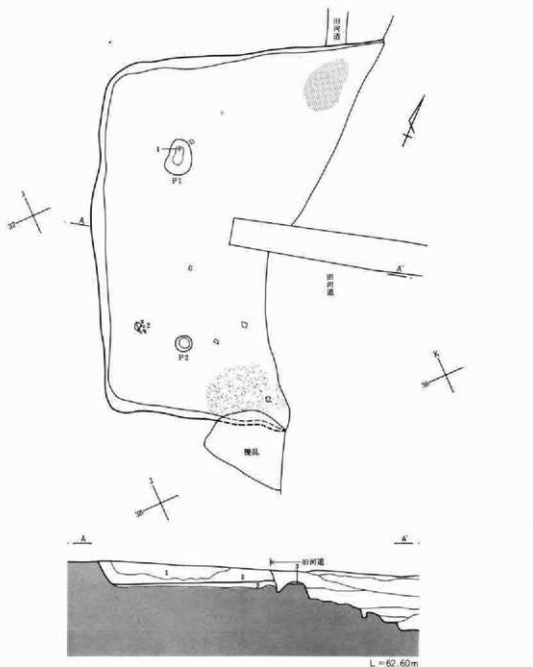
埋没土 ロームブロックや炭化物を含む、暗黄褐色土で埋没していた。

掘り方 あり。厚さ10cm程のロームと褐色土が混じりあった、暗黄褐色土で充填されている。掘り方底面はほぼ平らであった。住居跡はほぼ中央部から、土師器杯形土器(3)が、掘り方底面上に置かれたように、底

部を下にして完形で出土している。

床面 貼床が施されている。住居跡中央部から南壁にかけて硬化面が見られた。また、南壁際に2~3cmの厚さで、粘土が広がっていた。北壁際には、焼土の広がっている部分が発出された。

貯蔵穴 不明。

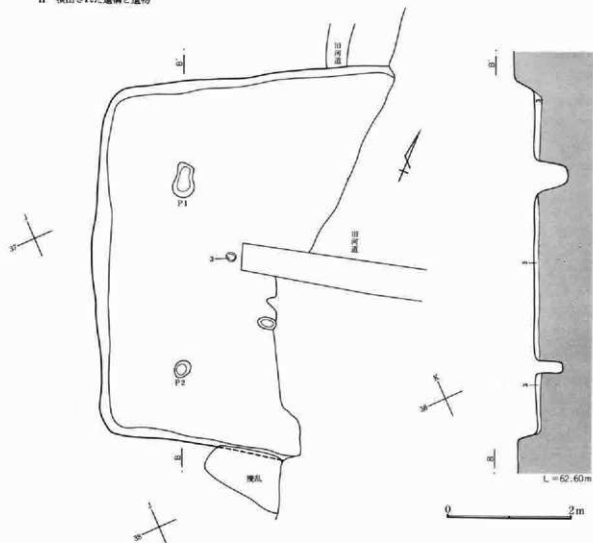


- 121住
- 1層 明褐色土。ローム小ブロックを多く含む乱れた土層。粒子粗く、粘性低い。
 - 2層 暗黄褐色土。粒子やや粗く粘性低い、ロームブロックをやや多く含む。炭化物を少量含む。
 - 3層 暗黄褐色土。粒子やや粗く粘性低い、ロームと褐色土が混じりあった土層。

0 2m

図24 121号住居

II 検出された遺構と遺物



周溝 なし。

柱穴 西壁に平行する2本の主柱穴を検出した。P1は重複関係を持つ2本の柱穴があり、改築の可能性がうかがえる。

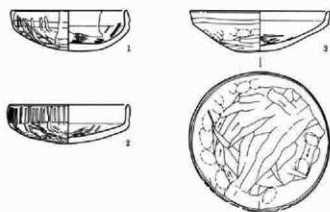
柱穴No	P 1	P 2
直径	0.35m	0.25m
深さ	0.60m	0.45m

遺物出土状態 床面直上より図25の1・2の土器器形土器が出土している。

カマド 不明。

調査所見 北壁に近い床面上に焼土が薄く広がっている部分を検出されたが、掘り込みがなかったため、炉とは考えられない。出土遺物から、古墳時代中期後半の住居と考えられる。

(中山)



0 20cm

図25 121号住居掘り方と出土遺物

122号住居 (図26, PL13)

位置 3区 H-36グリッド

北壁方位 N80°W

重複 6号古墳に先行する。

規模 縦3.80m 横2.30m+α 深さ0.25m

形状 隅丸方形か?

埋没土 ローム粒子を多量に含む、ソフトな明褐色土で埋没していた。

掘り方 なし。掘り込んだローム上面を床面にしている。

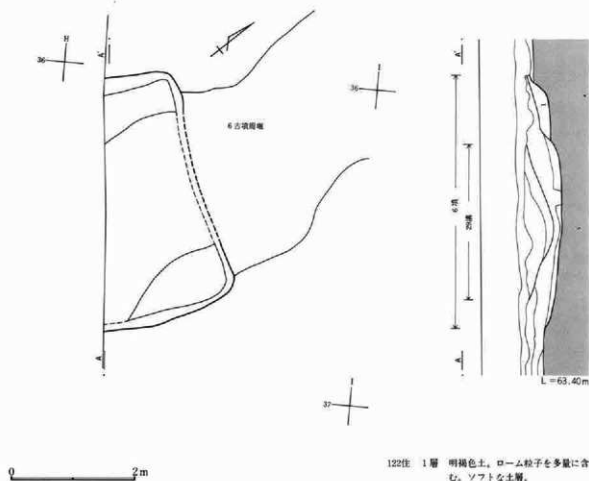
床面 硬化面は認められず、軟弱な床面である。

貯蔵穴 不明。 周溝 不明。 柱穴 不明。

遺物出土状態 土師器変形土器細片が、1片出土しただけであった。

カマド 不明。

調査所見 本住居跡は西半部が調査区域外になり、さらに住居跡中央部を6号古墳周掘によって切られているため、本住居の特徴等ほとんどつかめなかった。床面も軟弱であり、かろうじて壁面が住居埋没土より硬かったため、平面形だけはつかめた。周辺の住居跡との関係から、それらと同時期頃であろうか。(中山)



122住 1層 明褐色土。ローム粒子を多量に含む。ソフトな土層。

図26 122号住居

II 検出された遺構と遺物

(3) 5区

蛇川左岸での調査が主であるのに対して、5区は右岸で行った調査区のことである。この調査は、東武鉄道桐生線、治良門橋駅南に隣接する踏切を通る現道の橋の掛け変え工事に伴うものである。コンクリート橋設置に伴い、蛇川右岸の橋脚部分にあたるため、約50m²の面積を対象に調査を行った。

調査範囲は、G・H-72~74グリッドである。確認できた住居跡は、7軒であった。他の遺構としては、井戸跡や土坑跡がある。調査面積が狭い範囲に限定されたうえ、重複が激しく、調査区外へ遺構の延びがあることから、各遺構を明確に図示することが困難であった。

以上のような理由から、住居跡については、重複関係にある住居ごとに報告することにする。

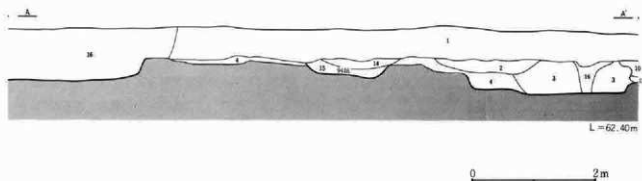
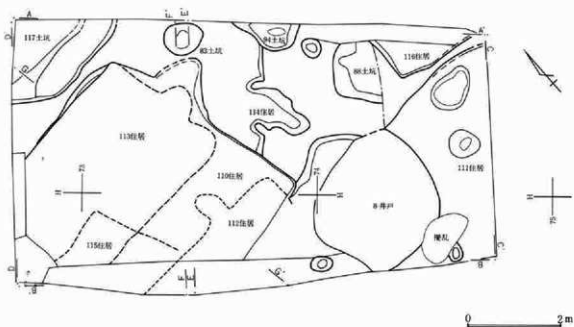
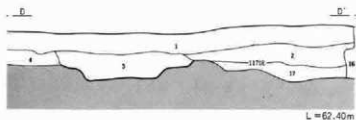
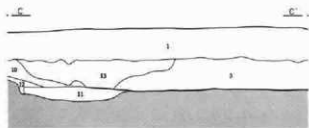
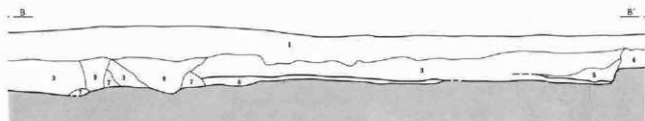


図27 5区全体図と埋没土層



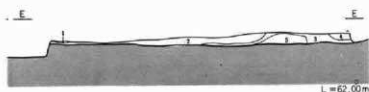
0 2m

L=62.40m

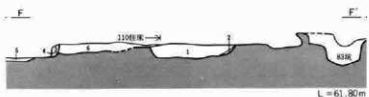
- 1層 表土。
- 2層 黒褐色土。4層より僅かに黒い。
- 3層 褐色土。僅かに白色鉱物粒や、ところどころに焼土粒を含む。軟質土。
- 4層 褐色土。3層によく似ている。焼土が入らない。
- 5層 暗黄褐色土。
- 6層 黄褐色土。砂質であり地山に近い漸移層である。焼土ブロックを僅かに含む。
- 7層 黄褐色土。ローム漸移層。
- 8層 8号井戸覆土。
- 9層 褐色土。円礫、人頭大〜にぎり拳大を含む。上部からの溜り込みの覆土。柱穴？。
- 10層 黄土。ローム層を主に褐色ブロックが入り。焼土ブロック、焼土粒子が混入する。カマドの一部分と考えられる。硬い。
- 11層 暗褐色土。ローム粒子・炭化粒を僅かに含む褐色土。
- 12層 赤褐色土。焼土ブロック・焼土粒を多量に含む。カマド内覆土？軟質土。
- 13層 茶褐色土。焼土ブロック・炭化ブロックφ2~10mmを全体的に含む。小礫を少量含む。
- 14層 4層と同じ。
- 15層 暗黄褐色土。底面は礫層（地山）。} 94号土坑
- 16層 攪乱。褐色土。
- 17層 茶褐色土。φ5cmの礫を含む。

図28 5区埋没土層

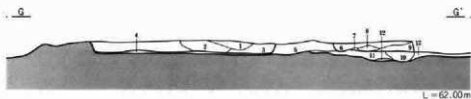
II 横出された遺構と遺物



- 110住
- 1層 灰褐色土、軟質、極少量焼土あり。
 - 2層 褐色土、やや砂質、焼土粒を斑点状に含む。
 - 3層 暗褐色土、焼土ブロックを僅かに含む。
 - 4層 褐色土、汚れた土であり、落ち込みとは考えられない。
 - 5層 焼土。



- 1層 褐色土。上部は焼土粒が混入。ローム粒が全体に僅かに混入。
 - 2層 褐色土。僅かに焼土ブロックを含む。ボソボソとした軟質土。
 - 3層 暗褐色土。炭化物を含む。ボソボソした軟質土。
 - 4層 暗褐色土。やわらかく、石を含んでいる拳大。
 - 5層 暗褐色土。ローム粒を含む。
 - 6層 黄褐色土。砂質であり、地山に近い漸移層である。焼土ブロックを僅かに含む。
- } 110号住埋没土
} 112号住埋没土



- 113住
- 1層 褐色土。僅かに焼土ブロックを含む。ボソボソした軟質土。
- 2層 暗赤褐色土。焼土粒が少量であるが全体に混入する。軟質土。
- 3層 暗黄褐色土。僅かに焼土粒を含む。にぎり拳大の礫を含む。
- 4層 床面。僅かにはり床があり、床下はこまかな砂利と拳大の礫がある。
- 112住
- 5層 褐色土。上部は焼土粒が混入。ローム粒が全体に僅かに混入。
- 6層 褐色土。焼土ブロック・炭化ブロックを含む。軟質土。
- 7層 赤褐色土。下部は焼土が多い。やや硬い。
- 8層 焼土ブロック・焼土粒が多い。やわらかい。
- 9層 暗黄褐色土。僅かに焼土ブロックを含む。ロームブロックも僅かにみられる。やわらかい。
- 10層 暗赤褐色土。焼土ブロック(φ1-10mm)を多量に含む。
- 11層 暗褐色土。焼土ブロック(φ1-10mm)を少量含む。軟質土。
- 12層 黄褐色土。ローム漸移層。

0 2m

図29 5区埋没土層

110号住居 (図29~31, 表9・10, PL15・48)

位置 G・H-72・73グリッド

主軸方位 N82°E

重複 112・113・114・115号住居と重複し、いずれよりも後出する。

規模 縦4.90m 横4.90m 深さ0.10m

形状 隅丸方形

埋没土 僅かに焼土粒や焼土ブロックを含む褐色土で埋没していた。

掘り方 なし。

床面 カマド右袖付近から南西方向に、住居跡約 $\frac{1}{2}$ の面積が硬くしまった床面があり、図中スクリーンで表現した部分である。

貯蔵穴 なし。

周溝 なし。

柱穴 なし。

遺物出土状態 住居跡全面から、土器片が散布状況を呈して出土している。カマド内からの出土もある。復元できた出土遺物は、カマド付近のものが多い。

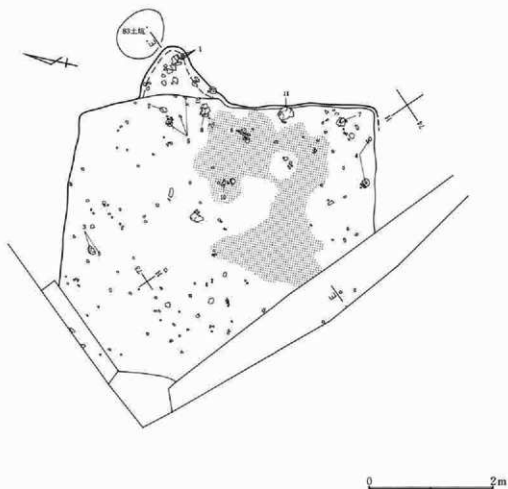


図30 110号住居

II 検出された遺構と遺物

カマド 位置 東壁中央

規模 全長1.0m 最大幅1.4m

袖 なし。

掘り方 遺存状況が悪く、焼土がつまった状況で検出された。カマド本体と煙道の一部が僅かに検出できた。

遺物出土状態 焼土内から土師器杯形土器（1）が出土している。その他にも、土師器甕形土器破片等が出土している。

調査所見 東壁付近は、約18cmの深さをもつ。西側はプラン確認面から約5cmで床面に達した。地山には礫が含まれており、床面の一部やカマド付近には、その礫が露出する部分もあった。遺構の残存状況は、確認面から浅いので不明瞭である。奈良～平安時代初期の住居と思われる。（相京）

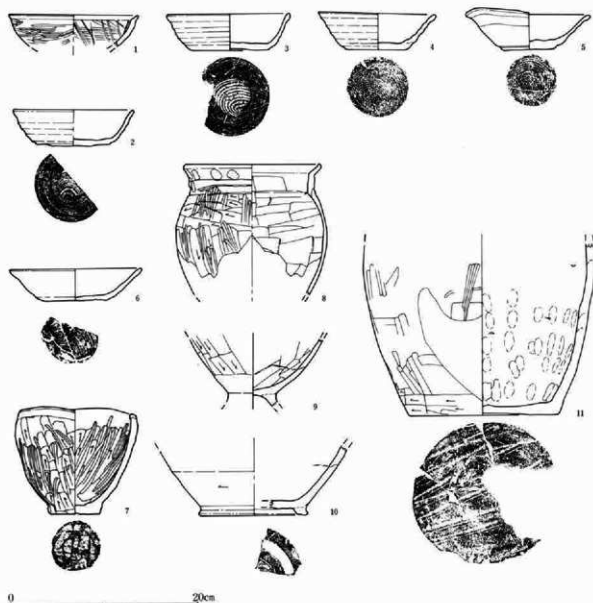


図31 110号住居出土遺物

113号住居 (図29・32・33, 表10, PL16・48)

位置 G・H-72・73グリッド 主軸方位 N74.5°E

重複 110号住の下位に位置し、115号住と切り合う。

規模 縦4.40m 横3.06m 深さ0.15m 形状 隅丸長方形

埋没土 褐色土層。僅かに焼土ブロックや、拳大の礫を混入する軟質土である。

掘り方 110号住居床面を精査した段階で確認できた。本住居のカマドは、110号住居のカマドとほぼ同位置にあり、検出は困難をさわめた。5区の住居跡の中では、比較的良好な状態でプランが検出できた。

床面 床面はほぼ平坦である。貼床は南西付近で一部が明瞭に残る。全体として良好な状態であった。厚さ4cmほどのしっかりとしまった土層が確認できた。床面下はこまかな砂利と拳大の円礫の地山となる。

貯蔵穴 なし。 周溝 なし。 柱穴 なし。

遺物出土状態 全体にまばらな状態で出土している。形状をとどめる遺物は、土師器壺形土器や須恵器杯形土器類が多く、カマド前面や北西部付近に集中している。

カマド 位置 東壁中央

規模 全長0.35m 最大幅0.76m 焼き口幅0.76m

袖 なし。

遺物出土状態 焼き口付近前面に、土師器壺形土器(9)の出土がある。

遺存状態 カマドの掘り込み下部のみが残存し、カマド使用面は焼けている。

調査所見 奈良時代の住居と考える。

(相京)

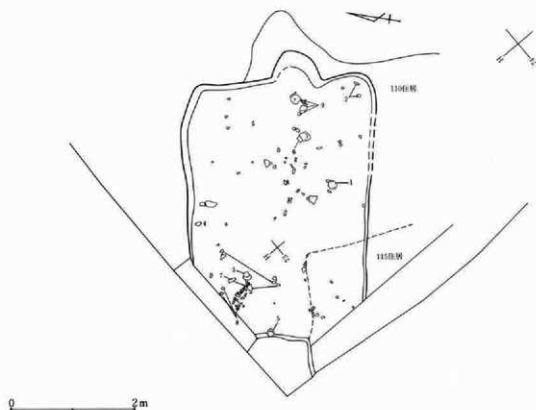


図32 113号住居

II 検出された遺構と遺物

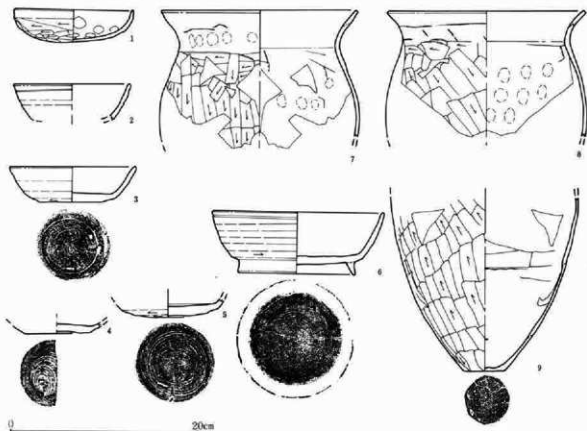


図33 113号住居出土遺物

112号住居 (図29・34, 表11, PL17)

位置 G・H-73グリッド 主軸方位 N 3°W

重複 115号住居とは重複するが、新旧関係は不明。110号住居より古く、8号井戸より新しい。

規模 縦・横 不明。深さ 0.1m 形状 隅丸方形と推定される。

埋没土 褐色土層中に、僅かに白色鉱物粒や焼土粒を含む軟質土である。

掘り方 本住居跡は北壁にカマドをもち、東壁との隔は僅かに確認できる。東壁部分は、8号井戸掘り方に重複し、こわれている。北壁も西に向かい不明瞭になる。住居跡の確認できる深さは、深いところで10cmであった。

床面 しっかりとした貼床である。床面を構築している土は、砂質の地山に近い土層であり、黄褐色土でロームブロックや焼土が混入する。

貯蔵穴 あり。位置 北東隅 規模 縦40cm 横29cm 深さ20cm 形状 楕円形

周溝 なし。 柱穴 なし。

遺物出土状態 北壁に位置するカマド前面に遺物の集中地点がある。土師器甕形土器(1・2)などが出土している。

カマド 位置 北壁にあり、やや東寄りに位置していることが推定される。

規模 全長0.7m 最大幅0.5m 焚き口幅0.5m

袖 なし。 煙道 不明。

遺物出土状態 焚き口部付近から、土師器甕形土器破片が僅かに出土した。

遺存状態 ほとんどこわれた状態で検出された。袖等の構築状況は不明であった。カマドの使用面には焼土が見られた。

調査所見 出土遺物から平安時代前半の住居と思われる。

(相京)

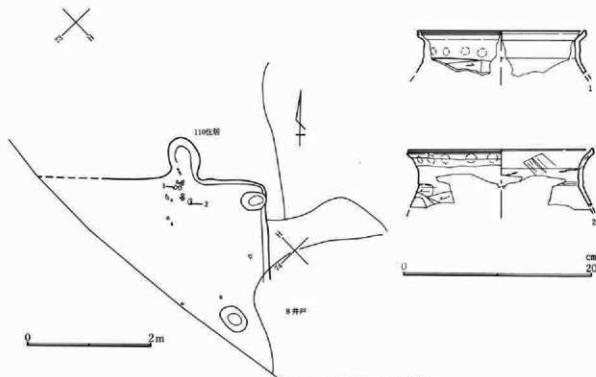


図34 112号住居と出土遺物

114号住居 (図35・36, 表11, PL18・49)

位置 H-73グリッド 主軸方位 N133°E

重複 110号住居・113号住居に後出し、83号・94号土坑に先行する。

規模 縦・横 不明。 深さ0.1m 形状 不明。

埋没土 円礫を含む褐色土層であり、焼土粒をも含む。

掘り方 東南壁の一部にカマドが検出された。94号土坑により北東隅部、大半を110号住居に切られ、北側は調査区外を現在の蛇川によって切られており、全貌を明らかにすることは不可能である。

床面 なし。 貯蔵穴 なし。

周溝 なし。 柱穴 なし。

遺物出土状態 全体にまばらな状況での遺物出土であり、カマド周辺部に多い。

カマド 位置 東壁

規模 全長1.55m 最大幅1.35m 焼き口幅0.55m

袖 袖の幅は約0.3mである。住居跡内側へ約0.4m入る。住居跡東壁から約0.9m外出する。

遺物出土状態 焼き口部分床面からは、土師器甕形土器(2・3)が出土している。また右袖前方からも土師器甕形土器(1)が出土している。

遺存状態 袖部なども残るが、全体としての残存状況はよくない。カマドの壁面或使用面からは、地山内にある円礫が露出する。かまどの一部に円礫による袖に使用された芯石が検出された。

調査所見 古墳時代後期の住居と思われる。

(相京)

II 検出された遺構と遺物

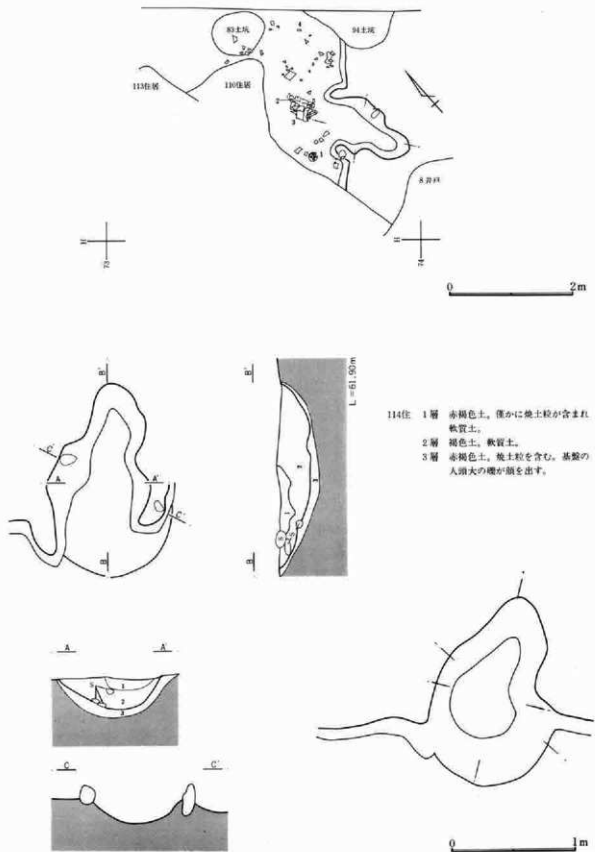


図35 114号住居とカマド

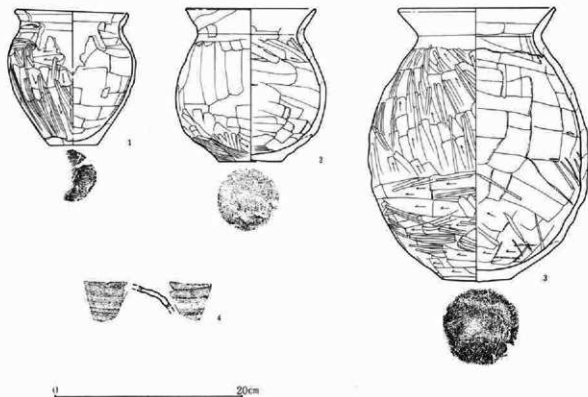


図36 114号住居出土遺物

115号住居 (図37, 表11, PL19・49)

位置 G-72・73グリッド

東壁方位 N22°W

重複 110号・113号住居に先行し、112号住居との新旧関係は不明。

規模 縦・横 不明。深さ 0.24m

形状 隅丸方形と考えられる。

埋没土 埋土は褐色土であり、下層では暗黄色が強くなる。全体的に白色鉱物粒や僅かな焼土を含む、軟質土である。

掘り方 なし。

床面 調査区西壁に、一部貼床と思われる焼土粒の混入した硬い土層が確認できた。

貯蔵穴 不明。

周溝 不明。

柱穴 不明。

遺物出土状態 比較的重複度の少ない110号住居跡床面より下位で、112号住居の覆土と113号住居覆土との間で、遺物の集中地点があった。土師器変形土器や杯形土器が出土している。

調査所見 発掘区西側にトレンチを入れた結果、地山に落ち込みが表われた。また、113号住居床面に一部プランが確認されたことにより、住居跡の北東隅部分であることがわかった。出土遺物から、古墳時代中期から後期の住居と思われる。(相京)

II 検出された遺構と遺物

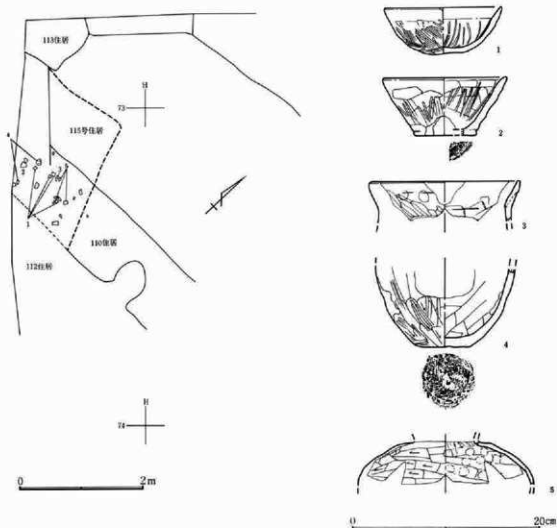


図37 115号住居と出土遺物

111号住居 (図38, 表11・12, PL17・49)

位置 G・H-74グリッド

北壁方位 N94°E

重複 本住居跡北東隅を後出する8号井戸、北壁は116号住居に切られている。

規模 不明。

形状 方形を呈すると思われる。

埋没土 褐色土層である。僅かに白色鉱物粒や焼土粒を含む軟質土である。

掘り方 北壁及び床面の一部が残存する。発掘区南壁(図28)の土層図からは、床面下に掘り方になる一部が検出でき、壁の立ち上がりとかマドの一部と考えられる黄褐色土層が確認できた。形状は不整形で最深部は、床面から約25cm下がる。

床面 確認できた床面の範囲は、全て硬くしまっていた。

貯蔵穴 なし。

周溝 なし。

柱穴 あり。ただし、主柱穴になるかは全体像が不明のため、未解決である。

1. 住居跡

No.	P 1	P 2
長軸	100cm	66cm
短軸	70cm	54cm
深さ	15cm	40cm

遺物出土状態 床面及び埋没土中から44点の土器片の出土があった。中でも、北壁付近から土師器埴形土器（4）や埴形土器（3）等が出土している。

カマド 位置 発掘区南壁の一部にカマドと考えられる黄褐色土層が確認できた。周辺に一部焼土粒子の見られるところもある。おそらく、近接した発掘区域外に存在するものと考えられる。

調査所見 古墳時代中～後期の住居と思われる。（相京）

116号住居 (図38・39, 表12, PL19)

位置 H-74グリッド

西壁方位 N 5° E

重複 88号土坑と接するが、新旧関係は不明。

規模 縦・横 不明。深さ 0.3m

形状 方形を呈すると考えられる。

埋没土 褐色土層であり、南側は焼土粒を僅かに含む。北側は同様な土であ

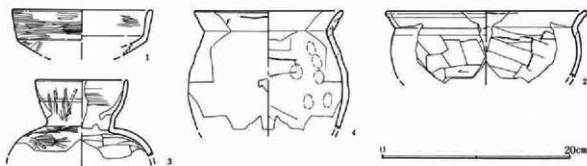
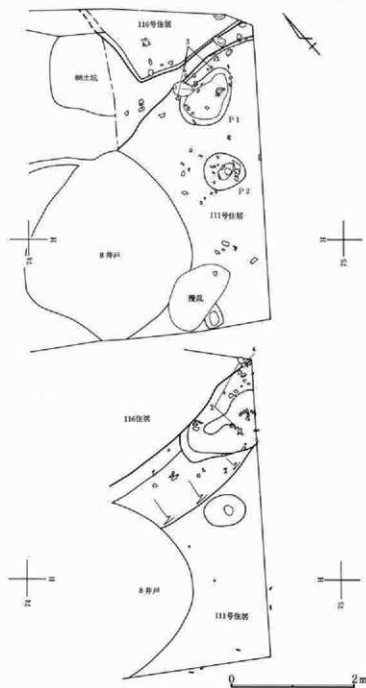


図38 111号・116号住居と111号住居出土遺物

II 検出された遺構と遺物

るが、焼土がみられない。地山と考えられる黄褐色土を掘り込んでいる様子が、土層から観察できる。

掘り方 掘り込み面を確定できるまでにはいたらないが、5区においては唯一深さ30cmを測る住居跡である。

床面 比較的平坦であり、北側に僅かに高まりがある。

貯蔵穴 不明。

周溝 不明。

柱穴 不明。

遺物出土状態 南西隅に床面より24cmの高さに土師器壺形土器（1）が出土している。その他はすべて破片であり、実測不可能であった。

カマド 不明。

調査所見 116号住居跡の確認範囲は発掘区の北東隅部分に住居跡の南と東の壁の一部分が確認できた。本住居跡は南壁の一部が111号住居跡の北壁と接し、発掘区の北東隅付近の土層図においても観察できる。出土遺物は壺形土器の破片がある。横方向の篋削りによる調整が内外面とも行われており、111号住居跡の壺形土器の頸部の形状や、器面調整とは大きく異なる。111号住居跡は古墳時代中～後期にかけての土器であり、本住居跡は平安時代に比定される土師器と推定される。

（相京）

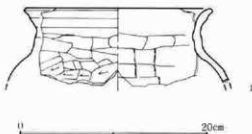


図39 116号住居出土遺物

2. 堀立柱建物跡

昭和61年度から平成2年度までの調査（調査区全域）の中で、1軒だけ検出された。3区南半には、ピットが多数検出されたが、本遺構以外に建物跡となるものはなかった。

1号堀立柱建物 （図40、PL13）

位置 3区 I-33・34グリッド

重複 29号溝・6号古墳に先行する。

平面形 2間×2間の北辺がやや歪んだ正方形の総柱建物跡である。

規模 桁方向4.50m・梁方向3.90mを測り、棟の走向はN53°Wである。

柱穴 径25～45cm・深さ（確認面より）10～35cmの円形の掘り方を呈し、統一性のある形状をしている。埋設土は、すべてロームブロックを多く含む暗褐色土である。

調査所見 本遺構は、6号古墳の埋土よりも一見古く、時期を特定できる遺物の出土はないものの、本遺構の南側で検出された住居跡とおそらく同時期ではないかと考える。

（中山）

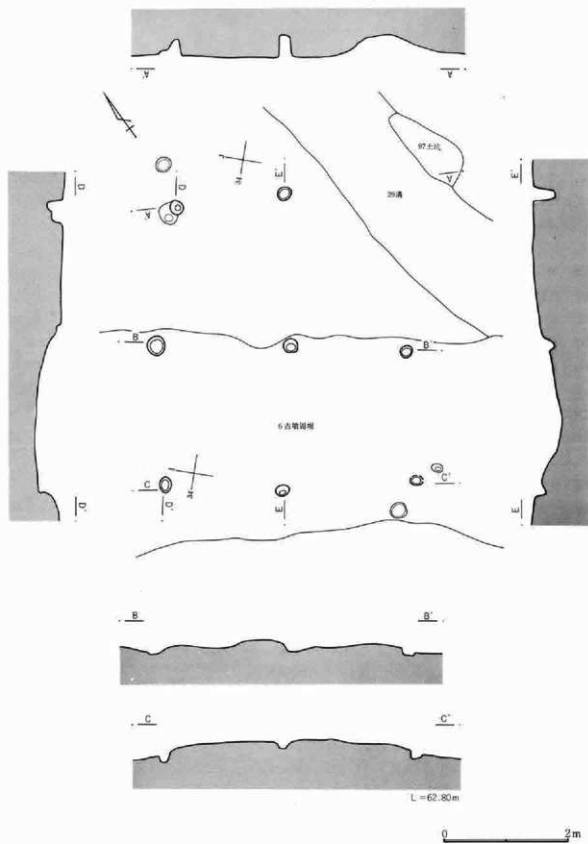


图40 1号独立柱建物

3. 古墳

検出された古墳は、全部で9基である。その他に、同時代と思われる円筒棺が1基検出されている。当採掘地内には、多くの古墳があり、総称して成塚古墳群と呼称されている。上毛古墳総覧によれば、新田郡強戸村成塚に、144号～183号まで存在すると記載されているが、小字及び地番からは、調査区内の9基の古墳に該当するものではなく、今回検出された古墳は、いずれも古墳総覧記載もれの古墳と判断される。

これらの古墳は、現蛇川に沿って一列に並んでいるような分布状況を示す。封土はいずれも現蛇川とそれに沿う現道（アスファルト道路）によって削平されている。一部民家にかかった古墳もある。

総覧記載の古墳中、円墳と思われる144号墳が本調査区に近接してある。主墳と考えられる146号成塚郷荷神社古墳（前方後円墳、6世紀後半）は、調査区の北東約200mの位置にある。

1号古墳（図41～54、表12～21、PL20・21・49～52）

位置 3区 F～1ラインの間、25～30ラインの間で検出。

隣接して、北側に5号古墳と1号円筒棺、南側に2号古墳がある。

重複 104号土坑、37号溝に先行する。

形状・規模 平面形状から、主軸がほぼ南北を通る帆立貝式古墳と思われる。主軸長推定17.5mで、堀を含めると、20.5mになる。前方部長さ4.5m、前端部幅6.4m、連接部幅4.2mである。くびれ部は、東側に比べて西側がくびれ、推定主軸線に対し左右対称にはならない。後円部径は13mと推定する。

残存状態 全体の約2分の1残存。西半分は、現蛇川により破壊。墳丘・主体部共に削平されて、不明。周堀のみ、西くびれ部から前方部（張り出し部）と、後円部東側3分の1まで検出。

葺石 周堀内への転石がみられないところから、ないものと考えられる。

周堀 周堀は全周していると思われるが、確認できたのは全体の約2分の1で、残りは調査区外になる。後円部東周堀は、上端幅2.5mで、底面幅1～1.5mあり、底面は平らであるが、東くびれ部分に向かって階段状に下がる。断面形状は逆台形であり、墳丘側の立ち上がりか60°以上の急傾斜に対して、外側の立ち上がりは30°前後の緩傾斜である。深さは0.4～0.5mある。前方部前端部分の周堀は、上端幅1.2m、底面幅0.5mで、深さは0.3mである。断面形状は、両側法面とも45°前後の傾斜で逆台形状を呈する。くびれ部分の堀は東西共に深さが0.7m程あり、検出された周堀中では一番深い。

埋没土 FPを含む黒褐色土で埋没していた。最下層は地山ロームの小ブロックを含む黄灰褐色土であった。また、埋没土最上層と考えられる部分に、As-Bの純層堆積がみられるので、12世紀初頭までには周堀がほぼ埋まっていたことが想定される。

遺物出土状態 墳丘が削平されているため、遺物の出土は主に周堀内であった。遺物はすべて破片で東西のくびれ部からの出土が多く、前方部前端からの遺物の出土は少なかった。出土した遺物のうち形象埴輪は、西くびれ部に多く、人物が少なくとも6体出土し、そのうち1体は左手を上げた馬飼いやと思われる人物埴輪（図45～6）である。馬形埴輪片については、たてがみと首の一部が出土している。前端部と西くびれ部堀からは唐形埴輪と思われる破片が出土している。埴輪の基底部の出土は、破片数に比べてごく僅かである。朝顔形円筒埴輪は、東西両くびれ部堀内から1個体ずつ出土し、後円部東堀からの出土はないようである。

調査所見 調査は昭和63年度と平成元年度の2年にわたった。そのため遺構確認面に違いができ、周堀幅等にくい違いができた。西側部分は、道路下からの検出である。前方部上にある104号土坑は、埋没土・遺物

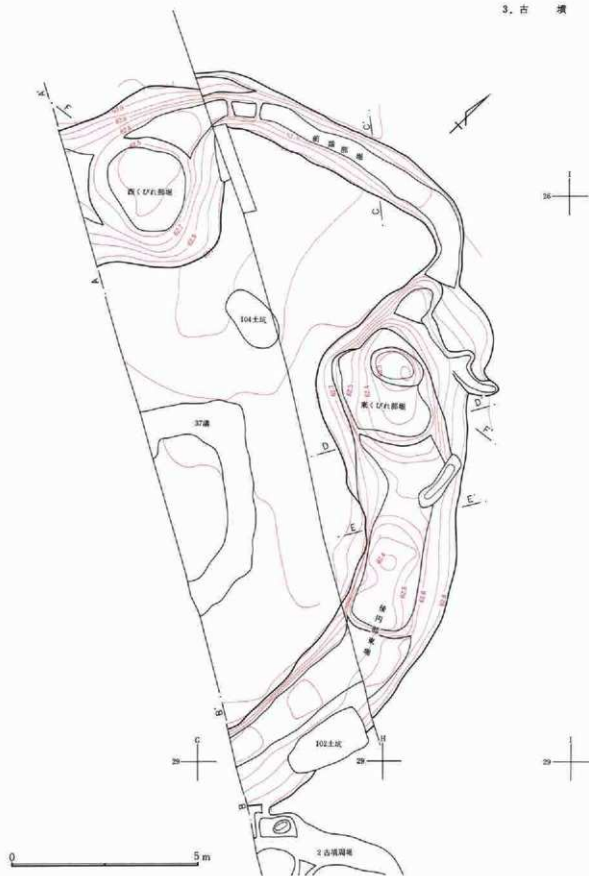
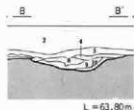
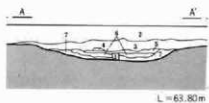
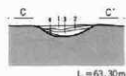


图41 1号古墳

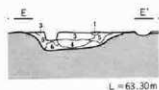
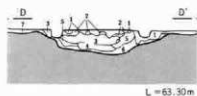
II 検出された遺構と遺物



- 1 墳 1層 雑瓦。
 2層 埋土。
 3層 表土。As-Aを含む砂質土。
 4層 黒褐色土。As-Bを含む砂質土。
 5層 暗褐色土。FP軽石粒を少量含む、ローム小ブロックを極少量含む。粘質。
 6層 黒褐色土。FP軽石粒を少量含む、ローム小ブロックを少量含む。粘質。
 7層 暗黄褐色土。ロームブロックを多く含む。
 8層 黒色土。FP軽石粒を少量含む、ローム小ブロックを極少量含む。粘質土。
 9層 暗褐色土。FP軽石粒を少量含む、ロームブロックを多く含む。粘質土。
 10層 灰褐色土。ローム粒子が粗粒、ソフトな土層。粘質土。



- 1 墳 1層 黒色土。FPを少量含む。
 2層 黒褐色土。FPを多量に含む。
 3層 黒褐色土。軽石を含まない。
 4層 黒褐色土。黄褐色土小ブロックを含む。



- 1 墳 1層 耕作肌。
 2層 As-B。
 3層 黒褐色土。やや砂質。As-Bを、混じる部分がある。
 4層 暗褐色土。FPを含む。やや粘質を帯びる。
 5層 灰褐色土。FPを少量含む。
 6層 黄灰褐色粘質土。地山ロームの小ブロックを含む。
 7層 灰褐色砂質土。



図42 1号古墳埋没土層

出土状態等から、本墳に後出する土坑と考える。37号溝も同様である。また、2号古墳出土の形象埴輪の破片が、本墳周囲内から出土しているので、2号古墳は本墳と同時期か先行する可能性がある。

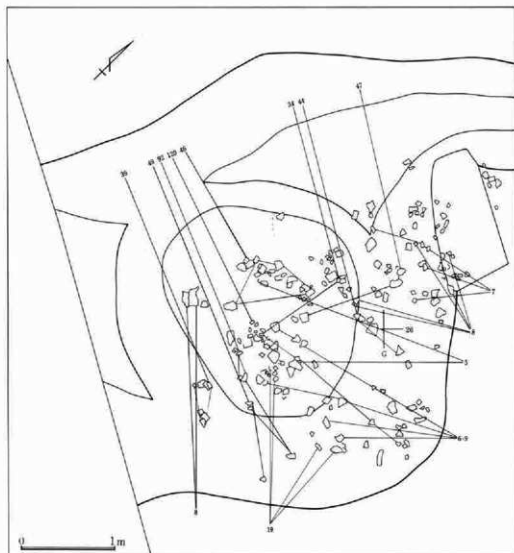


図43 1号古墳西くびれ部周縁内遺物出土状態

なお、104号土坑は本墳墳丘上に位置する。土坑出土の埴輪類は、他の古墳のものとするより本墳所属の埴輪と考えた方が自然であるので、この項で続けて報告する。
(中山)

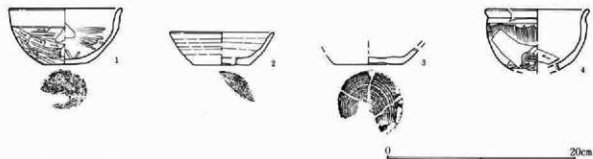


図44 1号古墳出土遺物 (1)

II 検出された遺構と遺物

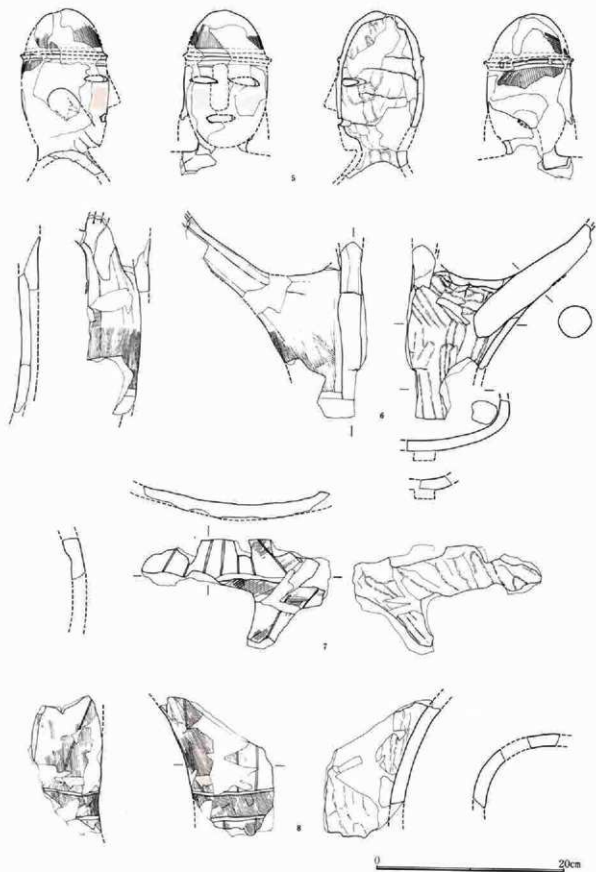


図45 1号古墳出土遺物(2)

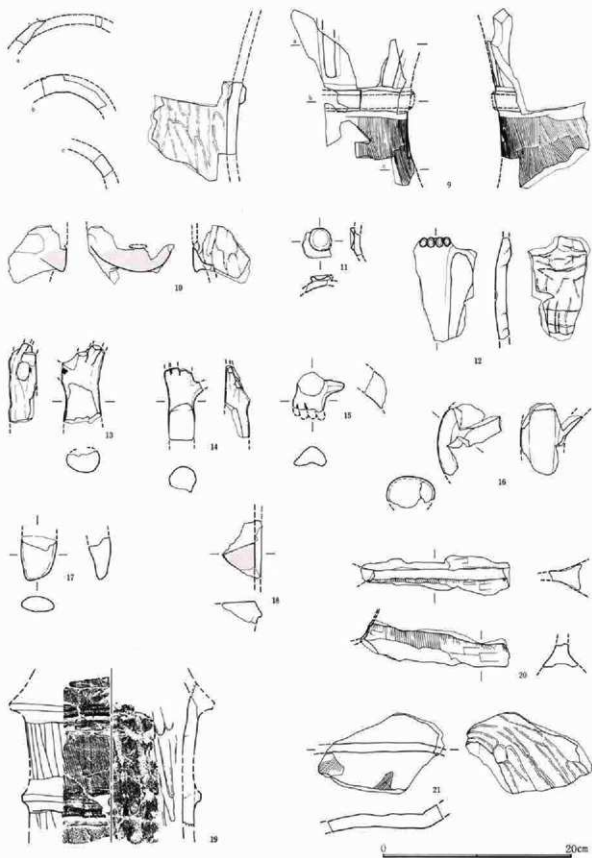


图46 1号古墳出土遺物(3)

II 検出された遺構と遺物

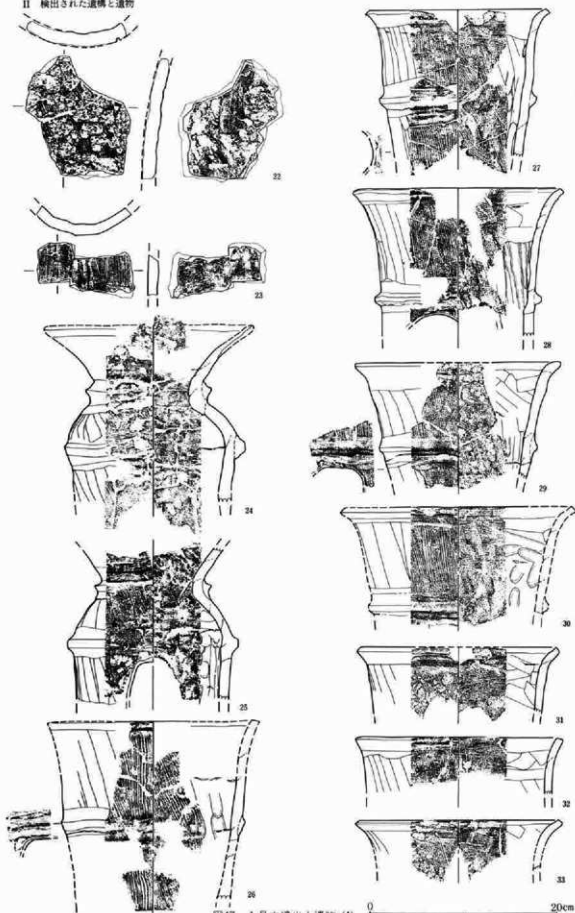


図47 1号古墳出土遺物 (4)

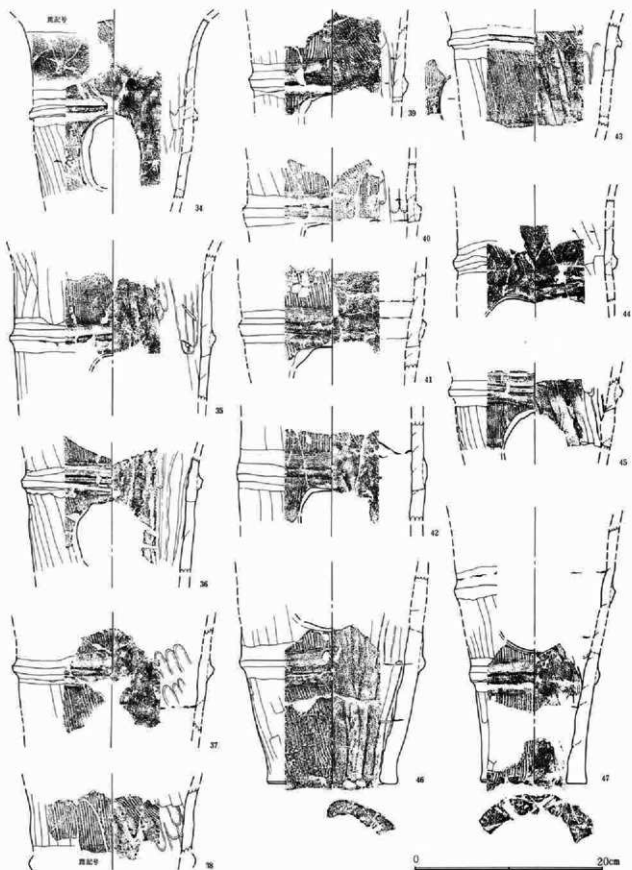


図48 1号古墳出土遺物(5)

II 検出された遺構と遺物

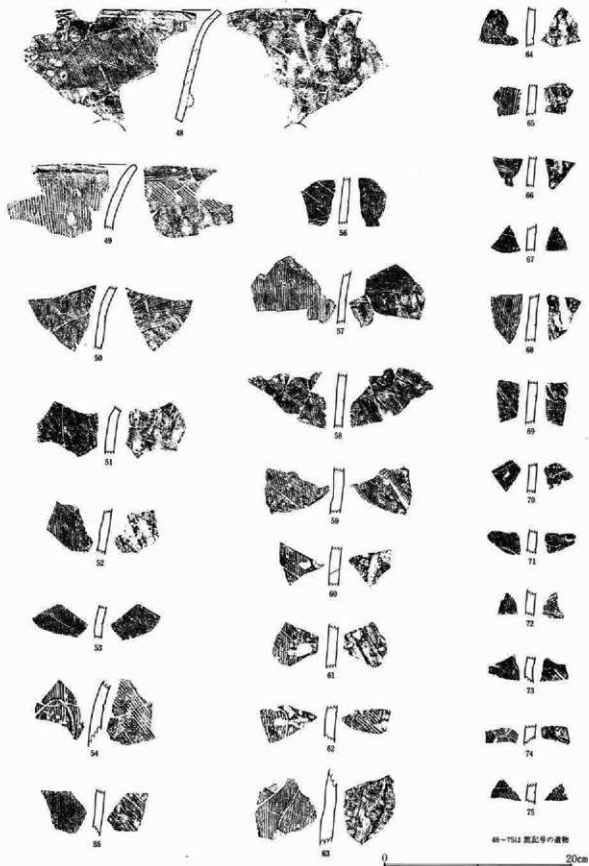


図49 1号古墳出土遺物 (6)

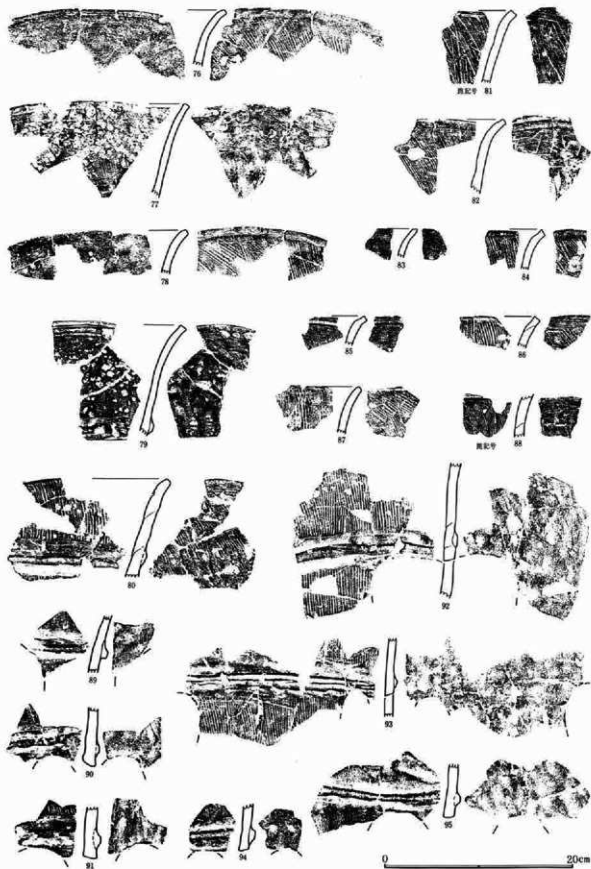


図50 1号古墳出土遺物(7)

II 検出された遺構と遺物

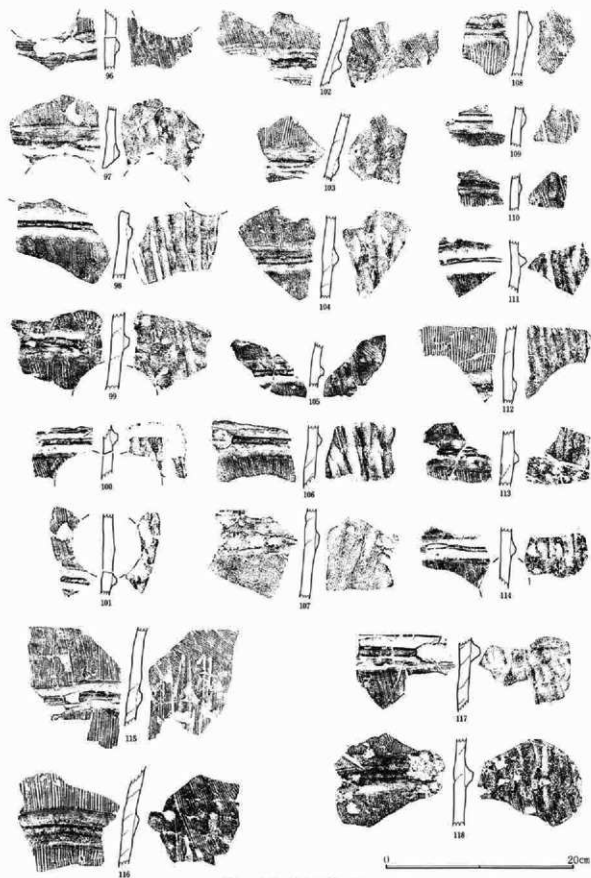


図51 1号古墳出土遺物 (8)

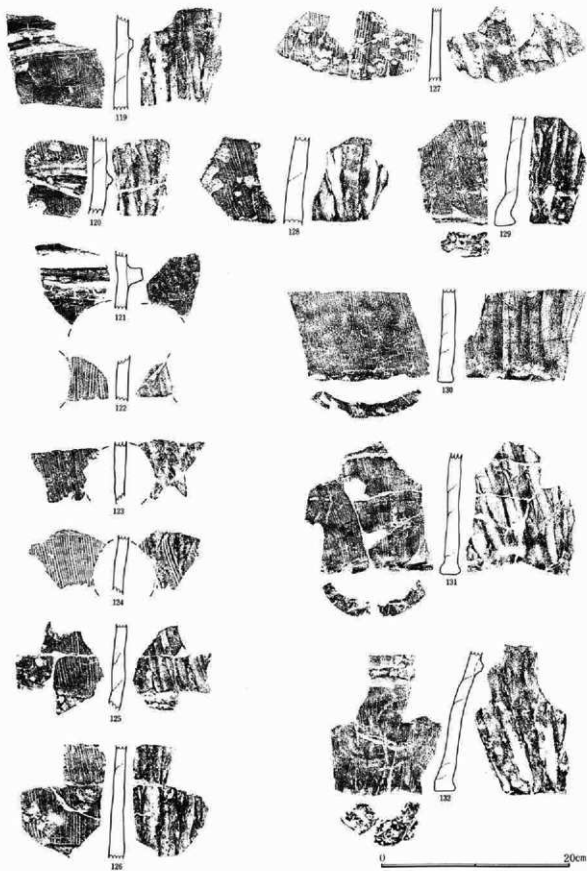


图52 1号古墳出土遺物(9)

II 検出された遺構と遺物

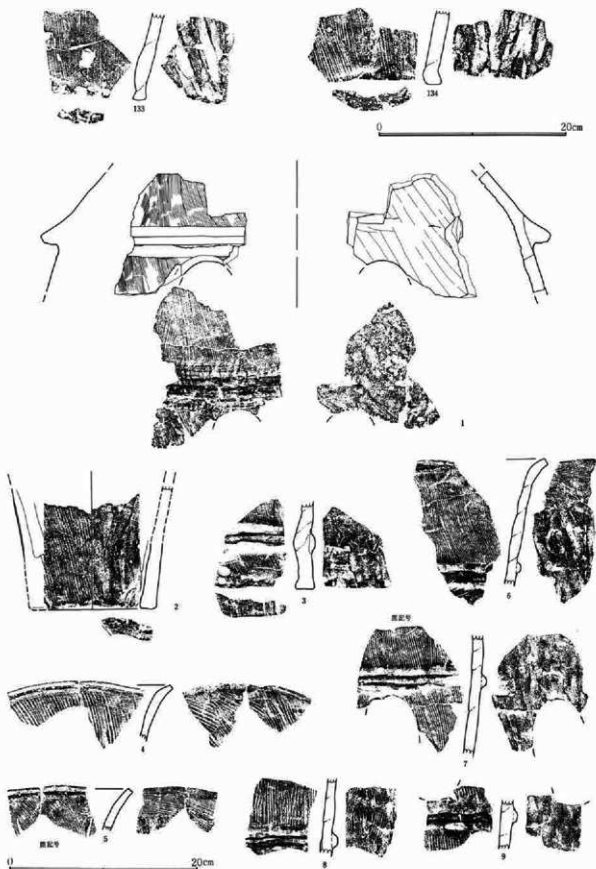


図53 1号古墳出土遺物⑩・104号土坑出土遺物(1)

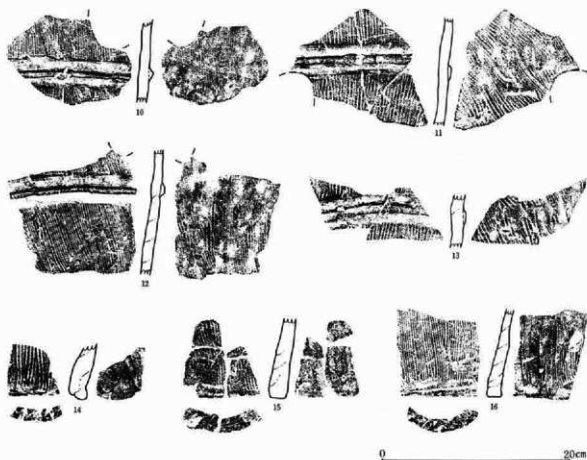


図54 104号土坑出土遺物 (2)

2号古墳 (図55～66, 表21～26, PL22・23・52～54)

位置 3区 G～Iラインの間、29～33ラインの間で検出。

隣接して、北側に1号古墳が、南側に6号古墳がある。

重複 105号土坑を周堀がわずかに切る。

形状・規模 平面形状から、円墳と思われ、墳丘北側に土橋状の途切れ部を持つ。墳丘径は約10mであり、堀を含めると径15mと推定される。

残存状態 全体の約3分の1残存。西側は、現蛇川によって破壊。墳丘・主体部共に削平されて、不明。周堀のみ残存。

墓石 周堀内への転石がみられないところから、ないものとする。

周堀 周堀は全周せず、墳丘北側で途切れている。途切れた部分から北西側を北堀、南東側を東堀とする。遺構確認面からの計測では、上端幅3.0m、底面幅0.5～1.0mある。深さは、北堀では階段状に西に向かって深くなり、最大60cmである。東堀はなだらかに南へ向かって深くなり、31ライン付近から50cmの深さになる。断面形状は、北堀と東堀ではやや異なり、北堀は底面幅が狭く皿状を呈する。東堀は底面幅が31ライン付近から広くなり始め、逆台形状を呈するようになる。

埋没土 ロームの小ブロックを含む明褐色土で埋没していた。

遺物出土状態 墳丘が削平されているため、遺物の出土は主に周堀内であった。北堀からは、人物埴輪では

II 検出された遺構と遺物

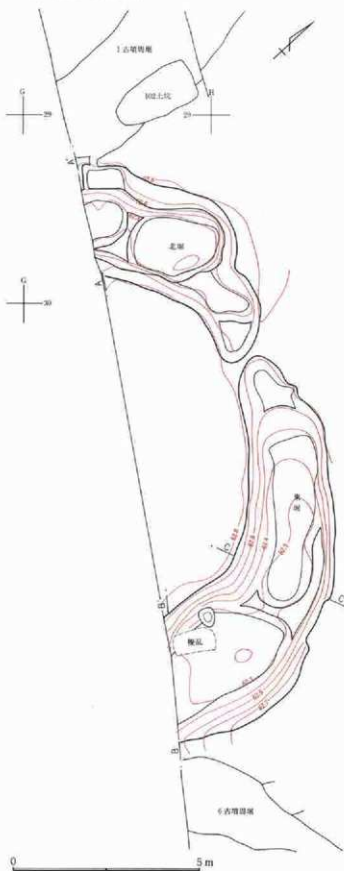
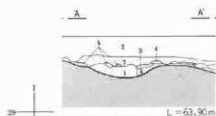
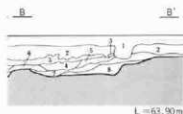


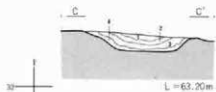
図55 2号古墳



- 2墳
 1層 埋土、蛇川裏ごめ、
 2層 道路埋土、
 3層 表土、A₁-Aを含む砂質土、
 4層 黒褐色土、A₁-Bを含む砂質土、
 5層 黒褐色土、ローム小ブロックを少量含むソフトな土層、やや粘質、
 6層 明褐色土、ローム小ブロックを多く含む、ソフトな土層、やや粘質、



- 2墳
 1層 道路埋土、
 2層 表土、A₁-Aを含む砂質土、
 3層 黒褐色土、A₁-Bを含む砂質土、
 4層 黒色土、ローム小ブロックを少量含む、やや粘質、
 5層 黒褐色土、ローム小ブロックや粒子を少量含む、やや粘質、
 6層 暗褐色土、ローム大ブロックを少量含む、やや粘質、
 7層 明褐色土、ロームブロックを多く含む、やや粘質、
 8層 灰褐色土、ローム粒子を多量に含む、やや粘質、



- 2墳
 1層 明褐色土、黒色土小ブロックを少量含む、FPを極少量含む、ソフトな土層、
 2層 黒褐色土、ローム小ブロックを極少量含む、FPを極少量含む、ソフトな土層、
 3層 暗褐色土、ローム小ブロックを少量含む、FPを極少量含む、ソフトな土層、
 4層 暗黄褐色土、ロームの大小ブロックの堆積層、FPを極少量含む、ソフトな土層、

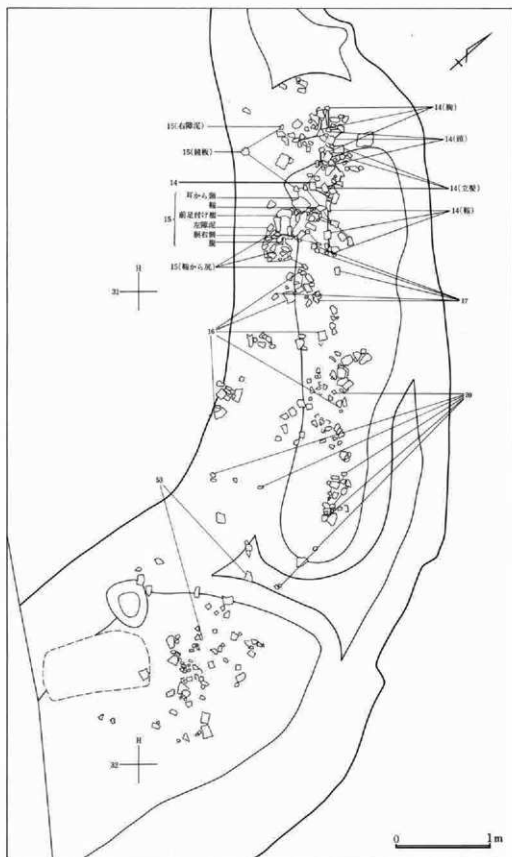


図56 2号古墳東周堀遺物出土状態

II 検出された遺構と遺物

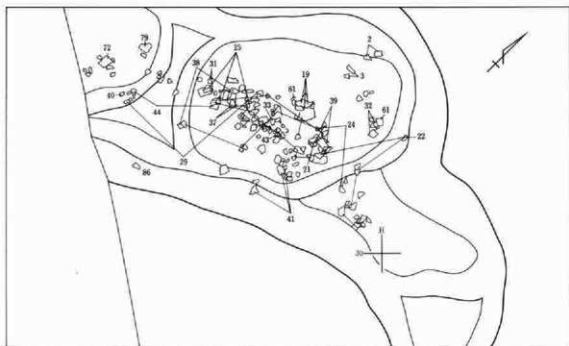


図57 2号古墳北周堀遺物出土状態

0 1m

男性の顔の部分（図58-1）が出土している。朝顔形円筒埴輪の出土は3個体であった。他は、ほとんどが円筒埴輪の破片であった。一方東堀からは、いくつかの形象埴輪の出土があった。特に馬形埴輪（図-60・61）が2個体分出土した。破片の分布状態から推定するに、14の馬の方が15の馬に比べてやや北側に位置し、両方とも頭を北方向へ向けていたようである。他に、12・13の大刀も出土した。同一個体かどうかは不明である。朝顔形円筒埴輪は6個体分出土している。人物埴輪については胴の部分や手や腕の出土があったが、性別は不明である。胎土・焼成から8と9は同一個体と思われる。また、8の人物埴輪は背中から右腕付け根の部分であり、腕をやや斜め上方に上げ馬形埴輪のやや前方の位置からの出土なので、馬飼いを想定する。

調査所見 昭和163年度に周堀の一部を確認し得たが、本格的調査は平成元年度に行った。（中山）



図58 2号古墳出土遺物(1)

0 20cm

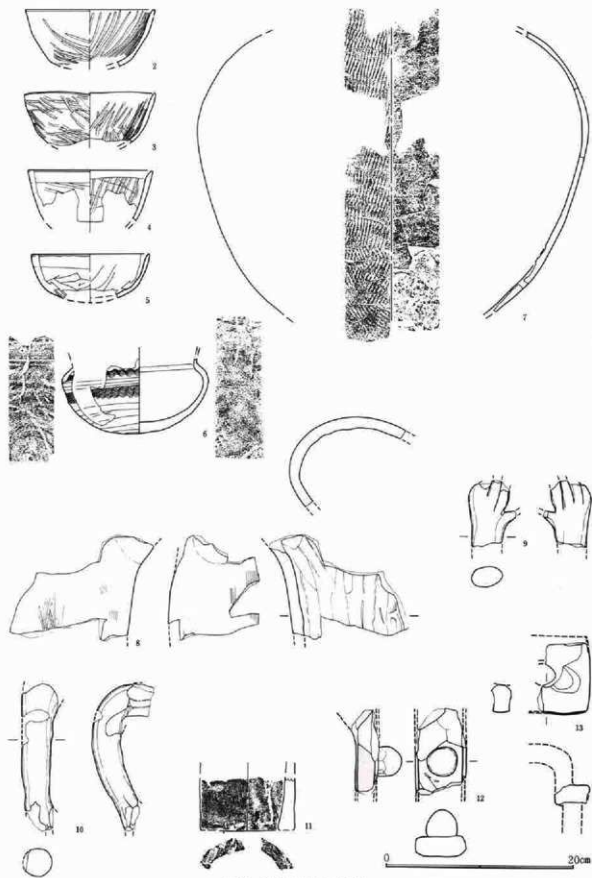


图56 2号古墳出土遺物(2)

II 検出された遺構と遺物

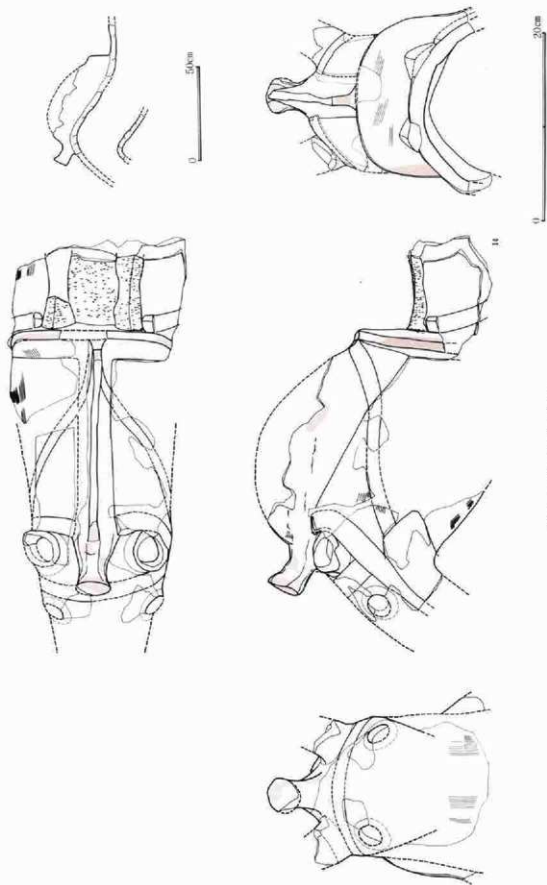
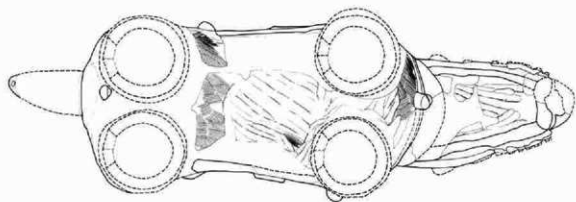
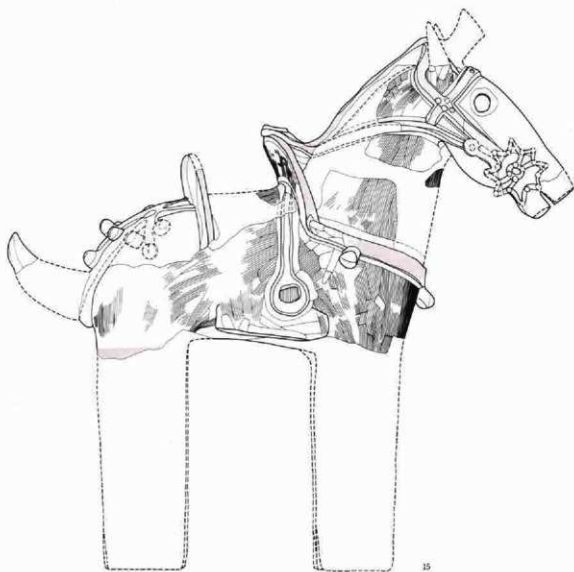


図60 2号古墳出土遺物 (a)



0 25cm

図61 2号古墳出土遺物(4)

II 検出された遺構と遺物

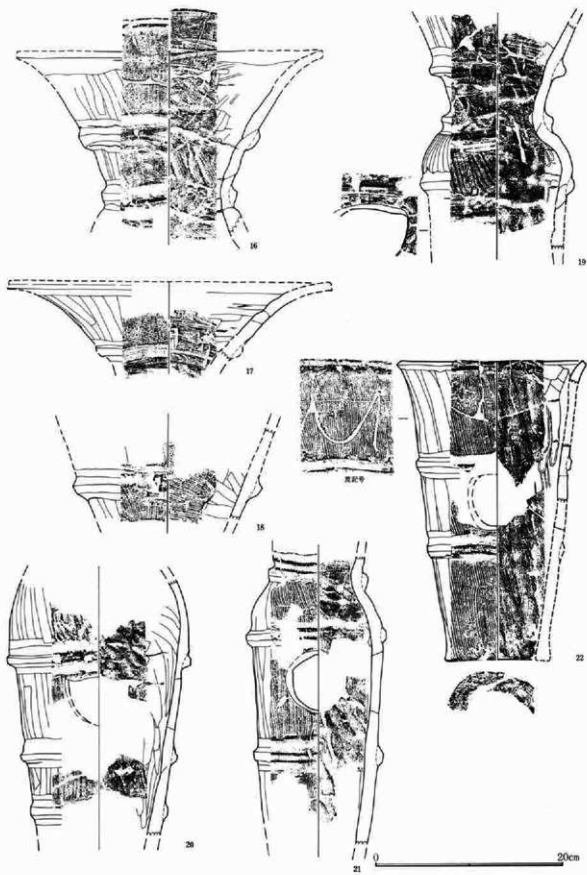


図62 2号古墳出土遺物(5)

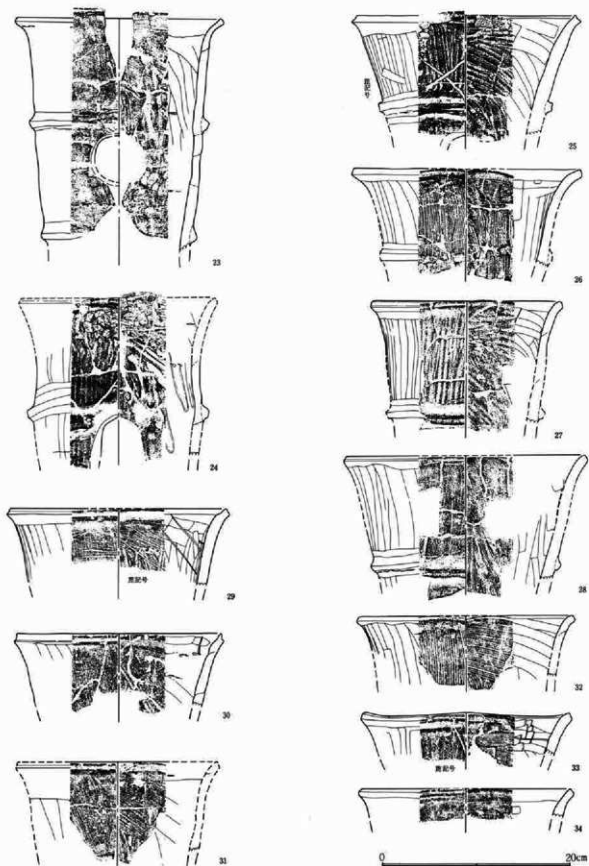


图63 2号古墳出土遺物 (6)

II 検出された遺構と遺物

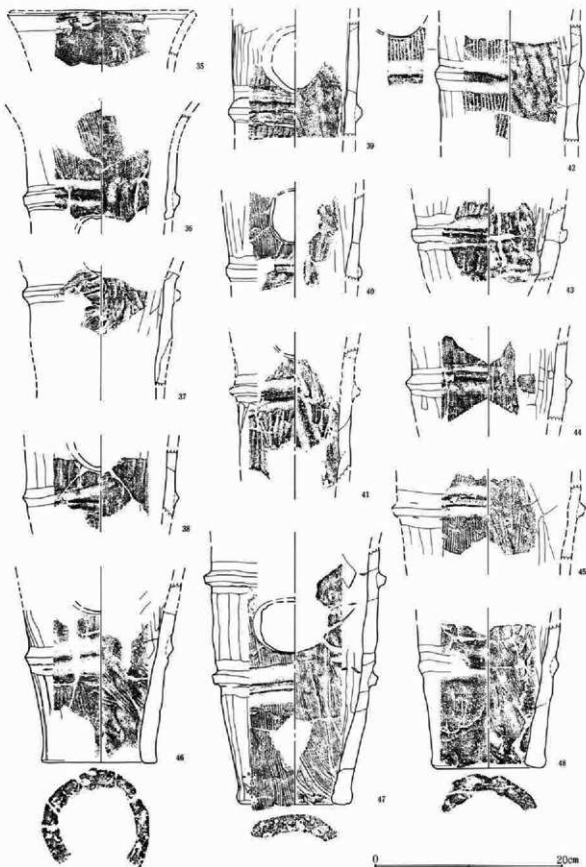


図64 2号古墳出土遺物(7)

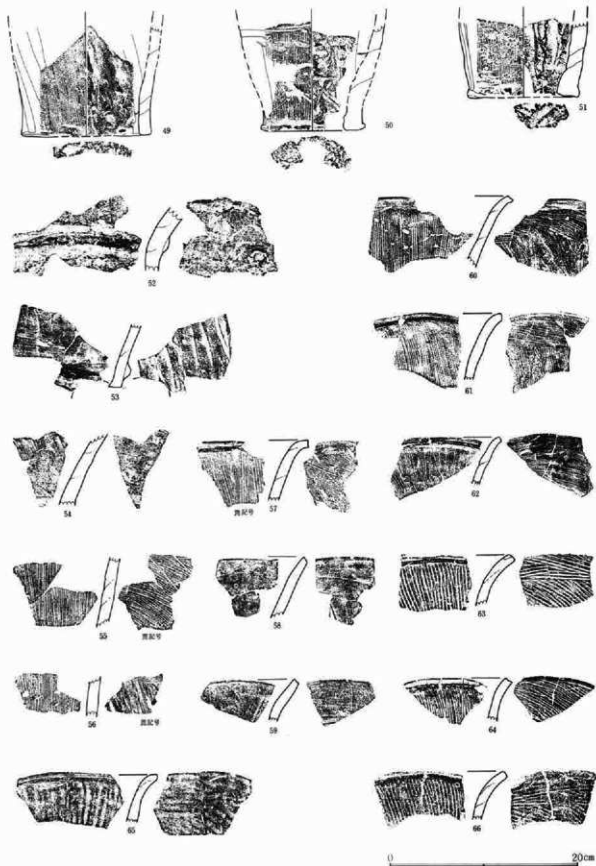


图65 2号古墳出土遺物(8)

II 検出された遺構と遺物

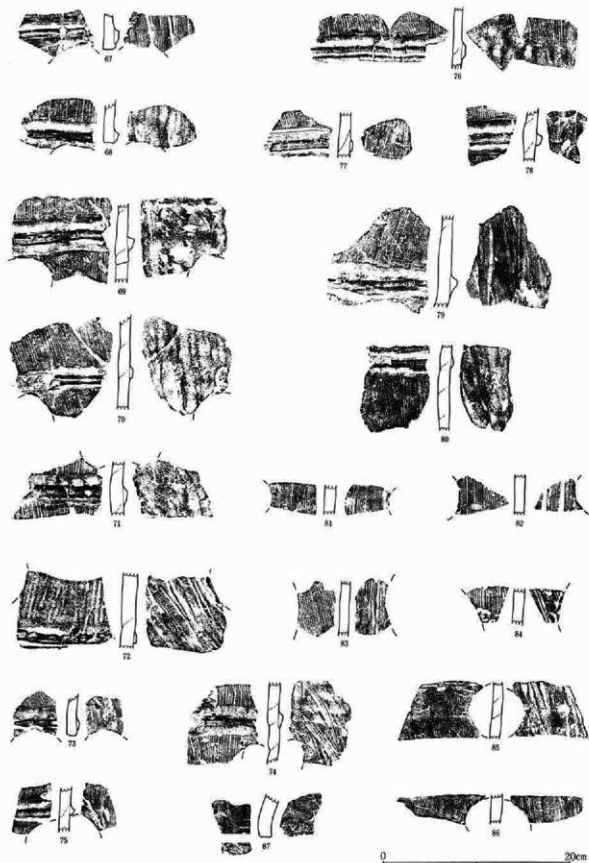


図66 2号古墳出土遺物(9)

3号古墳 (図67・68, 表26・27, PL23・55)

位置 4区 B～Dラインの間、6～8ラインの間で検出。

隣接して、北側に7号古墳、南側に4号古墳がある。

重複 86号土坑・113号土坑・39号溝に先行し、北側へのびる溝との新旧関係は不明。

形状・規模 平面形状から、やや楕円形を呈する円墳と思われる。墳丘径は、長径7.5m・短径6.3mと推定され、堀を含めると、短径8.8mと推定される。長径については不明である。

残存状態 全体の約4分の3残存し、そのうち一部は未調査である。西側は、現蛇川と道路下の水道管理設で破壊。墳丘・主体部共に削平されて、不明。周堀のみ残存。

墓石 周堀内への転石がみられないところから、ないものとする。

周堀 周堀は全周せず、墳丘北側で途切れている。途切れた部分から西側を西堀、東側を東堀とする。遺構確認面での計測では、西堀で上端幅1.2m～1.0m、底面幅0.5m～0.3mを計る。深さは0.3mあり、浅い皿状の断面形状を呈す。東堀は、上端幅1.5m～1.3m、底面幅0.8～0.5mで、西堀に比べて規模がやや大きい。深さは0.3m～0.2mあり、浅い逆台形の断面形状を呈する。

埋没土 ロームブロックを含む黒褐色土で埋没していた。

遺物出土状態 墳丘が削平されているため、遺物はすべて周堀内からの出土であった。西堀からの遺物の出

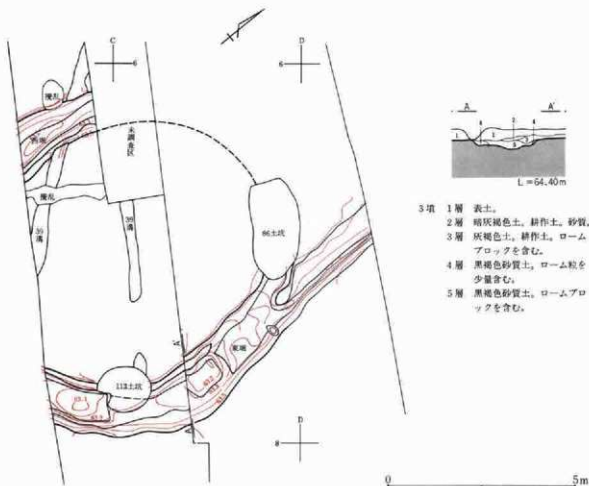


図67 3号古墳

II 検出された遺構と遺物

土は、僅かであり、実測可能な遺物の出土はなかった。東堀からは250点以上の埴輪片を取り上げたが、いずれも小破片で、実測可能な遺物は図68の3～7の盾形埴輪と思われる個体のみであった。

調査所見 調査は昭和63年度と平成2年度の2年にわたった。63年度調査時には、当古墳東堀と38号溝が平行して検出され、前方後円墳の一部と考えた。その後、平成2年度の調査で、38号溝が7号古墳を切っていることが判明し、さらに西堀の検出があり、当古墳の形状と規模が推定できた。

また、4号古墳出土の形象埴輪と本古墳出土の形象埴輪破片が接合したのが13点ほどあった（円筒埴輪片については接合関係不明）ので、本墳は4号古墳に後出する可能性がある。（中山）

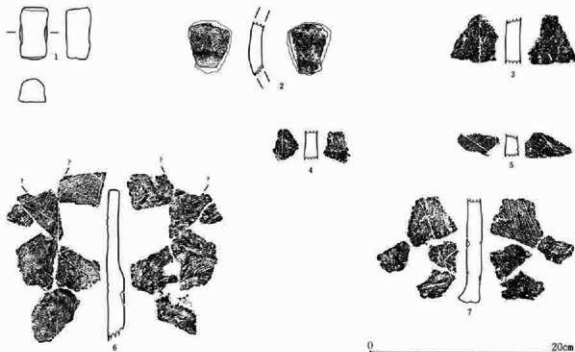


図68 3号古墳出土遺物

4号古墳（図69～74、表27～30、PL24・25・55～57）

位置 4区 B～Eラインの間、8～12ラインの間で検出。

隣接して、北側に3号古墳が、南側にやや離れて9号古墳がある。

重複 91号土坑・109号土坑及び39号溝に先行し、93号土坑に後出する。

形状・規模 墳丘の平面形状から円墳と考える。墳丘部径は約13mであり、堀を含めると径20mと推定される。

残存状態 全体の約5分の2残存し、一部電柱設置箇所にかかり未調査である。西側は現蛇川と道路下の水道管理設で破壊。墳丘・主体部共に削平されて、不明。周堀のみ残存。

墓石 周堀内への転石はみられないところから、ないものとする。

周堀 検出状況からは、周堀は全周するものとするが、確認できたのは、全体の5分の2程で、残りは調査区外になる。周堀上端幅は4.0m～3.0mあり、底面幅は1.5m～0.8mあり、底面は南側ほど平らになる。深さは1.5m～0.8mあり、中央から南側で皿状の、北側では逆台形状の断面形状を呈する。

埋没土 FPと思われる白色軽石を含む暗褐色土で埋没していた。最下層は地山のロームを多量に含む黄褐色

II 検出された遺構と遺物

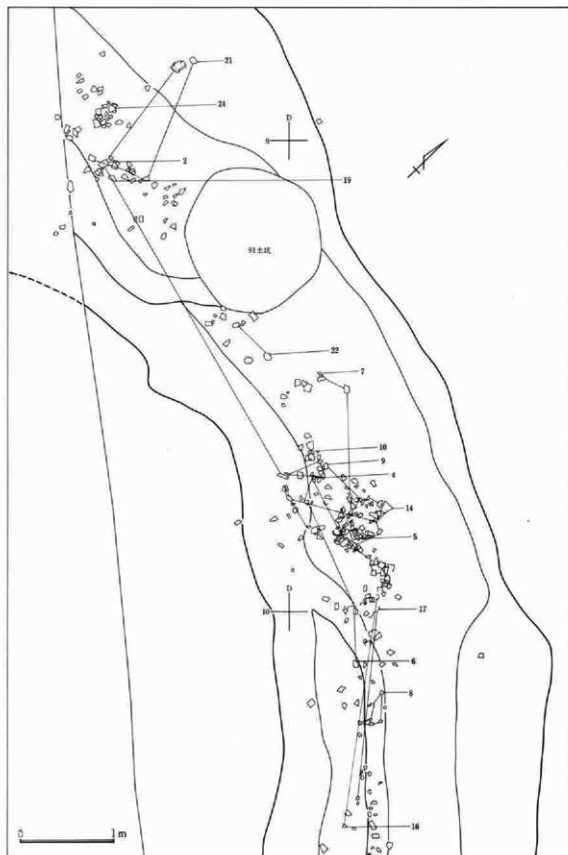


図70 4号古墳遺物出土状態

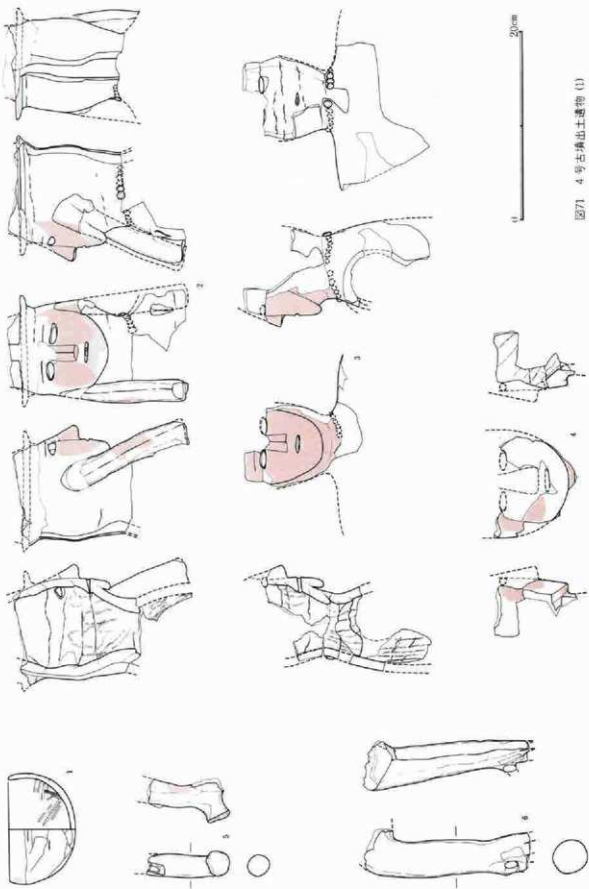


图71 4号古墳出土器物(1)

II 検出された遺構と遺物

土であった。埋設土上層には、As-Bのブロックが見られたので、12世紀初頭までには周堀がほぼ埋まっていたことが想定される。

遺物出土状態 墳丘は削平されていて、遺物の出土は周堀内からであった。11ラインより北側に遺物の出土が多く、形象埴輪のうち人物が、6体(図71~73)あり、男性が2体、女性が3体判明しており、もう1体も女性と思われる。首から下の出土遺物は少ないので、頭部の復元が主になった。人物以外の形象埴輪は、破片が細かく復元不可能であった。円筒埴輪や形象埴輪の基底部の出土は、ごく僅かであった。朝顔形円筒埴輪破片も、それとわかるものの出土はなかったので、調査範囲内には樹立されていてもごく僅かか、あるいはなかったのかもしれない。

調査所見 調査は昭和163年度と平成2年度の2年にわたった。平成2年度調査部分からの遺物の出土は少な

く、小破片が100点程度であり、形象埴輪片はほとんどなかった。このことから、埴輪の樹立は、本古墳の北側からやや東にかけて行われたのであろうか。(中山)

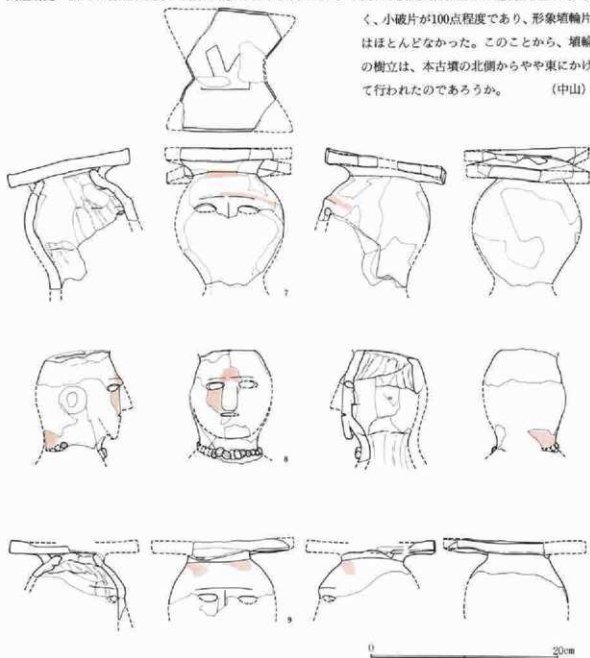


図72 4号古墳出土遺物(2)

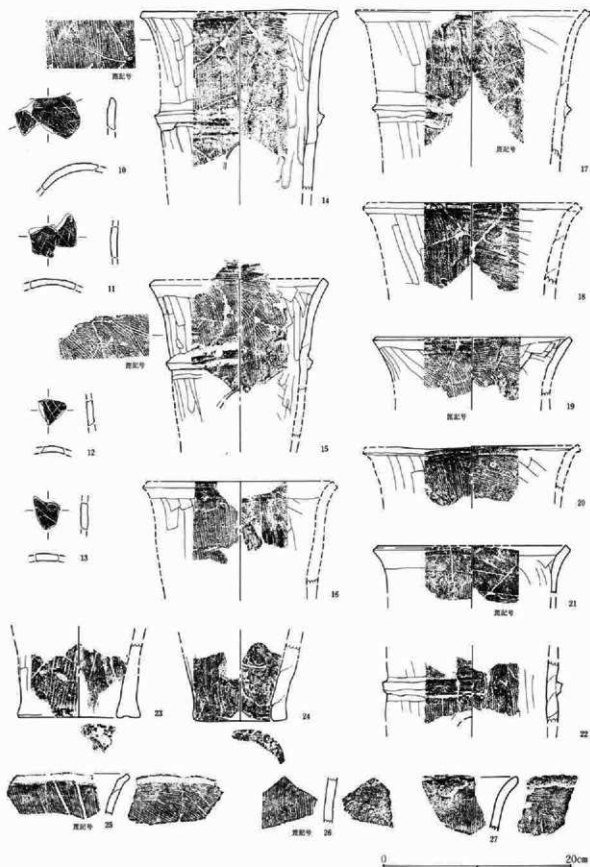


図73 4号古墳出土遺物(3)

II 検出された遺構と遺物

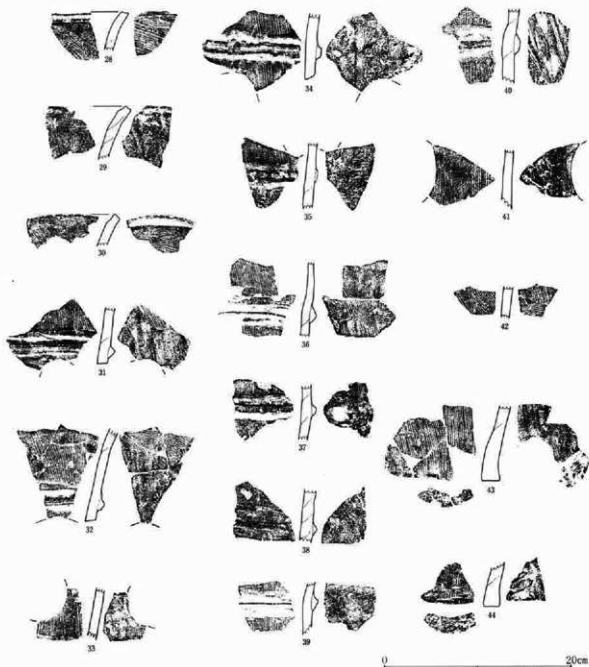


図74 4号古墳出土遺物(4)

5号古墳 (図75~79, 表30・31, PL26・57・58)

位置 3・4区 E~Gラインの間、22~25ラインの間で検出。

隣接して、北側に8号古墳が、南側に1号円筒棺と1号古墳がある。

重複 なし。

形状・規模 墳丘及び周堀部分の平面形状から円墳と考える。墳丘部径は約13mであり、堀を含めると径19mと推定される。

残存状態 墳丘部分はほとんど残らない。周堀は約4分の1残存。他は、現蛇川によって破壊。3区と4区の境になる部分には電柱があり、未調査。

3. 古 墳

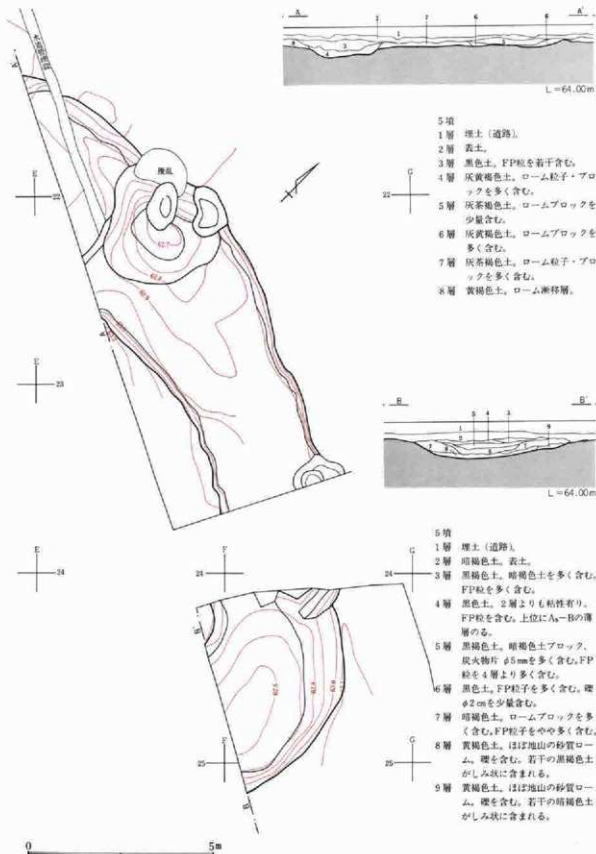


図75 5号古墳

II 検出された遺構と遺物

墓石 周堀内への転石がみられないところから、ないものと考える。

周堀 全周するものと考える。上端幅4.2m～2.8m、底面幅3.5m～2.5mある。深さは、E-22グリッド内の落ち込みで50cmの深さであるが、その他は30cm程度の深さである。断面形状は、ほぼ皿状を呈す。

埋没土 FPを含む黒～暗褐色土で埋没していた。最下層は、地山のロームを多量に含んだ黄褐色土であった。

遺物出土状態 遺物は、すべて周堀内からの出土であった。23ラインから南側は散在する程度の遺物の出土量であり、遺物は主にE-22グリッドから出土した。部位のわかる形象埴輪は1点のみで、あとは円筒埴輪破片であった。そのうち、朝顔形円筒埴輪は図77-2である。

調査所見 調査は昭和63年度と平成元年度の2年にわたった。形状については断定できる遺構（前方部）が検出されていないため、円墳とした。しかし、周堀の西側への直線の伸び方、及びE-22グリッド内の落ち込みからは、1号古墳同様の帆立貝式古墳を想定することもできる。すなわち、E-

22グリッド内の落ち込みは、東くびれ部にあたり、西側への直線的な周堀の伸びは、前方部前端へつながる部分とも考えられるからである。本墳出土遺物は、出土遺物量からすれば1・2・4・6号墳に次ぐもので、少ない部類に入るが、非常に堅緻な胎土である。復元された朝顔形円筒埴輪は、9基中最も大きい。

(中山)

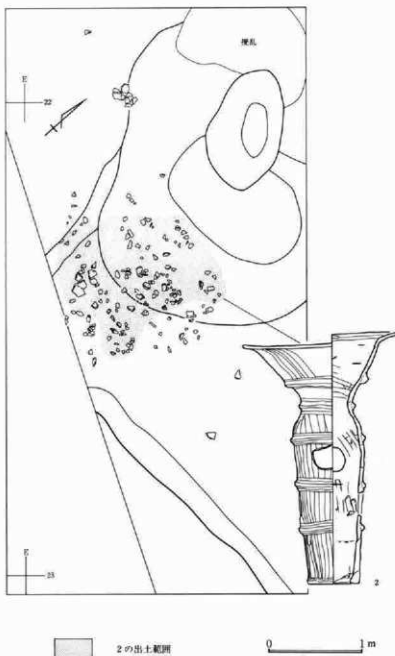


図76 5号古墳遺物出土状態

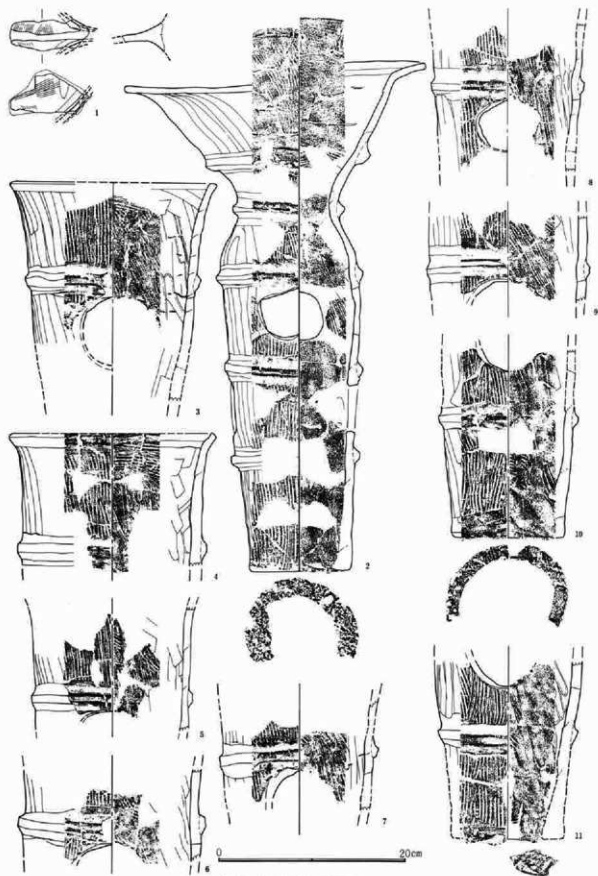


图77 5号古墳出土遺物(1)

II 検出された遺構と遺物

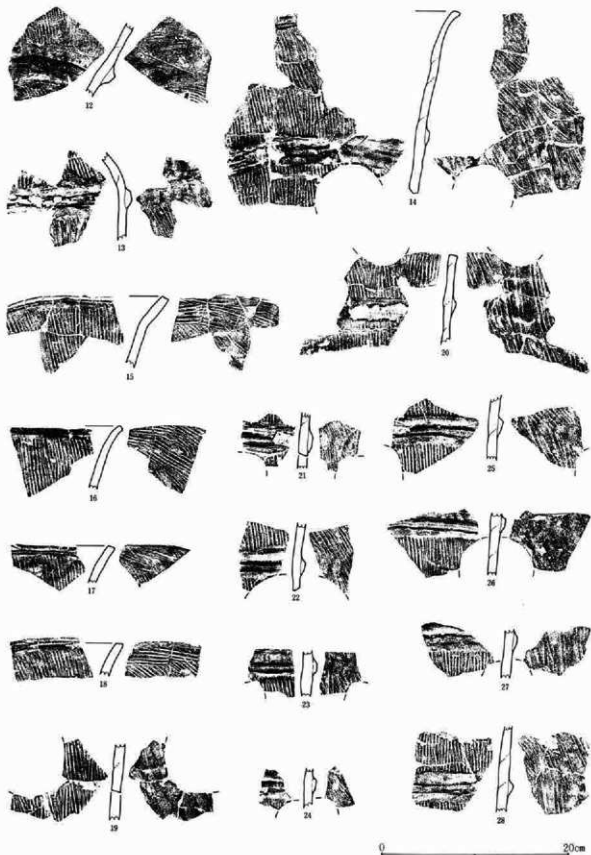


図78 5号古墳出土遺物(2)

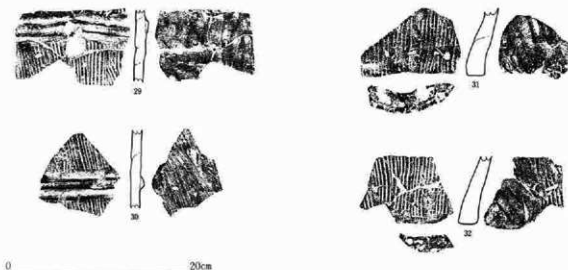


図79 5号古墳出土遺物(3)

6号古墳 (図80～83, 表31～33, PL27・58)

位置 3区 G～Iラインの間、32～37ラインの間で検出。

隣接して、北側に2号古墳がある。

重複 99号・100号土坑と、29～33号溝に先行し、106号土坑・122号住居・1号掘立に後出する。

形状・規模 平面形状から、円墳と思われる。墳丘径は約8mであり、堀を含めると径10.4mと推定される。

残存状態 全体の約3分の1残存。西側は、現蛇川によって破壊。墳丘・主体部共に削平されて、不明。周堀のみ残存。

墓石 周堀内への転石がみられないところから、ないものと考えられる。

周堀 周堀は全周するものと思われる。遺構確認面からの計測では、上端幅1.8m～1.1m、底面幅1.3m～0.4mある。深さは、50cm前後である。断面形状は北側ほど逆台形状を呈し、南側ほど皿状を呈する。

埋没土 FPを含む黒～暗褐色土で埋没していた。

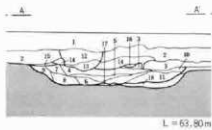
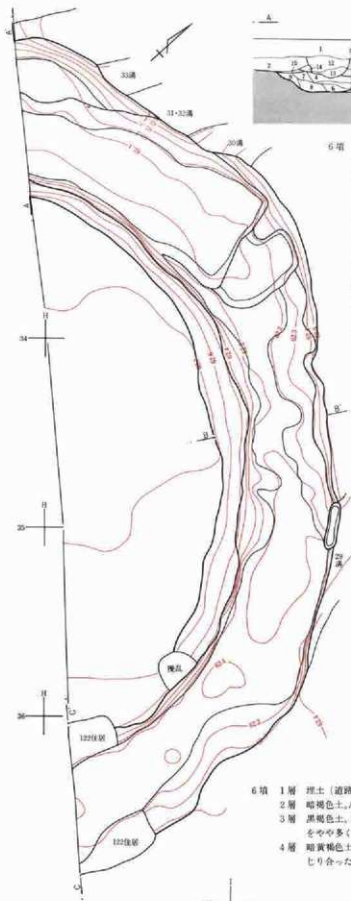
遺物出土状態 墳丘が削平されているため、遺物の出土は墳丘肩部から周堀内であった。形象埴輪は少なく、人物埴輪の腕が2本出土している。他には、盾と大刀の部分の出土をみる。朝顔形円筒埴輪は、破片で2片出土（内1片は図82の7）しているのみであり、樹立数はごく僅かなことが想定される。35ラインから36ラインの間に遺物が集中しているので、おそらくこの付近の墳丘上に埴輪が集中して樹立されたものと思われる。また、本古墳出土の遺物で特徴的なことは、脆弱な胎土の埴輪が多いことである。

調査所見 本古墳と切り合う溝や土坑から多くの埴輪片が出土した。位置的には本墳に伴う遺物と考えられるが、図135の2は、器種・胎土・焼成・整形等から、2号古墳に伴う遺物と考えられる。(中山)

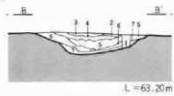


図80 6号古墳出土遺物(1)

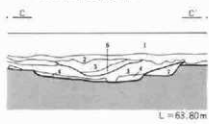
II 検出された遺構と遺物



- 90坑 12層 暗褐色土。
 13層 暗黄褐色土。
 32溝 14層 黒褐色砂質土。
 31溝 15層 暗褐色砂質土。
 33溝 16層 暗褐色砂質土。
 34溝 17層 明褐色土。
 18層 灰黄褐色土。
- L = 63.80m
- 6墳 1層 砂礫層埋土。
 2層 表土。A₁-A₂を含む。
 3層 暗褐色土。FP多量に混入。小礫少量混入。ローム小ブロックを少量含む粘質土。
 4層 黒褐色土。FP多量に混入。
 5層 黒色土。FPを多く含む。粘性が高い。
 6層 黒褐色土。FPを少量含む。ロームブロックをやや多く含む粘性。
 7層 褐色土。ロームと褐色土の混じり合った土層。
 8層 灰褐色土。ローム小ブロック少量含む。粘性高い。
 9層 明褐色土。ロームと黒色土の混じり合った土層。
 10層 黒褐色土。ロームブロックを極少量含む。やや粘質。
 11層 明褐色土。ロームの大小ブロックをやや多く含む。粘質土。



- 6墳 1層 擾乱。
 2層 明褐色土。表土。
 3層 暗褐色土。白色小軽石粒子を多量に含む。しまりは良い。
 4層 暗褐色土。2層よりもやや明るい。白色小軽石粒子をやや多く含む。2層と4層の中間のしまり。
 5層 黒褐色土。FPを多く含む。3層よりもしまりは強い。地輪片を含む。
 6層 暗褐色土。地輪片を含む。FPをおずかに含む。ロームブロックを少量含む。最もしまりは強い。
 7層 明褐色土。砂質ロームブロックを多く含む。FPはほとんど含まない。



- 6墳 1層 埋土(道路)。
 2層 暗褐色土。A₁-B軽石を含む砂質土。
 3層 黒褐色土。FP粒を若干含む。ロームをやや多く含む。
 4層 暗黄褐色土。ロームと暗褐色土が混じり合った土層。
- 29溝 5層 暗褐色砂質土。
 6層 暗褐色土。
 122住 7層 明褐色土。

図81 6号古墳

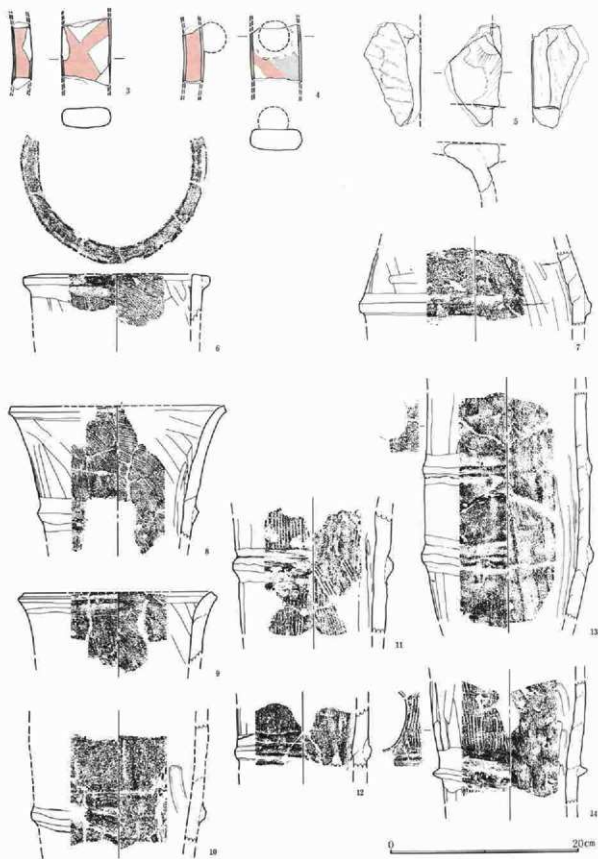


图82 6号古墳出土遺物(2)

II 検出された遺構と遺物

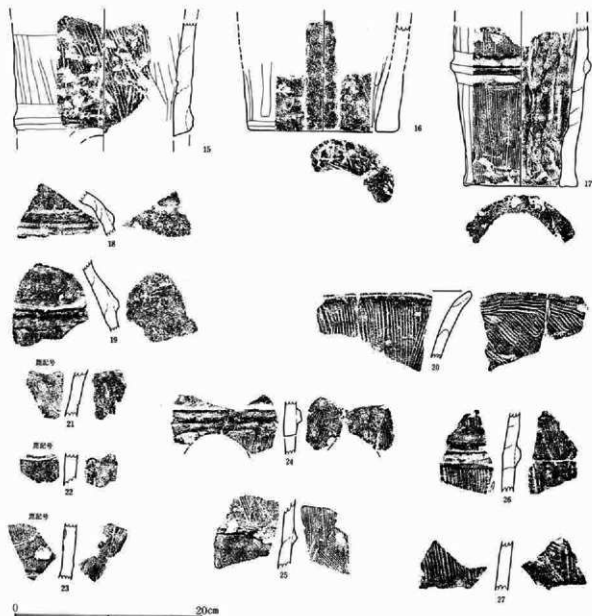


図83 6号古墳出土遺物(3)

7号古墳 (図84, 表33, PL28・58)

位置 4区 B-5・6グリッド内で検出。

隣接して、南側に3号古墳がある。

重複 38号溝に先行する。

形状・規模 不明。

残存状態 現蛇川と水道管埋設によって破壊され、北西の道路下へ延びる所から、周堀外縁の一部を確認しただけである。

墓石 不明。

周堀 外縁部の一部を検出。検出部分での周堀の深さは25cmある。周堀外縁線が、北の方向へ直線的に延びるのが観察された。

埋没土 ローム粒子を多く含む明褐色土で埋没していた。

遺物出土状態 遺物は周堀埋没土中から破片が10点出土した。そのうち、7点が形象埴輪の破片であり、実測可能な遺物は4点(1~4)のみであった。

調査所見 形状・規模共に不明であるが、他の古墳周堀と同様のゆるやかな立ち上がり状態と、埋没土上部にAs-B混入の黒色土の堆積がある点、埋没土が他の古墳と類似する点、少量ながら埴輪片が出土したこと等により、古墳の周堀と推定した。(下城)

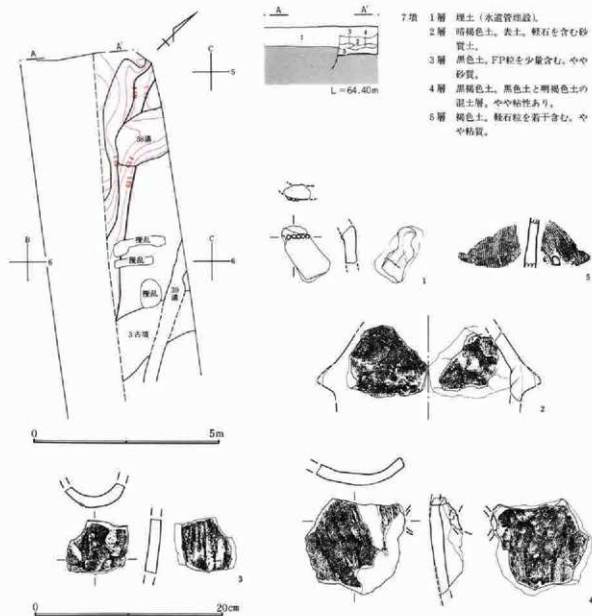


図84 7号古墳と出土遺物

8号古墳 (図85・86, 表34, PL28・29・58)

位置 D~Fラインの間、18~20ラインの間に位置する。

隣接して、北側に9号古墳が、南側に5号古墳がある。

重複 112号土坑・道路状遺構に先行し、風倒木痕を切る。

形状・規模 平面形状から、方墳と思われる。一辺が約7.8mと推定され、堀を含めると、約11mと推定される。

残存状態 全体推定規模の4分の3を検出。西側は、現蛇川によって破壊。墳丘・主体部に削平されて、不明。周堀のみ残存。

墓石 周堀内への転石がみられないところから、ないものと考えられる。

周堀 遺構確認面からの計測では、上端幅1.8m～1mあり、底面幅0.9m～0.5mある。北堀はやや広く、東・南堀はやや狭い傾向にある。断面形状は逆台形を呈す。深さはどちらも平均20cmくらいあり、底面はやや凹凸がある。

埋没土 ローム粒子を多く含む灰褐色土で埋没していた。

遺物出土状態 墳丘が削平されているため、遺物は周堀内からの出土だけであった。総数約100点の小破片の中から図示し得たのは、13点であった。形象埴輪破片は2点あったが、図示し得なかった。

調査所見 民家の植木を移動した下から検出されたためもあり、かなりの深さで土が除かれた。そのため周堀の深さも20cm程度しか残らなかったであろう。本墳に伴う埴輪は、元々少なかったのか、覆乱を受けたためかは不明である。

(下城)

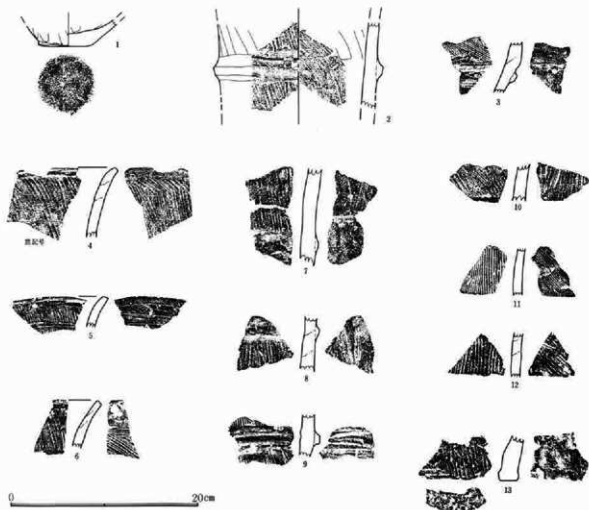


図86 8号古墳出土遺物

II 検出された遺構と遺物

9号古墳 (図87・88, 表34・35, PL29)

位置 4区 C～Fラインの間、14～18ラインの間で検出。

隣接して、南側に8号古墳があり、やや離れて北側に、4号古墳がある。

重複 36号溝と1号道路状遺構に先行する。

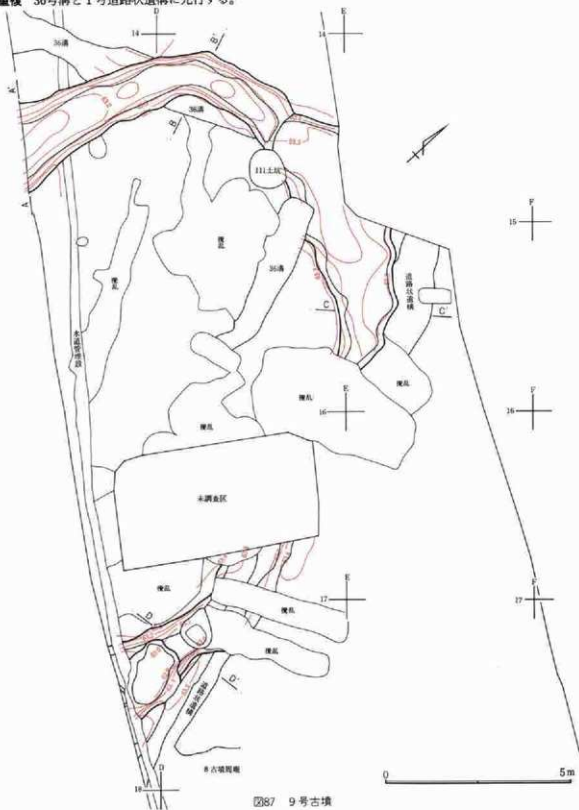


図87 9号古墳

形状・規模 平面形状は不整楕円形をしており、歪んだ形状をなす。墳丘規模は、長径約12m、短径約10mと推定される。堀を含めると長径約15mと、短径約13mになる。

残存状態 全体推定規模の5分の3を検出。西側は、現蛇川によって破壊。墳丘・主体部共に削平されて、不明。周堀のみ残存。

墓石 周堀内への転石がみられないところから、ないものと考えられる。

周堀 周堀は全周せず、墳丘北東側に土橋部の存在が推定される。遺構確認面からの計測では、上端幅2m～1mと差があり、深さも40cm～15cmと差がある。西側と東側の周堀は幅がやや狭く深い。北側の周堀は幅が広く浅い、浅くなる。

埋没土 ローム粒子やロームブロックを含む灰褐色土で埋没していた。

遺物出土状態 墳丘が削平されているため、遺物は周堀内から出土した。破片総数33片。そのうち須恵器破片8片、土師器破片5片あるので、埴輪破片20片ときわめて少量の出土であった。破片も細かい。

調査所見 民家の下から検出された遺構のため、残りが非常に悪く、遺構確認面が、他の古墳より深かった。そのため、周堀の深さに大きな違いがでたことは否定できない。遺物出土状態により、本墳にも埴輪が樹立されていたことがうかがえるが、量については遺構確認面が下がったことから、不明である。（下城）

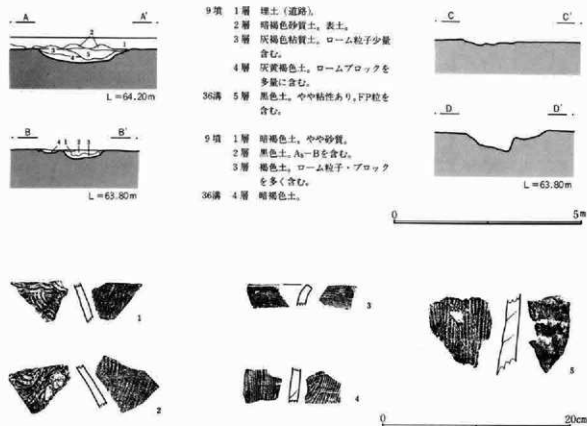


図88 9号古墳埋没土層と出土遺物

1号円筒埴輪（図89～91、表35、PL30・59）

3区 F-25グリッド内で検出された。

西側に5号古墳が、南側に1号古墳が隣接する。

長楕円形の掘り方内に、2本の円筒埴輪を合わせ口に設置している。

II 検出された遺構と遺物

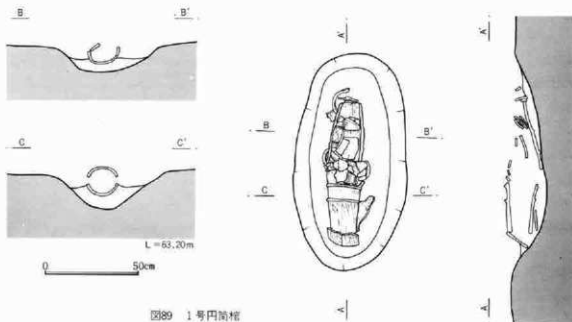


図89 1号円筒棺

掘り方の規模は、長軸1.15m・短軸0.6m・深さは、遺構確認面から0.2mである。長軸方向はN56°Eである。長軸方向の断面は、東側が急傾斜で、西側に向かうに従いゆるやかな立ち上がりを示す。掘り方充填土は黄褐色土である。ローム起源の土と考えられるが、やや汚れた粘性の低い土であり、墳輪設置後埋填したと考えられる。

墳輪は、上辺がほぼ水平になるように、底部をやや持ち上げた格好で設置され、西側の円筒墳輪については、内部から底部を塞ぐように、4枚の墳輪片が置かれていた。両端の外側からも、底部を塞ぐように墳輪片が置かれていた。したがって、西側の円筒墳輪は内外両面から底部を塞いでいたことになる。主体部内の土をふるって、遺物等の検出を試みたが、未検出である。

西側に使われた円筒墳輪は、上側半分が失われているが、これは表土掘削を機械で行った時に、誤って削り取られた部分である。2本の完形の円筒墳輪を用いて主体部にしたと考えられる。主体部を隠すようにやや盛り土があったと思われるが、その規模等は不明である。

主体部には、図91のように7個体の墳輪が用いられていた。4・7は同一個体である。1・2を合わせ口にして、4・8の破片で合わせ口を固定したのであろうか。3を2の下に置き、1の内側から5・7の破片で底部を塞ぐ。円筒の底部は外側から3・7を用いて塞いでいる。両側面の透し穴は、破片で塞がれてはいなかった。中に土が入り込まないようにするには、円筒棺全体を何かで包んだのであろうか。

3は、基底部はないものの、縦方向2分の1を、円筒棺の各所に利用している。(中山)

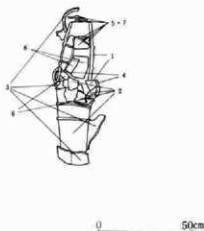


図90 1号円筒棺遺物接合図

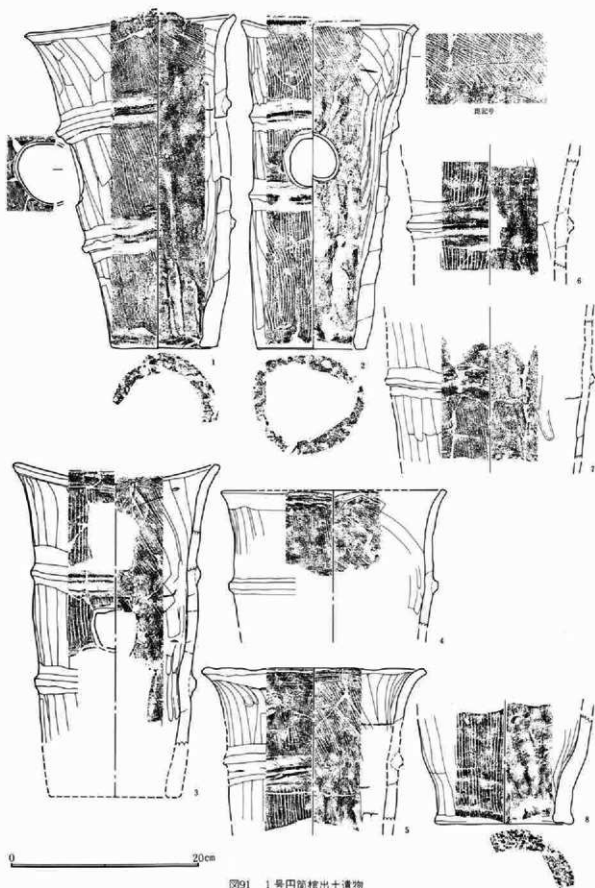


図91 1号円筒棺出土遺物

4. 旧河道

本河道は、調査区内38～50ラインまでのうち、調査区の半分以上の面積を占める。河道としたのは、調査区内を蛇行していることや、埋設土が砂質で下部層が砂礫だからである。50ラインより下流でも同様の遺構が検出されており、自然流路とは認めながらも、上流側への続きが想定されるため、便宜上1号溝・17号溝の遺構名称を付して昭和63年度に報告した。今回上流側が調査できたので、一連の川とし、調査区内を蛇行しながら流れていると判断した（図92）。

本地域は、大間々扇状地の扇側部（扇端部でもあろう）にあたり、旧河道の基底面は礫層やローム層である。2区南側の蛇川沿いの地層観察では、砂質のローム層と中礫を主とする礫層の互層になっている。河道の底面も地点によって変化があり、黄褐色シルトで充填された礫層が表われていたり、ロームだったりする。この状態は50ラインより下流側でも同様である。

本河道によって、多くの遺構が切られている。上流側から順に追ってみると、117号・120号・122号・116号住居跡、114号・115号・108号・79号土坑、34号溝等である。後出する遺構としては、23号溝、80号・81号・82号土坑、7号井戸がある（図93、付図2）。

表土を剥いで遺構を検出したところ、2区の広い範囲で帯状に南東方向へ延びる黒色土が認められた。

I・J-40グリッド内にトレンチを入れ土層観察を行った結果、上位から黒色砂質土・粘質土・黄褐色砂質土・砂礫層の順に、土層が堆積しており、自然の流路であることがわかる。また、砂礫層上面から土器が

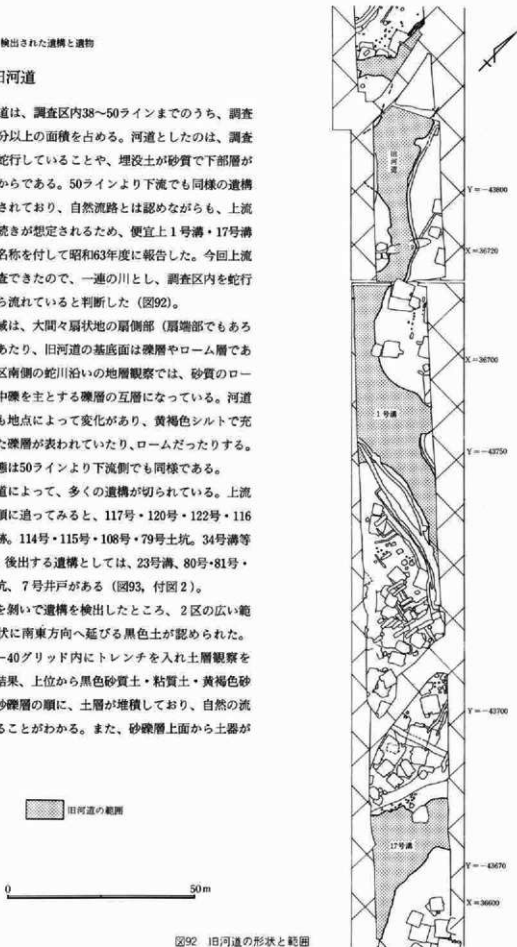


図92 旧河道の形状と範囲

出土することも明らかとなった。自然の流路は層相の変化の激しいことが予想され、遺構の規模や形状、遺物の出土状態と出土層位を正確にとらえるため、およそ10mおきに土層観察用のベルトを残しながら、掘り進めることにした。

2年度に渡った調査区は、以下の通りである。(図92)

昭和63年度	2区	41ラインから50ラインの間 (50ラインから1号溝)
平成元年度	2区	38ラインから41ラインの間
	3区	36ラインから40ラインの間 (K-33・34グリッド内に、右岸肩部の一部分を検出したが、底面は調査範囲外になり、遺物の出土はなかったため、全体図の中でのみ位置を示し、他の図や付図からは除いてある。)

検出した旧河道は、下流の17号溝まで総延長250mあり、その内今回調査区は、36～50ラインの間で約70mある。河道は蛇行しながら南東方向へ延び、右岸法面未検出であるが、43ライン付近で最大幅20m以上となる。最も狭いのは46ライン付近で、5mの幅である。地表面から2mを越える深い部分は、I-44グリッド内にあり、遺構確認面から約1.2mの深さである。浅い部分はJ-43グリッド内で、深さ0.6mある。旧河道は、41ライン付近から蛇行南流し、42ラインで一部調査区域外に出る。43ラインから東方向へ流路を変え、46～49ライン間は、ほぼ真直ぐに南東方向へ延び、49ライン付近から南へ向きを変える。

以上の形状と流路変遷をへた河道は、遺物出土状態と河道埋積物を検討した結果、3時期に区分することができる。新しい河道から、第1河道・第2河道・第3河道と呼称して使用する。第1河道は、8・9世紀の平安期の特色を持つ須恵器杯形土器を指標とする遺物を出す流路(図93)である。付図の土層では2層から15層までである。その他に、本流からややはずれる3区内の2つの流路については、本流ととらえた土層の堆積と異なるので、30層以降の番号を付した。河道の鍵層として12世紀初頭に降下したとされるAs-B(3層)とその下位の粘性の高い黒色土(4層)がある。土層観察によると、本流部分の4層と36層は同じであり、As-Bを多量に含む砂層である31層は、3層にきわめて近い時期の土層と言えよう。本河道最下層は、砂礫層である。J-45グリッドから下流では、礫層の堆積は見られず、粘性の高い暗褐色土となり(11層)、上位の10層と共に遺物包含層となっている。第2河道は、古墳時代後期の特色を持つ土師器杯形土器を指標として、これと同時に遺物を出す流路(図97)である。付図の土層では16層から26層までである。本河道は、暗褐色である21層と褐色土の23層そして砂礫層の24層が遺物包含層である。第3河道は、他の2つの河道が上流から下流まで連続して追えたのに対して、上位のこれら2つの河道によって侵食され、J・K-39・40グリッド、J-42・43・44グリッド、I・J・K-49・50グリッドの3地点(図97)にのみ検出された。遺物包含層は、26層の砂礫層であり、古墳時代中期後半の土器群からなる。以上のように、3つの河道の底面は砂礫層からなり、その中から多量の遺物が出土している。これらの遺物は、器面は水流の影響で荒れているにもかかわらず、土器の欠け口が摩耗しているものは極く僅かである。器種によっては、17号溝(第1集)の土師器高杯形土器や埴形土器の出土のように、集中出土地点が見られる。

(1) 第1河道(図93～95, 表35～37, PL31～34・59)

第1河道は、平安期の遺物を底面近くから出土する。その後河道の変遷と埋積を続け、12世紀初頭のAs-B降下によって、ほぼ川が埋まりきる。その後は、付図3の1層の土層断面のように、周辺よりはやや凹んだ地形のまま、現在に至る。本河道は、H・I-38グリッド内の支流と、K-36グリッド内の細流を合わせながら、41ラインより上流では下位の第2・第3河道を削り込む。出土遺物では須恵器が多く、長頸瓶や長

II 検出された遺構と遺物

頸窓あるいは椗が出土(図94・95-22・24・25)する。K-41グリッド内旧河道左岸には、強い水流にえぐられたと思われる部分がある。この近くからは、ほぼ完形で3個体の須恵器杯形土器(図94-4~6)が、法面から出土する。この辺りでは深さ0.9mと河道中最も深くなる。41ラインから下流は、何度も河道を変えながら、第2河道埋没土を削り込み、西へ大きく蛇行し、川幅も42~44ライン付近で最大となり、10m以上に広がる。46ラインからは流路をせばめて、幅3m深さ0.6mになる。48ライン付近で急に川幅がせばまり大きく蛇行する。幅1.5m深さ0.35mである。47ラインからはまた徐々に川幅を広げ、1号溝に続く。遺物出土も、46ラインより下流側では散点する程度になる。完形に近い遺物の出土はなかった。本河道出土遺物は、本来なら下位の第2河道・第3河道の遺物も取り込んでいるはずであるが、どれがその取り込んだ遺物かは、出土状態からは明らかにし得なかった。というのも、遺物出土が層位的に下位の第2・第3河道と連続しているためである。その結果、図94・95に示したように、河道内出土がはっきりわかる遺物に限った。これらの遺物は、河道底面ないしは法面からの出土であり、底面の範囲は、土層断面からの復元である。

■ 第1河道の範囲

0 10m

図93 第1河道の範囲



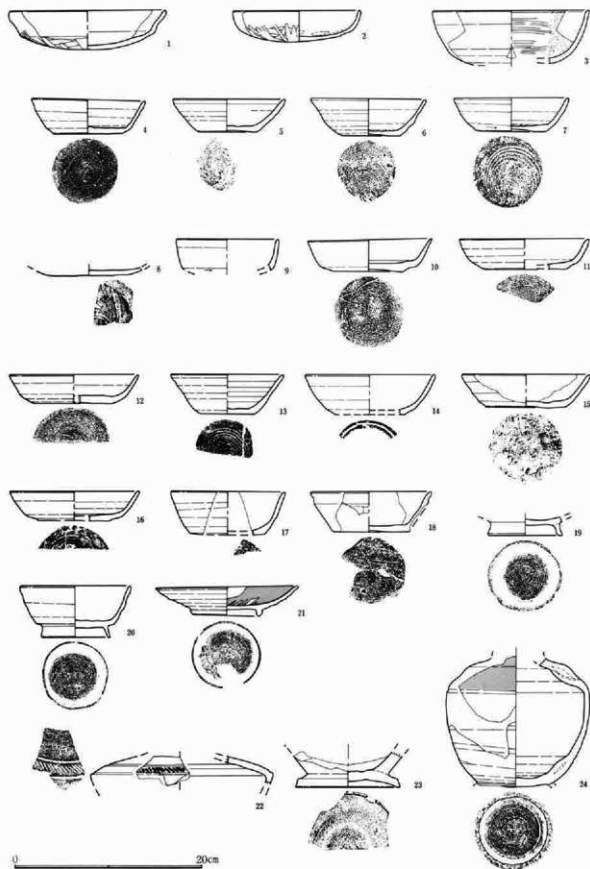


图94 第1河道出土遗物(1)

II 横出された遺構と遺物

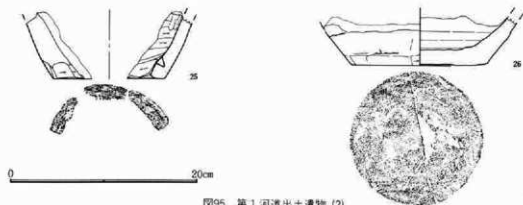


図95 第1河道出土遺物(2)

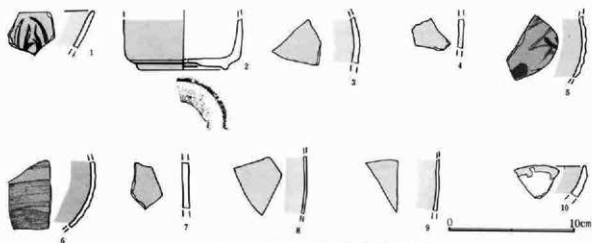
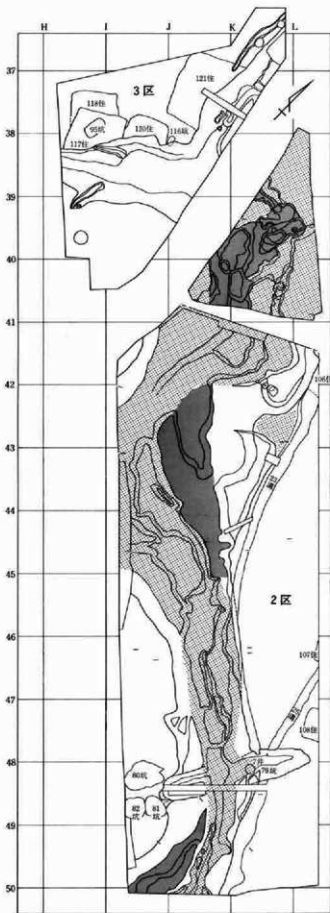


図96 旧河道その他の出土遺物(1) (P.L.59)

(2) 第2河道 (図97~111, 表38~43, PL31~34・60・61)

第2河道は、38~50ラインの間で検出された。3本の河道中河道の幅を最大に広げ、河床面も第3河道遺物出土層より一段下がっている。38~41ラインまでは上位の第1河道に切られて、河道底面の遺物のみ残ったような出土状態である。K-39・40グリッド付近では、第3河道の上位に本河道出土遺物と考えられるものが何点かあるが、第2河道と第3河道の境は、土層観察からはわからなかった。41ラインからは西へ大きく蛇行を始め、河道幅も広がる。44ラインまでは砂礫層中から遺物が散在(図97)して出土しており、礫層中からの出土のためか、欠け口が摩耗している遺物が多い。J-44グリッドからは、砂礫層からやや浮いた状態で、図101の14~23の土師器杯形土器が出土(図98)している。また、同じ位置から図103の60が破片になって点々とJ-49グリッドまで続く。J-46グリッド(図100)内では、63の須恵器壺形土器の破片が、左岸法面から帯状に48ライン近くまで延びる。この遺物も26層(砂礫層)直上の23層からの出土遺物である。この辺りから河道は下刻を始め、その中に砂礫と土器が入り込む。これらの遺物は、器面は荒れているものの、欠け口の摩耗しているものは極めて少ない。J-49グリッドからはさらに下刻をし、砂礫が堆積する。図111の50ラインよりやや上流側の左岸法面中段から図102の37の須恵器蓋が出土している。



遺物出土状態図について

図96 J-44グリッド付近上層

Kラインに沿って密集して出土している遺物は、26層中より出土した第3河道出土遺物である。

それより一段下がった西側が、21層内より出土した第2河道出土遺物である。

図99 J-44グリッド付近下層

45ラインより北側の密集部分が、第3河道出土遺物である。第2河道出土遺物は、24層内及びその直上からの出土である。

図100 J-47グリッド付近上層

中央部に帯状に延びるのは須形器整形土器の破片である。24層直上からの第2河道出土遺物である。

図106 K-39・40グリッド付近上層

第2河道底面と第3河道出土遺物層が接する部分と思われる。出土した遺物は第3河道出土遺物であり、上位に何個体か第2河道出土遺物が見られるが、河道の境はとらえられなかった。

図107 K-39・40グリッド付近下層

河床面のロームを削り込んだ窪みに、土器がびっしり入っていたのを取り上げた状態である。

図108 J-42グリッド付近上層

谷状の部分に密集する土器は、26層内から出土した第3河道出土遺物であり、図96の上流部分である。西側の法面付近の遺物は、第2河道出土遺物である。

図109 J-42グリッド付近下層

42ライン付近から斜めに1ラインの方向へ延びる遺物は、第2河道出土遺物である。他の谷状の部分に位置する遺物は、第3河道出土遺物である。

図110 I・J-49グリッド付近上層

Jライン上を斜めに横切る、密集した出土遺物は第3河道出土遺物であり、上位に何個体か第2河道出土遺物がある。法面から一段下がった部分の遺物は、第1河道出土遺物の可能性があるが、土層の層状状態からは検証できなかった。

図111 I・J-49グリッド付近下層

第3河道出土遺物は、3回の平面実測によってようやく遺物の取り上げが終了した。本図はその2回目の遺物出土状態図である。法面より一段下がった谷状の部分の遺物の出土は、第2河道出土遺物である。

■ 第2河道の範囲

■ 第3河道の範囲

0 10m

図97 第2河道・第3河道の範囲

II 検出された遺構と遺物

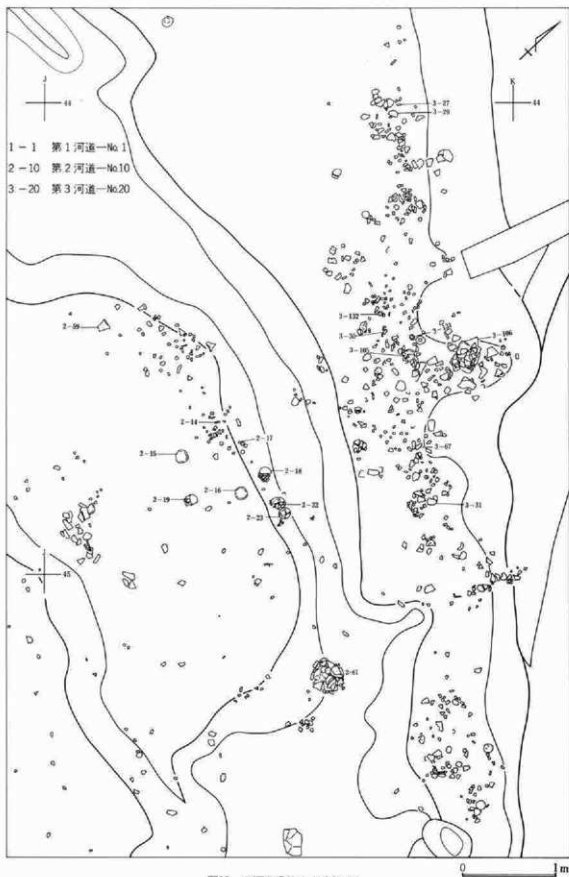


図98 旧河道遺物出土状態 (1)

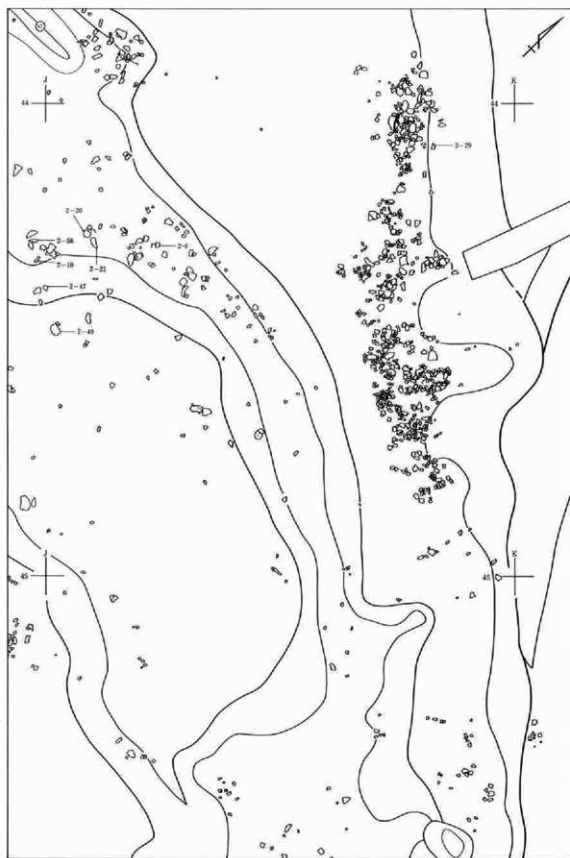


图99 旧河道遺物出土状態 (2)

II 検出された遺構と遺物

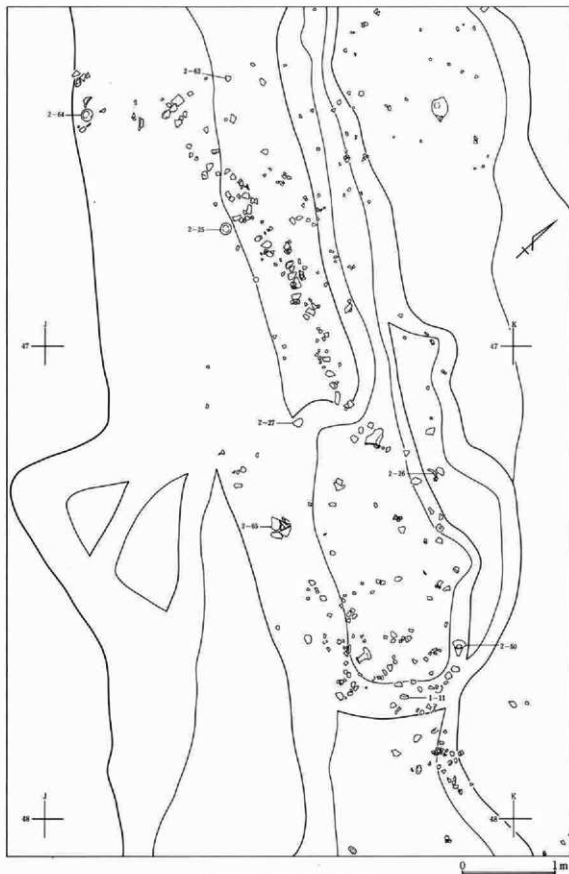


図100 旧河道遺物出土状態 (3)

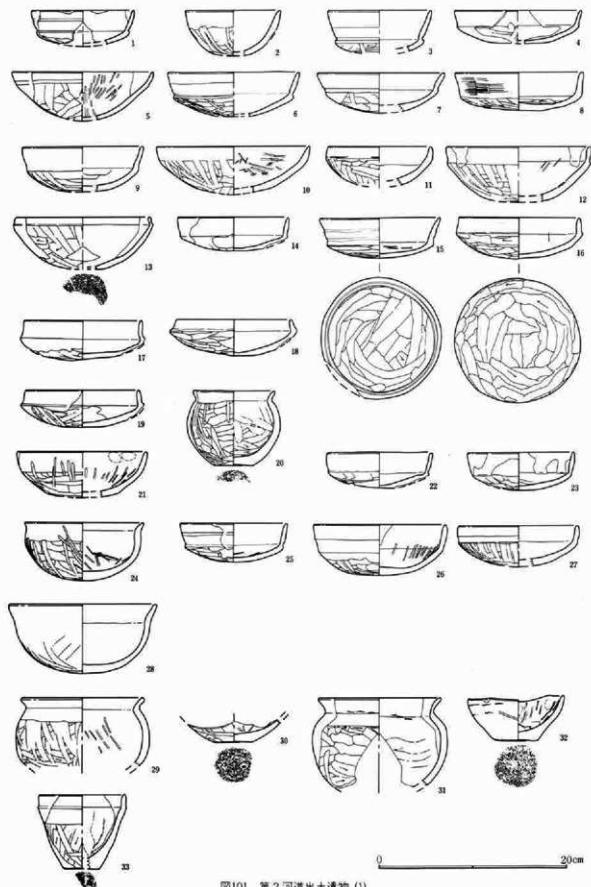


图101 第2河道出土遗物(1)

II 検出された遺構と遺物

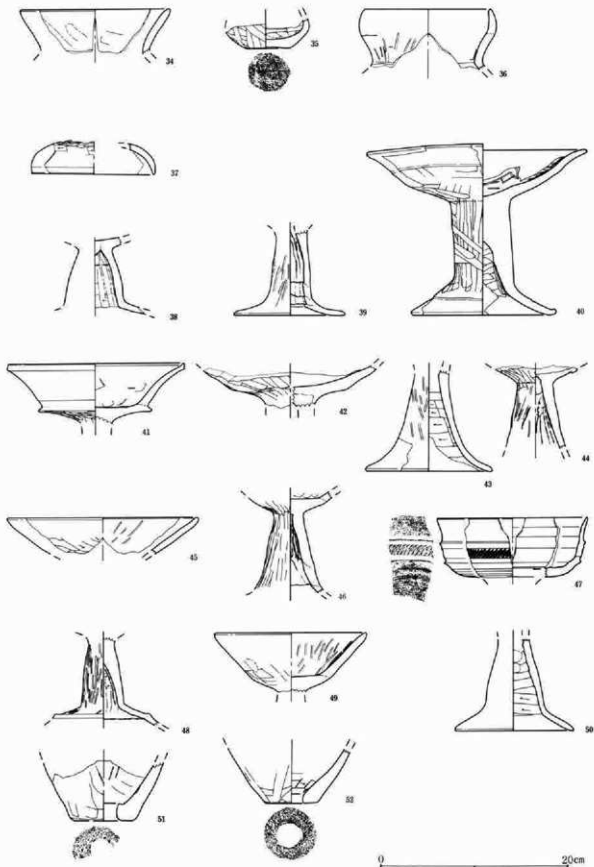


図102 第2河道出土遺物(2)

4. 旧河道

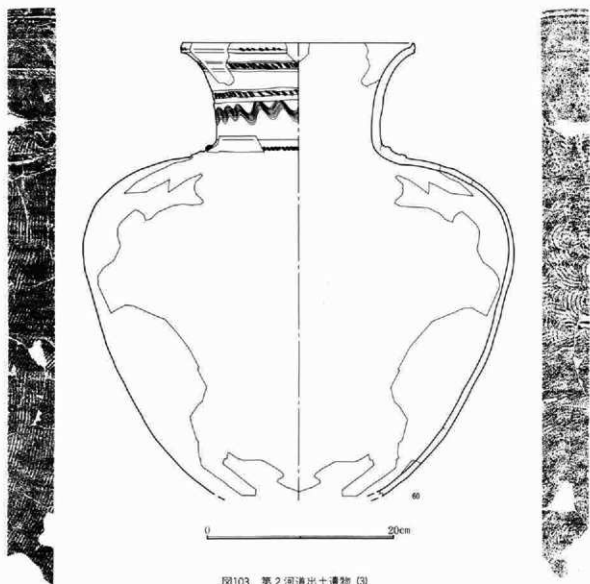
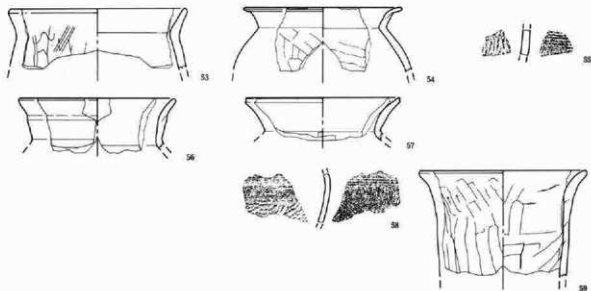


图103 第2河道出土遺物 (3)

II 検出された遺構と遺物

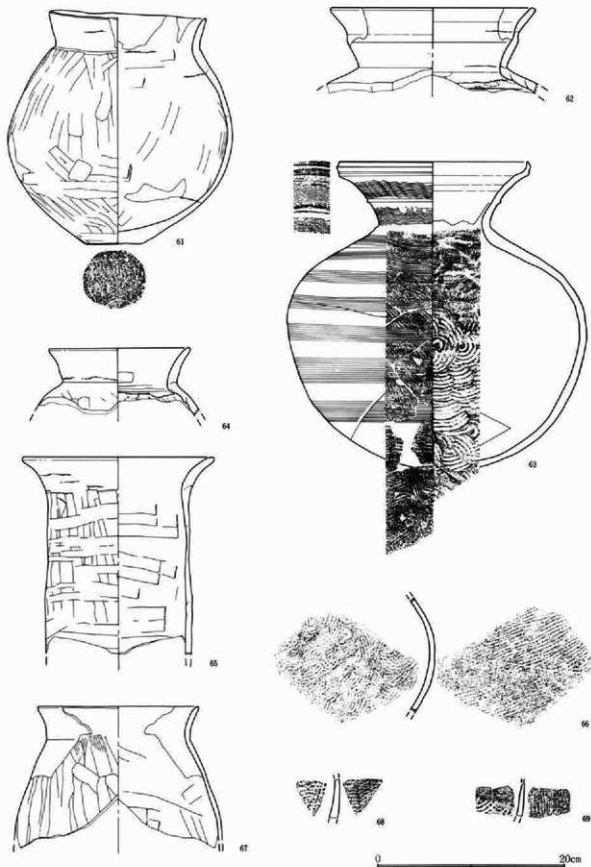


図104 第2河道出土遺物(4)

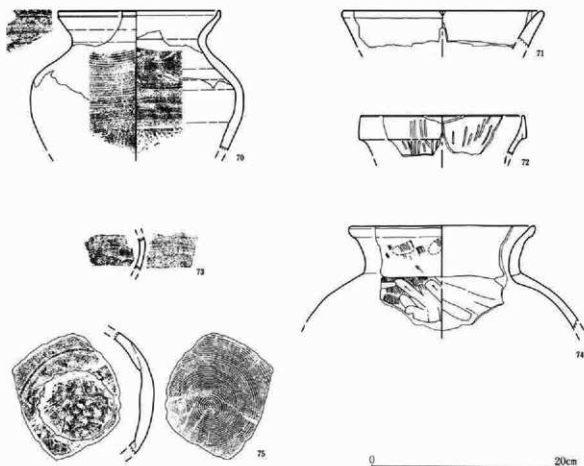


図105 第2河道出土遺物(5)

(3) 第3河道(図97~100・106~119, 表43~53, PL31~34・61~65)

第3河道は3地点のみ残り、他は上位の第1・第2河道によって切られる。本河道における古墳時代中期後半の遺物の出土はすべて26層の砂礫層中からである。K-39グリッド内の土層断面の観察では、砂礫層は4層に分かれるが、26層で示した。J・K-39・40グリッド内の本河道は、幅3m長さ10mに渡って検出された。その中に3ヶ所の河道の窪みがある。この窪みの深さは、K-39グリッド中央が約20cm、K-40グリッドポイント付近が30cm、K-40グリッド内が50cmである。これらの地点には土器が密集(図106・107)している。上部は出土遺物から第2河道の底面の可能性があるが、窪みの底面まで土器の出土は連続している。土層の変化でも第2河道底面はとらえられなかったので、第2河道を特徴づける遺物以外は、本河道出土遺物とした。J-42~44グリッド内(図108・109)にも、幅1m長さ15mの規模で本河道が検出された。手づくね土器や石製槌造品、土製紡錘車(図118~132)が、土師器の多量の破片中から出土している。I・J-49グリッド内の本河道出土遺物(図110・111)は、幅1~3m長さ10mに渡って検出された。土器の密集度は3地点中最も高く、両グリッドからNaを付して約2,000点を取り上げている。I-49グリッド内の本河道部分から1点石製槌造品が出土しているが、出土地点は不明である。

本河道周辺には、同時期の遺物を出土する住居跡が10軒近く検出されている。川を中心とした当時の生活が色濃く反映したのが、本河道出土遺物なのであろう。(相京・中山・小島)

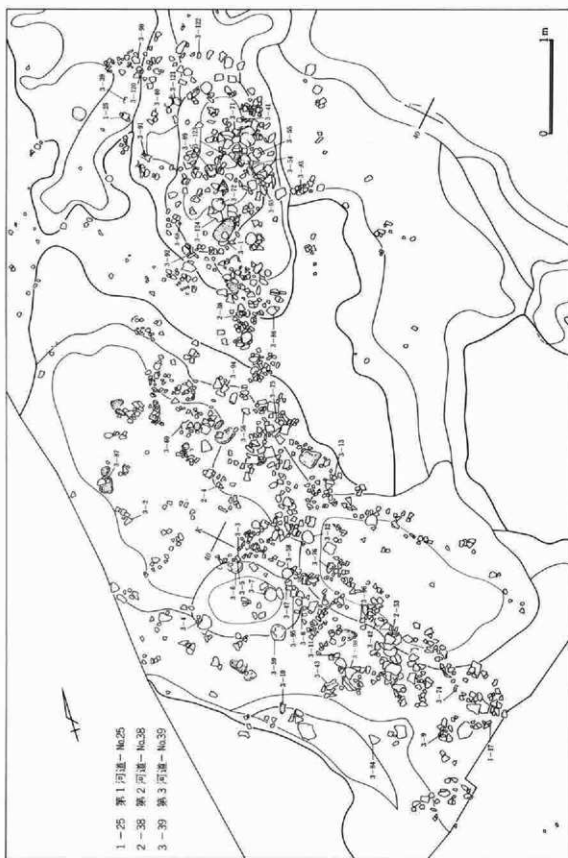


図105 旧河原遺跡出土状態(4)

II 検出された遺構と遺物

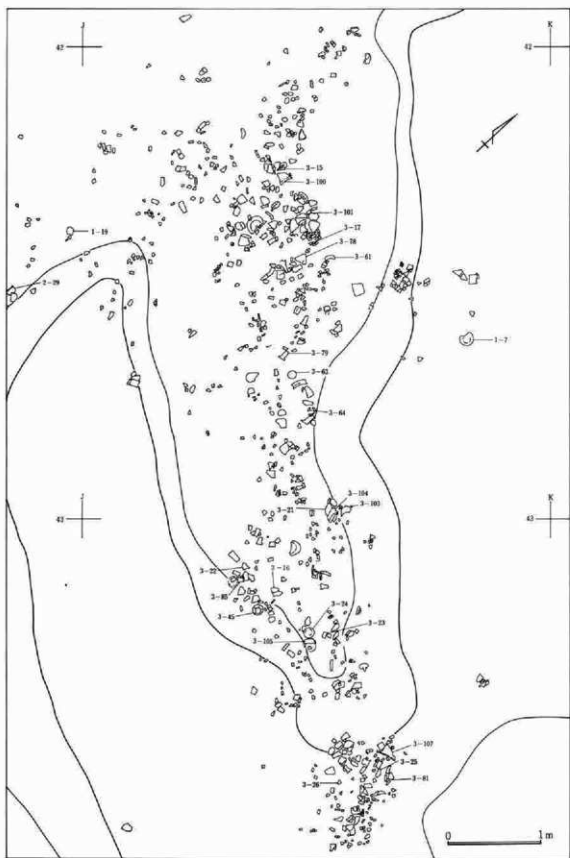


図108 旧河道遺物出土状態 (6)

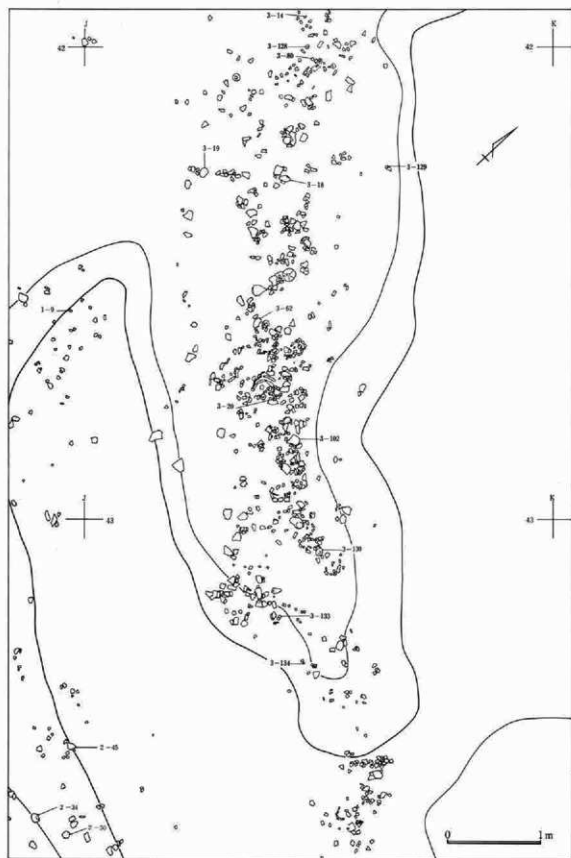


图109 旧河道遺物出土状態 (7)

II 検出された遺構と遺物

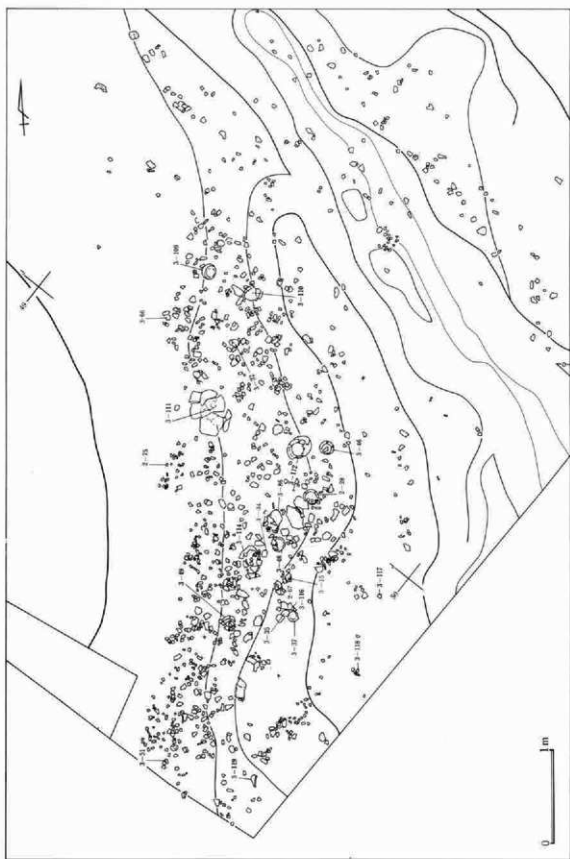


図110 旧河道遺物出土状況 (8)



図111 旧河道遺物出土状況 (9)

II 検出された遺構と遺物

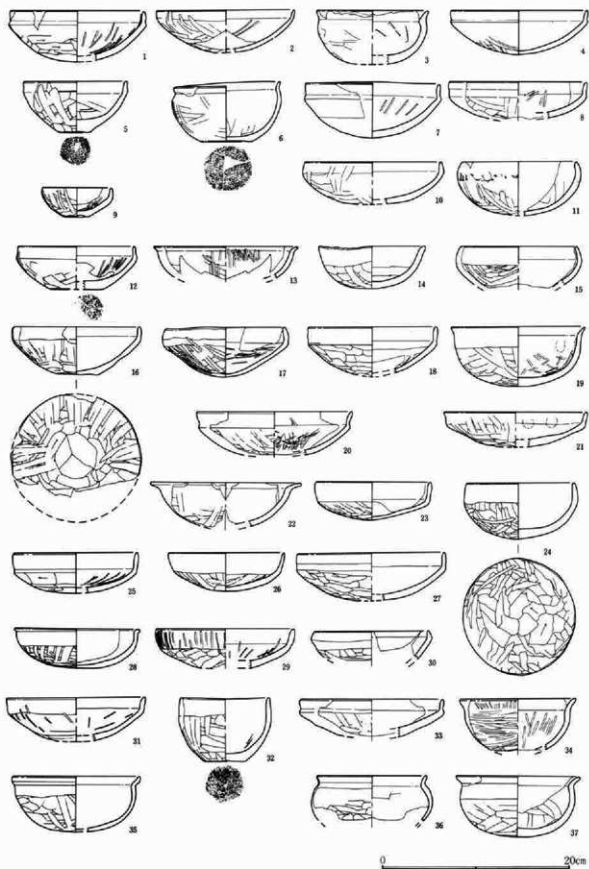


図112 第3河道出土遺物(1)

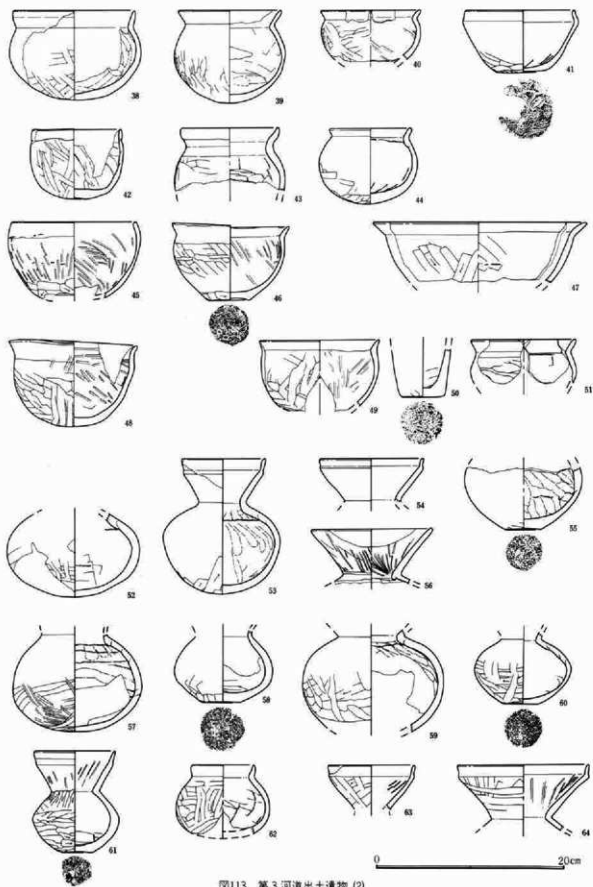


图113 第3河道出土遗物(2)

II 横出された遺構と遺物

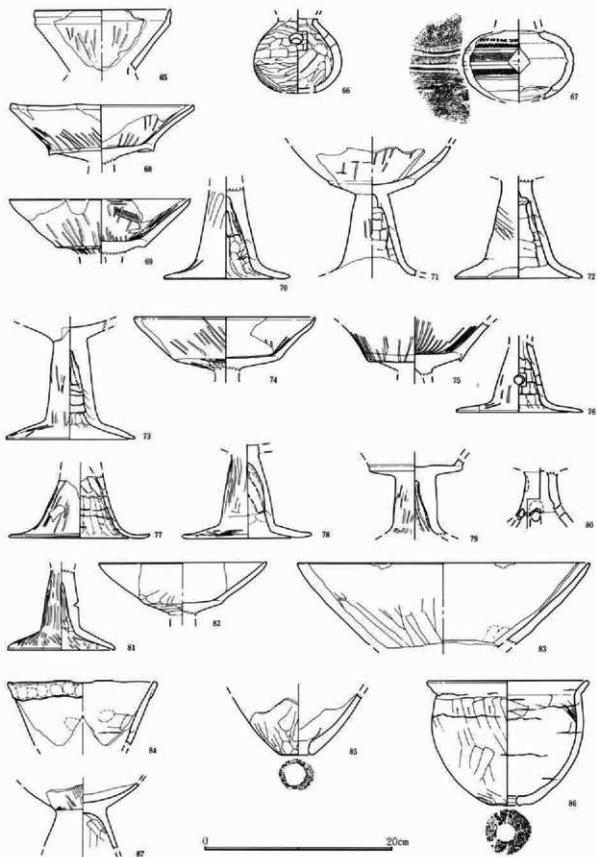


図114 第3河道出土遺物(3)

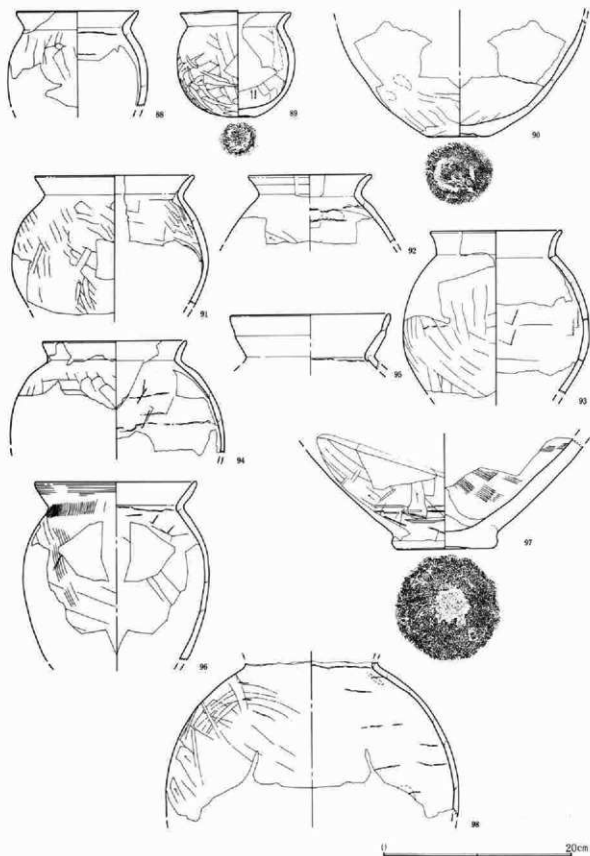


图115 第3河道出土遗物(4)

II 検出された遺構と遺物

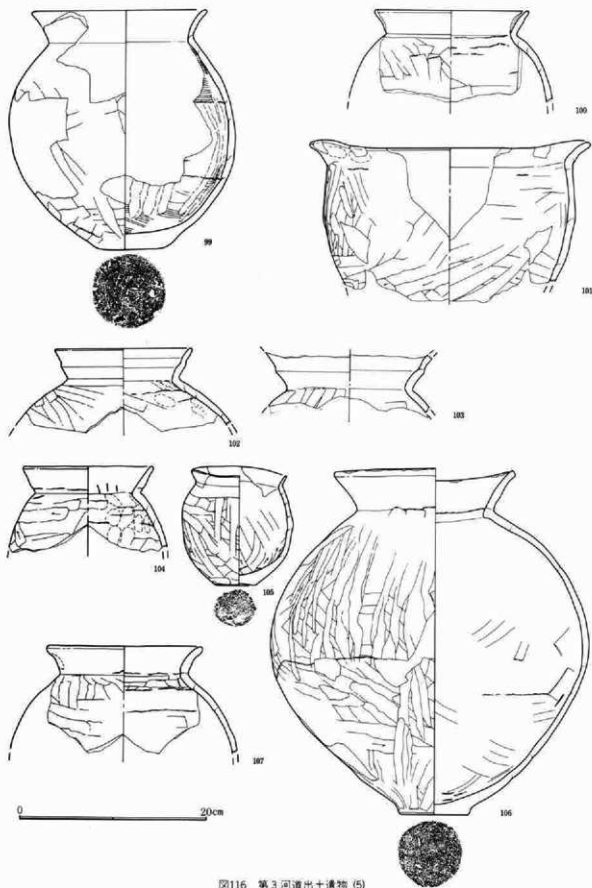


図116 第3河道出土遺物(5)

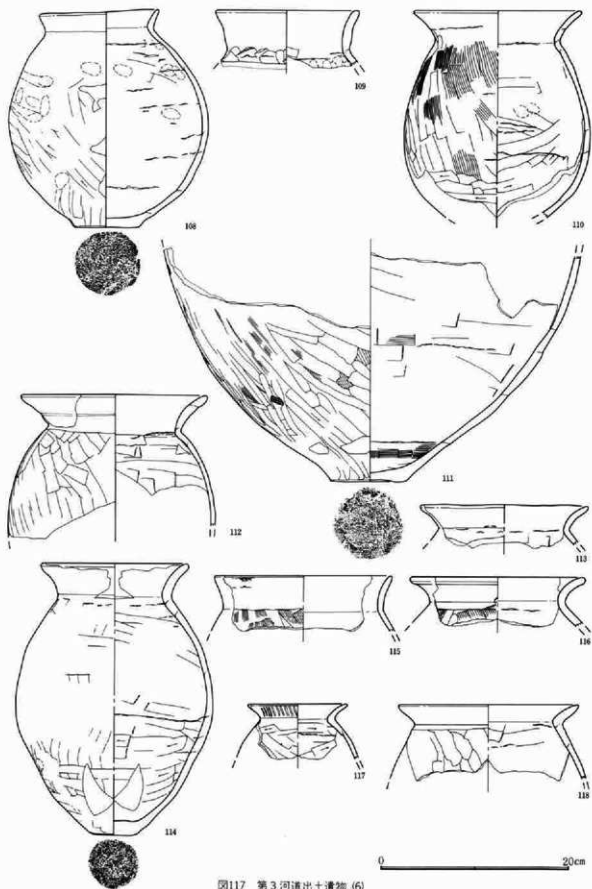


图117 第3河道出土遗物(6)

II 検出された遺構と遺物

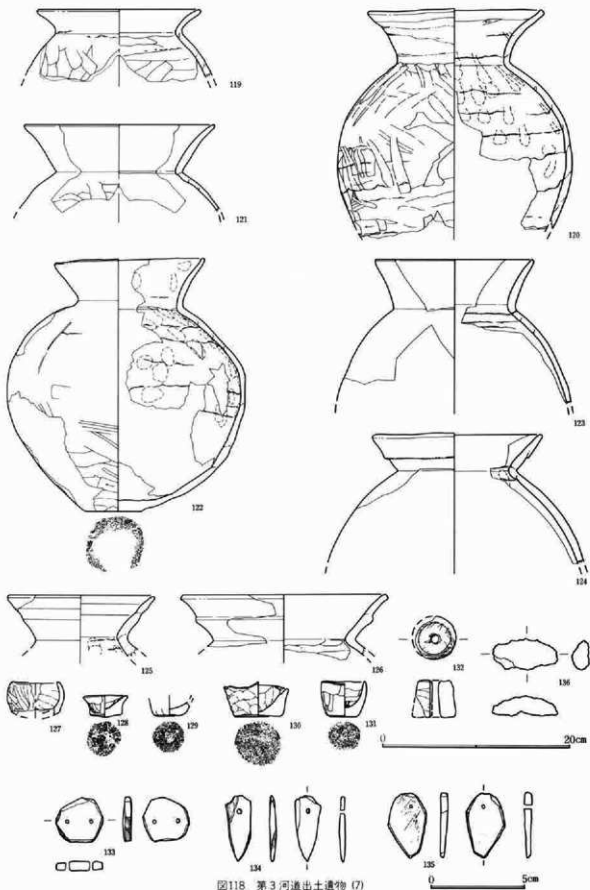


図118 第3河遺出土遺物(7)

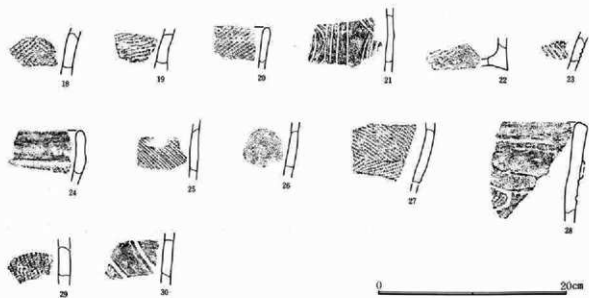
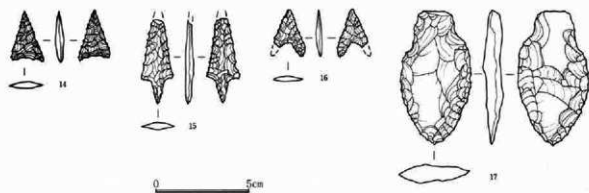
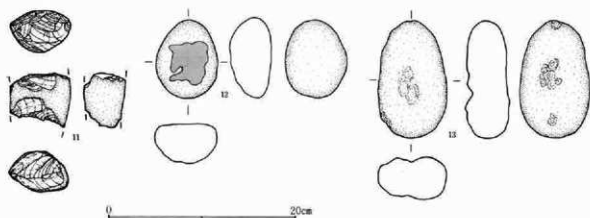


図119 旧河道その他の出土遺物(2)(P.L.65)

5. 溝

本調査で検出した溝は、22号～39号溝の16条である。これらの溝は、旧河道と何らかの関係を持った溝や、道路に沿う溝等である。

22号溝 (図120, 表54, PL35)

22号溝は、1区のL-93・94・95・96グリッドで検出された。76号土坑及び24号溝と重複しているが、土層断面の観察から76号土坑に後出することがわかる。24号溝との新旧関係は不明である。幅0.3～0.4mの規模で、深さ0.1～0.2m、南東方向に延びる。埋没土は、黒灰色の砂質土である。出土遺物は、土師器細片が埋没土中から出土しているが、壺形土器口縁部(図120-1)を図示した(第一部I集で報告)。(小島)

24号溝 (図120, PL35)

24号溝は、1区L・M-95・96グリッドで検出された。先述したように22号溝と切り合っている。幅1～2mで東西方向に延び、深さ0.05～0.15mの浅い溝である。断面形は逆台形状を呈する。形状は全体的に不定形で、西端は58号住居付近で、耕作痕の凹凸ようになってしまう。東部分の底面は比較的平坦であった。埋没土は、灰褐色砂質土や黄褐色粘質土で、流水の痕跡はない。出土遺物はなかった。(小島)

23号溝 (図121, PL35)

23号溝は、2区旧河道左岸に沿って、I-42グリッドから50ラインまで連続して検出された。106号住居・79号土坑に後出し、25号溝との新旧関係は不明である。79号土坑に後出することは、遺構確認時及び土層断面から確認できたが、79号土坑といっしょに掘った関係で、79号土坑と重なる部分の溝の状態は把握できなかった。幅0.5m～0.8mで、やや弧を描きながら南東方向へ延びる。深さは0.2～0.3mでU字形の断面形状を呈するが、南に延びるほど浅くなる。埋没土は、ロームブロックを含む茶褐色土である。出土遺物はないが、近接した25号溝と同じような埋没土の状況を呈する。(小島)

25号溝 (図121, 表54, PL66)

25号溝は、2区K-46及びL-46・47グリッドで検出された。107号住居・旧河道・79号土坑に後出する。23号溝との新旧関係は不明である。本溝は、幅0.5～0.7mで、K-46グリッド内で直角に屈曲する。深さは0.1～0.15mで、浅い箱型の断面形状を呈す。茶褐色の粘質土で埋没しており、埋没土中から図121の1の陶器片が出土している。(小島)

28号溝 (図122, PL35)

28号溝は、3区北端G-23グリッドで検出された。調査時の観察から92号土坑を一部切っていたことが判明している。本溝は、昭和63年度に調査した溝で、元年度にその続きを調査する予定でいた。しかし、4区の民家の移動に伴って地山のローム層が削りとられたため、4区での本溝との連続性・規模・走向は明らかにすることができなかった。埋没土は、礫を含む暗黄褐色土である。出土遺物はない。(中山)

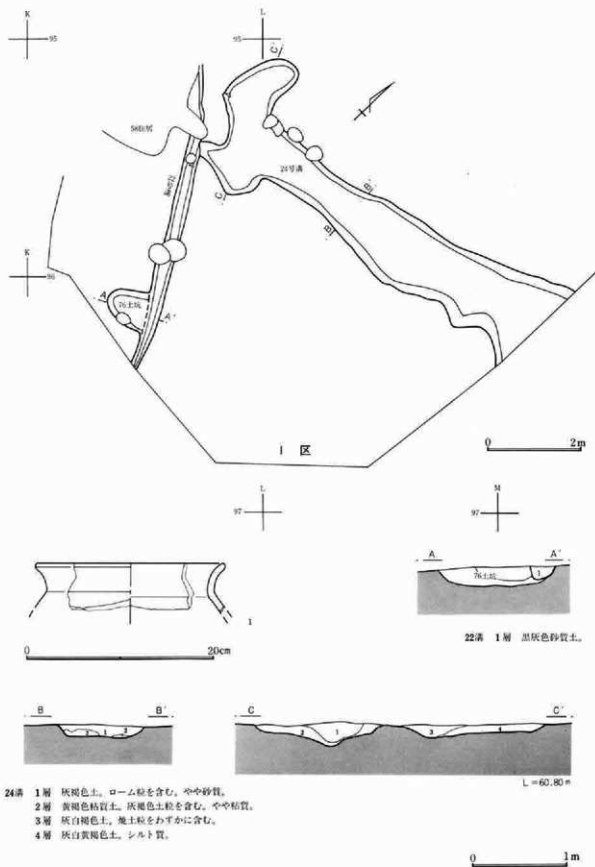


図120 22号・24号溝と22号溝出土遺物

II 検出された遺構と遺物

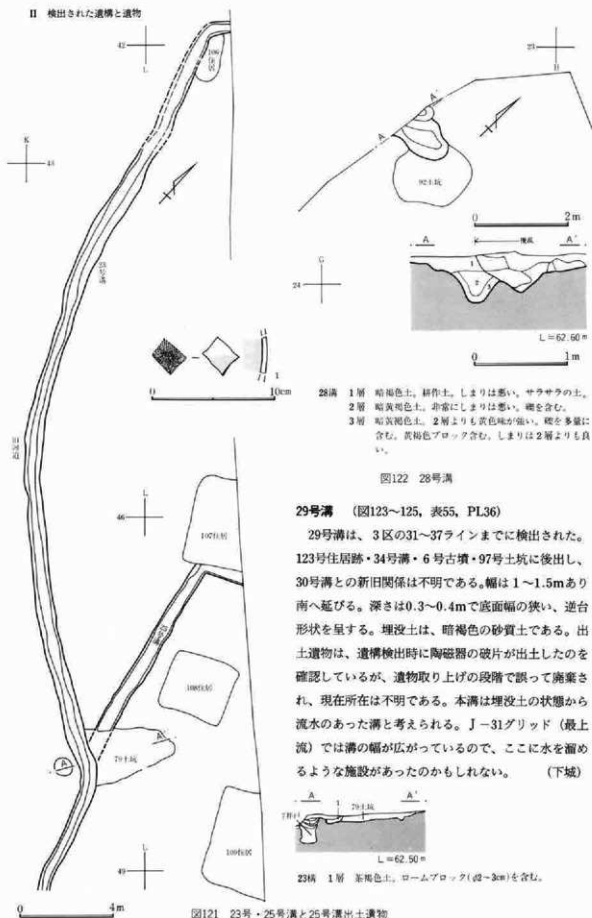
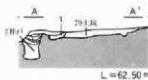


図122 28号溝

29号溝 (図123~125, 表55, PL36)

29号溝は、3区の31~37ラインまでに検出された。123号住居跡・34号溝・6号古墳・97号土坑に後出し、30号溝との新旧関係は不明である。幅は1~1.5mあり南へ延びる。深さは0.3~0.4mで底面幅の狭い、逆台形状を呈する。埋没土は、暗褐色の砂質土である。出土遺物は、遺構検出時に陶磁器の破片が出土したのを確認しているが、遺物取り上げの段階で誤って廃棄され、現在所在は不明である。本溝は埋没土の状態から流水のあった溝と考えられる。J-31グリッド(最上流)では溝の幅が広がっているので、ここに水を溜めるような施設があったのかもしれない。(下城)



23溝 1層 茶褐色土、ロームブロック(40~50cm)を含む。

図121 23号・25号溝と25号溝出土遺物

30号溝・31号溝・32号溝・33号溝 (図123~125, 表55, PL36・66)

30号~33号の溝は、3区31~34ラインまでに検出された。34号溝・6号古墳に後出する。32号溝は99号土坑・100号土坑・103号土坑に先行する。この4本の溝は、深さ0.1~0.2mの浅い皿状を呈する。幅は0.3~1.5mあり、互いに切り合って南西方向へ延びる。30号溝は途中で終わるがその他の3本の溝は調査区外へ続く。埋設土は暗褐色土を主にし、砂粒とロームブロックを含む。出土遺物は、土師器破片が数片だけであった。

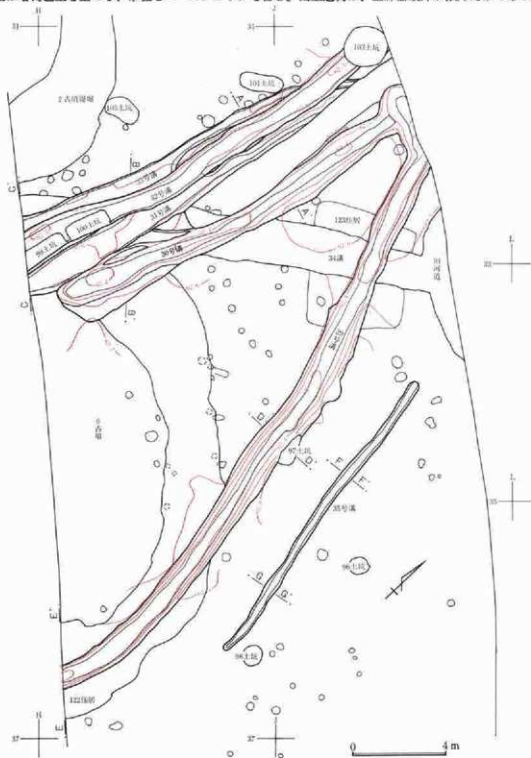
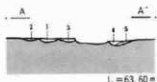
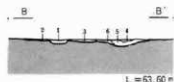


図123 29号~33号溝・35号溝

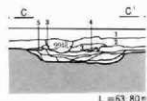
II 検出された遺構と遺物



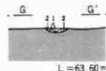
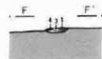
- 32溝 1層 暗褐色土。砂粒を含み、ローム小ブロックを少量含む。固く締っている。
 33溝 2層 明褐色土。ローム小ブロックを多く含む。固く締っている。
 31溝 3層 明褐色土。砂粒を含み、ローム小ブロックを多く含む。
 30溝 4層 明褐色土。褐色土とロームのブロックが混じり合った土層。
 5層 暗黄褐色土。ロームの大小のブロックが混じり合った土層。



- 32溝 1層 暗褐色土。砂粒を多く含む、ローム小ブロックを少量含む。固く締っている。
 33溝 2層 暗黄褐色土。ロームブロックと褐色土ブロックの混入土。固く締っている。
 31溝 3層 暗茶褐色土。砂粒を多く含む、ローム小ブロックを少量含む。
 30溝 4層 明褐色土。砂粒を多く含む、ローム小ブロックを多く含む。
 5層 暗褐色土。砂粒を多く含む、ローム小ブロックを極少量含む。
 6層 褐色土。砂粒を多く含む、ローム小ブロックを多く含む。



- 1層 埋土(道路)。
 2層 表土。As-A軽石を含む砂質土。
 32溝 3層 暗褐色土。B軽石を多く含む。やや砂質。水流あり。
 33溝 4層 暗褐色砂質土。B軽石と砂の混じり合った土層。水流あり。
 31溝 5層 黒褐色砂質土。

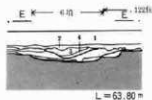


- 35溝 1層 暗褐色砂質土。As-B粒子を多く含む。
 2層 黄褐色土。暗褐色土を含む。
 3層 黄褐色土。ローム。
 4層 暗褐色土。ロームを多く含む。白色小軽石を極僅か含む。

0 2m



- 29溝 1層 暗褐色砂層。As-B粒子を少量含む。流れている。炭化物粒子微量。しまりは弱い。陶磁器片出土。
 2層 暗褐色土。ローム小ブロック及び粒子を含む。全体にやや黄色味を帯びている。比較的早い段階で埋まったものと思われる。



- 29溝 1層 埋土(道路)。
 2層 表土。
 3層 暗褐色砂層。As-Bを含む砂層。暗褐色土小ブロックを少量含む。
 4層 暗褐色土。As-Bを含む砂質土。

0 4m

図124 29号～33号溝・35号溝埋没土層

その他、6号古墳周堀内の位置から、図125に示したような埴輪片の出土があった。6号古墳樹立の埴輪と考える中で、6は胎土・焼成・整形方法等から2号古墳の埴輪と思われる。しかし、出土遺物は溝の掘削時期を示すものではなく、むしろ埋没土や溝の方向性から、4本の溝はいずれも、溝の上位にあった道路に伴う溝で、過去何度かの掘り返して造られた一連の溝の可能性の方が強い。したがって、溝掘削時期は、近・現代と言えよう。(下城)

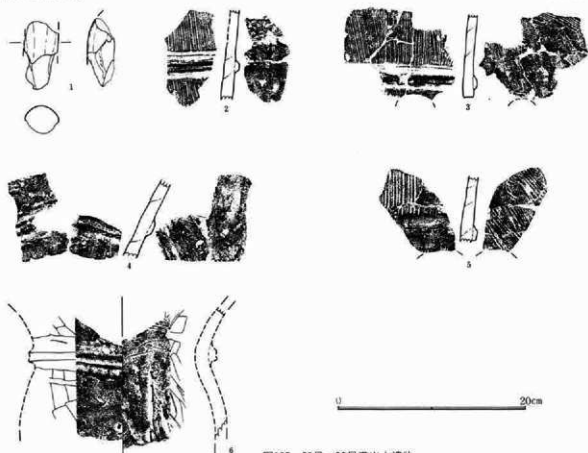


図125 29号・30号溝出土遺物

35号溝 (図123・124, PL36)

35号溝は、3区J-34・35、I-36グリッドで検出された。他の遺構との重複関係はない。幅は0.3~0.5mあり、深さ0.1m前後の浅い溝で、29号溝に沿う形で南方向へ直線的に延び、I-36グリッドで切れる。断面形状はU字形である。埋没土は、ロームを含む暗褐色土である。出土遺物はない。(下城)

34号溝 (図126, PL37)

34号溝は、H~Lライン・32~34ラインの間で検出された。123号住居跡に後出し、平安期の旧河道・6号古墳・29~33号溝に先行する。走向NS3°Eで、南西方向へほぼ直線状に延びる。幅は上端で1.5~2mあり、底面で0.5~1mである。深さは1m前後で逆台形状を呈す。埋没土は、下層が砂質の茶褐色土である。溝の底面は平らで、非常に固く締まっており、恒常的に流水があった溝と考えられる。出土遺物は、先行する123号住居に伴うと考えられる縄文土器のみで、溝に伴うと考えられる遺物はない。しかし、重複関係にあり、後出する6号古墳・旧河道との関係から、6世紀よりも古い。さらに、本溝の南東約20mに検出された古墳時代中期後半の住居跡群の北限の境界線とともに、旧河道(第3河道)から取水し、西方へ通水した灌漑用

II 検出された遺構と遺物

の水路の可能性もある。

(下城)

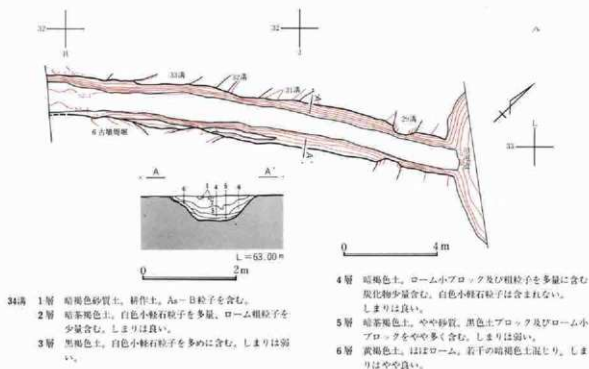


図126 34号溝

38号溝 (図127, PL37)

38号溝は、4区C・D-5グリッドで検出された。7号古墳に後出し、中央部に攪乱を受けている。幅1~2m、深さ0.15~0.3mを計るが、幅員及び断面形は一定していない。溝は南西方向に延びるが両側ともに調査区域外になり、全容は不明である。断面形は、東側がゆるく立ち上がるのに対して、西側はやや傾斜が急である。本溝は、昭和63年度調査時は、埴輪片の出土が何点あり、古墳の周堀と考えていた。平成2年度に7号古墳を切る形で、溝の続きが検出され、38号溝の名称を付した。B-5グリッド内に未調査区がある。掘削時期は不明である。

(下城)

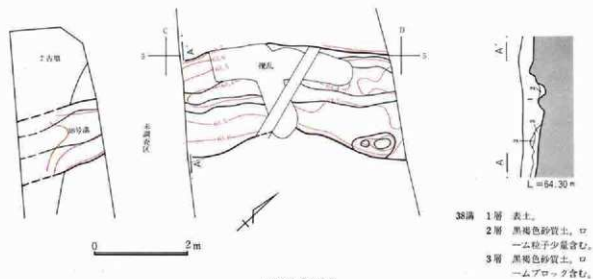


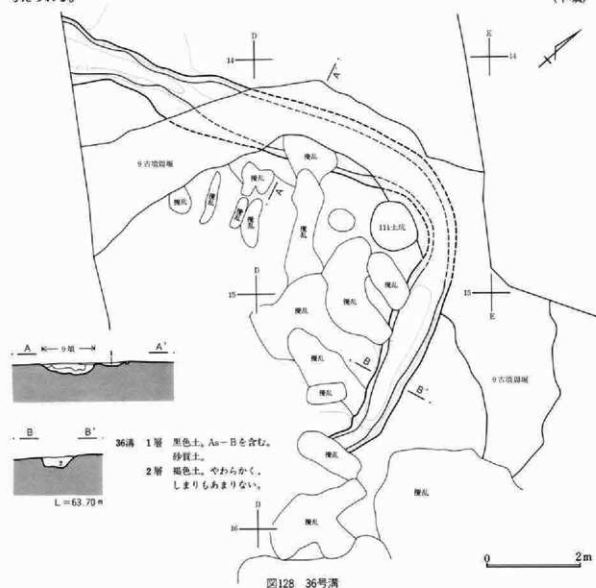
図127 38号溝

36号溝 (図128, PL.37)

36号溝は、4区14ラインから16ラインの間で検出された。9号古墳に後出する。幅は1~2mで、深さは確認面から0.4~0.5mある。D-14グリッド内でほぼ直角に方向を変え、西側は調査区域外へ、南側は上層からの攪乱で切れて不明である。埋没土は、粘性の少ない褐色土である。出土遺物は埴輪片が数点あり、本溝に伴う遺物はない。本溝は、遺構確認面が地表から深い位置であったため、先行する9号古墳の調査を優先させた。9号古墳周堀内は推定線で表わしてある。(下城)

37号溝 (図129, PL.37)

37号溝は、3区F・G-27・28グリッドで検出された。1号古墳に後出する。幅0.4m前後、深さ0.1mの浅い溝で、方形にぐるりと続くような平面形状を呈す。断面形は逆台形状である。埋没土は、ロームブロックを含む褐色土である。出土遺物はない。本遺構は、近世以降の溝と埋没土が類似するため、溝番号を付したが、位置が1号古墳の中央にあり、形状が特異な所から、1号古墳の主体部施設の抜き取り痕の可能性も考えられる。(下城)



II 検出された遺構と遺物

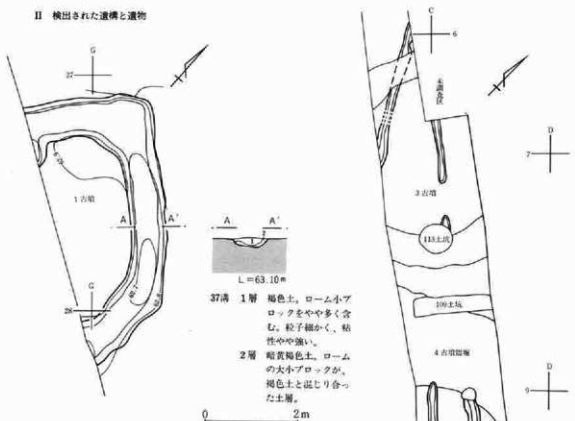


図129 37号溝

39号溝 (図130, PL37)

39号溝は、4区6～13ラインの間に検出された。3号墳・4号墳に後出する。幅20～40cmで、深さ10cm前後の規模の溝が2条平行して南東方向へ延びる。断面形状は、U字状を呈す。埋設土は、As-Aと思われる軽石粒を含む暗褐色土層である。本溝は、埋設土の状況及び平行して2条走ること、現道下にあることから、近・現代の道路に伴う溝と判断した。

(下城)

0 4m

図130 39号溝

6. 土坑

(図131~143, 表55・56, PL38~43・66)

土坑は、39基検出された。第1分冊で、形態を五つに分類し報告したが、本報告でも形態的に大きな矛盾は認められないので、この五つの分類に沿って報告する。図131には、全体的傾向を知るために第I集分の成果も加えてある。

今回の調査では、縄文時代の陥穴が3基検出されている。時期・用途が明らかなので、A～E類に分類した土坑群より先に報告する。A～E類の土坑にあてはまらないので、図131には示していない。

今回報告分の土坑で特徴的なことは、A・B類が減少し、C類がなかったこと。D・E類が多い中で、円形で袋状の断面形を持つ土坑(D類)や、不定形で深い土坑が多く検出されたことである。

A類 幅が1m前後で、2m～5mの帯状の平面形を呈する土坑。深さは、遺構確認面から7cm～50cmの範囲である。断面形は箱形である。

B類 長さ1m～2mの小さい長方形を呈する土坑。深さは、遺構確認面から7cm～35cmの範囲である。断面形は角がやや丸い箱形である。

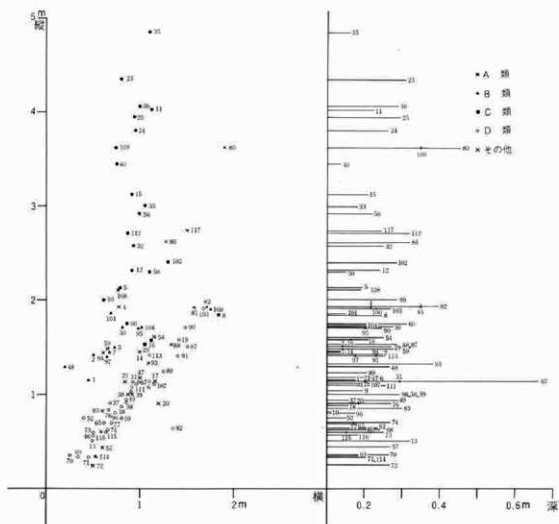


図131 土坑の規模と分類

II 検出された遺構と遺物

C類 一辺が1m～2mの正方形に近い矩形を呈する土坑。本報告分の土坑では未検出。

D類 径0.5m～0.8mの円形を呈する土坑。深さは遺構確認面から11cm～44cmとばらつきがある。D類の土坑は、断面形によって細分した。

E類 平面形が不定形を呈する土坑。断面形もまちまちである。

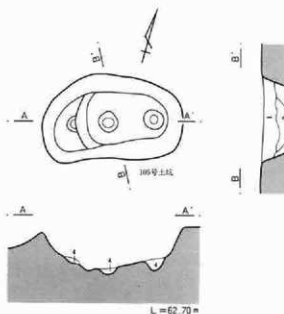
下表は、出土遺物についてまとめたものだが、土坑から出土した土師器や埴輪片によって、土坑の時期を

表1 土坑一覧表

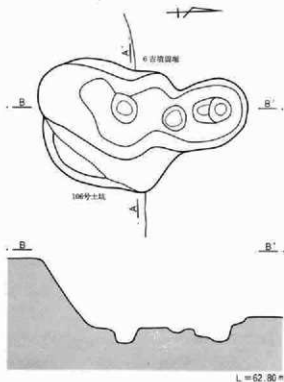
番号	分類	区	位置	縦	横	深さ	遺構の重複	出土遺物
105	陥穴	3	H-31	1.50	0.89	0.44	2号古墳近接	(出土遺物なし)
106	陥穴	3	H-33	2.22	1.30	0.80	6号古墳周堀→	縄文土師器片。
110	陥穴	4	C-10	2.40+α	0.85+α	0.50		(出土遺物なし)
99	A	3	G・H-32	2.0	0.60	0.37	6号古墳周堀→	形象埴輪片。円筒埴輪基部、破片。土師器破片。
102	A	3	G-28・29	2.22	1.15	0.35	1号古墳周堀→	埴輪破片。土師器破片。
109	A	4	B・C-8	3.30+α	0.73	0.50	4号古墳周堀→	(出土遺物なし)
112	A	4	D-17	2.75	0.83	0.44	8号古墳周堀→	(出土遺物なし)
95	B	3	H-37・38	1.74	0.99	0.20	117号住居→	形象埴輪片。土師器壺口縁部、他破片。
97	B	3	J-34	1.44	0.62	0.15	29号溝→	(出土遺物なし)
100	B	3	H-32	1.90	0.70	0.26	6号古墳周堀→	(出土遺物なし)
101	B	3	I・J-31	1.86	0.69	0.10		土師器破片。
104	B	3	G-26	1.73	0.98	0.21	1号古墳上→	埴輪破片 (BS3・54)
52	Da	1	L-95	0.45	0.40	0.20		(出土遺物なし)
83	Db	5	H-73	0.85	0.67	0.40	114号住居→	(出土遺物なし)
77	Dc	1	K・L-95	0.70	0.64	0.14		土師器破片。
96	Dc	3	J-35	0.80	0.72	0.15		土師器壺胴部、他破片。
76	De	1	K-96	0.90	0.73	0.34	22号溝→	土師器杯底部、他破片。
92	De	3		0.62	1.33	0.27	28号溝→	(出土遺物なし)
98	De	3	I-36	0.91	0.85	0.34		土師器破片。
107	De	3	H-39	1.10	1.07	0.23		土師器高杯破片、他破片。
111	De	4	D-14	1.05	0.95	0.31	36号溝→	(出土遺物なし)
87	Df	4	D-11・12	1.55	1.50	0.34		埴輪破片。土師器杯底部。
89	Df	4	D-11・12	1.24	1.22	0.21		須臾器。土師器破片。
90	Df	4	D-10	1.70	1.48	0.29		埴輪基部部。
91	Df	4	C-9	1.40	1.40	0.25	4号古墳周堀→	埴輪破片。
103	Df	3	J-31	1.90	1.68	0.34		埴輪基部部。他埴輪片。土師器破片。
113	Df	4	B・C-7	1.40	1.05	0.31	3号古墳周堀→	(出土遺物なし)
79	E	2	I-L-47・48	18.30	2.30	0.60+α		土師器壺。破片。埴輪破片。
80	E	2	I-48	3.06	1.90	0.71		土師器壺口縁部、高杯杯部、杯、他破片。
81	E	2	I-48	1.93	1.58	0.50	82号土坑近接	(出土遺物なし)
82	E	2	I-48	1.91	1.77	0.59		土師器破片。
86	E	4	C-6・7	2.60	1.28	0.44	3号古墳周堀	土師器破片。
88	E	5	H-74	1.52	1.35	0.37		(出土遺物なし)
93	E	4	C・D-9	1.35	1.08	0.56	4号古墳周堀→	土師器破片。
94	E	5	H-73	1.44	0.60	0.30	114号住居→	土師器破片。
108	E	3	I-37・38	2.09	0.78	0.18	120号住居→	(出土遺物なし)
117	E	5	H-72・73	2.73+α	1.74+α	0.29		(出土遺物なし)
114	Ea	3	K-36	0.60	0.58	0.10	旧河道→	(出土遺物なし)
115	Ea	3	K-36	0.82	0.59+α	0.02	旧河道→	(出土遺物なし)
116	Ea	3	J-38	0.80	0.49	0.16	旧河道→	(出土遺物なし)

決定することは困難である。時期によられるものは、各土坑の記述中に述べた。

陥し穴 105号・106号・110号土坑の3基が検出された。105号土坑は、2区2号墳周堀に近接する。長軸1.5m、短軸0.9mで深さ0.4mで長楕円形を呈す。長軸方向は、N85°Eである。底面には長軸上に3本の逆茂木状のピットが並ぶ。106号土坑は、2区6号古墳に先行する。長軸2.2m、短軸1.3mで深さ0.7mである。やや不整形な形状を呈す。本坑にも3本の逆茂木状のピットが検出されている。110号土坑は、4区39号溝に近接する。長楕円形を呈すると思われるが、北半が未検出なため、形状・規模共に不明である。深さは0.5mある。逆茂木状のピットは未検出である。3基とも埋没土は、暗褐色土である。106号土坑埋没土上層から、縄文時代前期の土器小破片が5点検出土している。



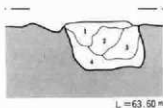
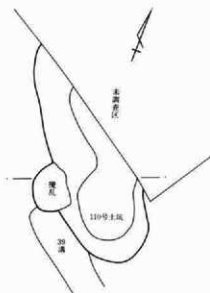
- 105坑
- 1層 暗褐色土。ローム混入を多く含む、黄色味を帯びる。白色小軽石粒子をわずかに含む。
 - 2層 暗褐色土。1・3層に比べて厚味が強い。ロームブロックをわずかに含む。
 - 3層 暗褐色土。ロームブロックを多く含む。
 - 4層 暗褐色土。砂質ロームを多量に含む。



- 106坑
- 1層 暗褐色土。白色小軽石粒子(Aa-C?)をやや多く含む。焼土粒子・炭化物粒子をわずかに含む。しまりは弱い。
 - 2層 暗褐色土。白色小軽石粒子(Aa-C?)は含まない。炭化物粒子及び細礫を少量含む。しまりは、やや良い。
 - 3層 暗褐色土。炭化物粒子を少量含む。しまりは良い。
 - 4層 暗褐色土。ロームブロックを多量に含む。しまりはやや弱い。小礫(φ5mm以下)をわずかに含む。

0 1m

図132 陥し穴 (1)



- 110 坑 1層 褐色土。ロームブロックを少量含む。粒子が細かい。(砂質) 広くしまっている。
 2層 黒色土。F.P粒を含み、粘性がある。ややしまりがある。
 3層 暗褐色土。ロームと黒色土の混じり。粒子が細かい。粘性がややある。
 4層 明褐色土。地山ロームと混じり合う。中硬細砂を含む。粘性ややあり。



図133 陥し穴 (2)

A類の土坑 4基検出された。99号・102号土坑は3区。109号・112号は4区に位置する。長さは最長 $3.3+\alpha$ mの109号土坑から、 $2+\alpha$ mの99号土坑までである。埋没土は一層のみ観察されている。109号土坑は3層に分かれる。これらの土坑の埋没土は、いずれもしまりが弱く柔らかいのが特徴である。

99号土坑から埴輪が出土(図135)しているが、部位や胎土・整形から2は2号古墳樹立の埴輪と思われる。これらA類の土坑の掘削時期は、32号溝に後出する99号土坑の存在から、第I集報告同様18世紀以降と考える。

B類の土坑 5基検出された。すべて3区に位置する。このうち小型のA類土坑と考えられるのが100号土坑である。97号土坑は29号溝に切られ、右下隅しか検出されていないが、隅が方形であるところからB類と考えた。他の95号・101号・104号土坑は、隅がやや丸くなり、長楕円形に近くなる。断面形状はいずれも箱型である。埋没土は、97号土坑が焼土粒子を含む暗褐色土であるのに対し、他の4つの土坑は、一括埋填の可能性を持つ、ロームブロックの多い暗褐色土であった。

出土遺物は、104号土坑から埴輪が、95号土坑から土師器破片が出土しているが、これらはいずれも先行する遺構である1号古墳・117号住居跡所属のものとする。

Da類の土坑 1区検出の52号土坑である。第I集報告書に一部報告してある。幅22cm深さ10cmの円形のビット状の土坑である。

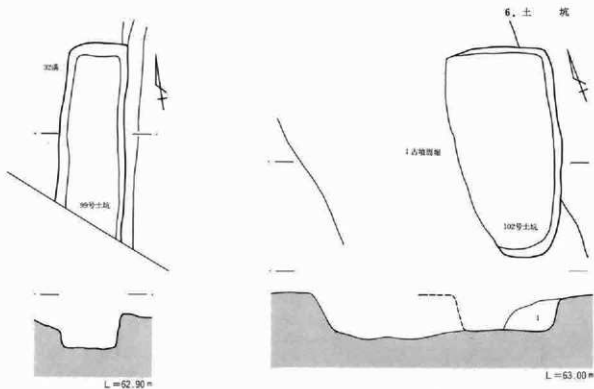
Db類の土坑 5区検出の83号土坑である。114号住居跡に後出する。長軸0.84m短軸0.69m、深さ0.36mのビット状の土坑である。

Dc類の土坑 77号土坑は1区で、96号土坑は3区で検出された。直径60~70cmの円形で、皿状の断面形状を呈す土坑である。埋没土中にはいずれも少量の炭化物を含む。

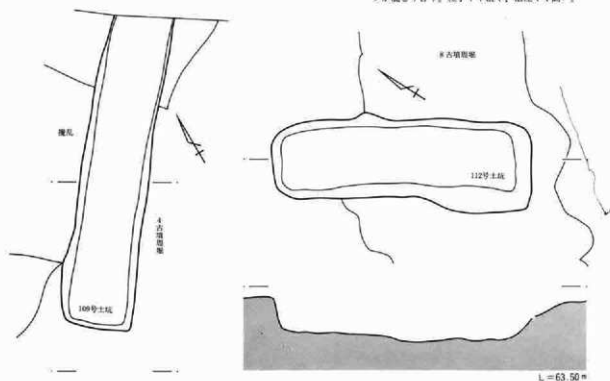
出土遺物は、96号土坑から図138の1・2の土師器鉢形土器が出土し、1は底面直上からの出土である。

De類の土坑 5基検出された。1区検出は、22号溝に先

行する76号土坑。3区検出は、28号溝に先行する92号土坑と98号・107号土坑の3基。4区検出は、9号古墳に後出する111号土坑である。これらは直径が1m前後で、断面形が皿状を呈する。そのうち、98号土坑は断面形状が袋状を呈し、小型のDf類土坑と考えられる土坑である。埋没土は、暗褐色や黒褐色の土層である。98号土坑は、一括埋填の可能性がある。



102 坑 1層 黒褐色土。ローム・黒色土・褐色土の大小のブロックが混じり合う。粒子やや粗く、粘性やや高い。



109 坑 1層 明褐色土。粒子細かく、やわらかい。2mm程度の繊維を所々に含む。上層に暗褐色土を混じえる。
 2層 明褐色土。1層に似る。暗褐色土ブロックを斑点状に含み、中層あり。やわらかく、しまりない。
 3層 黒色土。ロームブロックを繊維に含む。しまり弱く、砂質。

0 1m

図134 A類の土坑

II 検出された遺構と遺物

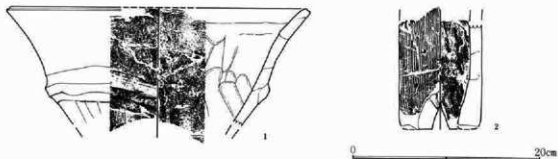


図135 99号土坑出土遺物

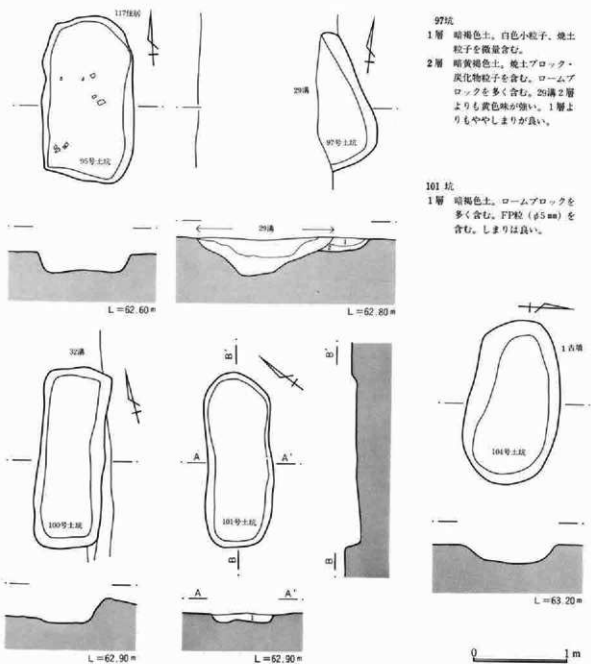


図136 B類の土坑

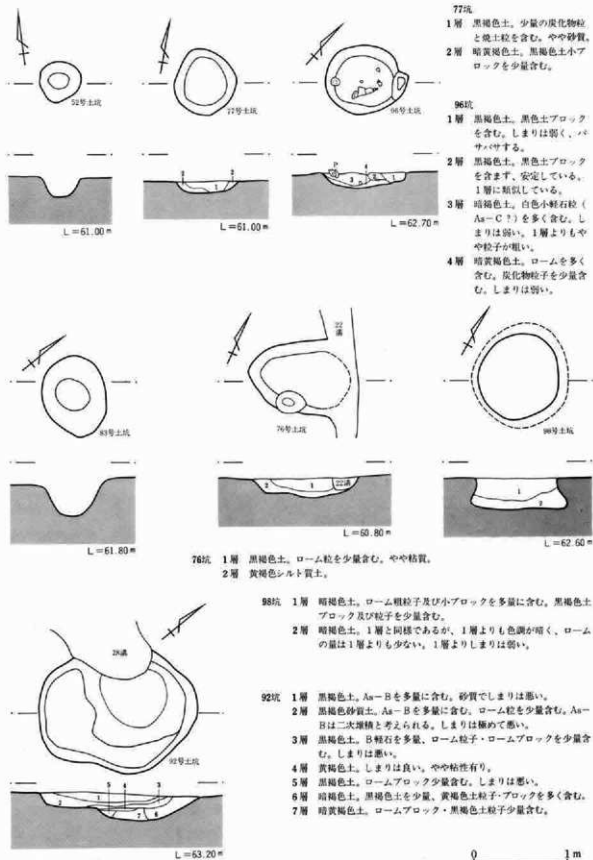
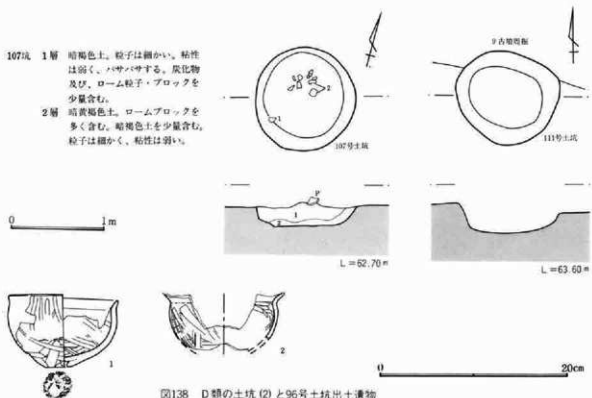


図137 D類の土坑(1)

II 検出された遺構と遺物

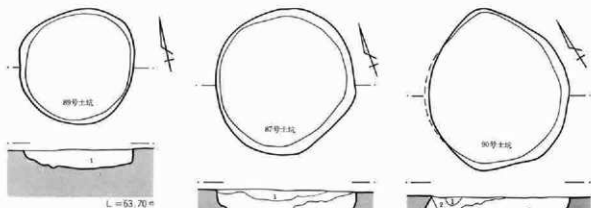


D類の土坑 6基検出された。この土坑は直径が1m以上で、断面が袋状を呈す土坑である。第1集報告中になく、3・4区に特徴的な土坑である。6基検出されたが、3区の103号土坑の他は4区検出である。これらの土坑の埋没土は、いずれもロームブロックを多量に含む点から、一括埋填された可能性が高い。土師器破片のみられる土坑もあるが、時期を示す出土遺物はない。

E類の土坑 不定形な土坑と、施土坑をE類としてまとめた。2区に4基、3区に4基、4区に2基、5区に3基の計13基である。2区79号土坑(付図2)は古墳時代後期の旧河道に先行する。第2河道堆積物(付図2-24層)によって下層は埋積されているので、それ以前に掘削されたことは明らかである。及び、7号井戸・23号溝に先行し、土層断面から23号溝掘削時に土坑内に旧河道との境の土手を築かれている(付図2・J-J')ことがわかる。2区80・81・82号土坑は、I-43グリッド内に近接して位置する。断面形状はなべ底状を呈す。埋没土は、暗褐色や黄褐色の土で、3基とも同様の状況を示す。埋没土の上層がAs-Bの純層であるので、12世紀以前にこれらの土坑は掘削されたと考える。86号土坑は、4区C-6・7グリッドで検出された。3号古墳との重複関係は不明である。長楕円形を呈するが、西側がやや不定形である。埋没土は灰褐色である。掘削時期は不明である。5区の88号・94号・117号土坑であるが、H-72~74グリッド内で検出された。88号土坑は116号住居跡に近接するが、重複関係は不明である。また、埋没土が他の遺構と同じような土のため検出が困難であり、南側は一部不明である。断面形状は、なべ底状を呈するものと思われる。94号土坑は114号住居に後出する。埋没土は暗黄褐色土である。117号土坑は、5区の北東隅に位置し、なだらかに北方向へ落ち込む。出土遺物(図143-4~10)から住居跡の可能性が考えられるが、調査範囲が狭いことと、明瞭な壁・床面が未検出であるため、土坑として番号を付したものである。93号土坑は、4号古墳に先行する。FPと思われる軽石を含む黄褐色土により埋没する。108号土坑は、3区I-38グリッドから検出

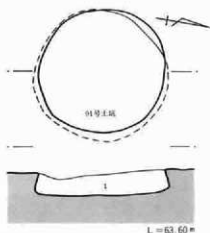
II 検出された遺構と遺物

6. 土 坑



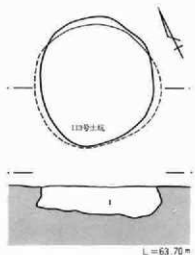
89坑 1層 黄褐色土。つぶれた断面形の黒褐色土の小ブロックと多量の ϕ 1cm前後のローム粒を混じる。

87坑 1層 現耕作土。
2層 灰褐色土。本層中にローム粒・ロームブロックを多く含む。 ϕ 0.5~1cm。
3層 黄褐色土。ローム混じり。ロームブロック ϕ 1cm前後のを少し含む。黒色土のブロックは ϕ 1cm位のをわずかに含む。

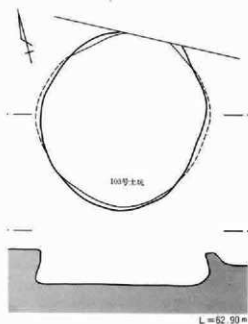


90坑 1層 現耕作土。
2層 褐色土。褐色土層中に黒色土とローム粒が混在する。
3層 黄褐色土。褐色土層中に、ローム粒・黒色土粒を含む。
4層 黒色土。3層の下位に厚さ1cm程度の本層が認められる。

91坑 1層 As-B混じりと考えられる土で、粒子が粗く、粘性が強い。中にローム粒を混入する。ロームブロックは断面の中央部に多く端に近づくと少なくなる。



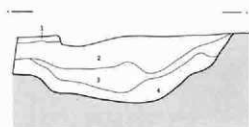
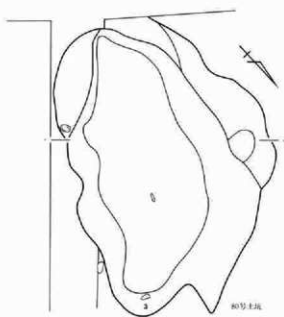
113坑 1層 暗褐色土。ロームブロックを多量に含む。やや粘りがある。しまりもある。



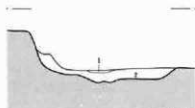
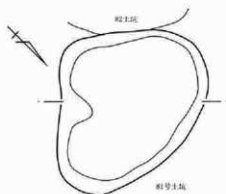
0 1m

図139 D類の土坑 (3)

II 検出された遺構と遺物



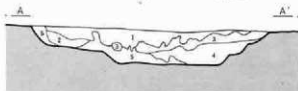
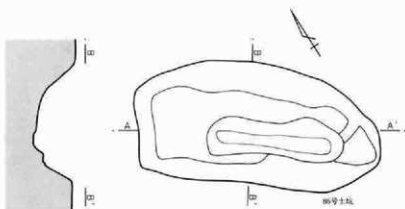
L=62.20m



L=62.10m

- 81坑 1層 淡黄褐色土、しまりあり。
2層 黄褐色土、しまりややあり、1層よりやや暗色。

- 80坑 1層 Aa-B、黄褐色。
2層 褐色土、しまりよい、白色軽石含む、赤褐色の粘土粒混入、炭化物、焼土粒と同程度に混入。
3層 暗褐色土、2層よりしまり弱い、軽石、ロームブロック含む。
4層 黄褐色粘質土、しまりは2層と同程度、白色鉱物混入、ロームが混入した土層。



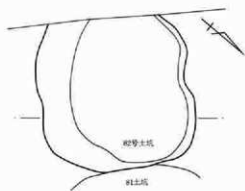
L=63.50m

- 86坑 1層 黒褐色土、軽石を少量含む。やや粘質。
2層 茶褐色土、ロームブロック(φ4-5cm)を含む。
3層 暗灰褐色土、少量の軽石を含む。
4層 灰褐色土、ロームブロック(φ1-3cm)を含む。
5層 黄灰褐色粘質土、軽石は全く含まない。

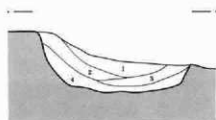
0 1m

図140 E類の土坑(1)

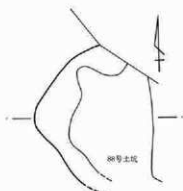
6. 土 坑



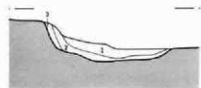
- 82坑 1層 褐色土。しまりがある。白色軽石 (max 5mm) 混入。
 2層 淡黄褐色土。しまりあり。白色鉱物散点する。
 3層 黄褐色土。ロームをかなり含む。粘質土層。
 4層 淡黄褐色土。しまりややあり。2層よりやや暗色。



L = 62.10 m



L = 62.00 m



L = 63.60 m

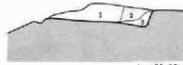
- 93坑 1層 茶褐色土。しまりあり。
 2層 黄褐色土。ローム混じりの土。FPと思われる軽石2-3点あり。
 3層 褐色土。しまりあり。シルト質である。

0 1 m



L = 62.00 m

- 94坑 1層 黒褐色土。
 2層 暗黄褐色土。底面は硬層(地山)。



L = 62.30 m

- 108坑 1層 暗褐色土。ローム小ブロックと、灰化物を少量含む。
 2層 暗褐色土。FP粒子を多量。焼土粒子及び灰化物粒子を少量含む。しまりは良い。
 3層 FP粒子とほとんど含まず。ローム混入を多く含む。しまりはやや良い。

図141 E類の土坑(2)

II 検出された遺構と遺物

された。120号住居に先行する。底面は凹凸があり、平安期の旧河道により切られる。当初住居跡かと考えた
が、平面形が長楕円形状を呈するので、土坑番号を付した。埋没土は、炭化物を少量含む暗褐色土である。

3区旧河道に沿って、3基の焼土坑が検出された。114号・115号土坑は、平安期の細流によって切られて
おり、ともに円形である。断面形状は浅い皿状を呈す。116号土坑は、120号住居に隣接し、120号住居床下焼
土坑と形状がよく似ている。本坑も長楕円形で、壁は赤褐色になるほど良く焼けており、炉的な施設と考え
られる。短軸方向の断面形状は、U字状を呈す。 (中山)

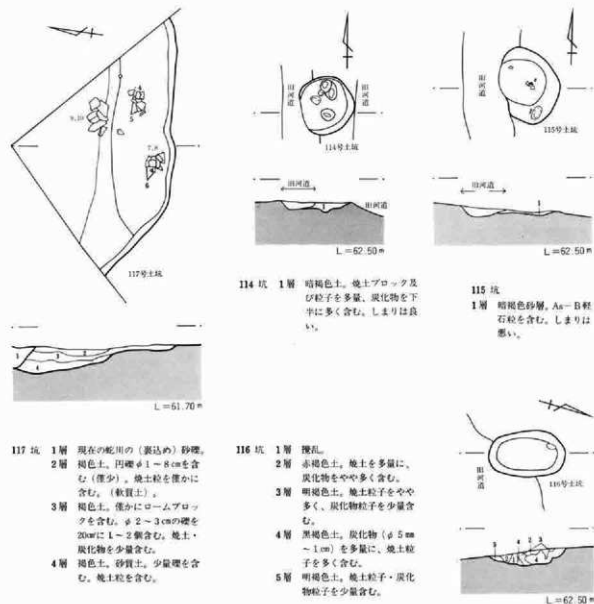
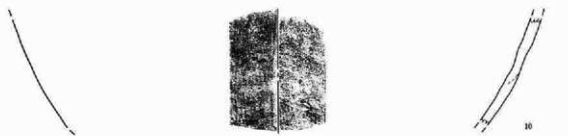
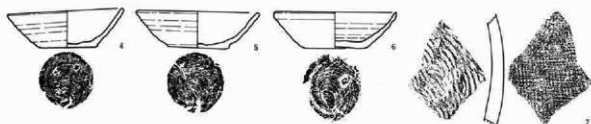


図142 E類の土坑(3)



(1・2の透視は付図2)



0 20cm

図143 E類の土坑出土遺物

7. 井戸

4基検出され、単独の井戸はなく、他の遺構と切り合っている。

6号井戸 (図144, PL43)

6号井戸は、2区L-46グリッドに検出された。107号住居跡に後出する。平面形は、長径1.2m短径1.1mでほぼ円形を呈する。底面は、扇状地疎層まで掘り込んでおり、深さは107号住居掘り方面より、1.4mである。出土遺物は土師器細片であるが、井戸掘削時期を示すものではない。(中山)

7号井戸 (図144, PL43)

7号井戸は、2区K-48グリッドに検出された。79号土坑・旧河道・23号溝に後出する。平面形は、径0.7mの円形である。底面はローム層であり、中に湧水層と考えられる旧河道堆積物(砂礫層)がある。深さは、遺構確認面から0.8mである。出土遺物は土師器細片があるが、土層からかなり新しい井戸と言えよう。(中山)

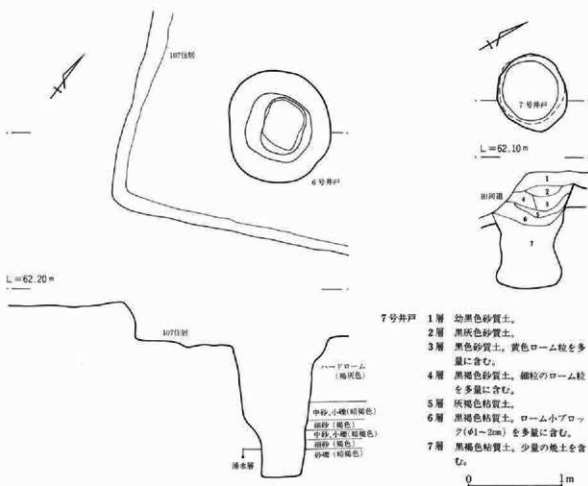


図144 6号・7号井戸

8号井戸 (図145, PL43)

8号井戸は、5区H-75グリッドに検出された。111号・116号住居跡に後出し、112号住居跡に先行する。径3mでほぼ円形を呈す。底面は扇状地礫層を掘り込んでおり、遺構確認面から3.5mの深さがある。出土遺物には、土師器や須恵器の破片が、小バン箱に1つあったが、実測できるものや掘削の時期を特定できるものはなかった。

(中山)

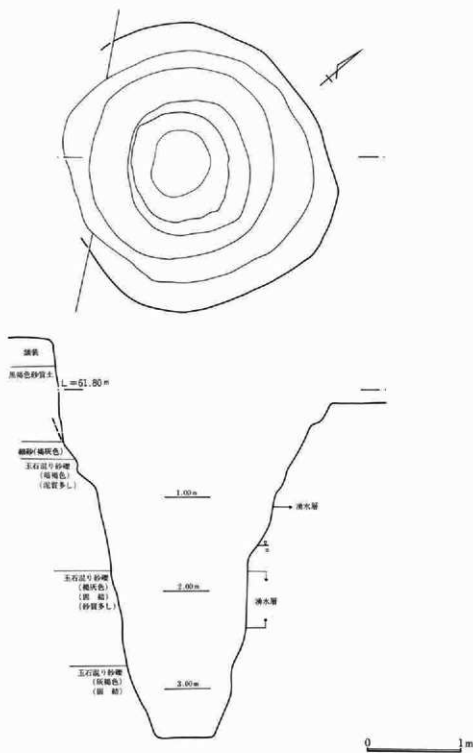


図145 8号井戸

II 検出された遺構と遺物

9号井戸 (図146, PL43)

9号井戸は、2区L-48グリッドに検出された。109号住居に後出する。径1.8mでやや楕円形を呈する。底面は扇状地礫層を掘り込んでおり、遺構確認面から1.9mの深さがある。出土遺物は、本井戸上層に109号住居に伴うと思われる遺物が密集して出土した(図18)。 (中山)

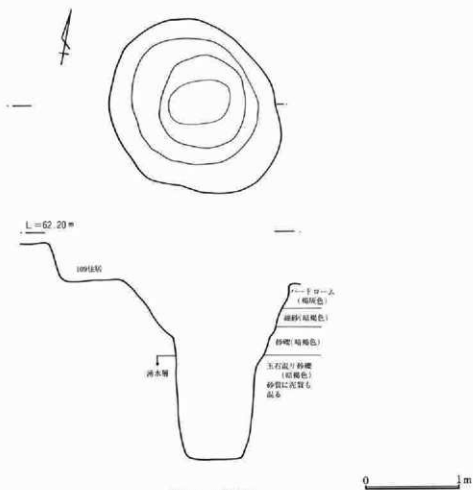


図146 9号井戸

8. 道路状遺構

検出された遺構は1条である。4区中央部の8号古墳と9号古墳の間をぬうようにして南北方向へ伸びる。

1号道路状遺構 (図147, PL44)

位置 4区 D~F・15~18ラインの間で検出。

重複 8・9号古墳に後出する。

走向 MN14°W

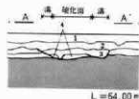
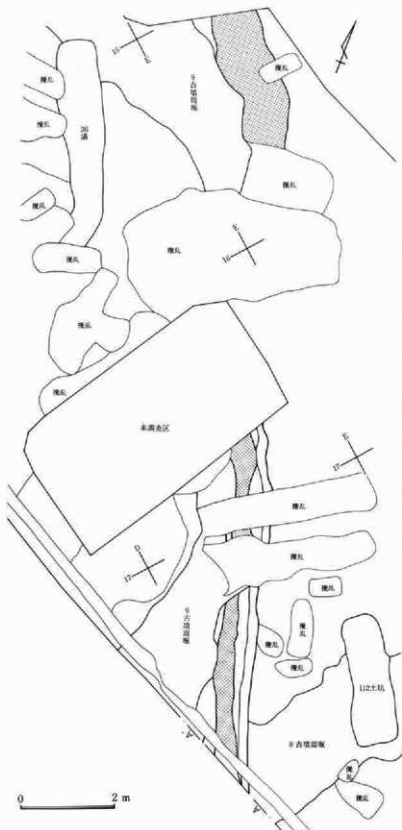
形状・規模 南端部は、硬化面幅30~50cmで断面形状はやや皿状をなし、両側に幅約30cm深さ10cmのU字状の溝がついていた。北端部では、平坦な硬化面のみが確認され、幅1~2mであった。硬化面の厚さは、ともに5mm前後であった。

残存状態 距離約10mにわたって確認されたが、周囲は攪乱が著しく、残存状態は良くない。

出土遺物 なし。

調査所見 8・9号墳を切り、硬化面上面の覆土にAs-B混入の黒色土が堆積している所から、平安期を中心とする時期と考えられる。

(下城)



1号道路状遺構

- 1層 埴土 (道路)
- 2層 表土
- 3層 黒色土、As-Bを含む砂質土
- 4層 灰褐色土、ローム粒子を多く含む

図147 1号道路状遺構

9. 遺構外出土遺物

(図148・149, 表56・57, PL66)

遺構に伴わない形で、2・3・4区より遺物が出土した。

図148の1と2は、ローム層上部からの出土遺物であり、4区ローム層試掘坑内より検出された。ただ本地区のローム層は一次堆積物の可能性が薄いため、すぐに旧石器時代の遺物と層位的に断定するわけにはいかないが、1などは旧石器の可能性が強い。

1区と5区を除いて、縄文土器が遺構確認時に何点か出土した。そのうち、図148の7～11は2区旧河道左岸K-44・45グリッド内のローム層上部の暗黄褐色土から検出された23点の土器の一部である。遺構は確認できなかった。遺物も縄文時代中期から後期にわたる。

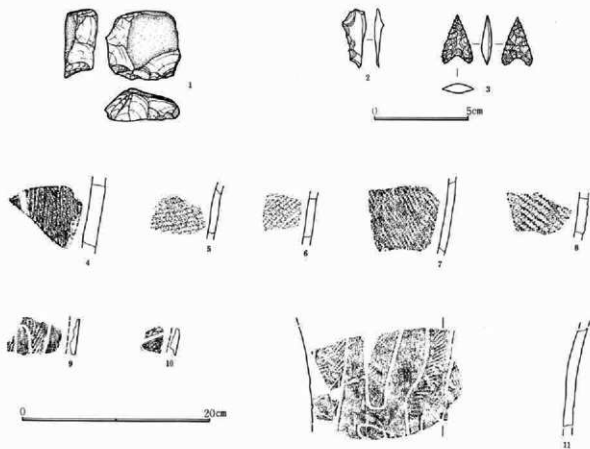


図148 遺構外出土遺物(1)

3区H-29グリッド内に大小の石と共に埴輪片が出土した。検出された場所がちょうど1号古墳と2号古墳の間の東側になる。どの古墳の遺物かは不明である。

図149の13・14は、動物埴輪の可能性がある。動物埴輪(馬しか判明していないが)が検出された古墳は、1号・2号・5号古墳であり、胎土・色調からは1号・2号古墳検出遺物に近い。(中山)

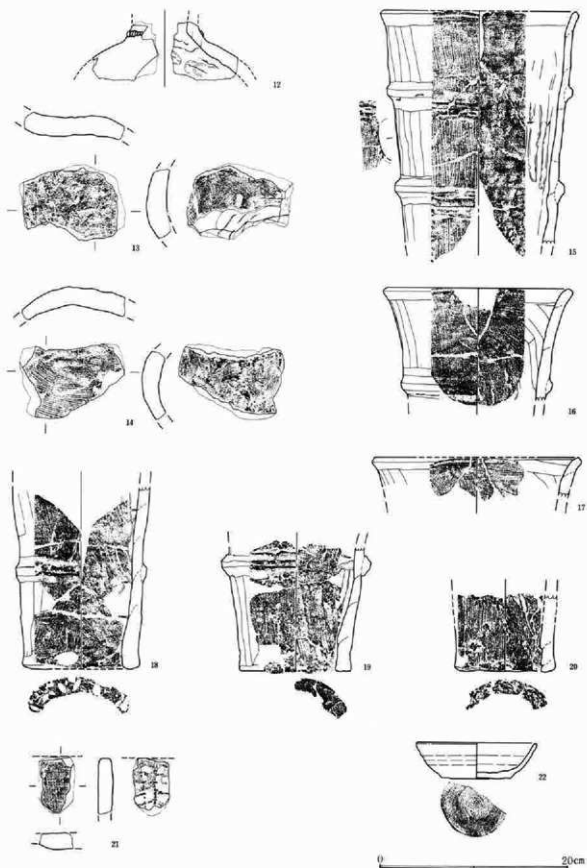


图149 透構外出土遺物 (2)

III ま と め

1. 成塚石橋遺跡 鉱物分析報告

(1) 分析の目的

成塚石橋遺跡は、段丘化した大間々扇状地の東端部に位置する。扇央部に位置する藪塚本町付近では、大間々扇状地堆積物の直上に、約1.6—2.1万年前に噴出した浅間—板鼻褐色軽石(As-BP, 新井, 1962, 町田ほか, 1984)が堆積している(沢口, 1971)ことから、大間々扇状地の離水は約1.6—2.1万年前ごろと推定される。ところが、今回の成塚石橋遺跡の調査では、大間々扇状地に相当すると思われる台地部において、As-BPを認めることができなかった。そこで、台地を構成する礫層上位の土壌を対象としてテフラ分析を行うことによって、As-BPが認められない理由についての資料を得ることを試みた。

(2) 分析の方法

分析は次の手順で行った。

イ。台地部における代表的な土壌断面から採取された試料5点(図150)を、分析の対象とした。

ロ。試料60g(試料番号5については40g)を秤量。

ハ。超音波洗浄と分析篩(1/16mm)による篩別を繰り返し、泥分を除去。

ニ。80°Cで恒温乾燥。

ホ。分析篩により、1/4—1/8mmの粒子を篩別。

ヘ。テトラプロモエタン(比重2.96)により、比重分離。

ト。重鉱物、軽鉱物各々について計量し、重・軽鉱物の重量比を求める。

チ。重鉱物、軽鉱物各々について250粒を偏光顕微鏡下で同定し、重鉱物、軽鉱物比を求める。

(3) 分析結果

分析試料全体における1/4—1/8mm粒子の占める割合(重量比)と1/4—1/8mm粒子全体における重鉱物の割合(重量比)を表2に示した。一般に硬度の大きい(硬い)石英は、機械的な風化作用に対して強く、堆積物中で残りやすい性質をもっていると考えられる。従って1次堆積のテフラに比べると、再堆積したテフラや、河川などによって運ばれた砂などでは、石英言い替えば軽鉱物の占める割合が大きくなることが予想される。いま成塚石橋遺跡付近に堆積する1次堆積のテフラの重軽鉱物比を一定と仮定し、上述の観点になって得られた数値を解釈すると、特に試料番号1において1次堆積のテフラが混入している可能性が大きく、下位の明かに河川の作用によって堆積したと考えられる灰色砂層(試料番号5)に向って、再堆積したテフラや河川の砂などの占める割合が増加していることが考えられる。

さて軽鉱物組成ダイアグラムを図151に、その内訳を表3に示した。上述の傾向を裏付けするように、下位の層ほど軽鉱物中において、石英の占める割合が若干ながら増加していることがわかる。なお火山ガラスの形態をみると、約2.1—2.2万年前に南九州の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976)に由来するバブル型火山ガラスが、試料番号1と3に、ごく少量ながら認められる。またAs-BPより

新しい浅間火山起源のテフラに特徴的に含まれる、分厚い中間型火山ガラスが全試料に含まれている。これらのことから、礫層の離水は約2.1—2.2万年前以降であることがわかる。

重鉱物組成ダイヤグラムを図152に、その内訳を表4に示した。おおよそ下位ほど同定不能粒子(大部分が風化した重鉱物や岩片など)の占める割合が大きい。また基盤岩に由来すると考えられる黒雲母が下位の試料に多く含まれる。また重鉱物の中では比較的風化に対して強い磁鉄鉱が下位の試料に多く含まれている。これらのことも下位の試料ほど再堆積のテフラや河川の砂などの割合が下位ほど大きいことを支持している。

以上のように、下位の試料ほど再堆積のテフラや河川の砂などの割合が大きいことがわかる。堆積物の連続から考えると、下位ほど河川によって運ばれた砂の割合が増加していると考えられる。

成塚石橋遺跡において、黄灰〜褐色を呈する試料番号2, 3, 4と新井(1962)により記載された、通常周辺の台地上に分布するロームとよばれる褐色火山灰土(上部ローム, 113地点b, 116地点a)と比較すると、石橋遺跡の試料は角閃石や黒雲母を比較的多く含む点で異なる特徴をもち、風成の褐色火山灰土とまったく同じ堆積物とは考えられない。

(4) 考察一 台地の離水時期について

一般に、大間々扇状地は、約2万年前ころに離水したと考えられているが、今回の調査では、その重要な根拠とされている礫層を覆うAs-BPを発見することはできなかった。As-BPとそれの上位に堆積する上部ロームのかわりに、河川起源の砂層とそれを主な構成物とする土壌の堆積が認められた。これらの砂層と土壌中には、ATやAs-BP以上のテフラに由来する火山ガラスが認められた。

今回礫層の上位にAs-BPが認められなかった理由には、2つが考えられる。一つは、礫層上位にAs-BPが堆積後、なんらかの作用により土壌侵食がおりAs-BPが削剝されたとする考え方(礫層の離水は、As-BP堆積以前)、もう一つは、部分的に成塚石橋遺跡付近の離水が遅れたことである。後者には、扇状地離水時に残された旧河道に本遺跡が位置しているか、あるいは本遺跡が狭義の大間々扇状地(藪塚面, 沢口, 1971)とは異なる段丘上に位置しているかが考えられる。この問題を解決するためには、周辺の地形・地質調査が必要である。

(鶴パリノ・サーヴェイ)

文 献

- 新井房夫(1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, 1—79。
 町田 洋・新井房夫(1976) 広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—。科学, 46, 339—347。
 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984) テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカatalog—。古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, 865—928。
 沢口 宏(1971) 渡良瀬川流域の第四紀地形発達史。群馬教育センター紀要, 16, 102—111。

Ⅲ まとめ

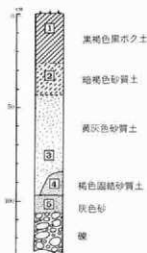


図150 成塚石橋遺跡台地部の地質断面

試料番号	試料の重量 (g)	1/4-1/8mm粒子の全体に占める割合(%)	重鉱物の1/4-1/8mm粒子全体に占める割合(%)
1	60	13.4	25.3
2	60	8.6	11.6
3	60	12.0	5.9
4	60	11.8	12.1
5	40	16.4	11.6

表1 分析試料の重鉱物の割合

試料番号	軽鉱物組成					同定鉱物総数	
	火山ガラス		石英	長石	その他		
	バブル型	中間型					
1	1	6	9	40	43	151	250
2		6	5	27	31	181	250
3	2	2	1	36	27	182	250
4		7	2	44	22	175	250
5		3		34	21	192	250

表2 成塚石橋遺跡の軽鉱物組成

試料番号	重鉱物組成					同定鉱物総数	
	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	黒雲母		
1	2	180	35	4	13	16	250
2	1	165	38	5	13	28	250
3	3	143	18	13	5	12	250
4	4	133	23	10	2	26	250
5		125	39	5	3	32	250

表3 成塚石橋遺跡の重鉱物組成

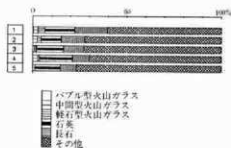


図151 成塚石橋遺跡の軽鉱物組成ダイアグラム

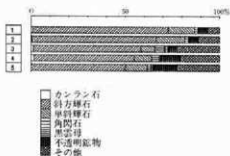


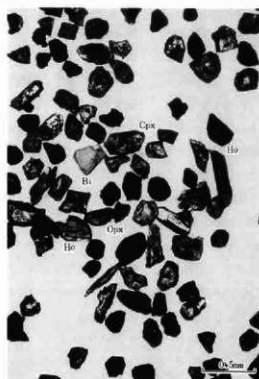
図152 成塚石橋遺跡の重鉱物組成ダイアグラム



試料番号1 重鉱物

Opq : 斜方輝石 Cpx : 単斜輝石

Opq : 不透明鉱物 (磁鉄鉱)



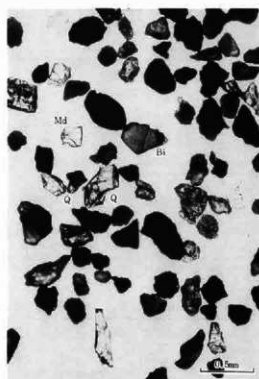
試料番号5 重鉱物

Bi : 黒雲母 Ho : 角閃石



試料番号1 軽鉱物

Pm : 軽石型火山ガラス Md : 中間型火山ガラス Q : 石英



試料番号5 軽鉱物

Pm : 軽石型火山ガラス Md : 中間型火山ガラス Q : 石英

2. 旧河道について

(1) 遺跡周辺の微地形と旧河道

成塚石橋遺跡が、大間々扇状地の扇側部に位置することは、遺構編のところでもふれた。ここでは本遺跡がなぜ大間々扇状地の一部なのかについて検証し、昭和32年以前の耕地図から読みとった水系と、太田市の基本図から読みとった微高地をからめて、旧河道の上流部分について述べてい。

大間々扇状地は、岩宿遺跡のある琴平山付近を扇頂とする、今から一万年以上前に渡良瀬川によって形成された扇状地である。台地化したのは、渡良瀬川の流路が桐生から足利へと変遷したためとらえている。扇端部はおよそ標高60m付近と考えられており、そのあたりには、西から東へ向って、平井、金井、市野井、小金井、寺井、などという湧水池に関連した地名が、現在残っている。東側扇側部は八王子丘陵に沿うが、扇状地面との間には沖積地が帯状に南東方向に続く。この沖積地は、扇状地面より一段下がり、上流側は大間々町から始まり、阿左美付近で幅約200mの浅い谷になる。藪塚まで下がると幅も500m程に広がる。藪塚から南東へ約3kmの地点が、本遺跡の位置する成塚である。この辺りが扇側部の最後の地点であり、巾も広い所で1km程になる。標高も60m前後であるから、扇端部と考えてもよいだろう。

この沖積地は、先述したように大間々町から扇頂と考えられる琴平山付近をぬけて、成塚付近まで続く谷であることから、渡良瀬川の名残川と考えてよいと思われる。八王子丘陵からの表流水を合わせて、扇側部を流下したので、阿左美付近で幅約200mと谷が広がりみせるのではないか。表流水だけであったら谷底幅

ももっと狭くなり、表流水も流下する間に扇状地礫層中にしみ通ってしまったと考えても不自然ではない。

以上のように、地理的には扇状地上に成塚は位置すると考えられるが、地質的にはどうだろうか。

成塚石橋遺跡の立地する部分は、付近の地層観察から明らかに扇状地の一部と認められる。

3・4区におい

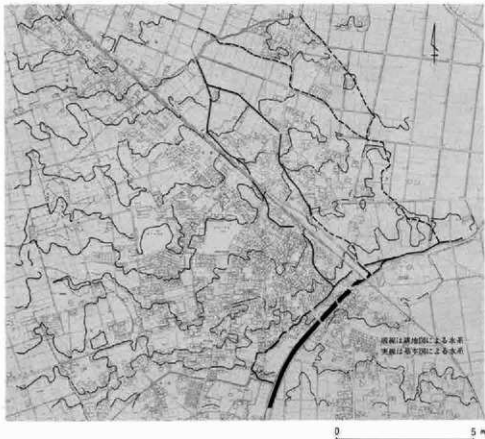


図153 成塚石橋遺跡周辺の地形

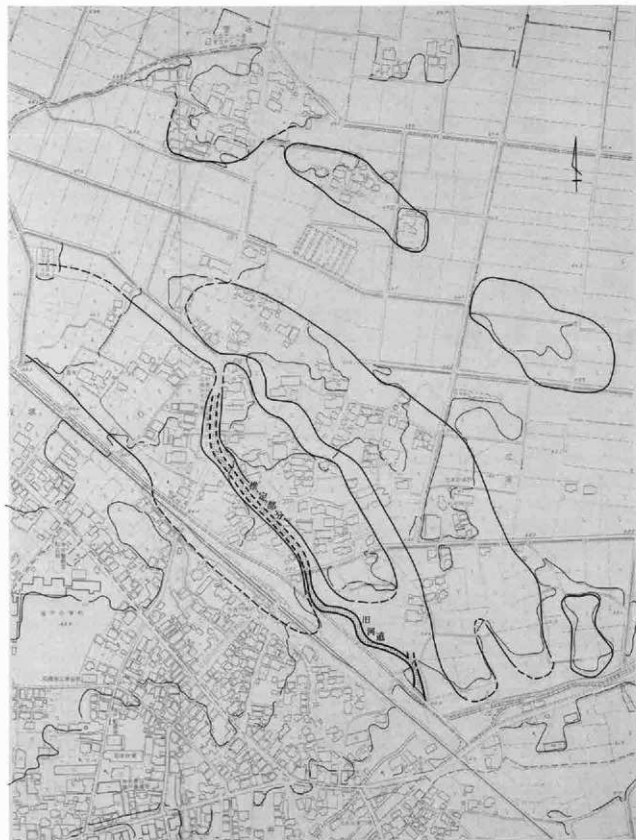


図154 旧河道と微高地

0 200m

ては、ローム層下から長径20～30cmの巨礫が表われた。これらの巨礫はimbricationの発達がよく、弱い蛇行を示しながらも、扇頂部の方向へ各礫の長軸を向けている。礫種には花崗岩礫も含む。2区では、井戸の断面調査から扇状地面と判明した。ただ問題は、ローム層と中～大礫を主とする礫層の互層が上位に発達する点である。このロームと礫の互層は、下流の1区へ近づく程厚くなり、一部には砂層が挟まれたり礫層がレンズ状に堆積したりする。ロームも一次堆積と考えられるような明るい黄褐色だけでなく、一部は茶褐色あるいは暗黄褐色を呈す。地層の傾斜も、扇状地面と平行の南東方向へではなく、南々東ないしは南への傾斜であった。すなわち、これら扇状地礫層の上位にのるロームと礫の互層は、2区より南へ向かうほど厚くなり、3区で見られたローム層下の砂層と同時異相の関係になるものと考えられる。

ここで、バリノ・サーヴェイの分析結果の考察について若干ふれるならば、礫層の上位にBPが認められなかった理由のうち、筆者は先に述べたことがらより、成塚石橋遺跡付近の離水が遅れたことを支持する。そして、大間々扇状地と異なる段丘上に本遺跡が位置しているのではなく、扇状地離水時に残された旧河道近くに位置しているがための離水の遅れととらえたい。

図153は、基本図に、昭和32年以前の耕地図から読みとった水系を加えて表わした図である。これによれば、図幅の上側中央から右はじ中央を斜めに沖積地がはしり、現在水田として利用されているのが読みとれる。沖積地より南側が大間々扇状地にあたる。図の下側が扇端部になり、寺井という地名が読める。東武鉄道桐生線より西側(南西)では、何本もの谷が入る。強戸小学校と中学校の校庭付近や、東武鉄道沿い等である。東武鉄道より東側(北東)では、耕地図から読みとった水系に沿って谷が2本入る。

図154には成塚周辺の微高地部分と旧河道を表わした。微高地については等高線判読による。旧河道は、調査部分を実線で、推定部分を破線で示してある。成塚の地が入る微高地は間に2本の谷が入っているが、その内の1本が旧河道の位置する谷と考えられるものである。3つに分かれた微高地の北側のものは、南西側は伊勢崎～足利線付近まで続く。中央の微高地は稲荷神社南100m付近で終わるようである。南側の微高地は、治良門橋駅付近の地形改変で続きは不明である。上流側では南側2本の微高地はつながると思われる。

検出できた部分の旧河道は、図153の水系に沿っている。現在まで旧河道の部分は凹地として残っていると見えよう。したがって凹地は旧河道の存在を示すものと考え、検出部分より上流は150m先の谷地先端までは追える。それより上流は不明であるが、2つのことが考えられる。1つは現水系に沿っているという考え。もう1つは、市道に沿って真北へ上りもう1本の谷と合流する考えである。残念ながら、くわしい現地調査ができなかったため詳細は不明であるが、空中写真判読を行ったところ前者の可能性が強いので、図154には判読結果を示した。

(中山)

(2) 旧河道遺物出土状態

1) 出土遺物のデータベース化

旧河道の遺物は、破片やほぼ完形のものまで多数が出土した。調査時点で、土層断面や河道底面の凹凸に沿って、遺物が偏在する傾向があったことから、遺物1点1点の位置・大まかな器種・絶対レベルを記録し、取り上げることとした。遺物は、河道の底面に近いものは、残して位置を記録するように努めたが、埋没土中の遺物は位置を記録せずにグリッド毎に一括して取り上げたものもある。

第1～第3の河道の分層は、調査時点では土層断面では可能であったが、河道毎の分層発掘はできなかった。したがって、遺物はグリッドごとの通しNoを付した。昭和63年度調査区分では6,983点、平成元年度調査区分では1,418点を数え、埋没土一括で取り上げたものは遺物取納箱20箱に及んだ。これらの遺物の中には、

様々な遺物が含まれていたため、それらの遺物の内容から、河道の変遷や用途について考えることができること期待された。そこで、これらの遺物の諸属性と分布状態の関係や遺物の接合関係を整理するために、属性ごとの分布図を作成することとした。遺物の諸属性は、以下の観察項目についてそれぞれの目的を想定して、1点1点観察を実施した。

観察項目	主たる目的
①遺物の種別	遺物の残存状況と遺物の種別による偏在傾向をつかむ。
②遺物の部位	
③土器の器種・型式	器種別の偏在傾向をつかむ。また、型式のわかる遺物に偏在傾向があれば河道の変遷をつかむ。
④摩耗の有無	廃棄行為の有無
⑤遺物の接合関係	同一個体の位置関係から遺物の廃棄行為を考える。

遺物の器種は、器形の特徴をよくあらわす破片は特定できるが、そうでないものはほとんど変形土器の体部破片と判断したものが多い。また、型式組列の確定できる遺物は杯形土器と高杯形土器の一部であり、総遺物点数の2.74%である。

現場で作成した遺物の平面分布図は、遺物が集中している部分では同じ地点に上下3枚にわたって作図するほど枚数も多く、検索する遺物の量も多いことから、人力によるデータ処理は繁雑になることが予想された。そこで、コンピューターによるデータ処理を行うことにした。内容は、遺物の座標を、既製の平面図からデジタイザーで読み取り、絶対レベルを新たに入力して、遺物の三次元の位置をデータベース化すること、さらに遺物の属性のデータを入力して、属性毎のマークで平面分布図・垂直分布図を出力することである。

2) 河道の遺物出土傾向

以上のようなデータベースから、出力し、諸属性を抽出・強調して作図したのが付図2～5の4枚の遺物分布図である。整理作業の当初では、河道のほとんどが5世紀のものであり、その中の時期的細分が可能ではないかと考えられた。したがって、和泉式併行期の土師器・須恵器については組列を示す型式細分までをデータとして抽出することにしたが、ほとんどが破片であったので、型式を確定できたのは杯形土器と高杯形土器の一部にとどまった。さらに、これらの型式を判定し得た遺物の数は非常に少なく、その分布は散在してしまい、それらの遺物のみで特定の流路を示唆するような集中傾向は看取できなかったのが実際のところである。したがって、五世紀の中を分けるような河道の変遷を、この作業から考えることはできないと判断した。

河道の変遷については、整理作業の進捗に伴って埋没土層の検討から、5世紀の河道、6世紀の河道、8・9世紀の河道の3時期の河道の変遷が考えられるにいたっている。遺物の面からは6世紀、8・9世紀の遺物は出土数が少なく、データベース作成時に、その時期性をデータとしてとらなかつた怪緯がある。したがって、直接前記の3河道の変遷を裏付けるような分布図を出力できなかった。しかし、実測された遺物が、土層によって抽出した河道の時期毎に集中して出土していることは確認している。

以上のように、今回のデータベースからの分布図作成業務からは時期性を議論する成果をだすことはできなかった。一方、集落における河道のありかたを示唆する幾つかの事例を提示することができた。

第1に、遺物の摩耗度であるが、出土遺物全体の8.6%の破片にのみ摩耗の痕跡が見られた。また、完形・

半完形の遺物が0.95%ある。しかし、その分布には偏在傾向はなかったので、今回の報告書には分布図を掲載していない。流水によって摩耗したと考えられる破片は少なく、その場で割れたと考えられる遺物も存在することから、本河道で出土した遺物の多くは近くで廃棄されたか、廃棄された現位置を示している可能性が高いと考えられる。

第2に遺物の種別・土器の器種による分布の特徴は、祭祀遺物と考えられている石製模造品や土師器埴形土器・高杯形土器の偏在をあげることができる。(付図3) 高杯形土器については、昭和62年度調査区で17号溝として報告した本河道の下流部に集中して出土した地点があり、集落内の祭祀の可能性を示唆しておいた。今回報告する調査区では高杯形土器のみでなく、土師器埴形土器・剣形石製模造品が、J-42~44グリッドの第3河道底面の遺物集中のなかに偏在して出土している。この河道は5世紀のものと考えられ、本河道左岸に展開する同時期の集落の祭祀行為がおこなわれたことを想定させる。集落内の祭祀については、群馬県子持村黒井峯遺跡等で畚の軌道に土器や玉類がおかれているケースや、本遺跡のように河川敷や湧水池の周辺に祭祀遺物が集中する場合などいくつかのパターンにわけることができそうである。この問題については資料の集積と比較検討を待って今後の課題としたい。

第3に器種別の分布の特徴として、土師器が多量に出土したことをあげることができる。本遺跡の河道、特に第3河道については、底面を部分的に侵食した小溝状のところに遺物がびっしりつまるように出土したが、これらを構成するのは、日常什器の主体をしめる土師器の杯形土器や埴形土器等である。(付図4) これらの土師器がどうしてこのように集中して廃棄されたのか。これらの中には完形のものも含まれ、接合して完形にできたものも少なくない。また、先述して祭祀遺物が偏在する地点にも埴形土器を中心として土師器が出土している。祭祀遺物は偏在しているが、それらだけ独立・分離して出土するのではなく、他の日常什器とともに出土するのである。このような土師器の大量出土は日常什器の単なる廃棄行為なのか。それらの廃棄行為と祭祀行為は集落の中で分離して行われていないのか。これらを明らかにすることが、居住域のなかを流れる小河川が、集落のなかでどのような用途に使われていたかを解明する手だてになろう。

第4に遺物の接合関係であるが、139例824点の接合資料が得られた。(付図5) 同じグリッドの中で接合したものは、86例462点、隣のグリッドで接合したものは45例276点で、合計すると94.3%を占めている。これは5~10mの範囲での接合がほとんどであることを示しており、摩耗の有無や完形・半完形が多いことも矛盾しない。河川作用によって流れてきたものが出土するのではなく、集落における廃棄・投棄行為を示唆するものと思われる。この場合、接合の範囲は廃棄・投棄行為の範囲を示すことになる。また、接合関係は接合したそれらの遺物が含まれる河道が同一時期のものであることを示す。このことは、土層の観察から抽出した3時期の河道のありかたと矛盾するものではなく、河道変遷の想定は妥当なものといえよう。なお、違い地点の出土遺物が接合している例が3例ある。これらのうち2例は、須恵器の大形埴形土器であり、その接合は特殊である。

もう一例は、土師器の高杯形土器で、脚部と杯部が5つ離れたグリッドで出土したものが接合している。

旧河道の遺物出土状態から、考えられることを述べてみた。今回の旧河道の調査でわかったことは、集落内を流れる河川周辺には祭祀行為があったこと、祭祀遺物も日常什器とともに廃棄されているらしいことであるが、河道の用途・性格については、同様な遺跡を比較・検討しつつ、今後とも考えていかなければならない。

(小島)

3. 古墳について

(1) 成塚古墳群における検出古墳の位置

今回の調査で、帆立貝式古墳・円墳・円筒棺と、一地域における葬送の3つの形態が検出されたわけであるが、この中で成塚古墳群にかかわる古墳の位置と立地について簡単にふれておきたい。

太田市北辺に位置する成塚地内には、数多くの古墳があり成塚古墳と呼称されている。本古墳群は総覧によれば39基存在する。また、本古墳群周辺には数多くの古墳が立地するが、その中の大型前方後円墳として西に、新田町の二ツ山1号・2号古墳が存在する(図155)。南には亀山古墳・鶴山古墳が存在する。

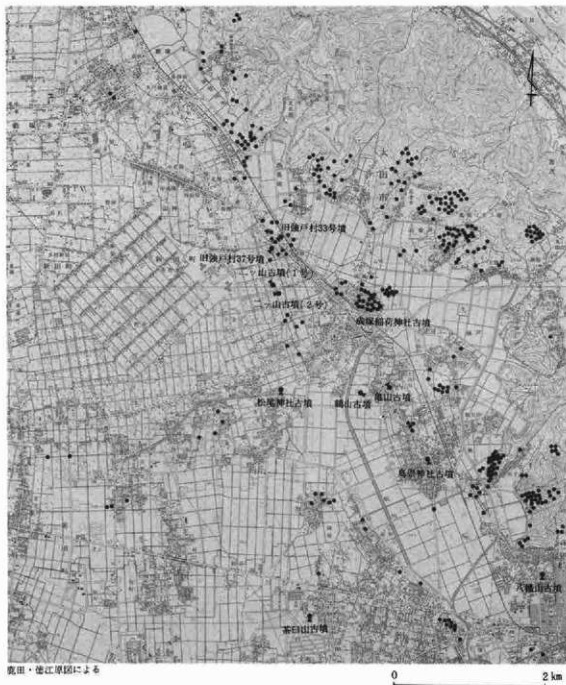


図155 成塚周辺の古墳

図156は、太田市教育委員会「1985・市内遺跡Ⅱ 図44」に、綜覧記載の規模を加えて表現したものである。本図によれば、そのほとんどの古墳は微高地上に位置し、3本の谷をはさんで、4つの支群に分けることができる。北側の支群内の173号から180号の8基の古墳は、耕地整理により消滅している。中央の2本の微高地上には計26基の古墳が存在する。今回検出した8基（7号墳は周堀のごく一部検出なので、ここでは表わしていない）の古墳は、一番南側の微高地上に立地する。

これらの古墳には、埴輪が数多く樹立されていたようで、綜覧記載は以下のような状況（表5）である。37基中26基に埴輪破片が出土しているとのことなので、約70%の古墳に埴輪が樹立されていたことになる。封土は37基中32基に認められ、2尺（約60cmの高さ）から12尺（約4mの高さ）と報告されている。綜覧144号古墳については、現地観察では周辺よりやや高まりを持っているので、主体部の一部が残存している可能性がある。



図156 成塚古墳群と検出した古墳

表5 古墳総覧記載の古墳

番号	規模	大字	小字	番地	大きさ	高さ	備 考	
144	円形	成塚	藁 訪	996	不詳	不明	埴輪、石椁	
145	〃	〃	岩 穴	797	〃	〃	埴輪	
146	〃	〃	〃	792	〃	〃	埴輪破片 (1985、周堀一部調査)	
147	〃	〃	明神前	118	〃	〃	〃	
148	〃	〃	岩 穴	772	100尺	10尺	〃	
149	〃	〃	〃	790	66尺	7尺	〃	
150	〃	〃	〃	809	66尺	7尺	〃	
151	〃	〃	〃	810	50尺	9尺	埴輪破片	
152	〃	〃	〃	754	66尺	8尺	〃	
153	〃	〃	〃	806-1	66尺	10尺	〃	
154	〃	〃	〃	806-2	66尺	10尺	〃	
155	〃	〃	〃	807-1	66尺	10尺	〃	
156	〃	〃	〃	811	99尺	12尺	〃	
157	〃	〃	下新田	836	66尺	不明	〃	
158	〃	〃	〃	821	73尺	10尺	〃	
159	〃	〃	〃	822	50尺	8尺	埴輪	
160	〃	〃	〃	847	83尺	11尺	〃	
161	〃	〃	〃	847	66尺	6尺	〃	
162	〃	〃	〃	乙843	66尺	5尺	埴輪破片	
163	〃	〃	〃	811	66尺	7尺	〃	
164	〃	〃	〃	996	66尺	8尺	〃	
165	〃	〃	〃	971	66尺	8尺	〃	
166	〃	〃	〃	972	66尺	12尺	〃	
167	〃	〃	〃	971	66尺	12尺	〃	
168	〃	〃	〃	973	99尺	12尺	〃	
169	〃	〃	〃	978	66尺	12尺	〃	
170	〃	〃	〃	藁 訪	582	50尺	5尺	〃
171	〃	〃	〃	983	50尺	3尺	埴輪破片	
172	〃	〃	〃	801	66尺	7尺	〃	
173	〃	〃	〃	715	50尺	3尺	埴輪破片	
174	〃	〃	〃	724	50尺	10尺	直刀、石塔	
175	〃	〃	〃	336	50尺	3尺	埴輪破片	
176	〃	〃	〃	308	20尺	4尺	〃	
177	〃	〃	〃	308	50尺	4尺	〃	
178	〃	〃	〃	310	33尺	5尺	埴輪破片	
179	〃	〃	〃	317	33尺	4尺	〃	
180	〃	〃	〃	310	33尺	4尺	〃	
181	〃	〃	〃	317	33尺	2尺	〃	
182	〃	〃	〃	318	170尺	3尺	〃	

表6 検出古墳

○=数や器種は不明だが存在するもの。

番号	形 状	墳丘	墓石	周堀	全 長(m)	人 物	馬	家	大刀	盾	他の 形象	朝顔	円筒
1	帆立貝形	無	無	全周?	17.5	6+	1			○	○	2	有
2	円形	無	無	途切	10	2+	2				?	8+	有
3	楕円形	無	無	途切	7.5×6.3			○		○		無	有
4	円形	無	無	全周?	13	6					○	無	有
5	円形	無	無	全周?	13		○				○	有	有
6	円形	無	無	全周?	16				○		○	有	有
7	不明	不明	不明	有	不明	○					○	不明	有
8	方形	無	無	全周?	7.8							無	有
9	楕円形	無	無	途切	12×10							無	有

(2) 主な古墳における埴輪の樹立

墳丘が削平された古墳には、埴輪の基底部分は残らないし、さらに倒伏した埴輪の破片もそのほとんどが失われてしまっている。しかし、周堀内にかろうじて埴輪の小破片が残り、埴輪樹立が断片的ではあるが推定できる状況にあった。古墳の周堀は、少なくともAs-B降下項には埋没が終了していることが、土層断面から判断される。周堀埋没土は上位に必ずAs-Bの純層もしくは混土層を持つことによる。

表7の埴輪は、調査の時には周堀内より出土したもののだが、本来は墳丘上に樹立されていたと考え得る。今回の調査で検出された9基の古墳は、西半分を未検出のものが多い(調査区外になるが、過去の蛇川護岸工事等による破壊を受けている部分でもある)が、それらの残存する周堀内の埴輪片の分布を見ると、北辺に出土が多く、西北及び東南に向かうに従い出土が少なくなる傾向がうかがえる。

9基の検出古墳の中で、埴輪の出土が多かった3基の古墳について、出土した埴輪の元の樹立位置(樹立状況)の復元を試みたい。3・5・7・8・9号古墳については埴輪片自体の出土が少なく、6号古墳については形象埴輪片の出土が少ないので、樹立状況の推定を試みるには資料不足と思われるので除くことにする。埴輪の樹立状況については、出土の限られる形象埴輪と朝顔形円筒埴輪を中心にし、普通円筒埴輪の本数については、出土した破片は多いものの基底部の出土量は極少ないので、本稿ではふれないこととする。

この試みを実施するにあたり、まず各々の古墳の埴輪の出土位置、出土層位等を検討した上で実施することにする。この中で、まず3基の古墳に共通することを取り上げておく。

- ① 周堀内の土層は、すべて一次的な堆積物と考えられる。レンズ状に堆積しており、遺構外からの多量の土の流れ込みを示すものはない。墳丘崩壊を示すような土層の流れ込みも認められない。
- ② 埴輪の出土部位から判断すると、埴輪は墳丘上に樹立されていたものと考えられる。外堤上の樹立はあっても極めて少ないものと思われる。出土遺物は、墳丘からころがり落ちたように、墳丘肩部か周堀内側の法面上あるいは底面上に密である。外側法面付近には遺物の分布はほとんどみられない。

表7には、それぞれの埴輪の出土位置も示した。1号古墳西くびれ部堀内から出土した遺物は、土層番号5層と6層からの出土であり、土層はFP粒子を含む暗褐色～黒褐色土である。上位にAs-Bを含む4層がある。前端部堀もほぼ同様の土層内から出土している。東くびれ部堀内は、4層・5層のFP粒子を含む幼黒色～灰褐色土からの遺物の出土であった。後円部東堀は8層・9層のFP粒子を少量含む黒色～明褐色土より遺物が出土している。

2号古墳北周堀は、5層・6層の黒色～明褐色土中より遺物が出土している。東周堀も2層・3層の黒色～明褐色土中より遺物が出土している。これらにはFP粒子が少量含まれており、上位にAs-Bを含む黒褐色土がのる。

4号古墳周堀は、3層・4層の黄褐色～暗褐色土からの遺物の出土であり、4層にはFP粒子が散点する。上位には2層のAs-Bをブロック状に含む茶褐色土がのる。

次に出土した形象埴輪片の胎土・色調・焼成・出土位置を基準に、可能な限り同一個体かどうかの検討を行った。その結果も表7に示した。この表を基に埴輪の樹立位置を推定したが、図157～159である。位置推定にあたって、次のような考え方に基づいて図上表現を行った。

- ① 出土した埴輪片が数点以上ある個体の樹立位置は、周堀肩部に近い場所である。
イ、破片の分布が墳丘の肩部から遠い程、肩部に近い位置に樹立されていた。

表7 主な古墳における形象埴輪と朝顔形埴輪

	番号	器種・部位	備 考	番号	器種・部位	備 考
1 号 古 墳	7	武人	底面上27cm 西くびれ部 法面上15~21cm	5	人物 男	底面上23~36cm
	8	〃	底面上32~42cm 法面上10~16cm	6	人物 馬飼	〃 22cm 法面上27~29cm
	17	美豆良	前端部埋没土中(P L50) 〃 (〃)	9	〃 〃	西くびれ部 底面上40cm 法面上0~33cm
	No218	人物 顔	肩部+3cm(P L51)	16	腕	底面上28cm
	11	(女子1)耳	前端部埋没土中(P L50)	19	基底部	〃 24~35cm 法面上22~29cm
	15	手	〃 (〃)	20	馬 立髪	底面上39cm(P L50)
		首?	〃 (〃)	21	首	西くびれ部 〃 40cm
	No296	(女子2)髻	西くびれ部底面上41cm (P L51)	22	鬘?	〃 40cm
	13	人 手	西くびれ部埋没土中29cm	No372	立髪先端?	西くびれ部底面上24cm(P L51)
	12	男子1 胸	西くびれ部埋没土中 (P L50)		立髪先端?	〃 埋没土中 (〃)
	14	手	〃 〃 (P L49)	18	器材 盾	前端部埋没土中(P L50)
	No317	?	〃 底面上31cm (P L51)	No273	盾	西くびれ部底面上35cm(P L51)
	No329	腕	〃 底面上30cm (〃)	25	朝顔形円筒	西くびれ部埋没土中48cm
	10	(男子2)顎	西くびれ部埋没土中 (P L50)			
24	朝顔形円筒	東くびれ部埋没土中4~32cm				
2 号 古 墳	1	男子1 顔	北堀埋没土中	19	朝顔形 1	北堀底面上29~34cm
	10	腕	北堀?埋没土中	21	朝顔形 2	北堀底面上30~47cm
	12	大刀	東堀埋没土中	18	朝顔形 3	北堀埋没土中
	13	〃	〃	17	朝顔形 4	東堀底面上21~28cm法面上
	8	人1	東堀底面上0~10cm	16	朝顔形 5	東堀底面上19~26cm法面上
	9	(馬飼?)手	東堀法面上8cm	20	朝顔形 6	東堀底面上15~26cm法面上
	14	馬1	東堀底面上3~29cm	53	朝顔形 7	東堀底面上11~27cm法面上
	15	馬2	東堀底面上10~34cm 〃 法面上10~30cm		朝顔形 8	東堀埋没土中 (99土坑出土図135-1の一部)
4 号 古 墳	2	男子1 顔	周堀底面上16cm 〃 法面上10~16cm	3	男子2 顔	周堀底面上11~25cm 〃 法面上12cm
	7	女子1 顔	周堀底面上18~30cm	4	女子3 顔	周堀底面上12~17cm
	6	腕	周堀底面上16cm 〃 法面上3~8cm	5	大刀?	〃 〃 20cm
				8	女子4 顔	周堀底面上12~17cm
	9	女子2 顔	周堀底面上16~19cm			

表中の番号の意味 7. 遺物番号 (II遺構編参照) No218 遺物取り上げ番号 (P L50) は、写真プレート50を参照の意味。

田まとの

口、破片の分布が墳丘肩部に近い程、肩部から離れた位置に樹立されていた。

- ② 出土した埴輪片が1点ないしは2～3点の場合、周堀内の分布がどの位置であれ、樹立位置は肩部ではなくより墳丘中央部寄りである。(ほとんどの破片は、墳丘上に残ったであろうから。)

1号古墳 (図157)

1号古墳の形象埴輪は、西くびれ部と前端部西半分の周堀内に出土が多く、東くびれ部と後円部東側の周堀内には、僅かな破片の出土しか見られなかった。このことは、形象埴輪の樹立が前方部を中心としており、しかも西くびれ部から前端部にかけての部分であることを示しているものと考えられる。5～22の実測埴輪は、およそ10個体にまとめられる。7・8は武人埴輪の一部であり、同一個体と思われる破片は、前端部でも西寄りの堀内と西くびれ部堀内北側に多く分布しているもので、前端部西側に樹立されていたと推定される。その北側には、顔・耳・手などが前端部から出土した女子1が樹立されていた可能性がある。女子1の東隣にも、頭部の鬘の部分のみ出土した女子2が並んでいた可能性がある。ただ、前端部堀内から同一個体の破片が出土しているかどうかは、出土破片を調べたが不明であった。武人埴輪の東隣にも人物埴輪(13、手)が樹立されていたと考えた。この手の破片は、他の人物埴輪の胎土・色調と異なるため、樹立の可能性がある。武人埴輪の南隣に男子1が樹立されていたと推定される。12・14の出土位置は西くびれ部堀内であるが、他の2片の出土位置が明らかなので、2片の出土位置から樹立位置を推定した。もう1体男性の頸の部分(男子2)が出土しているが、出土位置を平面図に落としてない遺物なので、樹立位置は推定できない。しかし、他の人物埴輪との位置関係から、女子2の南側と考えた。盾形埴輪は、前端部堀内と西くびれ部堀内から1点ずつ小破片が出土している。樹立位置は前方部中央部寄りを推定した。

5～19はそれぞれ接点はないものの、出土位置・胎土・色調から同一個体と考えた。左手を上げなおかつ後述する馬埴輪の破片に近い位置からの出土であるため、祭式の役割としての馬飼を想定した。本埴輪は左手の平を下に向けているので、何かをささげ持つ埴輪とは考えられない。また大豆良を持つところから男性である。馬埴輪は、この馬飼の近くから胴の破片の一部と、首・立髪の一部が出土し、馬飼との位置関係から北向きが想定される。立髪先端と思われる破片が2個体分あるので、馬も1頭でない可能性が高い。馬に対応する馬飼とすれば2個体の存在が考えられるが、頭部と胴部の接点が見つからないものの、2個体を積極的に支持する他の破片(頭部に対する他の胴部)の存在がないので、馬飼は1個体と思われる。

残った形象埴輪の中には、器財埴輪を想定させるような破片はないようである。人物埴輪は、何点かあるものの部位がわからない程の小破片である。

朝顔形円筒埴輪は、東西くびれ部堀内から1個体ずつの出土であり、出土破片から樹立近接地を求めると、くびれ部よりやや後円部寄りになる。しかし、県内の他の古墳の樹立状況から推定すると、やはりくびれ部に1対樹立されていたものであろうか。

円筒埴輪は、前方部の東西に樹立されていたことが破片の出土状態からうかがえる。後円部の堀が検出されているのは東側だけであるが、破片の分布を見ると、くびれ部に近い部分程量が多く、後円部南側になるに従い量が少なくなる。これを樹立本数にあてはめれば、前方部及びその付近で樹立数が密で、後円部南側程粗になる。前端部も僅かな破片の出土量であるところから、円筒埴輪は樹立されなかった。あるいはあっても2～3本ではなかったらうか。

2号古墳 (図158)

2号古墳の形象埴輪は、およそ5個体にまとめられる。男子1は、北堀からの唯一の形象埴輪の出土であり、他はすべて東堀からの出土である。男子1は、埋没土中取り上げ遺物の中から接合されたものであるた

め、正確な出土位置は不明である。この他の人物埴輪は、東堀から1体出土しているのみである。

本墳は、馬形埴輪が2個体分東堀から出土した。馬1は、周堀底面上からの出土であり、図56に示したように頭及び鞍・尻の出土状態から、頭を北に向けていたと推定される。馬2は周堀内法面上に横倒しになったような状態で出土し、体の右半分が残存していた。頭等の遺物の位置関係(図56)から馬1同様に北向きと推定される。人1は、馬埴輪よりやや北側に破片が出土している。馬との位置関係と東堀から他の人物埴輪片の出土は1片のみであること、頭部・胸部の出土はないものの右腕を斜め上方に上げている様子から、馬飼を考えた。

形象埴輪は上記の4個体の他には、大刀が1個体(12・13)出土している。出土位置は東堀からのみであり、周堀の途切れ部を意識しての形象埴輪の樹立であれば、男子1と馬飼の間が大刀の樹立位置である可能性がある。その他には、先述した人物埴輪の一部と思われる破片1片と、器財埴輪の類と思われる破片が1片出土しているだけ(東堀南半分にある形象埴輪片は、すべて馬埴輪のものと思われる)であるので、1号古墳に比較して形象埴輪の樹立は少なかったものと思われる。

朝顔形円筒埴輪は、6個体出土位置が判明し他に2個体で、計8個体の存在が確認できている。遺物の出土状態からおおよそ1mの間隔に置かれていた様子が看取できる。形象埴輪が樹立されていたと推定される周堀途切れ部分に近い周堀(北堀・東堀共に)内には、朝顔形円筒埴輪片らしいものは出土していないようなので、この部分を除いて全周していたのであろうか。半周と考えると10~15本もの樹立が想定される。

円筒埴輪は、朝顔形円筒埴輪の間に数本樹立されたと考えられるが、出土破片数と朝顔形円筒埴輪の間隔との関係から、1~2本の樹立数であろうか。

4号古墳(図159)

4号古墳の形象埴輪は、6個体におよそまとめられる。破片はほとんどが男子1の頭部(図71)が出土した位置と、女子4の出土した範囲内からである。出土破片から樹立近接地を墳丘上に求めると、男子1と女子4がやや南北に離れていて、その他の男子2と女子1~3までは近接して樹立されていた様子が想定できた。破片の出土位置からの推定であるので、樹立の順序は本来のものと違うかもしれないが、一応本論では図159のように推定している。一番北側に男子1、次が女子1、3番目が女子2、4番目が男子2、5番目が女子3、6番目が女子4の順である。これらの人物埴輪はほとんどが顔及び頭部の復元であり、手や胴部の出土はみられない。ただ1点6の腕が出土しているが、胎土・色調・出土位置から女子1か2の手と思われる。どちらの所属かは女子1も2もよく似ているので特定できなかった。ただ、手の角度や手の平に刻線痕があるところから、何かを持っている(大刀か?)様子がとらえられる。その他の人物は、どんな役割をになっていたか不明である。

この他に出土した埴輪片の中には、別の人物を想定させる破片はなかったし、周堀内の形象埴輪片の出土も墳丘の中心から北ないしはやや東側に限られるので、6個体の人物埴輪の樹立であると言える。器財埴輪は、残った形象埴輪片の部位がわからず不明である。

朝顔形円筒埴輪は、本墳に樹立されなかった可能性が強い。周堀出土破片の中に口縁部から頸部を示す破片が1点も出土していないことによる。

円筒埴輪は、形象埴輪片が出土したのと同じような位置からの出土が多く、北側・南側共に破片の出土量は少ない。破片の出土量が樹立数を反映するとすれば、形象埴輪が樹立されていた周辺に円筒埴輪の樹立数も多く、その他は少ないと言える。(中山)

田まどめ

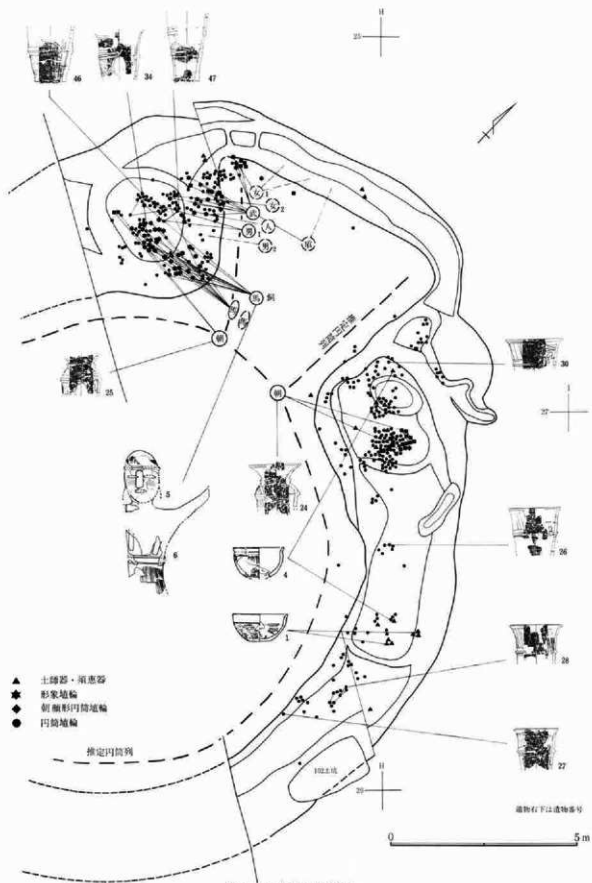


図157 1号古墳埴輪樹立

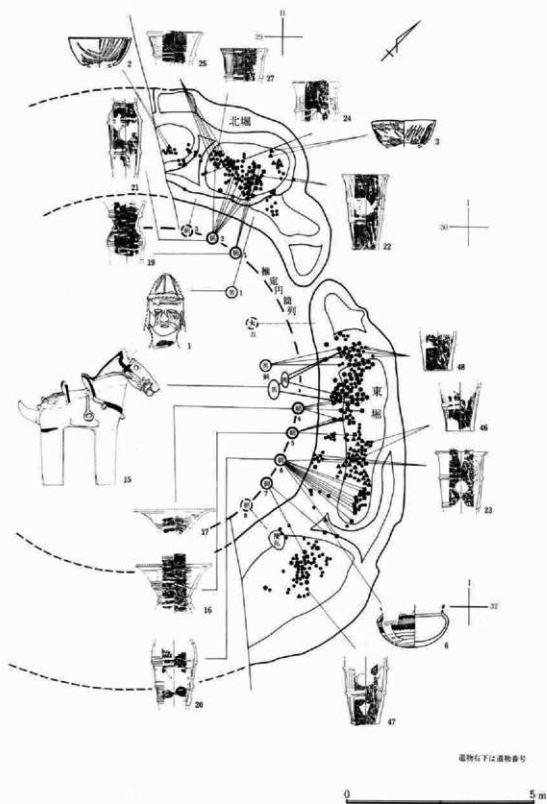


図158 2号古墳埴輪樹立

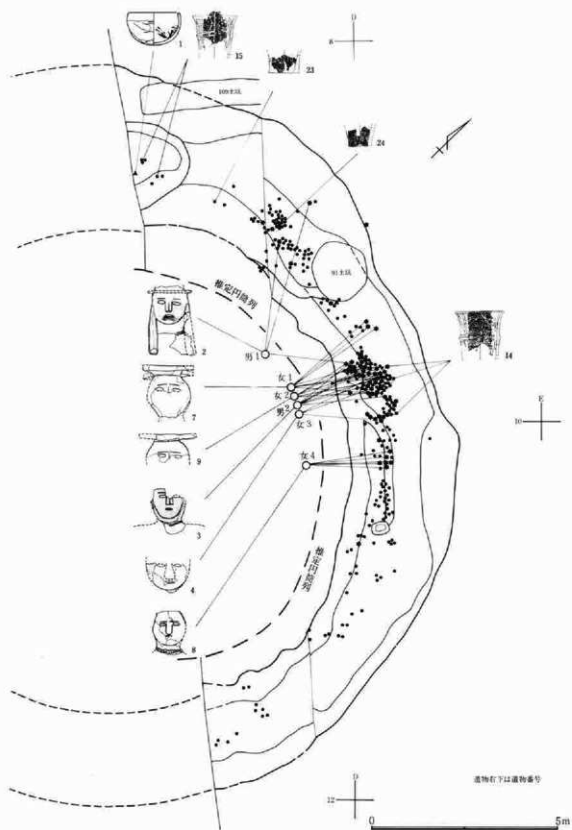


図159 4号古墳墳輪樹立

4. 馬形埴輪の成形について

関 邦 一

2号古墳周堀から、2体の馬形埴輪が検出された。1体は頭部から鞍までの残存で、脚・腹・尻等は検出されなかった。もう1体は右半身残存で、脚部不明であるが、復元高75.00cmと考える。

群馬県内からは、多数の馬形埴輪が出土しており、それを基にした製作技法の報告がいくつかなされるようになった。復元を急いで十分な技法の観察が行えなかったが、本稿において、検出された2頭の馬形埴輪の製作技法について、簡単な報告を行いたい。

169ページの馬形埴輪は、遺物番号14である。復元・実測後さらに残った破片の細かい観察を行ったところ、



頸部および立髪

頭～頸部をあらかじめ製作したのち接合し、隔肉で固定している。

頭部

頸部内面

頸部内面には粘土紐による成形の痕跡が見られる。耳、目部分はよく調整されている。

前輪
立髪前輪前面
(立髪未接合)

前輪～立髪 (背部への接合部分)



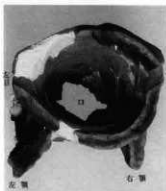
鞍部 (鞍輪～後輪)

鞍は背部の刷毛目調整後前輪後輪をつけ、居木部分に粘土をはりつけ、さらに棘突を加え鞍轡を表現している。

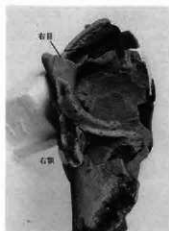
Ⅲ ま と め

耳は外側を向いていたことがわかった。

170～173ページの馬形埴輪は、遺物番号15である。この埴輪は、八棱形の鏡板を持つが、模様は左右で90度ずれている。立髪は、14の馬形埴輪のように高さを持っていたものを、成形後削ったことがうかがえる。赤色塗彩は、面髻・胸髻・手綱・立髪・前輪・後輪・尻髻・杏葉に施されていたことが、残存部分から推定される。

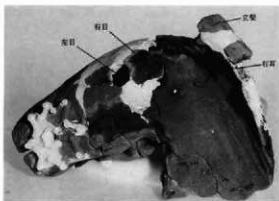


頭部～口先部分内面



頭部～頭部内面

目は丸く切り抜いた周辺を指撫でしている。頭頂部内面は、十分に調整されておらず人物頭部に見られるしぼり込みのように隆起した状態となっている。



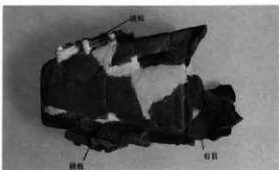
頭部左面および頭部右内面

顎内面および頭部内面は指撫でにより調整されている。



頭部～頭部右内面

耳は、内面の指撫で後丸く切り抜きつけられているが、切り抜いた周囲は、調整が不十分で突出している。



頭部下面

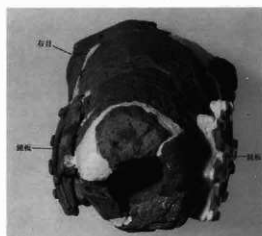


頭部右面

頭部は円筒状に製作し、刷毛目調整後顎(顎)および馬具(鏡板)をつける。

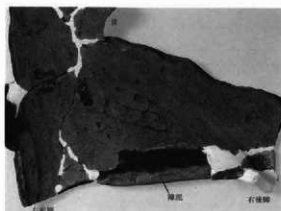


頭部右面



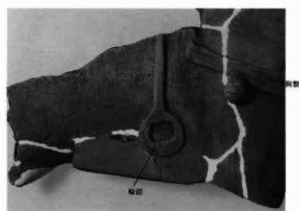
頭部口先部分

口先部分はしほり込む形で成形され、口は切り込みを入れ表現する。



胸部右内面

前脚～胸へ一気に縦に指撫でされ、後脚～胸へは斜めに指撫でされているが、反面胴の一部には粘土紐の接合痕が明確に残る。



胸部右外面

外面には、全体に刷毛目が残るが、胸骨・鞍部周辺ではなで消されている。



脚～臀部右内面

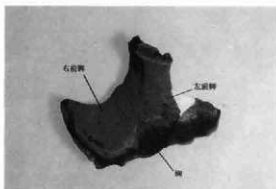
脚上部内面は縦に指撫でされ、臀部では胴部～脚部の斜めの指撫でにかわる。



脚～臀部右外面

外面は撫でにより調整されるが一部に刷毛目が残る。

Ⅲ ま と め



腹～脚接合部

前脚は左右それぞれ別々に腹・胸部へと接続されている。脚内面は縦に指撫できる。



腹～脚接合部

前脚左右の間には空間があり、指撫により調整され、刷毛目は残らない。



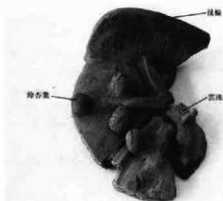
腹部内面(上面)

腹部は厚い粘土板で形成され、内面～脚部には指撫でが残る。



腹部外面(下面)

後脚近くでは、刷毛目が残るが腹～前脚部分では撫でにより消えている。



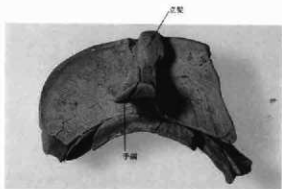
後輪～雲珠・背脊部分(後上方より)

後輪後面では、平行な刷毛目が残り、外周(覆輪)部は、指撫でしている。



後輪～背脊(内面)右側より

4. 馬形植輪の成形について



前輪前面

前輪前面は刷毛目を方向をかえ施した後外周（覆輪）部分を指撫する。



前輪後面

前面同様の調整を施すが刷毛目の方向は異なっている。

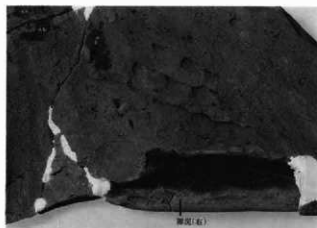


背部内面(前輪および立架接合部分)

背部粘土紐接合痕跡

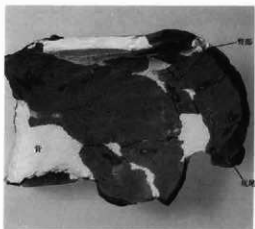


背一臀部内面(脚側より)



胴部内面

障泥は胴部に隅肉をともなって接合される。胴部内面には、粘土紐の接合痕が残る。



背一臀部内面(脚部より)

(2) 出 現

群馬における埴輪受容は芝根7号墳で、4世紀後半代^(註5)に遡る。そして、形象埴輪を伴った本格的な配置がみられるのは、朝子塚古墳である。全長123mの前方後円墳で円筒列が廻り、後円部墳頂に方形区画がある。家・盾・壺が後円部墳頂に配置されていた。

この太田市周辺では、馬形埴輪の出現は5世紀後半の大泉町高徳寺東古墳である。全長40m程の帆立貝式古墳で、円筒埴輪はB種横ハケが主体をなし、造り出し部に人物(男女)、馬形埴輪の配置が推定される^(註7)。

粕川村では白藤古墳群で5世紀第4四半期^(註8)に出現する。白藤F-2・V-4・P-6・D-3号墳各々径21~23mの円墳で、馬形埴輪を持つ。F-2号墳では鏡板をつけた頭部と人物が出土し、V-4号墳では出土した2個体のうち完形の一個体は円筒列中に配置されていた可能性が高い。他の一個体は尻鬚と尻尾の部分で、2個体とも尻尾が中空に造られていることが注目される。P-6号墳は人物とf字形鏡板をつけた飾り馬が出土し、D-3号墳では鞍から尻鬚・雲珠の刺離痕のある尻部までの破片が出土している。4基とも5世紀第4四半期で、D-3号墳を除いて周堀にFAが確認されている。

前橋では、荒子町の舞台遺跡1号古墳に出現の可能性がある。全長約40mの帆立貝式古墳である。円筒埴輪は横ハケを持つ個体があるが横ハケを欠く個体の方が多い。馬形埴輪は鞍の一部かと思われる破片が出土している。他の形象埴輪は家、蓋、盾、鶏、人物がある。これとは別に円筒埴輪の口縁部などに貼り付けたと思われる人物、猪、小鳥の像が出土している^(註9)。

高崎周辺では、群馬町保渡田古墳群に初現がみられる。5世紀後半の井出二子山古墳は中堤上に人物・馬形埴輪の配置が推定されている。馬については剝離した馬鈴などから存在を確認できるのみで詳細は不明である。また、古墳の北に隣接して突出遺構があり、家や盾・蓋などの器財、武人・巫女・力士・狩人などの人物、馬・猪・犬といった動物埴輪等合計56個体以上出土した。これらの形象埴輪は二子山古墳とほぼ同時期とみられる。馬形埴輪は4個体^(註10)が確認されている。次代の首長墓である八幡塚古墳は5世紀第4四半期の築造である。中堤2箇所^(註11)に方形区画を設け、人物、動物埴輪を配置している。残存状況の比較的良かったA区と呼ばれた区画では、馬形埴輪は8個体^(註12)確認されている。B区は尻尾や耳が出土し、馬形埴輪の配置が想定される。八幡塚古墳よりやや後出する薬師塚古墳でも馬形埴輪から剝離したf字形鏡板が出土し、その存在が知られる。これら三前方後円墳の周堀からFAが確認されている^(註13)。

また、高崎市八幡原の若宮八幡北古墳が馬形埴輪を持つ。造り出し付帆立貝式古墳で舟形石棺を主体部に持ち、5世紀末~6世紀初頭と思われるが詳細は不明である^(註14)。

以上のように、5世紀後半代に馬形埴輪の出現をみることができる。馬形埴輪の初現といわれる平塚1号墳・2号墳^(註15)、大山古墳^(註16)、替田御廟山古墳^(註17)ののち、時を置かず県内でも馬形埴輪の製作・樹立が行われたのである。千葉県畑沢宮址群^(註18)や山形県菅沢2号墳^(註19)、福岡県塚堂古墳^(註20)でもほぼ同時期の馬形埴輪が出土している。

また、馬形埴輪の出現と相前後して人物埴輪も姿を現わしている。井出二子山古墳も多様な人物を伴っており、高徳寺東古墳、舞台遺跡1号古墳も人物が存在する。白藤古墳群例でもV-4号墳以外は男子や女子が出土している。馬形埴輪と人物埴輪は同時期に出現したといえよう。

井出二子山古墳、舞台遺跡1号古墳、高徳寺東古墳、白藤F-2・V-4・P-6・D-3号墳、そして保渡田八幡塚古墳も含め、前後関係はどうであろうか。特に舞台遺跡1号古墳・高徳寺東古墳は未報告・報告予定中であり、一概には論じられないが御教示いただいた内容から円筒埴輪を見たい。まず、一次調整のみの保渡田八幡塚例^(註21)、白藤例は他資料より後出する。残る三古墳はいずれも二次調整横ハケを持っているが、

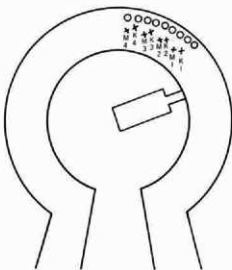


図161 雷電神社跡古墳後円部における配列模式図 (注30文献より)

井出二子山例は横ハクが客体的であり、舞台遺跡1号古墳も横ハクは一次調整のみの資料に渡襲されるようである。現段階では、B種横ハクが主体をなすという高徳寺東古墳が最も先行する可能性が大きく、人物・馬形埴輪の初現性が指摘される。また、墳形を考慮すれば、人物・馬形埴輪という新しい組成は、前方後円墳や帆立貝式古墳を造営する首長層に受容され、5世紀のうちに円墳にまで樹立されたといえる。保渡田古墳群では、井出二子山古墳の突出遺構の近くに3基の円墳が検出されている。いずれも削平され周堀のみであったが、周堀内にFAが確認された。二子山、八幡塚、薬師塚という前方後円墳に埴輪使用が顕著に認められるのに対し、これらの円墳ではわずかに一基から円筒埴輪片が少量出土したのみで、厳然とした格差が感じられる。白藤古墳群は首長墓と別系列で小型円墳からなる等質性が指摘されておられ、白藤で小型円墳を造営した階層に人物・馬形埴輪が浸透し易かったのであろう。おそらく、畿内と結びつき、あるいは強い影響下にあった地域に埴輪の中で新しい組成である人物・馬形埴輪が逸早く波及してきたと思われる。

また、井出二子山古墳突出遺構の馬形埴輪は脚は粘土板円筒化成形であり、頭部は複数工程成形で粘土板による頬骨表現をしていない(図164)。これらの技法が出現期からすでに存在し、5世紀後半にまで遡ることが知られる。

こうして、畿内での出現から時を置かず群馬でも樹立された馬形埴輪は6世紀前半に徐々に数を増し、6世紀後半にまるで何かのタガが外れたかのように爆発的に増加する。埴輪樹立自体が小型埴輪にまで普及していったことが原因であるが、その背景は何か今後の課題のひとつである。集成表には発掘調査による資料を中心に掲載した。発掘調査例で管見に触れなかった資料や各地の大学・博物館に収蔵されている資料を含めればさらに数ページを費すことになろう。

その中で出土例が少ないのは茨城以北の北毛地域、甘葉・富岡地域があげられるが古墳の調査例が少ないことにもよろう。北毛ではあまり埴輪が盛行しない。空沢古墳群では埴輪樹立古墳は数少なく円筒埴輪のみで最も少ない。また、有瀬1号墳や鏡石古墳、三峰神社高遠跡1号墳のように形象埴輪は墳頂に家を配置するのみという古墳があり、形象埴輪集成では数に入るが馬形埴輪は管見に触れない。

甘葉・富岡地域では富岡5号古墳にみるように埴輪受容が窺える。しかし、塚原古墳群、上田窪古墳群、桐河古墳群、横瀬古墳群、清水古墳群など群を構成する古墳の多くが7世紀代の築造であり、古墳のものに埴輪を持たないことが空白部分になる大きな原因と思われる。

- K1-男子半身像、全高86.5cm、上げ美豆貝で浅いつば付帽子を被り(鉢巻?)、右手を上げて左手は脇につける。帯は後で結ぶ。
 K2-男子半身像、全高63cm、両手は胸におく。耳環をし、帯は前で結ぶ。襦に紐をつける。
 K3-男子半身像、全高90cm、下げ美豆貝で鉢巻をし、首に丸玉、腰に大刀と鞘をつける。両手は脇にそえる。帯は右側で結ぶ。
 K4-男子半身像、全高67.5cm、上げ美豆貝で首に丸玉、腰に刀子をつける。両手は胸におく。帯は後で結ぶ。
 M1-高123cm、長125cm、十字文の鏡板、三盤、靴、笠を装着。胸盤に馬蹄を下げ、尻に馬蹄及び吉雲の刺繍板有り。居水の下縁を突出させて表現している。
 M2-高116cm、長122cm、環状鏡板、三盤、靴、笠をつける。胸盤、尻盤には円形装飾がある。
 M3-男装は不詳だが靴と笠は装着。下げ美豆貝で天冠を被り、首に丸玉、腰に鞘をつけた男子が乗る。
 M4-不詳。

(3) 配 列

他の形象埴輪とも考え合わせて埴形ごとに馬形埴輪の配列をみていきたい。

まず、前方後円墳をみよう。井出二子山古墳では、馬形埴輪は中堤の一区画に人物とともに、突出遺構では器財・人物・他の動物とともに樹立されていた(図162)。いずれも配置までは明らかではない。次代の保渡田八幡塚古墳では、やはり中堤上に2箇所方形区画を設けて人物・他の動物とともに配置されている。A区では、区画中で飾り馬3個体、野馬3個体が同方向を向いて縦一列に並んでいた。他に野馬2個体がある中堤上の区画内には家や器財類の報告はなく、朝子塚古墳以来同様に埴丘頂部に置かれていたと思われる。

6世紀に入ると、人物・動物埴輪も埴丘に移る。主体部に横穴式石室が採用されると、石室入口を意識して基壇平ら面に人物・動物埴輪が配置される。図161の雷電神社跡古墳(前方後円墳・全長約66m)は横穴式石室を有する6世紀後半～末葉の古墳である。埴丘は消滅したが、後円部の一部の配列が記録された。円前列の内側で横穴式石室の向かって右側に半身像の男子4個体、馬4個体が確認された。人物・馬ともに石室入口方向を向き、男子は馬の左斜め前方に位置し、男子と馬とで一組になっていた。組と組との間隔は1mほどであった。すでに採土が進んでおりこの4組の前後に列が壊れるのか不明であるが、採土時に多量の形象埴輪破片が出土したという。図161 M3の馬形埴輪は馬体は不詳であるが全国でも数少ない人を乗せている資料である。馬上の人物は髪を下げて美豆良に結び、天冠を被り、首に玉飾り、腰には鞆をつけている。いかにも貴人が首長を思わせる人物である。M3の鼻先に位置する男子は腰に鞆と大刀を、首には丸玉の首飾りをつけて正装している。他の馬とセット関係になる人物とは明らかに格差があり、その格差は騎馬及び馬上の人物所以であろう。雷電神社跡古墳の人物は馬とセット関係にある同一状況の配列であっても4個体各々様相を異にしている。前述事項を考慮すれば、4個体各々意味を持たせて配列していると思われる。

6世紀後半の納貫観音山古墳では馬形埴輪は石室入口部での「場面」から離れ、前方部平坦面両コーナーに一個体ずつ位置している。埴頂には家、盾、鶏が配置されている(図162)。6世紀末葉～7世紀初頭の造宮である二ツ山1号墳では石室入口に向かって右側に馬形埴輪が12個体以上配列されていた(図162)。12個体以上並ぶ間には人物埴輪破片が散在しており、その存在が窺える。石室左側でも人物が配され、埴頂には家が配置される。前方部前面に威儀具・武具が位置し、前面を守護するためと思われる。埴頂からの転落の可能性も考えられるが、配列の原則にやや乱れが生じているのかも知れない。

帆立貝式古墳ではまず5世紀中葉の赤堀茶臼山古墳を見たい(図163)。後藤守一氏の復元案ではあるが、後円部埴頂に家や腰掛、高杯、短甲などの器財類が検出されている。くびれ部の鶏は後円部から転落してきたものと推察される。まさに、人物・馬形埴輪出現前夜の姿である。そして高徳寺東古墳や舞台遺跡1号古墳の段階で人物埴輪とともに馬形埴輪が出現する。高徳寺東古墳で造り出しに配置が推定されており、出現段階から造り出しが樹立の場であったことが看取される。塚廻り4号墳(図163)では、後円部に家・盾・大刀が樹立されている。家は埴頂から転落したものであるが、大刀や盾は護持する役目を負って後円部に配置されている。馬は飾り馬で造り出しに2個体配され造り出し前面を向く。各々右斜め前方に左手をあげた男子が位置し、セット関係にある(図163)。人物埴輪とセット関係の配列はすでに6世紀第2四半期まで遡り得ることが分かる。塚廻り3号墳では大刀や盾が守護のために造り出し前面に並んでいる。上芝古墳では飾り馬が造り出し中央に2個体配され、後円部を向いていた。馬の左斜め後方には釜形鞆を被り刀を帯びた半身像が位置する。6世紀後半の塚廻り1号墳では造り出し前面に大刀や盾持ちが並んでさらに守護性を強めている。飾り馬は前面に添うように2個体並んでいた。造り出し前面の状態が類似するのは同時期の内堀

III ま と め

M-1号墳⁽¹⁸⁴¹⁾で、横穴式石室を持つ。馬形埴輪はくびれ部に、人物は造り出しに、前面には盾や盾持ちが並んでいた。後円部には家、盾、大刀、箭、鞆などが配置されている。本郷稲荷塚古墳⁽¹⁸⁴²⁾が石室入口を意識した配列なのに比べ、M-1号墳は造り出しに配置の場を求める伝統性を持っている。

円墳では白藤古墳群が初現である。白藤V-4号墳は馬形埴輪が円筒列に取り込まれて配置されていた可能性が高い。P-6号墳などでは男子像も出土しているが有機的にセットになるか明確ではない。6世紀初頭の「綜覧」記載瀬五目牛3号墳⁽¹⁸⁴³⁾では形象埴輪は馬形埴輪のみで白藤V-4号墳例と共通する。円墳では出現後早い段階では馬のみ配列するケースが存在したのかも知れない。6世紀中葉の富岡5号古墳では石室中心の配列となり、女3個体男3個体並んだ列の最後に馬が位置している(図163)。石室入口を挟んで左側にも馬形埴輪の存在が推定される。馬の前の人物は上げ美豆良に帽子を被っており、形態の詳細は不明だが馬とセットになる可能性も考えられる。7世紀初頭のオクマン山古墳⁽¹⁸⁴⁴⁾では、横穴式石室入口向かって右に武人2個体、鷹匠1個体、農夫2個体、馬形埴輪7個体が順に並んでいた(図163)。石室入口を意識した配列は他に石山南古墳、田向2号墳、⁽¹⁸⁴⁵⁾「綜覧」記載瀬五目牛13号墳、⁽¹⁸⁴⁶⁾上諏訪古墳、⁽¹⁸⁴⁷⁾壇塚古墳などで横穴式石室を主体部に持ち、円筒列の内側に形象埴輪を配列する場合の多くがこの例にあたる。

以上のように、後円部の主体部を意識して配置していた家や器財類の他に、人物や馬をはじめとする動物埴輪という新しい組成が出現し、墳丘外へ配置された。やがて墳丘へ移り、横穴式石室が採用されると石室入口を意識して基壇平垣面に樹立されるようになる。帆立貝式古墳では造り出しが人物・馬形埴輪の配置の場であり、横穴式石室採用後も造り出しやくびれ部などに配置される。

こうした新しい組成の出現後も、家や器財類は墳頂へ配置するという伝統的とも言うべき意識が窺え、特に前方後円墳にこの傾向が強い。円墳でも壇塚古墳に顕著にみられる。器財類が守護のために基壇面などに降りてくる例もみられるが、この伝統的意識は大きな流れとして埴輪消滅まで続いている。

また、馬形埴輪と人物がセット関係で配置される例がみられるが、綿貫観音山例のようにセットではない例もみられる。綿貫観音山古墳では石室入口で操り上げられる「場」から離れて前方部コーナーに位置しているが、特に馬形埴輪自体が持つ意味を担っての配置であろう。

(4) 形 態

かつて和田千吉氏は馬形埴輪について「馬具一式鞍具三繫に至るまで現すものと、この幾分かを現せるものがあり、馬體のみにて何も現していないものがある⁽¹⁸⁵⁰⁾」と述べた。井上裕一はこれを受けて、「本来の乗馬の装具に不必要な「飾り」である杏葉・馬鐸・馬鈴などを装着したもの」を飾り馬とし、「鞍と乗馬に必要な馬装だけを備えた馬」を鞍馬、「鞍を置かず面繫と手綱をつけた簡単な頭絡のもの」を裸馬とした。⁽¹⁸⁵¹⁾

井出二子山古墳資料はあまり残存状況の良いものはないが、部分破片を考慮してみると飾り馬で良いように思われる。高徳寺東古墳は詳細不明であるが、飾り馬の初現が同古墳まで遡る可能性もあろう。保渡田八幡塚⁽¹⁸⁵²⁾では飾り馬の他に「野馬」との表現があり、裸馬とされる。白藤P-6号墳では飾り馬がみられ、V-4号墳では鞍・鍔・面繫・引手・尻繫のみが表現された資料があり、鞍馬としたい。以上が各分類の初現であるが、5世紀のうちにすべて出現していることが看取される。

保渡田八幡塚例以外の裸馬として管見に触れたものでは、群馬県立歴史博物館所蔵の出土地不明資料⁽¹⁸⁵³⁾がある。立髪前端を円柱状に整え、面繫をして左からの片手綱が背中へ伸びている。また、写真で見ると、群馬郡箕輪町八幡宮前出土の鼻破片は二重の鼻革をし、頬革と手綱の一部が残っているのがわかる。裸馬か鞍馬の可能性があろう。

また、裸馬で人を乗せている資料もある。太田市高林出土例は鼻革のみの表現の面繫に両手綱があり、鞍はなく袋状のものを背負った子供(?)が乗っている。他に人の乗る例としては前述した雷電神社跡古墳資料がある。馬体の詳細は不明だが鞍と杓蓋の装着が判別しており、飾り馬か鞍馬で馬上の人物からすれば飾り馬の可能性があろう。また、四天王寺宝物館所蔵資料に伝群馬県出土として飾り馬に乗る例がある。馬上の人物は腰に大刀をつけ耳飾りをして脚絆の袴をはく正装男子である。人が乗る例は全国的に見ても少なく、埼玉県生田塚6号墳出土資料、埼玉奥の山古墳出土資料、伝茨城県出土資料(天理参考館所蔵)があげられる。他に福岡県立山山13号墳出土の鞍に乗った貴人の例がある。生田塚例は裸馬で美豆良に首飾りをした人物が乗る。伝茨城県例も馬体は裸馬である。これら人が乗る馬の配置が判明しているのは雷電神社跡古墳例のみであり、4組の人物・馬形埴輪の列の前後が不明なことが惜しまれる。雷電神社跡古墳例は、首長が馬に乗る姿を表現したものといえようか。

裸馬は単体で配置されるのではなく、飾り馬などと一緒である。両手綱と片手綱があり、人が乗る裸馬は両手綱であるところからみて、両手綱の裸馬は乗用にもなったと思われる。片手綱のものは荷物を運ぶ駄馬・挽馬、あるいは犠牲獣、馬飼の駒牽などと考えられている。別の視点から、農耕に使用した可能性も指摘されていて興味深い。また、駄馬にしても非常時には騎馬にした例もある。どちらにしろこれらの考え方は古代において最も重要な利用法であったと思われる軍用馬以外にも使われたという面で一致をみている。裸馬はあくまで「ケ」の馬であり、何らかの儀式的場を表現する埴輪には形象されにくかったのではないだろうか。なおかつ埴輪に形象され樹立される背景に裸馬の重要な意味があったと思われる。

最後に鞍馬に触れたい。県内の例では雷電神社跡古墳、伊勢崎市蛇塚古墳に存在が指摘され、白藤V-4号墳も鞍馬にあたる。しかし人が乗る裸馬や白藤V-4号墳例にみるように実際の乗馬の際にはごく簡単な馬装だったのであり、その意味で鞍馬の概念の再検討の必要性を感じる。また、馬鐸はないが胸繫自身に円形状の金具(香葉?)に紐飾り下げ、尻繫も同様の例や馬鐸・香葉類はないが胸繫尻繫に円形装飾がつく例、同様に馬鈴がつく例など、馬体装飾には様々な例があり、形態分類に苦慮するケースがあることも概念再検討の一因である。

(5) 結

畿内での出現から時を移さず群馬においても製作・樹立された馬形埴輪は、畿内と何らかの関係にあったと思われる首長層に逸早く受容される。それは古墳において人物・動物からなる新しい組成の埴輪で「場」の表現が必要となった表われであった。その後、円墳にも樹立されるが、その場合も馬形埴輪の持つ意味があつてのことであろう。人物とセットで配置されて意味を持つ場合もあろうが、馬のみの配置もあり、のちに動物埴輪の中で普遍的に樹立されるのが馬形埴輪であることを考えれば、馬形埴輪自体が何らかの意味を持つと考えざるを得ない。その一つは「権威の象徴」であつたらう。

平成二年度の子持村無沢バイパス用地の一連の調査で、榛名山の軽石に埋没した無数の馬の蹄跡などが検出され、牧の可能性が指摘されている。武器類や蓋、轡などの本体の性格が形象埴輪のそれらに反映されているように、こうした遺跡から本来の馬がどのように扱われ、どんな意識で見られていたのかを抽出できれば、馬形埴輪の性格づけもより明確にできよう。そして、なぜ馬形埴輪を古墳に樹立するのかという根本的な問題に今までと全く別の角度から迫ることができるとと思われる。こうした、走り出したばかりの馬形埴輪研究に拙稿が少しでも寄与できれば幸いである。

本稿は群馬県埋蔵文化財調査事業団主催の第10回公開普及デー「古代人と馬」で行われた公開講座中の「埴

III ま と め

輪の馬」で発表した内容を加筆・削除したものである。本稿中では解決されない問題が多く、これからも検討を続けていきたい。また、資料の多くが写真のみで実物にあたはず事実認識が生じれば責は筆者にある。なお、動物埴輪の中で最も早く出現する鶏は、家や器財類とともに埴壇に配置され、他の動物埴輪とは歩みを異にすることをつけ加えておきたい。

本稿をなすにあたり、石塚久則、石岡伸一、加部二生、西田健彦、右島和夫各氏から有役な御指導、御助言をいただいた。記して感謝の意を表します。

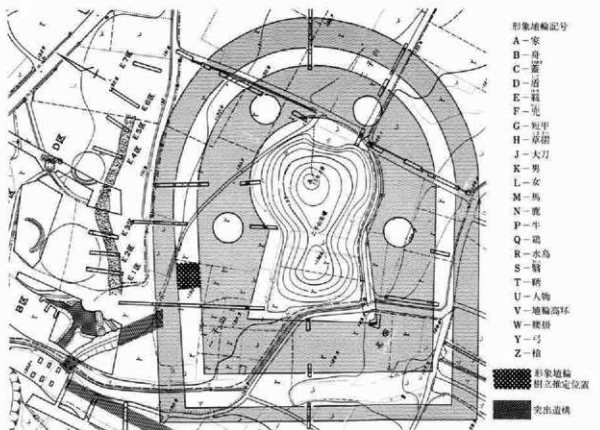
参考文献

- ・橋本博文 1980 「埴輪祭式論」 『家廻り古墳群』群馬県教育委員会
- ・右島和夫 1989 「東国における埴輪樹立の展開—上野地域の事例を中心として—」 『古文化叢書』第20集(下)九州古文化研究会

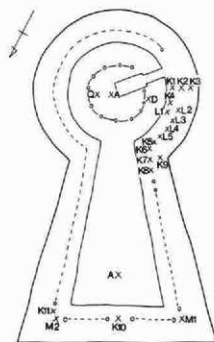
註

- (1) 近藤義郎・春成秀爾 1967 「埴輪の起源」 『考古学研究』13—3
- (2) CAD計画研究所 1987 「討論 群馬・埼玉の埴輪」
- (3) a. 松村一郎 1969 「埴輪製作過程の一考察」 『佐波郡東村の古墳』東村々誌編纂委員会
- b. 井上裕一 1985 「馬形埴輪の研究—製作技法を中心として—」 『古代探源』II
- c. 榎村繁 1986 「群馬県における馬形埴輪の変遷—上芝古墳を中心として—」 『MUSEUM』№425
- d. 宮崎由利江 1987 「『禊馬』の埴輪に関して」 『埼玉の考古学』
- e. 宮崎由利江・1989 「埼玉県における馬形埴輪の消長」 『考古学資料叢刊』第5輯 国学院大学考古学資料館
- f. 宮崎由利江 1990 「馬形埴輪に伴出する人物埴輪について」 『古代』第90号 早稲田大学考古学
- (4) 註③c
- (5) 橋本博文 1987 「埴輪の出現」 『季刊考古学』第20号
- (6) 田島桂男 1981 「朝子塚古墳」 『群馬県史』資料編3
- (7) 大泉町教育委員会の石岡伸一氏に未報告資料の御教示を受けることができた。
- (8) 相川村教育委員会 1989 『白藤古墳群』
- (9) 群馬県教育委員会 1990 『舞台遺跡1号古墳現地説明会資料』西田健彦氏から未報告資料について御教示を得ることができた。
- (10) a. 池田守一 1953 「上野国登原塚」 『考古学雑誌』第39巻第1号
- b. 群馬県教育委員会 1985 「二子山古墳」
- (11) 群馬県教育委員会 1990 『保原田遺跡』
- (12) 福島武雄・岩澤正作・相川龍雄 1992 「八幡塚古墳」 『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告』第2輯
- (13) 註⑩
- (14) a. 高崎市教育委員会 1974 「八幡原遺跡」
- b. 田島桂男 1981 「若宮八幡北古墳」 『群馬県史』資料編3
- (15) 奈良国立文化財研究所 1975 『平城京発掘調査報告VI』
- (16) 森浩一 1974 「考古学と馬」 『日本古代文化の探究・馬』
- (17) 安藤尚基 1974 「木更津市畑沢埴輪塚址の調査速報」 『古代』第57号
- (18) 福島県立博物館 1988 『東国のはにわ』
- (19) 福岡県教育委員会 1983 『塚堂遺跡1』
- (20) a. 五十嵐至 1981 「八幡塚古墳範圍確認調査」 『昭和55年度埋蔵文化財調査略報』群馬県教育委員会
- b. 南宮芳昭・若狭敬 1985 「保原田三古墳の埴輪」 『第6回三県シンポジウム 埴輪の変遷』北武蔵古代文化研究会
- (21) 註⑩b、註⑩b
- (22) もとより未報告段階の結果で、なおかつ本家ならば地域の様相や他の遺物のからの検討も行わなければならない。報告書の刊行を待って再検討を加えたい。
- (23) 註⑩
- (24) 註⑩
- (25) 註③c
- (26) 大塚昌彦 1985 「浜川市域における埴輪について」 『第6回三県シンポジウム 埴輪の変遷』北武蔵古代文化研究会
- (27) 松本浩一 1981 「有瀬1号墳」 『群馬県史』資料編3
- (28) 群馬県教育委員会 1974 『鏡石古墳発掘調査報告』
- (29) 月夜野町教育委員会 1986 『大友館址遺跡・三峰神社裏遺跡・善上遺跡』
- (30) 右島和夫・南宮芳昭 1985 「群馬県における形象埴輪の出土位置」 『第17回埋蔵文化財研究会 形象埴輪の出土状況』埋蔵文化財研究会
- (31) 富岡市教育委員会 1972 『富岡5号古墳』
- (32) 富岡市史編さん委員会 1987 『富岡市史』原始・古代・中世編、自然編
- (33) 東村村誌編纂委員会 1969 『佐波郡東村の古墳』
- (34) 梅沢重昭 1981 「観音山古墳」 『群馬県史』資料編3
- (35) 清水潤三 1948 『群馬県新田郡二ツ山古墳』 『日本考古学年報』1
- (36) 帝室博物館 1935 『上野国佐波郡赤堀村今井塚白山古墳』
- (37) 群馬県教育委員会 1980 「家廻り古墳群」
- (38) 註⑩ 本稿では軌立貝式古墳と造り付円墳との区別はせず、「前方部」にあたる語句は「造り出し」の語を用いた。
- (39) 福島武雄・岩澤正作・相川龍雄 1992 「上芝古墳」 『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告』第2輯

5. 群馬県における馬形埴輪の様相

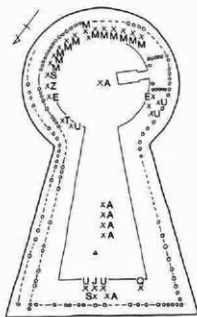


井出二子山古墳
(文献目録No.29より)



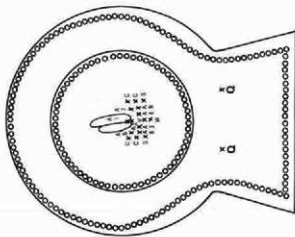
稲貫観音山古墳

- K 1 - 騎負
- K 2 - 騎負
- K 3 - 騎負
- K 4 - 男観 (あるいは巫女)
- K 5 - 真人
- K 6 - 真人
- K 7 - 農夫 (武人?)
- K 8 - 盾持
- K 9 - 武人 (農夫?)
- K 10 - 農夫 (馬飼?)
- K 11 - 鷹飼
- L 1 - 巫女 (あるいは男観)
- L 2 - 三人童女
- L 3 - 御食持
- L 4 - 御食持
- L 5 - 御食持
- M 1 - 飾り馬?
- M 2 - 飾り馬?



二子山1号墳

図162 前方後円墳における埴輪配列図 (註30文献より)



小塚茶臼山古墳 (複製字一式の複製)

L1 - 一帯女

高字に物を配む女子半身像

L2 - 一帯女, 石室入口を向く

物を掛け持つ女子半身像

L3 - 一帯女, 石室入口を向く

物を掛け持つつたすきめけの女子半身像

K1 - 一帯女, 石室入口を向く

帯をしめ, 顔に大刀を佩く男子半身像

K2 - 一帯女, 石室入口を向く

帽子を佩り, 顔に大刀を佩く男子半身像

K3 - 一帯女, 顔に外圍を向く

上げ美豆貝で首に丸玉をし, 後頸に飾を垂す男子半身像

M - 馬, 石室入口を向く

所見地輪は石室入口左側にも配置されていた

墳頂部に部材類の配置が推定される。

□ = 土器器台跡

△ = 土器器台跡

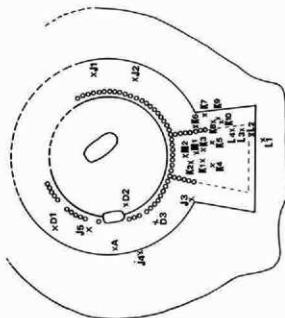
△ = 土器器台跡

△ = 土器器台跡

△ = 土器器台跡

△ = 土器器台跡

△ = 土器器台跡



塚原94号墳

L1 - 一帯女

高字に物を配む女子半身像

L2 - 一帯女, 石室入口を向く

物を掛け持つ女子半身像

L3 - 一帯女, 石室入口を向く

物を掛け持つつたすきめけの女子半身像

K1 - 一帯女, 石室入口を向く

帯をしめ, 顔に大刀を佩く男子半身像

K2 - 一帯女, 石室入口を向く

帽子を佩り, 顔に大刀を佩く男子半身像

K3 - 一帯女, 顔に外圍を向く

上げ美豆貝で首に丸玉をし, 後頸に飾を垂す男子半身像

M - 馬, 石室入口を向く

所見地輪は石室入口左側にも配置されていた

墳頂部に部材類の配置が推定される。

□ = 土器器台跡

△ = 土器器台跡

△ = 土器器台跡

△ = 土器器台跡

△ = 土器器台跡

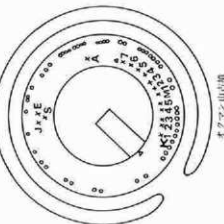
△ = 土器器台跡

△ = 土器器台跡

- K1 - 左手を挙げる男子半身像
- K2 - 左手を挙げる男子半身像
- K3 - 左手を挙げた男子
- K4 - 大刀を持つ男子
- K5 - 顔を持つ男子
- K6 - 顔を持つ男子半身像
- K7 - 美豆貝の男子
- K8 - 美豆貝の男子
- K9 - 顔の男子半身像
- K10 - 顔の男子半身像

- L1 - 大刀を持つ女子半身像
- L2 - 左手を挙げる女子半身像
- L3 - 杯を持つ女子半身像
- L4 - 杯を持つ女子半身像

- M1 - 顔の馬
- M2 - 顔の馬



オマツ山古墳

- K1 - 一帯女
- K2 - 一帯女
- K3 - 一帯女

図像で顔に輝ける帽子を佩く。下げ美豆貝で首を飾り、顔に大刀を佩く。顔に外圍を向く。上げ美豆貝で首に丸玉をし, 後頸に飾を垂す男子半身像

- K4 - 一帯女
- K5 - 一帯女

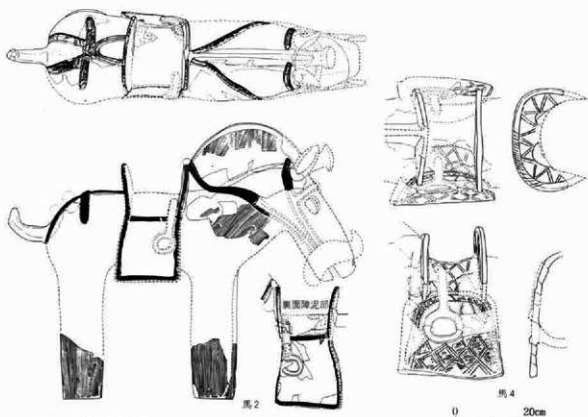
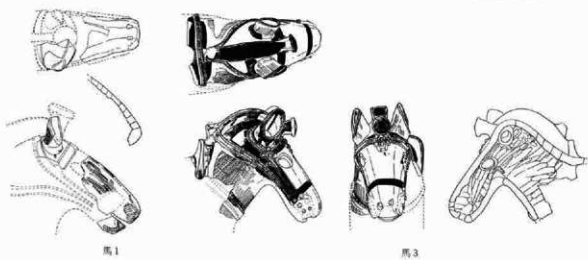
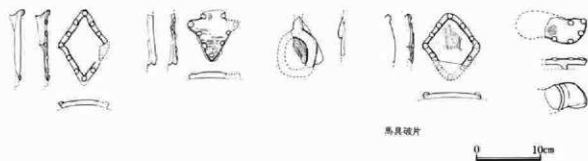
M1 - M7 - 馬

顔は不明だがこのうち1頭は馬を装着した顔の馬と判別される。

△ = 土器器台跡

図163 帆立貝式古墳, 円墳における通輪配列図 (注30文献より)

5. 群馬県における馬形埴輪の様相



井出二子山古墳出土遺構6号溝

图164 馬形埴輪実測図(1) (文献目録No.29より)

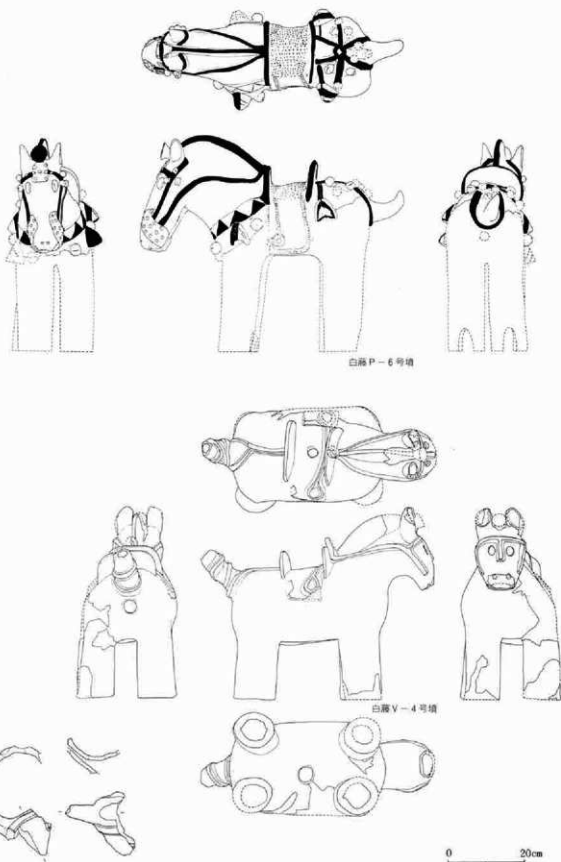


图165 馬形埴輪実測図(2) (文献目録No14より)

5. 群馬県における馬形埴輪の様相

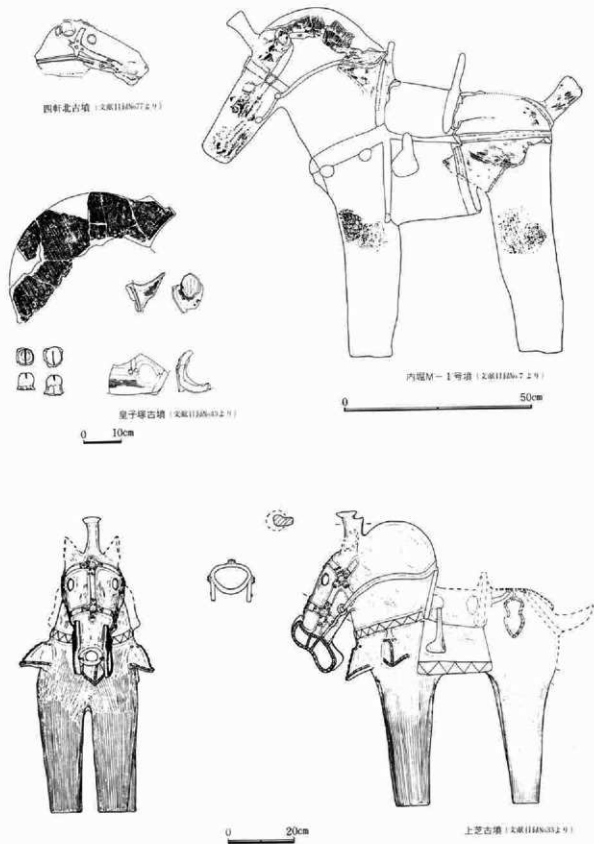


図166 馬形埴輪実測図(3)

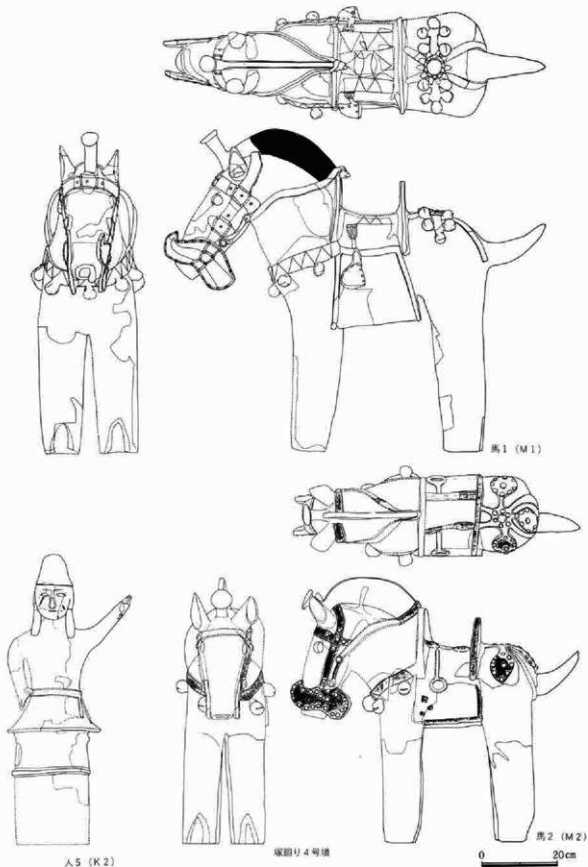


図167 馬形埴輪実測図(4) (文献目録No.72上9)

5. 群馬県における馬形埴輪の様相

群馬県における馬形埴輪調査表

規模単位=m 『原覧』は「上毛古墳原覧」(群馬県・1938年)を示す

No	古墳名	所在地	墳形	規模	馬形埴輪	伴出する埴輪	年代	文献
1	鯉登塚古墳	前橋市下大塚町	円墳	18	馬	人物、円筒	6 C 中葉	1
2	金冠塚古墳	前橋市山王町	前方後円	52	輪體部分破片	家、盾、蓑、大刀、男、女、円筒	6 C 末～7 C 初頭	2
3	東原7号墳	前橋市富田町	円墳	21	胴部	人物、円筒		3
4	オボ塚古墳	前橋市勝沢町	前方後円	35	馬	大刀、人物、円筒		4
5	総社稲荷山古墳	前橋市総社町	円墳	33	尻髷付近、輪體?	人物、円筒	6 C 第3	5
6	今井神社2号墳	前橋市今井町	円墳	40	鼻先、馬蹄	人物、家、蓑、器台形、円筒	6 C 第4	6
7	内堀M-1号墳	前橋市西大塚町	帆立貝式	35.2	飾り馬	男子、女子、盾持ち、盾、靴、髷、帽子、矛・大刀、円筒	6 C 後葉	7
8	不二山古墳	前橋市文京町	前方後円	50	飾り馬の頭部	家、円筒	6 C 後葉	8
9	舞台遺跡1号古墳	前橋市瓦子町	帆立貝式	40	鞍(前輪か後輪)?	人物、盾、盾、家、蓋、円筒	5 C 後葉	9
10	鏡手塚古墳	勢多郡粕川村月田	前方後円	28	馬	家、人物、髷、不明	6 C 中葉	10
11	壙塚古墳	勢多郡粕川村月田	円墳	25	馬1	家3、盾3、靴3、髷、大刀4、人物1、馬1、不明5、矛	11、12	
12	西原F-1号墳	勢多郡粕川村深津	帆立貝式	30	馬蹄、鈴	人物2以上、靴1、髷2、靴2、大刀4、盾3、家1、円筒	6 C 中葉	13
13	白藤F-2号墳	勢多郡粕川村勝	円墳	22	飾り馬の頭部	人物、円筒	5 C 第4	14
14	白藤D-3号墳	勢多郡粕川村勝	円墳	約23	鞍・尻髷・古葉をつけた胴部	円筒	5 C 第4	14
15	白藤F-6号墳	勢多郡粕川村勝	円墳	22.7	飾り馬	人物、円筒	5 C 第4	14
16	白藤V-4号墳	勢多郡粕川村勝	円墳	21.6	鞍馬1、尻髷・古葉にかけての破片	円筒	5 C 第4	14
17	九十九山古墳	富士見村原之郷	前方後円	60	馬	不明、円筒		15
18	高塚古墳	北群馬郡藤東村新井	前方後円	60	馬体から剝離した馬具	家、盾、靴、大刀、男1、女1、靴、弓、器台にのった蓑、円筒	6 C 後葉	16
19	観音山古墳	高崎市橋本町	前方後円	97	飾り馬	家2、盾1、男11、女7、馬1、円筒	6 C 後葉	17、18、19
20	若宮八幡北古墳	高崎市八幡原町	造り出し付帆立貝式古墳	46.3	鞍部片、圓髷・引手のある首～胴部破片	家、盾、蓑、人物、不明、円筒	5 C 末～6 C 初頭	20、21

Ⅲ ま と め

No	古墳名	所在地	墳形	規模	馬形埴輪	伴出する埴輪	年代	文献
21	石原稲荷山古墳	高崎市石原町	円墳	30	駒、甕蓋	盾、鞍、人物、円筒	6 C後半 ～未葉	22
22	オトウカ山古墳	高崎市小八木町	円墳	45	鈴	人物、馬、円筒		23
23	葦玉塚古墳	高崎市下佐野町	円墳	44	馬	鞍、馬、円筒		24
24	小星山古墳	高崎市筑前町	円墳	25	馬	家、盾2以上、人物、不明、円筒	7 C	25
25	下佐野2号墳	高崎市下佐野町	円墳	16.8	鈴、口の部分片	女子、盾、鞍、円筒	6 C後葉	26
26	井出二子山古墳 突出遺構	群馬郡群馬町井出	前方後円	108	馬鈴など 飾り馬4（頭部1、 胴部～鞍部1、鞍部 1、脚・首・鞍・尻 部1）	男、女、猪（人物につく） 蓋、円筒 首長級3、女3、洲等2、 力士2、甕を捧げる男子 2、狩人1、武人2、盾 持武人2、盾持14、他6、 猪1、犬4、盾4、蓋3、 甕2、家1、円筒	5 C後葉	27、28 29
27	保渡田八幡塚古墳	群馬郡群馬町保渡田	前方後円	102	飾り馬3、野馬5、 不明1	家1、男10、女2、鳥2、 水鳥6、不明、器台にの る甕、円筒	5 C未葉	30、31
28	保渡田薬師塚古墳	群馬郡群馬町保渡田	前方後円	105	彫刻したI字形鏡板	蓋、円筒	5 C未葉	29
29	上芝古墳	群馬郡箕原町上芝	帆立貝式	18	飾り馬2	男5、女1（他に人物4） 円筒		32、33
30	本郷稲荷塚古墳	群馬郡榎名町本郷	帆立貝式	34.5	馬？	人物、器、器財類、円筒	6 C前葉 ～中葉	34、35
31	小林A号墳	藤岡市小林	円墳	15.5	脚	大刀、人物、不明、円筒	7 C初葉	36
32	三本木A号墳	藤岡市三本木	円墳	11	馬2以上破片	不明、円筒	7 C中葉	37、38
33	本郷埴輪窯跡	藤岡市本郷			甕蓋・引手の残る頭 部、甕蓋、輪蓋、馬 鈴、耳、辻金具部、 尻繫部片	鞍、矛、盾、大刀、家、 円筒	6 C中葉 ～後葉	39、40
34	堀ノ内 CK-1号墳	藤岡市堀ノ内	帆立貝式	33.7	輪蓋部？	人物、円筒	6 C前葉 ～中葉	41
35	堀ノ内 FK-1号墳	藤岡市堀ノ内	帆立貝式	31.2	辻金具部片、立髪、 その他	人物、不明、円筒	6 C中葉	41
36	堀ノ内 FK-2号墳	藤岡市堀ノ内	帆立貝式	30.8	面鏡、手綱を残す首 部片	人物、円筒	6 C中葉	41
37	皇子塚（皇塚）古 墳	藤岡市三ツ木	円墳	31	飾り馬2以上、立髪、 耳、素羅鏡板部分片	人物（男子）、甕、鞍、大 刀、鬘、駒、円筒	6 C後葉	42、43
38	上栗須寺前6号墳	藤岡市上栗須	円墳	8	飾り馬	円筒	6 C前葉	44
39	高塚古墳	藤岡市神田	円墳	15	馬	鞍、円筒	6 C後葉	45

5. 群馬県における馬形埴輪の様相

No	古墳名	所在地	墳形	規模	馬形埴輪	伴出する埴輪	年代	文献
40	神田・三本木3号落ち込み(周堤?)	藤岡市神田			馬鈴?	糜状鍍板付善部分片・円筒	6C後葉	46
41	富岡5号古墳	富岡市七日市	円墳	約30	馬2以上(前脚2、鼻面部分。辻金具、引手指輪部、面梨、頭～首の立髪部、輪籠部分)	盾2、鞆2、大刀2以上 男3、女3、駒2以上、円筒	6C後葉	47
42	御三社古墳	富岡市七日市	前方後円		脚3本	円筒	6C中葉	48
43	梶原3号古墳	富岡市高瀬	円墳	約11	馬	人物、円筒	6C後葉	48
44	下塚1号墳	多野郡吉井町多胡	円墳	7程	脚2本、立髪、素直の鍍板をした頭部、首線のある鞍、馬鈴尻尾	人物、家、円筒	6C後葉	49
45	下塚2号墳	多野郡吉井町多胡	円墳	7程	鞍～尻籠(舌葉有)、陣泥(輪籠つき)、耳、馬鈴	人物、盾、靴、鞍、大刀、円筒	6C後葉	49
46	口明塚2号墳	甘楽郡甘楽町大引	円墳	15程	鞍、馬鈴	人物、円筒	6C後葉	49
47	築瀬二子塚古墳	安中市築瀬	前方後円	78	剥離した馬鈴	不明、円筒	6C初頭	50, 51
48	蛇塚古墳	伊勢崎市日乃出町	前方後円	55	馬4(作りが大型で飾り等個体間に若干の変化)	盾、靴、鞆、大刀、男2以上、円筒	6C末葉	52, 53
49	恵下遺跡2号墳	伊勢崎市上植木町	円墳	21	馬	女1、円筒		54
50	上諏訪古墳	伊勢崎市上諏訪町	円墳	約20	馬	人物(複数)、円筒	6C後葉	55, 56
51	横塚所在古墳	伊勢崎市豊城町			馬2	人物18(男6、女1、不明11)、犬1、不明3、雉1、家2、円筒		55, 57
52	「船寛」記載洞五日午3号墳	佐波郡赤堀町五日午	円墳	17.5	胴部、脚上部破片	円筒	6C初頭	58
53	「船寛」記載洞五日午4号墳	佐波郡赤堀町五日午	円墳	27.3	飾り馬の頭部、胴部破片	人物、盾、円筒	6C後葉～末葉	58
54	「船寛」記載洞五日午8号墳	佐波郡赤堀町五日午	円墳	15.4	飾り馬の頭部、胴部破片	男2以上、女、円筒	6C前葉	58
55	「船寛」記載洞五日午11号墳	佐波郡赤堀町五日午	円墳?		飾り馬の胴部、尻部破片	円筒	6C前葉	59
56	赤堀村27号墳	佐波郡赤堀町五日午	帆立貝式	26?	飾り馬の頭部、胴部、脚部片	男2以上、女1、円筒	6C前葉	59
57	「船寛」記載洞五日午13号墳	佐波郡赤堀町五日午	円墳	28.2	馬2(後脚部～胴部破片、前脚部～胴部破片)	男2、女2、人物2、不明1、円筒	6C後葉	59

脱稿後、前橋市天神遺跡(群馬県教育委員会・1990)1号古墳(円墳・33m)で人物・鞍とともに馬の脚部の出土があり、藤岡市教育委員会の調査で七興山古墳(前方後円墳・146m)から馬鈴の出土があることを知った。ここに記すに留め、詳細は別稿に譲りたい。

Ⅲ ま と め

No	古墳名	所在地	墳形	規模	馬形埴輪	伴出する埴輪	年代	文献
58	「総覧」記載編 五日午22号墳	佐波郡赤堀町五日午	円墳	18	小型飾り馬破片少量	靴、男2、円筒	6 C 中葉	59
59	洞山古墳	佐波郡赤堀町五日午	前方後円	22	馬	人物、大刀、円筒	6 C 前期 ～中葉	61, 81
60	赤堀村285号墳	佐波郡赤堀町西野	前方後円	23.5	飾り馬の蹄・胴部片	靴、人物、円筒	6 C 前期	60
61	赤堀村286号墳	佐波郡赤堀町西野	円墳	20	蹄泥と輪蓋部分破片	家、円筒	6 C 前期 ～中葉	60
62	赤堀村288号墳	佐波郡赤堀町西野	帆立貝式	28	靴、鞆、調などの破片	家、靴、男、女、円筒	6 C 後葉 ～末葉	60
63	葦岸山古墳	佐波郡赤堀町西野	円墳	30	馬	人物、円筒		61
64	「総覧」記載編 葦岸山4号墳	佐波郡赤堀町葦	円墳	13	飾り馬の首、胸、鞍	女、円筒	6 C 後葉 ～末葉	60
65	「総覧」記載編 葦岸山9号墳	佐波郡赤堀町葦	円墳	15	蹄部片、胴部片	家、人物、円筒	6 C 中葉 ～後葉	60
66	赤堀村275号墳	佐波郡赤堀町葦	円墳	27	鞍部片、蹄泥片	家、人物、円筒	7 C 前期	62
67	田向2号墳	佐波郡赤堀町今井	円墳	24.8	飾り馬1	男1、円筒	7 C 前期	63
68	轟山A号墳	佐波郡赤堀町今井	前方後円	29.4	馬?	円筒		61
69	石山南古墳	佐波郡赤堀町下敷	円墳	16	馬3 (脚部、他)	女1、円筒		64
70	「総覧」記載編 五日午29号墳	佐波郡赤堀町八幡	円墳	16.9	飾り馬1	男3、女1、人物1、不明、円筒	6 C 後葉	65
71	八幡林30号墳	佐波郡赤堀町八幡	円墳	25	脚上部、蹄泥部	人物、円筒	7 C 初期	65
72	雷電神社跡古墳	佐波郡東村小保方	前方後円	66	飾り馬1、鞍馬?、騎馬1、不明1	家、男4、円筒	6 C 後葉 ～末葉	66
73	鶴巻古墳	佐波郡東村小保方	円墳	34	首部片	人物、不明、円筒		66
74	東村16号墳	佐波郡東村小保方	円墳	22	胴部破片	不明、円筒		66
75	綱志天神山古墳	佐波郡境町上武士	前方後円	127	馬	男、女、犬、壺、円筒	6 C 末葉	67, 57
76	綱志村第33号古墳	佐波郡境町上武士	円墳	24	蹄部引手破片	人物、家、靴、円筒	6 C 後～ 7 C 初期	67
77	綱志村第36号古墳	佐波郡境町上武士	円墳	25	靴～蹄にかけて破片	靴、円筒	6 C 末?	67
78	吉田遺跡K-2号 古墳	佐波郡境町上御名	円墳		輪蓋破片、左頬付近破片	人物、家、壺、靴、不明、円筒	6 C 後葉	68
79	オクマン山古墳	太田市脇屋	円墳	36	飾り馬7	家1、靴、大刀、男5、鞍、円筒	7 C 初期	69, 70
80	寺ヶ入馬塚古墳	太田市東金井	円墳	15	馬	人物、不明、円筒	7 C 初期	71

5. 群馬県における馬形埴輪の様相

No	古墳名	所在地	墳形	規模	馬形埴輪	伴出する埴輪	年代	文献
81	塚廻り1号墳	太田市龍舞	帆立貝式	26.1	馬2 (耳・尻尾・前2脚・尻鬣の飾、前後4脚)	靴2、大刀4、男4、女2、円筒	6C第3 四半期	72
82	塚廻り4号墳	太田市龍舞	帆立貝式	22.5	飾り馬2	家1、盾3、大刀5、男10、女4、円筒	6C第2 四半期	72
83	駒形神社境内遺跡	太田市北金井	埴輪窯		脚部、飾り馬頭部	不明、円筒		73
84	四ツ塚古墳	太田市由良			三鬘・雲珠付き鞍なし馬、頭部、飾、鬣	人物、鳥、不明、円筒		57
85	成塚稲荷神社古墳	太田市成塚	前方後円		面鬘、輪蓋のついた陣羽部分	人物、盾、円筒	6C後葉	74
86	成塚石橋1号古墳	太田市成塚	帆立貝式	17.5	立髪部計、手綱一部片、立髪先端円柱?	男、人物、円筒		75
87	成塚石橋2号古墳	太田市成塚	円墳	約10	馬2 (飾り馬、頭部～鞍部の破片)	男、人物、大刀、円筒		75
88	成塚石橋5号古墳	太田市成塚	円墳	約13	立髪と手綱の破片	円筒		75
89	二ツ山1号墳	新田郡新田町天良	前方後円	74	馬12	家6以上、靴2、大刀1、人物6、鳥2、鬘、鞍1、槍1、帽子、円筒	7C初頭	76、77
90	四軒北古墳	新田郡新田町村田	前方後円		飾り馬(頭部)	円筒	7C初頭	77
91	高徳寺東古墳	邑楽郡大泉町古海	帆立貝式	40	馬	女子、男子、円筒		78
92	東毛養護学校内古墳	太田市高林			馬 (人が乗る裸馬)	家、円筒		79
93		太田市成塚			飾り馬1	円筒		79
94		佐波郡赤堀町			飾り馬1	円筒	6C?	80
95		新田郡尾島町亀岡			飾り馬1	人物4、円筒		33
96	石山南所在古墳	佐波郡赤堀町下触			飾り馬1	円筒	6C?	79
97		佐波郡境町			飾り馬1	円筒	6C末～ 7C初頭	79
98		前橋市朝倉町			四脚と陣羽付き脚部 耳、鞍、雲珠、尾	人物、靴、大刀、不明		57
99		前橋市田口町			脚4、尾?	人物(男2、女1)		57
100	「緑寛」三郷村88号墳	伊勢崎市安塚			飾り馬、飾り馬頭部	男1		57
101		伊勢崎市(旧榎蓮村)			雲珠部分			57
102		太田市西長岡			飾り馬頭部、脚、 輪蓋の残る陣羽	人物、家、靴、槍、大刀 円筒		57

田まとも

No.	古墳名	所在地	墳形	規模	馬形埴輪	伴出する埴輪	年代	文献
103		高崎市納買町 (旧火薬製造所内)			面髷、髷、頭部2	人物、鳥、盾、髷、髷、槍		57
104	「総覧」平井村 480号墳	藤岡市白石字滝1926			飾り馬	人物、盾、髷、髷		57
105		邑楽郡大泉町			飾り馬			57
106		邑楽郡千代田村新福 寺			素障銅板・引手・面 髷の頭部、脚4	人物、鳥		57
107		群馬郡寛仁町字八幡 宮前			面髷のみの鼻部、脚	人物3		57
108		佐波郡赤堀町下触			脚1	人物、家		57
109	「総覧」赤堀村 107号墳	佐波郡赤堀町下触			飾り馬1、頭部、耳、 鞍、脚、飾	人物、円筒		57
110	「総覧」東村 3号墳	佐波郡東村東小保方			耳、胴部、脚2	円筒		57
111		佐波郡境町下武士			飾り馬1、素障銅 板・引手・面髷の頭 部、脚、鞍、尾	人物、髷、髷、矛、大刀、 家		57
112		群馬県内			飾り馬			57
113		伊勢崎市波志江町			馬			33
114		伊勢崎市華蔵寺			馬			33
115		前橋市(旧寛砥村大 室)			馬			33
116		伝群馬県			人が乗る飾り馬			79
117					裸馬			82
118		太田市藤岡久	円墳		馬	男子、女子、円筒		79
119	白石二子山古墳	藤岡市白石	前方後円		馬	人物、器財等破片、円筒		79
120	萩原塚古墳	藤岡市白石	前方後円		馬	人物、髷、盾、髷、円筒		79
121	美久里中学校内 古墳	藤岡市神田	円墳		馬	人物、鷹の鷹、円筒		79
122	下谷A号墳	佐波郡東村東小保方	前方後円		馬	人物、その他、円筒		79
123	二ツ山2号墳	新田郡新田町天良	前方後円		馬	人物、円筒		79
124	近戸2号墳	勢多郡粕川村隈津	円墳	約25	馬	円筒	5 C未?	83
125	近戸4号墳	勢多郡粕川村隈津	円墳	16	馬	人物、円筒	5 C後～ 6 C前葉	83
126	塚原蛇塚古墳	多野郡吉井町池	円墳		頭部(?)	人物、大刀、髷、盾、 髷、帽子		84

集成文献目録

1. 相沢貞順 1981 「龍登塚古墳」 『群馬県史』資料編3
2. 前橋市教育委員会 1982 「金冠塚(山王二子山)古墳調査概報」
3. 前橋市教育委員会 1980 「富田遺跡群・西大塚遺跡群・清原南部遺跡群」
4. 尾崎喜左衛門 1958 「オブ塚古墳」 『勢多郡誌』
5. 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988 「桶荷山古墳」
6. 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986 「京浜北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青塚遺跡」
7. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1989 「内堀遺跡群II」
8. 尾崎喜左衛門 1971 「不二山古墳」 『前橋市史』第1巻 前橋市史編さん委員会 加部二生氏から御教示を得た。
9. 群馬県教育委員会 1990 「鶴台遺跡1号古墳現地説明会資料」 西田健彦氏から御教示を得た。
10. 尾崎喜左衛門・松本浩一 1981 「鏡子塚古墳」 『群馬県史』資料編3
11. 尾崎喜左衛門 1950 「群馬県船川村塚塚古墳調査報告」 『群馬大学紀要人文科学第1巻』
12. 尾崎喜左衛門 1958 「塚塚古墳」 『勢多郡誌』
13. 船川村教育委員会 1985 「西原古墳群」
14. 船川村教育委員会 1989 「白藤古墳群」
15. 尾崎喜左衛門 1954 「九十九山古墳」 『富士見村誌』
16. 石川正之助 1981 「高塚古墳」 『群馬県史』資料編3
17. 梅沢重昭 1981 「観音山古墳」 『群馬県史』資料編3
18. 群馬県教育委員会 1968 「高崎市結實観音山古墳調査概報」
19. 群馬県教育委員会 1981 「史跡 観音山古墳一保存修理報告書一」
20. 高崎市教育委員会 1974 「八幡塚遺跡」
21. 田島桂男 1981 「若宮八幡北古墳」 『群馬県史』資料編3
22. 高崎市教育委員会 1981 「石原和原山古墳」
23. 高崎市教育委員会 1981 「正観寺遺跡群III」
24. 尾崎喜左衛門 1957 「群馬県高崎市蔵王塚古墳」 『日本考古学年報』10 日本考古学協会
25. 高崎市教育委員会 1985 「筑城遺跡群」
26. 群馬県教育委員会・埋蔵文化財調査事業団 1986 「下佐野遺跡II地区」
27. 後藤守一 1953 「上野院愛宕塚」 『考古学雑誌』第39巻1号
28. 群馬県教育委員会 1985 「二子山古墳」
29. 群馬県教育委員会 1990 「保護田窪遺跡」
30. 福島武雄・岩澤正作・相川龍雄 1932 「八幡塚古墳」 『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告』第2輯
31. 五ノ風 至 1981 「八幡塚古墳断面確認調査」 『昭和55年度埋蔵文化財調査略報』群馬県教育委員会
32. 福島武雄・岩澤正作・相川龍雄 1932 「上芝古墳址」 『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告』第2輯
33. 榎村 繁 1986 「群馬県における馬形埴輪の変遷—上芝古墳出土品を中心として—」 『MUSEUM』No.425
34. 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983 「奥原古墳群」
35. 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990 「本郭の古墳群」
36. 尾崎喜左衛門 1958 「群馬県藤岡市小林A号墳」 『日本考古学年報』7
37. 尾崎喜左衛門 1954 「三本木A号古墳」 『日本考古学年報』7
38. 川端四郎 1981 「三本木A号古墳」 『群馬県史』資料編3
39. 尾崎喜左衛門 1958 「群馬県本郷埴輪密跡発掘報告」 『風土』4-2
40. 津金沢吉茂・飯島義雄・三宅孝子 1980 「群馬県藤岡市本郷埴輪密跡出土の埴輪について」 『群馬県立歴史博物館紀要』1号
41. 藤岡市教育委員会 1982 「堀ノ内遺跡群」
42. 松本浩一 1981 「泉塚古墳」 『群馬県史』資料編3
43. 藤岡市教育委員会 1989 「皇子塚古墳」
44. 群馬県埋蔵文化財調査事業団関東越道上越線調査事務所 1989 「昭和63年度関東自動車道上越線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査・整理調査概報」 石塚久則氏から御教示を得た。
45. 志村 哲 1985 「藤岡台地における埴輪の様相」 『第6回三県シンポジウム・埴輪の変遷—普遍性と地域性—』北武蔵古代文化研究会
46. 藤岡市教育委員会 1988 「神田・三本木古墳群」
47. 群馬県立博物館 1972 「富岡5号古墳」 群馬県立博物館研究報告 第7集
48. 富岡市史編さん委員会 1987 「富岡市史」原始・古代・中世編、自然編
49. 群馬県埋蔵文化財調査事業団関東越道上越線調査事務所 1990 「発掘された鶴の谷」パンフレット 右島和夫氏に御教示を得た。
50. 尾崎喜左衛門 1957 「群馬県史中市築瀬二子塚古墳」 『日本考古学年報』10
51. 尾崎喜左衛門 1981 「龍淵二子塚古墳」 『群馬県史』資料編3
52. 梅沢重昭 1968 「群馬県伊勢崎市蛇塚古墳」 『日本考古学年報』16
53. 梅沢重昭 1981 「蛇塚古墳」 『群馬県史』資料編3
54. 伊勢崎市教育委員会 1979 「堀ノ内遺跡」
55. 伊勢崎市 1987 『伊勢崎市史』通史編1
56. 梅沢重昭 1981 「上諏訪古墳」 『群馬県史』資料編3
57. 東京国立博物館 1983 「東京国立博物館図録目録」古墳遺物篇(関東II)
58. 赤堀村教育委員会 1978 「赤堀村地蔵山の古墳1」
59. 赤堀村教育委員会 1979 「赤堀村地蔵山の古墳2」
60. 赤堀村教育委員会 1976 「赤堀村冨山山の古墳1」

III ま と め

61. 松村一昭 1969 「埴輪製作過程の一考察」 『佐波郡東村の古墳』 東村々誌編纂委員会
 62. 赤堀村教育委員会 1977 『赤堀村葦岸山の古墳2』
 63. 松村一昭 1981 「田向2号墳」 『群馬県史』資料編3
 64. 尾崎喜左衛 1957 「群馬県佐波郡石山古墳」 『日本考古学年報』5
 65. 赤堀村教育委員会 1982 「八幡科古墳群及び縄文住居跡調査概報」
 66. 松村一昭 1969 「佐波郡東村の古墳」 佐波郡東村々誌編纂委員会
 67. 埴野教育委員会 1968 「埴野上武士の古墳」
 68. 埴野教育委員会 1985 「笠遺跡・古田遺跡」
 69. 太田市教育委員会 1969 『オクマン山古墳調査報告書』
 70. 木暮仁一 1981 「オクマン山古墳」 『群馬県史』資料編3
 71. 梅沢重昭 1981 「寺ヶ入馬塚古墳」 『群馬県史』資料編3
 72. 群馬県教育委員会 1980 「塚廻り古墳群」
 73. 大川 清 1970 「群馬県太田市駒形神社境内遺跡」 『日本考古学年報』18
 74. 岡部修一 1985 「成塚稲荷神社古墳」 『市内遺跡II』 太田市教育委員会
 75. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991 『成塚石橋遺跡II』
 76. 清水潤三 1948 「群馬県新田郡二ツ山古墳」 『日本考古学年報』1
 77. 新田町・新田町誌刊行委員会 1987 『新田町誌』第2巻資料編(上)
 78. 石関伸一氏から未報告の資料について有役な御指示を得ることができた。
 79. 群馬県立歴史博物館 1979 「群馬のはにわ」
 80. 秋田県立博物館 1983 「はにわ」
 81. 尾崎喜左衛 1981 「剱山古墳」 『群馬県史』資料編3
 82. 権原考古学研究所附属博物館 1990 『埴輪の動物園』
 83. 粕川村教育委員会 1986 『湖沼地区遺跡群』
 84. 吉井町教育委員会 1987 『蛇塚古墳』
- 註 180ページからの続き
- (40) 註(37)
 (41) 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1989 「内館遺跡群II」
 (42) 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990 「本郷的場古墳群」
 (43) 赤堀村教育委員会 1978 「赤堀村地蔵山の古墳1」
 (44) a. 太田市教育委員会 1969 『オクマン山古墳調査報告書』
 b. 木暮仁一 1981 「オクマン山古墳」 『群馬県史』資料編3
 (45) 尾崎喜左衛 1957 「群馬県佐波郡石山古墳」 『日本考古学年報』5
 (46) 松村一昭 1981 「田向2号墳」 『群馬県史』資料編3
 (47) 赤堀村教育委員会 1979 「赤堀村地蔵山の古墳2」
 (48) 梅沢重昭 1981 「上諏訪古墳」 『群馬県史』資料編3
 (49) 尾崎喜左衛 1958 「塚塚古墳」 『勢多郡誌』
 (50) 和田千吉 1930 「埴輪の種類」 『考古学』第1巻第4号
 (51) 註(3) b
 (52) 註(11) この場合は突出遺構の資料を使用した。
 (53) 註(12)
 (54) 権原考古学研究所附属博物館 1990 『埴輪の動物園』
 (55) 東京国立博物館 1983 『東京国立博物館図録目録』 古墳遺物篇(関東II)
 (56) 群馬県立歴史博物館 1979 「群馬のはにわ」
 (57) 註(56)
 (58) 鴻巣市教育委員会 1987 「鴻巣市遺跡群」
 (59) 埼玉県教育委員会 1989 「馬の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳」
 (60) 天竜参考館 1971 「はにわ」 [資料案内シリーズNo.8]
 (61) 岩戸山歴史資料館 1988 「岩戸山歴史資料館展示図録」
 (62) 大野雲外・柴田常憲 1901 「杉俣家の図版考説」 『東京人類学会雑誌』第207号
 (63) 増田精一 1960 「埴輪馬にみる顔筋の結構」 『考古学雑誌』第45巻第4号
 (64) 増田精一 1976 「埴輪の古代史」
 (65) a. 水野正好 1971 「埴輪芸術論」 『古代の日本』2 風土と生活
 b. 水野正好 1974 「埴輪体系の把握」 『古代史発展』7 埴輪と石の造形
 c. 水野正好 1977 「埴輪の世界」 『日本原始美術大系3 土偶・埴輪』
 (66) 山田昌久 1989 「日本における古墳時代牛馬飼開始説再論」 『歴史人類』第17号 筑波大学歴史・人類学系
 註(3) dによる指摘 埴馬については「動物馬」に対して飾られない馬も儀式に参加させた可能性を指摘している。
 (68) a. 梅沢重昭 1968 「群馬県伊勢崎市の蛇塚古墳」 『日本考古学年報』16
 b. 梅沢重昭 1981 「蛇塚古墳」 『群馬県史』資料編3
 (69) 註(56) P104 集成表No.94 太田市成塚出土資料
 (70) 註(56) P105 集成表No.97 石山南所出古墳資料 雷電神社古墳資料のうち一體もこのタイプである。
 (71) 伊勢崎市 1987 『伊勢崎市史』通史編1 カラー口絵 蛇塚古墳出土資料
 (72) 故に、白馬V-4号墳例を除いて積極的に鞍馬の認定はしなかった。集成表No.85・101・108・112等は飾り馬ではない可能性もある。
 (73) 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査。白井北中道遺跡・白井南中道遺跡・白井二位屋遺跡で検出された。

観 察 表

凡 例

- 量目の口は口径、高は器高、底は底径を表わす。数量に（ ）があるものは復元径を表わす。
- 胎土中の粒度は、ウェントウォースの粒径区分を用いて表わし、細砂 $4\sim 2\text{mm}$ 、粗砂 2mm 以上、中砂 $1/4\sim 1\text{mm}$ 、細砂 $1/4\text{mm}$ 未満とした。
 按雑物は、白色・赤色・黒色の細粒物を区別した。
 鉱物は、土師器・須恵器については、肉眼ではっきりわかる種類について、角閃石・石英等と記した。
 埴輪については、一括して鉱物と記した。
- 色調は、『新版標準土色帖』(財)日本色彩研究所による。
- 焼成は、酸化焰焼成か還元焰焼成かを記載した。埴輪については、基本的に酸化焰焼成なので記載を省略し、特に堅緻あるいは脆弱なものを硬度のところであらわした。並のものは省略した。
- 刷毛目については、 2cm あたりの本数(10本の場合は、 2cm の幅の中に10本の刷毛目が確認されたこと)を記した。
- 出土位置は、床直は床面直上から、床 5cm は床面から 5cm 離れて、埋没土中は埋没土中から出土したことを表わす。
- 縄文土器については、成・整形の特徴欄に土器の型式名を加えた。

目 次

- 住居跡 P 196
- 古 墳 P 207
- 旧河道 P 230
- 溝 P 249
- 土 坑 P 250
- 遺構外 P 251

縄文・瓦

番号	器種	量目	出土位置	①胎土 ③硬度	②色調	成・整形の特徴
----	----	----	------	------------	-----	---------

土師器・須恵器

番号	器種	量目	出土位置	①胎土 ③焼成	②色調	成・整形の特徴
----	----	----	------	------------	-----	---------

埴輪

番号	器種	量目	出土位置	①胎土 ③硬度	②色調 ④刷毛目	成・整形の特徴
----	----	----	------	------------	-------------	---------

陶磁器

番号	器種	量目	出土位置	特 徴		
----	----	----	------	-----	--	--

石製品

番号	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量
----	----	------	----	----	---	----	----

鉄滓

番号	器種	出土位置	量目	特徴
----	----	------	----	----

成塚石橋遺跡 II

1. 住居跡出土遺物

58号住居跡出土遺物観察表 (図4)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③硬度	成・整形の特徴
1	土師器 杯	口縁～体部1/6残 □ (13.8cm)	埋没土下層	①細砂を含む。 ②橙5YR6/6 ③還元焰	底部外面横方向窪削り。内面にて、指頭圧痕が残る。口縁部壊など。
2	須恵器 蓋	体部破片 □ (13.8cm)	埋没土中	①黒色細粒物を含む。 ②灰白2.5Y7/1 ③還元焰	成形技法不明。内外面回転など。
3	須恵器 杯	4/5残 □ 12.7cm 底 7.5cm 高 3.8cm	南壁際 床面上5cm	①細砂を含む。 ②灰白5Y7/1 ③還元焰	右回転ロクロ成型形。底部回転車切り磨し。内外面回転など。

123号住居跡出土遺物観察表 (図7)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③硬度	成・整形の特徴
1	縄文土器 深鉢	口縁部1/3残 □ (29.0cm)	中央部 床土6cm	①大量の繊維と長石を初めとする岩石粒を含む。 ②橙5YR6/8・黒褐7.5YR3/4	無文で器による整形痕がみられる。黒沢式
2	縄文土器 深鉢	割部破片	西壁 床土1cm	①繊維少量、長石、小粒の赤色岩石含有。 ②にぶい褐7.5YR6/3	半軟竹管による横引き糸痕。黒沢式
3	縄文土器 深鉢	口縁部破片	中央部 床土3cm	①繊維を大量に含む。黒色不透明、白色不透明、金雲母等の岩石粒を含む。 ②明黄褐10YR7/6	L / R の斜縄文を施文。黒沢式
4	縄文土器 深鉢	口縁部破片	東壁 床土2cm	①繊維を大量に含む。白色の小粒岩石粒を含む。 ②橙7.5YR6/8	R L斜縄文施文。黒沢式
5	縄文土器 深鉢	口縁部破片	西壁 床土5cm	①繊維を少量、細かな白色岩石粒を含有。 ②明褐7.5YR5/6・黒褐7.5YR2/2 ③還元	口縁部下及び胴部に各一条の横沈線を施し、中をR L斜縄文で充塞。黒沢式
6	縄文土器 深鉢	割部破片	中央部 床土9cm	①繊維を大量に含む。白色不透明、黒色透明の岩石粒を含む。 ②黄褐7.5YR7/8・黒褐7.5YR3/1	L / R の斜縄文を施文。縄文単位末端部が観察できる。縄文の長さは不明。黒沢式
7	縄文土器 深鉢	割部破片	中央部 床土7cm	①繊維を大量に含む。黒色透明、白色不透明の岩石粒を含む。 ②橙7.5YR6/6	L R斜縄文を施文。繊維が脱けおちた痕跡と重複しており観察しにくい。黒沢式
8	縄文土器 深鉢	口縁部破片	中央部 床土4cm	①白色透明及び不透明な細かな岩石粒及び繊維を含む。 ②浅黄褐10YR8/4・灰黄褐10YR4/2	3と同一個体。黒沢式
9	縄文土器 深鉢	割部破片	南壁 床土3cm	①繊維を少量含む。 ②内いぶい黄褐10YR7/4 外灰黄褐10YR6/2 ③還元	R L斜縄文を施文。黒沢式

123号住居跡出土遺物観察表 (図7・8)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③硬度	成・整形の特徴
10	縄文土器 深鉢	胴部破片	東壁 床上7cm	①大量の繊維及び大粒の石英粒を含む。 ②にぶい黄褐色10YR6/4	L R斜縄文を施文。黒沢式
11	縄文土器 深鉢	胴部破片	中央部 床上3cm	①大量の繊維及び、小粒の長石粒を含む。 ②橙5YR6/8・黄褐色7.5YR7/8	L R斜縄文を施文。黒沢式
12	縄文土器 深鉢	胴部破片	西壁 床上3cm	①少量の繊維及び、長石、黒色不透明の岩石粒を含む。 ②内橙5YR6/8 外橙7.5YR7/6 ③堅緻	無第Rの斜縄文を施文。黒沢式
13	縄文土器 深鉢	胴部破片	中央部 床上1cm	①大量の繊維及び、小粒の長石、黒色不透明の岩石粒を含む。 ②橙7.5YR6/8・灰褐色7.5YR4/2	L $\left\{ \begin{array}{l} r \\ r \\ r \end{array} \right.$ の斜縄文を施文。黒沢式
14	縄文土器 深鉢	胴部破片	南壁 床直	①少量の繊維及び、小粒の長石、黒色不透明の岩石粒を含む。 ②橙7.5YR6/6	L $\left\{ \begin{array}{l} r \\ r \\ r \end{array} \right.$ の斜縄文を施文。黒沢式
15	縄文土器 深鉢	胴部破片	中央部 床上1cm	①大量の繊維と長石粒を含む。 ②明黄褐色10YR7/6・黒褐色10YR3/2 ③脆弱	L R斜縄文を施文。黒沢式
16	縄文土器 深鉢	胴部破片	中央部 床上2cm	①大量の繊維と長石粒を含む。 ②明黄褐色10YR7/6・黒褐色10YR3/1	15と同一個体。縄文原体の末端部が観察できる。黒沢式
17	縄文土器 深鉢	胴部破片	埋没土中	①繊維少量。長石を初めとして白色透明、不透明、黒色透明、不透明の細かな岩石粒を大量に含む。 ②内黒褐色5YR3/1 外にぶい赤褐色5YR5/4	L $\left\{ \begin{array}{l} r \\ r \\ r \end{array} \right.$ の斜縄文を施文。黒沢式
18	縄文土器 深鉢	胴部破片	西壁 床上1cm	②内黒5YR1.7/1 外明赤褐色5YR5/6	17と同一個体。方向を変えて斜縄文を施文。黒沢式
19	縄文土器 深鉢	胴部破片	西壁 床直	②内黒褐色5YR3/1 外にぶい赤褐色5YR5/4	17・18と同一個体。方向を変えた斜縄文を施文しており、羽状縄文を作りだしている。黒沢式
20	縄文土器 深鉢	胴部破片	西壁 床直	②内黒5YR1.7/1 外橙5YR6/8 ③堅緻	17・18・19と同一個体。
21	縄文土器 深鉢	胴部破片	中央部 床上6cm	②内黒褐色5YR3/1 外にぶい赤褐色5YR5/4	17・18・19・20と同一個体。
22	縄文土器 深鉢	胴部破片	中央部 床上9cm	①大量の繊維と長石等の細かな岩石粒を含む。 ②橙7.5YR6/6	L $\left\{ \begin{array}{l} r \\ r \\ r \end{array} \right.$ の斜縄文。施文の方向を変えて、羽状としている。黒沢式
23	縄文土器 深鉢	胴部破片	埋没土中	①大量の繊維と、細かな岩石粒を含む。 ②黄褐色10YR8/6・暗褐色10YR3/3	R L斜縄文を施文。黒沢式
24	縄文土器 深鉢	底部破片	西壁 床上10cm	①大量の繊維と長石等の細かな岩石粒を含む。 ②橙5YR6/6 ③堅緻	L R斜縄文を施文。黒沢式
25	円盤状土 製品	完形 径 3.7×3.5cm 厚 0.8cm	埋没土中	①繊維及び細かな岩石粒を含む。 ②橙黄褐色10YR8/3	破片を利用した円盤状土製品で、L R斜縄文が観察できる。黒沢式

123号住居跡出土遺物観察表 (図8)

番号	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量
26	石鏡	東壁 床直	チャート	2.5cm	1.3cm	0.5cm	1.3g
27	割片石器	東壁 床上4cm	黒色頁岩	7.4cm	4.6cm	1.3cm	45g
28	割片	西壁 床上45cm	黒色頁岩	9.4cm	9.0cm	1.3cm	90g
29	磨石・敲石	南壁 床直	粗粒安山岩	10.7cm	7.0cm	5.1cm	550g
30	磨石・敲石	中央 床直	粗粒安山岩	9.5cm	7.3cm	5.5cm	750g
31	磨石・敲石	東壁 床上3cm	粗粒安山岩	10.2cm	7.8cm	4.9cm	660g
32	隆部	東壁 床上14cm	黒色頁岩	12.5cm	6.8cm	4.0cm	620g
33	台石	西壁 床上5cm	ホルンフェルス	35.0cm	18.0cm	11.5cm	13,500g
34	台石	東壁 床上3cm	溶結凝灰岩	28.0cm	21.0cm	14.0cm	9,900g

123号住居跡関連出土遺物観察表 (図9)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③硬度	成・整形の特徴
1	縄文土器 深鉢	口縁部破片	34号溝 埋没土中	①繊維及び大粒の長石、白色透明、黒色不透明の岩石粒を大量に含む。 ②内浅黄褐色10YR8/4 外橙7.5YR6/6	R L結束第1種。黒沢式
2	縄文土器 深鉢	胴部破片	34号溝 埋没土中	②内ふい黄褐色10YR7/3 外橙7.5YR7/6	Iと同一個体。
3	縄文土器 深鉢	胴部破片	34号溝 埋没土中	①大量の繊維と、白色黒色赤色等の不透明で大粒の岩石粒を多く含む。 ②内ふい黄褐色10YR7/4・橙5YR6/6	R L斜縄文。黒沢式
4	縄文土器 深鉢	胴部破片	34号溝 埋没土中	①大量の繊維と長石を初め、白色透明、黒色不透明の岩石粒を含む。 ②内ふい橙7.5YR6/4 外にふい黄褐色10YR6/3 ③堅硬	L R斜縄文を施文。黒沢式
5	縄文土器 深鉢	底部破片	34号溝 底面直上	①大量の繊維と長石等の岩石粒を含む。 ②黄褐色7.5YR7/8・にふい橙7.5YR5/4	L R斜縄文を施文。底部はあげ底。黒沢式
6	縄文土器 深鉢	底部破片	29号溝 底面直上14cm	①少量の繊維と、大粒の長石、白色・黒色・赤色等の不透明な岩石粒を多く含む。 ②内浅黄褐色10YR8/3・外明黄褐色10YR7/6 ③堅硬	L R斜縄文を施文。黒沢式

106号住居跡出土遺物観察表 (図10)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	土器器 杯	3/4壊 口 13.8cm 底 3.3cm 高 4.2cm	カマド右脇 床面直上	①中砂、石英、角閃石、赤色細粒物を含む。 ②赤褐色2.5YR4/6 ③酸化焰	底部外面削り。体部外面横方向削り後、横方向削り。体部内面上半横方向削り後、下半横方向削り。口縁部内外削り。
2	土器器 杯	口縁～体部1/4残 口 (12.8cm)	貯蔵穴 埋没土中	①細砂、石英、角閃石、赤色細粒物を含む。 ②明赤褐色2.5YR5/6 ③酸化焰	体部外面横方向削り後、部分的に斜方向削り。内面丁寧なで。口縁部横なで。
3	土器器 杯	完形 口 12.9cm 底 丸底 高 4.6cm	カマド右脇 床面直上	①細砂、石英、角閃石を含む。 ②にふい赤褐色2.5YR4/3 ③酸化焰	体部外面削り後、斜方向削り。内面丁寧なで後、斜方向削り。口縁部つまみ上げるような横なで。
4	土器器 杯	ほぼ完形 口 12.0cm 底 丸底 高 6.1cm	東廂。貯蔵穴 上部。貯蔵穴 底面直上39cm	①細砂、石英、角閃石を含む。 ②橙7.5YR6/6 ③酸化焰	底部外面削り。体部外面横方向削り後、横方向削り。体部内面横方向なで。指頭圧痕が残る。口縁部横なで。

106号住居跡出土遺物観察表 (図10-11)

番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴		
5	土師器 鉢	4/5残 口 10.4cm 底 4.7cm 高 6.9cm	カマド右脇 床面上2cm	①細砂、石英、角閃石、赤 色細粒物を含む。 ②赤10YR5/6 ③酸化焰	底部外面削り。体部外面削り後、横方向削 磨き。内面掘込で、下半部不定方向の削磨。上半 部には指頭圧痕が残る。口縁部横なで。		
6	土師器 高坏	杯部残 口 16.3cm	カマド内 床面上6cm	①細砂を含む。 ②明赤褐2.5YR5/6 ③酸化焰	杯部外面下半縦方向削磨。内面丁寧なで、下 半縦方向削磨。口縁部横なで。杯部底面中央に脚部 との接合のための突出が残されている。		
7	土師器 高坏	脚部4/5残 底 13.1cm	カマド右脇 床面直上	①細砂、角閃石を含む。 ②明赤褐5YR5/6 ③酸化焰	脚部外面丁寧なで、縦方向の細い削磨。脚部 部外面削り方向の細い削磨。底部内面削り後 周縁部のみ横方向削磨。		
8	土師器 小形壺	3/4残 口 10.6cm 底 5.0cm 高 12.0cm	カマド右脇 床面上8cm	①細砂、石英、角閃石、赤 色細粒物を含む。 ②赤褐2.5YR4/6 ③酸化焰	底部外面削り。胴部外面下半横方向削磨。上半摩 耗、割落が激しく整形痕は顕著ではないが、縦方向削 磨をおこなっていると考えられる。内面横方向削 磨で、口縁部横なで。		
9	土師器 小形壺	1/2残 口 (10.6cm) 底 5.6cm 高 9.7cm	カマド左脇 床面上6cm	①細砂、石英、角閃石、赤 色細粒物を含む。 ②増5YR6/6 ③酸化焰	摩耗、割落が激しく、整形痕の観察は困難である。		
10	土師器 壺	口縁部破片 口 19.0cm	カマド右脇 床面上2cm	①細砂、石英、角閃石、赤 色細粒物を含む。 ②増2.5YR6/6 ③酸化焰・硬質	口縁部内外面なでの後、外面縦方向削磨。内面横方 向削磨。口縁部外面は横なでによって重取りがさ れており、内面は外面の縁に対応するように凹んでい る。		
11	土師器 壺	口縁～胴上位破片 口 (14.8cm)	東隅 床面直上	①細砂、石英、角閃石、赤 色細粒物を含む。 ②赤10YR4/8 ③酸化焰	胴部外面削り後、斜方向削磨。内面横方向 削磨で、口縁部内外面横なで。		
12	土師器 壺	胴部下半～底部 口 (13.0cm) 底 4.5cm	カマド左脇 床面上6cm 貯蔵穴埋没土 中の破片と接 合	①細砂、石英、赤色細粒 物を含む。 ②赤褐2.5YR4/6 ③酸化焰	底部外面削り。胴部外面下半斜方向削磨後、縦方 向削磨。上半縦方向削磨。胴部内面斜方向、横方 向削磨。口縁部横なで。		
13	土師器 壺	口縁～胴上位1/4 残 口 (18.0cm)	カマド前 床面上5cm	①細砂、石英、角閃石、白・ 赤色細粒物を含む。 ②明赤褐5YR5/6 ③酸化焰	胴部外面縦方向削磨後、部分的に斜方向削磨。内 面横方向削磨で、上部に指頭圧痕が残る。口縁部横な で。		
14	土師器 壺	口縁～胴上位1/6 残 口 (16.0cm)	中央部 旧河道落込	①細砂、石英、角閃石を含 む。 ②増2.5YR7/6 ③酸化焰	胴部外面斜方向削磨。内面斜方向削磨で、頸部内面 横方向削磨で、口縁部内面丁寧なで、部分的に 横方向削磨。外面横なで。		
15	土師器 壺	口縁～胴上位1/4 残 口 (18.4cm)	南東壁付近 旧河道落込	①細砂、角閃石、赤色細粒 物を含む。 ②増5YR6/8 ③酸化焰	外面丁寧なで、縦方向削磨。胴部内面横方向 削磨で、指頭圧痕が残る。口縁部内面丁寧なで、後、 横方向削磨が残る部分がある。口縁部横なで。		
16	土師器 壺	胴下位～底部1/2 残	カマド左脇 床面上4cm	①細砂、石英、角閃石、赤 色細粒物を含む。 ②増5YR6/6 ③酸化焰	胴部下半斜方向削磨後、部分的に斜方向削磨。内 面斜方向削磨後、斜方向削磨。この破の底部孔は 水平でなく、やや凹状に切り取られている。		
17	土師器 壺	胴部～底部 底 5.7cm	カマド右脇 床面上4cm	①細砂、石英、角閃石、白・ 赤色細粒物を含む。 ②増7.5YR7/6 ③酸化焰	胴部外面斜方向削磨後、斜方向削磨。内面横方向 削磨で、底部外面削磨。		
番号	器 種	出土位置	石 材	長さ	幅	厚さ	重量
18	磨石	カマド前	石英閃石質	19.6cm	8.7cm	7.2cm	2.110g

107号住居跡出土遺物観察表 (図13)

番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	土師器 杯	口縁～底部破片 口 (13.0cm)	掘り方 南西壁寄り 底面上9cm	①細砂を含む。 ②増5YR6/6 ③酸化焰	底部外面削り。内面丁寧なで、口縁部横なで。

107号住居跡出土遺物観察表 (図13)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴		
2	須恵器 杯	底部 底 (8.6cm)	掘り方 北西壁寄り 床面上1cm	①細砂・白色細粒物を含む。 ②灰7.5YR7/1 ③還元焰	右回転コクロ成整形。底部切り離し技法不明。全面回転整形。		
3	須恵器 杯	底部1/3残 底 (8.0cm)	南東壁際 床面直上	①細砂を含む。 ②灰白5YR7/1 ③還元焰	右回転コクロ成整形。底部回転赤切り離し。		
4	土師器 小形壺	口縁部1/4残 口 (10.6cm)	掘り方 南東壁付近 床面上2cm	①細砂、角閃石を含む。 ②にぶい赤褐色5YR4/3 ③酸化焰	胴部外面横方向整形。口縁部内外面横なで。		
5	土師器 高坏	杯部残 口 (17.7cm)	南西壁礎礎面 床面上21cm	①細砂、角閃石、赤色細粒物を含む。 ②灰褐7.5YR4/2 ③酸化焰	杯部外面横方向整形なで後、横方向整形。杯底部外面斜方向整形なで後、斜方向整形。内面丁寧なで後、放射状の整形。口縁部横なで。脚部との接合のための突出部は着取れない。		
6	土師器 壺	口縁→胴部上位 1/4残 口 (20.7cm)	掘り方 北西壁寄り 床面直上	①細砂を含む。 ②にぶい赤褐色5YR5/3 ③酸化焰	胴部上位横方向整形。下位斜方向整形後、部分的に斜方向整形。内面横方向整形なで。口縁部横なで。口縁部外面、胴部上位内面に指頭圧痕が残る。		
番号	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量
7	磨石・砥石	南西壁中央部	粗粒安山岩	8.8cm	8.4cm	5.3cm	570g

108号住居跡出土遺物観察表 (図14)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴		
1	土師器 杯	3/4残 口 12.0cm 底 3.7cm 高 5.2cm	北壁際 床面直上	①細砂を含む。 ②黒褐7.5YR3/1 ③酸化焰	底部外面整形。体部外面横方向整形後、丁寧な横方向整形。内面丁寧なで後、放射状の整形。口縁部内外面横なで。		
2	土師器 杯	ほぼ完形 口 12.1cm 底 5.0cm 高 6.5cm	カマド前 床面上7cm	①細砂、赤色細粒物を含む。 ②明赤褐5YR5/6 ③酸化焰	底部外面整形。体部外面横方向整形後、斜方向整形。内面丁寧なで後、放射状の整形。口縁部内外面横なで。		
3	土師器 高坏	脚部残 裾部欠損	中央部 床面上5cm	①緻密 ②明赤褐5YR5/6 ③酸化焰・硬質	脚部外面斜方向整形。内面上半無整形。紋目目が着取られる。下半横方向整形なで。		
4	土師器 壺	口縁→頸部破片 口 (23.0cm)	カマド左端 床面上11cm	①細砂、赤色細粒物を含む。 ②褐色5YR6/6 ③酸化焰	胴部縦方向整形。下部横方向整形後、縦方向整形。内面下部斜方向刷毛目整形。上部横方向整形。部分的に横方向整形。		
5	土師器 壺	胴部下位1/5残	カマド前 床面上10cm	①細砂、石英、角閃石、白色細粒物を含む。 ②にぶい褐7.5YR5/4 ③酸化焰	胴部縦方向整形。下部横方向整形後、縦方向整形。内面下部斜方向刷毛目整形。上部横方向整形。部分的に横方向整形。		
番号	器種	出土位置	石材	長さ	幅	厚さ	重量
6	台石	中央部 床下4cm	焼結凝灰岩	18.0cm	11.5cm	6.4cm	2,210g

109号住居跡出土遺物観察表 (図17)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	土師器 杯	口縁→体部1/3残 口 (14.0cm)	カマド内 床面上6cm	①細砂、石英、角閃石を含む。 ②灰7.5YR6/6 ③酸化焰	体部外面横方向整形後、横方向整形。体部上半は整形用痕が着取できないほど丁寧な整形。内面で指頭圧痕が残る。口縁部内外面横なで。
2	土師器 杯	口縁→体部1/3残 口 (14.8cm) 丸底	カマド内の破片と9号井戸埋没土中の破片が接合 床面上8cm	①細砂を含む。 ②明赤褐2.5YR5/8 ③酸化焰	体部外面横方向整形。上半を中心に横方向整形。体部内面縦方向整形の後、底部内面一方方向の整形。口縁部内外面、口縁部つまみあなが丁寧な横なで。

109号住居跡出土遺物観察表 (図17)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③地成	成・整形の特徴
3	土師器 杯	完形 口 13.4cm 底 5.3cm 高 5.0cm	貯蔵穴埋没土 上層、貯蔵穴 底面上9cm	①細砂、角閃石を含む。 ②明黄褐10YR6/8 ③酸化焙	底部外面旋削り、体部外面横方向旋削り。下部のみ旋削り痕を残して、上部のみ丁寧な指なで後、縦方向旋削り、内面なで。摩耗が激しく磨きは取れない、口縁部内外面横なで。
4	土師器 杯	完形 口 14.8cm 底 丸底 高 5.1cm	南隅 床面上7cm	①細砂、角閃石を含む。 ②橙7.5YR6/6 ③酸化焙	体部外面横方向旋削り後、横方向旋削り。内面丁寧なで、指掘り痕が残る。口縁部内外面横なで後、外面のみ縦方向の細かい旋削り。
5	土師器 杯	口縁～体部2/5残 口 (14.0cm)	南隅 床面上7cm	①細砂、赤色細粒物を含む。 ②明赤褐5YR5/6 ③酸化焙	体部外面横方向旋削り。内面摩耗が激しく明確でないが、一部に旋削りが看取できる。口縁部内外面横なで。
6	土師器 杯	口縁～体部1/5残 口 (12.8cm)	埋没土中	①細砂、角閃石を含む。 ②明赤褐2.5YR5/6 ③酸化焙	体部外面旋削り。内面なで。口縁部内外面横なで。
7	土師器 鉢	口縁～体部上半破片 口 (14.4cm)	埋没土中	①細砂、石英、角閃石を含む。 ②ふい黄褐10YR5/3 ③酸化焙・やや硬質	体部外面縦方向旋削り。内面なでの後、斜方向旋削り。口縁部横なで後、外面斜方向、内面横方向旋削り。
8	土師器 鉢	口縁～体部上半 1/4残 口 (12.8cm)	埋没土中	①緻密 ②ふい橙10YR7/4 ③酸化焙・硬質	口縁部～体部外面縦方向の丁寧な旋削り。体部内面なでの後、縦方向の丁寧な旋削り。口縁部内面横なで。
9	土師器 高杯	杯部1/3残 口 (14.2cm)	中央部北西寄り 床面上2cm	①緻密 ②明褐7.5YR5/6 ③酸化焙	底部外面斜方向旋削り。内面丁寧なで。口縁部内外面横なで。
10	土師器 高杯	脚部2/3残	貯蔵穴埋没土 上層	①細砂、石英、角閃石、赤 色細粒物を含む。 ②赤褐5YR4/6 ③酸化焙	脚部外面縦方向の細かい旋削り。脚部内面粘土縁巻上げ痕が残る。無調整。上半部には絞り目と指なで痕がある。裾部内面丁寧なで。
11	土師器 高杯	杯部残 口 17.8cm	南隅 床面上4cm	①細砂、角閃石、白・赤色 細粒物を含む。 ②明赤褐2.5YR3/8 ③酸化焙	杯部外面なでの後、縦方向旋削り。杯底部外面なで。杯部内面横方向旋削りなでの後、上半部横なで。縦方向旋削り。
12	土師器 高杯	裾部欠損 口 15.0cm	カマド内 床面上1cm	①細砂、雲母、角閃石を含 む。 ②橙5YR6/6 ③酸化焙	杯部内外面なでの後、口縁部内外面横なで。外面縦方向旋削り。内面斜方向旋削り。脚部外面縦方向旋削り。内面上半部整形。絞り目が看取できる。下半部横なで。
13	土師器 高杯	裾部欠損 口 18.8cm	南隅 床面上4cm	①細砂を含む。 ②橙2.5YR6/8 ③酸化焙	杯底部横方向旋削り後、縦方向・横方向旋削り。杯部外面丁寧なで。下部に指掘り痕が残る。杯部内面丁寧なで。口縁部内外面横なで。脚部外面丁寧なで。内面縦方向なで。絞り目を消している。
14	土師器 小形甕	ほぼ完形 口 11.6cm 底 5.4cm 高 11.3cm	貯蔵穴内。 底面上1cm	①細砂、雲母、礫石を含む。 ②橙7.5YR6/8 ③酸化焙	脚部外面指押さえ。指掘り痕が残る。後、縦方向旋削り。頸部から口縁部外面指押さえ後、横なで。頸部内面、横方向旋削りなで後、縦方向旋削り。口縁部内面横なで。
15	土師器 甕	底部残 底 8.2cm	埋没土中	①緻密 ②橙7.5YR6/6 ③酸化焙	底部外面無調整。内面なで。
16	土師器 甕	胴部下位～底部残 底 5.0cm	南隅 床面上5cm	①粗砂を含む。 ②ふい赤褐5YR4/3 ③酸化焙	底部外面旋削り。胴部外面横方向旋削り後、斜方向に部分的に旋削り。内面横方向旋削りなで。
17	土師器 甕	口縁～胴部1/3残 口 18.4cm	南隅 床面上2cm	①細砂、石英、赤色細粒物 を含む。 ②橙2.5YR6/8 ③酸化焙	胴部外面斜方向旋削り後、胴部上半を中心に斜方向旋削り。胴部外面横方向旋削りなで後、横方向旋削り。内面摩耗が激しく整形痕は明確でない。頸部～口縁部内面横方向旋削り。口縁部内外面横なで。

109号住居跡出土遺物観察表 (図17)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
18	土師器 甕	口縁～胴部残 口 17.5cm	南東壁寄り 床面上1cm	①細砂を含む。 ②橙7.5YR7/6 ③酸化焙	胴部外面上半縦方向窪んで、下半縦方向微削り。部分的に横方向微磨き。内面横方向窪んで、胴部に指頭圧痕が顕著に残る。口縁部内外面横なで。
19	土師器 甕	口縁部欠損 底 6.6cm	南西壁付近 床面直上	①細砂、石英を含む。 ②にぶい橙7.5YR7/4 ③酸化焙	底部外面微削り。胴部外面下半横方向微削り後、部分的に横方向微磨き。上半丁寧なでて整形痕を消している。内面縦方向窪んで、下半部斜方向微磨き。

109号住居跡関連出土遺物観察表 (図18)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	土師器 杯	3/4残 口 (12.5cm) 高 5.2cm	9号井戸上層	①赤色細粒物を多量に含む。 ②にぶい赤褐5YR5/3 ③酸化焙	体部外面横方向の微削り後、横方向の微磨き。底部微削りにより平底を作り出している。体部内面丁寧なで、丁寧なで後、放射状の微磨き。口縁部内外面横なで。
2	土師器 杯	1/3残 口 (13.8cm) 高 4.5cm	9号井戸上層	①細砂、角閃石、赤色細粒物を含む。 ②橙5YR6/6 ③酸化焙・やや硬質	体部外面微削り後、不定方向の微磨き。体部内面窪んでの微、放射状の微磨き。口縁部内外面横なでの後、外面縦方向の微磨き。
3	土師器 杯	1/4残 口 (14.0cm) 高 4.0cm	9号井戸上層	①赤色細粒物を多量に含む。 ②橙5YR6/6 ③酸化焙	体部外面横方向の窪んで後、横方向の微磨き。底部微削りによって作り出している。体部内面丁寧なでの後、放射状の微磨き。内面に指頭圧痕あり。口縁部内外面横なで。
4	土師器 杯	口縁～体部1/4残 口 (13.8cm)	9号井戸上層	①細砂、石英を含む。 ②内帯赤灰2.5YR3/1 外帯2.5YR6/6 ③酸化焙	体部外面微削りの後、横方向の微磨き。体部内面窪んでの微、放射状の微磨き。口縁部内外面横なで後、内面横方向の微磨き。
5	土師器 杯	口縁～体部1/6残 口 (14.0cm)	9号井戸上層	①細砂、白・赤色細粒物を含む。 ②橙5YR6/6 ③酸化焙	体部外面横方向微削り。体部内面窪んで、口縁部内外面横なで。
6	土師器 碗	完形 口 12.6cm 底 丸底 高 6.9cm	9号井戸上層	①細砂、白・赤色細粒物を含む。 ②内帯5YR6/6 外にぶい黄緑10YR7/3 ③酸化焙・硬質	体部外面横方向の微削り後、横方向の微磨き。底部外面横方向の微削り。内面窪んで後、不定方向の微磨き。口縁部内外面共に横なで。
7	土師器 碗	口縁～体部1/6残 口 (10.8cm)	9号井戸上層	①細砂、石英、角閃石、雲母を含む。 ②浅黄橙10YR8/3 ③酸化焙・硬質	体部外面窪んでの微、横方向の微磨き。磨きは口縁部まで続く。内面丁寧なでの後、放射状の微磨き。
8	土師器 高杯	杯部1/4残 口 (17.6cm)	9号井戸上層	①細砂、石英、角閃石、赤色細粒物を含む。 ②橙2.5YR6/8 ③酸化焙	杯部外面丁寧なでの後、放射状の微磨き。杯部内面も丁寧なでの後、放射状の微磨き。口縁部口唇部共に横なで。
9	土師器 高杯	杯部3/4残 口 (17.3cm)	9号井戸上層	①細砂、角閃石を含む。 ②橙5YR6/8 ③酸化焙	杯底部窪んで、杯部外面丁寧なでの後、放射状の微磨き。杯部内面窪んで後、放射状の微磨き。脚部との接合のための突出部が看取される。口縁部内外面横なで。
10	土師器 鉢	完形 口 9.8cm 底 4.6cm 高 6.7cm	9号井戸上層	①細砂を含む。 ②橙7.5YR7/6 ③酸化焙・硬質	体部外面斜方向なで、底部削り出しの後、窪んで。内面斜方向の窪んで、口縁部内外面横なで。
11	土師器 増	口縁部1/5残 口 (9.8cm)	9号井戸上層	①細砂、角閃石、雲母を含む。 ②にぶい橙5YR7/4 ③酸化焙・硬質	口縁部中位に段を有する。口縁部外面は、2段に縦方向の微磨き。内面は内湾し、上半部放射状の微磨き。下半部斜方向と横方向の微磨き。
12	土師器 増	口縁部1/4残 口 (14.2cm)	9号井戸上層	①細砂、角閃石、石英、雲母、白色細粒物を含む。 ②橙5YR6/6 ③酸化焙・やや硬質	口縁部横方向なでの後、放射状の細かい微磨き。内面も横方向なでの後、放射状の細かい微磨き。口縁部上層内外面横なで。

109号住居跡関連出土土物観察表 (図18)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
13	土師器 埴	頸部～胴部上位 1/2残	9号井戸上層	①細砂、石英、白色細粒物を含む。 ②橙2.5YR6/6 ③酸化焰・やや硬質	胴部外面上半丁字型なまでの横、放射状の細かい荒磨き、中央横方向の磨削り。内面斜方向の磨んで、内面に指痕圧痕を取られ、頸部内面に被り目あり。
14	土師器 甕	頸部～胴部上半 1/5残	9号井戸上層	①細砂、石英、白・赤色細粒物を含む。 ②内黒褐色5YR3/1 外にふい赤褐色5YR4/4 ③酸化焰	胴部外面上半木鐲状工具による刷毛目状の整形。下半部横方向に同様の整形。内面横方向と斜方向の木鐲状工具によるなど。下半部に接合痕残る。口縁部内外面など。
15	土師器 甕	口縁部1/3残 口 (20.6cm)	9号井戸上層	①細砂を含む。 ②灰白7.5YR8/1 ③還元焰・軟質	胴部外面横方向の磨んで後、斜方向の木鐲状工具による刷毛目状の整形。刷毛目状の整形は、口縁部上半にまで見えている。内面横方向の磨き。口縁部内外面横など。口唇部は窪み、凸巻状の作りになっている。
16	土師器 甕	胴部下位～底部 1/2残 底 7.0cm	9号井戸上層	①細砂、3mm程度の小石を含む。 ②内橙5YR6/6 外にふい赤褐色5YR5/3 ③酸化焰	胴部外面下半木鐲状工具による刷毛目状の整形後、部分的に荒磨き。内面、不定方向の刷毛目状の磨き。部分的に荒磨き。底部外面、荒調整。
17	土師器 甕	口縁～胴部上半 口 15.4cm	9号井戸上層	①細砂、赤色細粒物を含む。 ②橙5YR6/8 ③酸化焰	胴部外面木鐲状工具による刷毛目状の整形。整形痕は口縁部上端まで及ぶ。内面横方向の磨んで、口縁部内外面横など後、内面横方向の磨き。
18	土師器 甕	口縁～胴部上半 口 (16.4cm)	9号井戸上層	①細砂・石英・雲母を含む。 ②にふい赤褐色5YR5/3 ③酸化焰	胴部外面木鐲状工具による刷毛目状の整形。内面横方向の磨んで、指痕圧痕あり。口縁部内外面横など。
19	土師器 甕	底部欠損 口 (15.7cm)	9号井戸上層	①細砂を含む。 ②赤10R5/6 ③酸化焰	胴部外面上半斜方向の磨んで、下半部斜方向の磨削り。内面横方向の磨んで、上半部に指痕圧痕あり。口縁部内外面横など。
20	土師器 甕	口縁～胴部1/2残 口 (20.8cm)	9号井戸上層	①細砂を含む。 ②橙2.5YR6/6 ③酸化焰	胴部外面木鐲状工具による刷毛目状の整形。中央横方向の磨削り後、斜方向の刷毛目状の整形。内面上半部横方向の磨んで、下半部横方向の磨んで、内面に接合痕を取られる。口縁部内外面横など。
21	土師器 甕	口縁～胴部中位 口 (17.8cm)	9号井戸上層	①細砂、赤色細粒物を含む。 ②橙7.5YR7/6 ③酸化焰	胴部外面木鐲状工具による刷毛目状の整形。整形痕は一部口縁部まで及ぶ。内面頸部付近は横方向の磨んで、胴部下半斜方向の磨んで。口縁部内外面横など。
22	土師器 甕	定形 口縁部一部欠損 口 14.3cm 底 4.7cm 高 8.0～8.6cm	9号井戸上層	①細砂、角閃石、白色細粒物を含む。 ②内橙2.5YR6/6 外にふい橙5YR6/4 ③酸化焰・軟質	胴部外面上半横方向の磨削り。下半部斜方向の刷毛目。内面、斜方向の刷毛目。口縁部横など。

117号住居跡出土土物観察表 (図21)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	土師器 杯	ほぼ定形 口 11.0cm 底 丸底 高 5.7cm	貯蔵穴内	①細砂、白色細粒物を含む。 ②橙2.5YR6/8 ③酸化焰・硬質	口縁部内外面共に丁寧な磨き。体部から底部全体に外面磨耗。
2	土師器 杯	定形 口 13.8cm 底 丸底 高 5.2cm	カマド右輪軸 体面	①中・細砂、赤色細粒物、石英を含む。 ②橙2.5YR6/8・にふい橙7.5YR7/4 ③酸化焰・硬質	口縁部横など、外面磨削り後の横、磨んで、内面磨んで、工具痕残る。
3	土師器 高杯	杯部2/5残 口 (17.0cm)	西壁際	①粗・中砂、石英を含む。 ②橙2.5YR6/8・にふい橙5YR7/4 ③酸化焰・硬質	杯部外面上半横など、下半部横方向の磨んで、内面など。脚部内面棒状工具による横方向の調整。
4	土師器 高杯	1/2残 口 18.5cm 底 (13.0cm) 高 13.5cm	カマド内	①粗・中砂、石英、角閃石、5～2mmの小石を含む。 ②内赤褐色2.5YR5/8・橙7.5YR7/6 ③酸化焰・硬質	杯部内・外面共になでの後放射状の荒磨き。脚部と杯部の外面荒磨き。裾部内面など。

117号住居跡出土遺物観察表 (図21)

番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴			
5	土師砂 小形甕	3/4残 口 12.0cm 底 3.6cm 高 11.8cm	掘り方 右袖下	①粗・中砂、石英、角閃石を含む。 ②明赤褐2.5YR5/8・浅黄褐7.5YR5/4 ③酸化焙	口縁部横なで、胴部外面縦方向の荒削りの後、横なで、外面下半部分によって準純、内面上半部分的に荒磨き。			
6	土師砂 瓶	3/4残 口 20.6cm 底 9.0cm 高 23.4cm	カマド右袖輪 床直	①粗・中砂、赤色細粒物、石英を含む。 ②橙2.5YR6/8 ③酸化焙 硬質 外胴部吸灰	口縁部横なで、胴部外面斜方向の荒削りの後、横なで、下半部は強い荒なで、内面斜方向の荒磨き。			
7	土師砂 甕	3/4残 口 (14.6cm) 底 5.5cm 高 25.4cm	カマド右袖輪 床直	①粗・中砂、白・赤色細粒物、石英を含む。 ②橙5YR6/8・橙7.5YR7/6 ③酸化焙 外胴部吸灰	口縁部横なで、胴部外面下半斜方向の荒削りの後、棒状工具による斜方向のなで、内面下半斜方向の荒削り。			
番号	器 種	出土位置		石 材	長さ	幅	厚さ	重量
8	石製模造品	南西隅 埋没土中		乾紋岩	6.8cm	2.8cm	0.7cm	15.1g

120号住居跡出土遺物観察表 (図23)

番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	土師砂 高杯	杯部破片	北東壁際 床上5cm	①中・細砂、白・赤色細粒物、石英を含む。 ②内橙2.5YR6/6 外に白・橙5YR7/4 ③酸化焙・やや硬質	口縁部横なで、体部斜方向の荒なでの後、内面荒なでの後、体部上半棒状工具による横方向のなで。

121号住居跡出土遺物観察表 (図25)

番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	土師砂 杯	3/4残 口 12.5cm 底 丸底 高 4.3cm	柱穴内上層	①中・細砂、白・赤色細粒物、石英を含む。 ②明赤褐2.5YR5/8 ③酸化焙	口縁部横なで、体部横方向の荒削りの後、縦方向に荒磨き、内面放射状の荒磨き。
2	土師砂 杯	完形 口 12.8cm 底 丸底 高 4.1cm	南東壁際 床直	①中・細砂、白・赤色細粒物を含む。 ②橙5YR6/8 ③酸化焙・やや硬質	口縁部外面丁寧な横なでの後、縦方向の荒磨き。体部外面、手持ちによる荒削りの後、縦方向の荒磨き。内面、放射状の荒磨き。
3	土師砂 杯	完形 口 14.9cm 底 丸底 高 4.3cm	中央部掘り方 底面上	①中・細砂、白・赤色細粒物を含む。 ②内橙5YR6/6 外橙2.5YR6/8 ③酸化焙・硬質 外口縁部吸灰	口縁部横なで、外面手持ちによる荒削り。内面丁寧な横なでの後、横方向の荒磨き。

110号住居跡出土遺物観察表 (図31)

番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	土師砂 杯	口縁-体部1/2残 口 (14.0cm)	カマド内 灰面上24cm	①細砂を含む。 ②明赤褐2.5YR5/6 ③酸化焙	体部外面での後、横方向に荒磨き。口縁部内外面横なで、内面横方向に荒磨き後、斜方向に荒磨き。
2	須恵砂 杯	口縁-底部1/2残 口 (12.8cm) 底 (8.0cm) 高 3.8cm	東壁付近 床面上6cm	①緻密 ②灰10Y6/1 ③還元焙	右回転ロクロ成整形。底部回転糸切り難し後、周縁のみ回転荒削り。
3	須恵砂 杯	3/4残 口 13.1cm 底 8.4cm 高 3.8cm	北壁付近 床面上3cm	①緻密 ②灰10Y6/1 ③還元焙	右回転ロクロ成整形。底部回転糸切り難し。
4	須恵砂 杯	口縁-底部2/3残 口 12.6cm 底 6.4cm 高 3.8cm	南東隅 床面上7cm	①細砂を含む。 ②灰10Y6/1 ③還元焙。一側面から底部にかけて酸化され赤化。	左回転ロクロ成整形。底部回転糸切り難し後、周縁のみ回転荒削り。
5	須恵砂 杯	2/3残 口 13.4cm 底 5.5cm 高 4.5cm	東壁付近 床面直上	①細砂を含む。 ②灰7.5YR6/1 ③還元焙	右回転ロクロ成整形。底部回転糸切り難し。やや重みがある。

110号住居跡出土遺物観察表 (図31)

番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③地成	成・整形の特徴
6	須恵器 杯	口縁～底部1/3残 口 (14.2cm) 底 (6.0cm) 高 3.3cm	東壁付近 床面上8cm	①細砂を含む。 ②灰白5Y7/1 ③還元焰・軟質。体部下位～底部酸化され赤化。	右回転クロコ成整形。底部回転糸切り難し。
7	土師器 鉢	完形 口 12.3cm 底 5.3cm 高 11.0cm	南東隅 床面上8cm	①細砂、石英、角閃石、白色細粒物を含む。 ②明赤褐2.5YR5/6 ③酸化焰	底部外面磨削り。体部外面縦方向磨削り後、縦方向磨削り。内面斜方向磨削り後、口縁部内外面横なで。内面斜方向磨削り。
8	土師器 甕	口縁～胴部上半残 口 14.6cm	東壁際 床面上19cm	①細砂、角閃石を含む。 ②明赤褐2.5YR5/8 ③酸化焰	胴部外面上位横方向磨削り後、下位縦方向磨削り。部分的に縦方向磨削り。内面横方向横なで。口縁部内外面横なで。内面は有機物と思われる付着物で黒変している。
9	土師器 台付甕	胴部下位1/3残	カマド内 灰面上15cm	①細砂、雲母、角閃石を含む。 ②明赤褐2.5YR6/6 ③酸化焰	胴部外面縦方向磨削り。内面横方向横なで。内面の一部に黒い炭化物の付着が見られる。
10	須恵器 壺	胴部下位～底部 1/6残 底 (11.8cm)	中央部 床面上4cm	①白色細粒物を含む。 ②灰N6/0 ③還元焰・硬質	粘土凝成形。右回転クロコ整形。底部切り難し技法不明。付け高台。
11	須恵器 甕	胴部～底部3/5残 底 16.0cm	東壁際 床面上12cm	①細砂を含む。 ②灰7.5YR5/1 ③還元焰・やや軟質	粘土凝成り。底部外面磨削り。胴部外面横方向磨削り後、縦方向横なで。内面横なで。粘土凝の接合を押しきった指頭圧痕が顕著に残る。

113号住居跡出土遺物観察表 (図33)

番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③地成	成・整形の特徴
1	土師器 杯	完形 口 12.9cm 底 丸底 高 3.5cm	中央部 床面上2cm	①細砂を含む。 ②いぶいぶ5YR6/4 ③酸化焰	底部外面不定方向磨削り。内面なで。内面に指頭圧痕が残る。口縁部内外面横なで。
2	須恵器 杯	口縁～体部残 口 (12.6cm)	南東隅壁際 床面上5cm	①細砂、石英を含む。 ②灰白10Y8/1 ③還元焰・やや軟質	内外面なで。外面口縁部から5mmほど下位に一条の沈線が付けられている。
3	須恵器 杯	1/3残 口 (13.3cm) 底 7.0cm 高 3.7cm	北西隅 床面上4cm	①細砂、石英を含む。 ②灰白5YR7/1 ③還元焰	右回転クロコ成整形。底部切り難し技法不明。切り難し後、全面回転磨削り。
4	須恵器 杯	底部1/2残 底 (7.0cm)	北壁際 床面上6cm	①白色細粒物を含む。 ②灰7.5Y6/1 ③還元焰	右回転クロコ成整形。底部回転糸切り難し。切り難し後、磨縁のみ回転磨削り。
5	須恵器 杯	底部残 底 7.6cm	西壁際 床面上5cm	①細砂を含む。 ②灰白10Y8/1 ③還元焰	右回転クロコ成整形。底部回転糸切り難し。切り難し後、磨縁のみ回転磨削り。
6	須恵器 高台付甕	3/4残 口 18.3cm 底 12.4cm 高 6.6cm	中央部 床面上4cm	①軟質 ②灰白10Y7/1 ③還元焰	右回転クロコ成整形。底部切り難し技法不明。切り難し後、全面回転磨削り。付け高台。体部内面および高台～底部内面は黒色を呈し、いわゆる「内黒」を想起させるが、磨き整形は施されていない。
7	土師器 甕	口縁～胴部上位残 口 (21.2cm)	中央部 床面上4cm	①細砂を含む。 ②明赤褐5YR5/6 ③酸化焰	胴部外面上位横方向磨削り後、下位縦方向磨削り。内面横方向横なで。頸部から口縁部内外面横なで。胴部内面および胴部外面に指頭圧痕が残る。
8	土師器 甕	口縁～胴部上位 1/6残 口 (11.4cm)	北西隅 床面上4cm	①細砂を含む。 ②いぶいぶ7.5YR5/3 ③酸化焰	胴部外面斜方向磨削り。内面丁寧な横方向横なで。口縁部内外面横なで。
9	土師器 甕	底部～胴部下半残 底 4.5cm	カマド前 床面上32cm	①細砂を含む。 ②灰7.5YR7/6 ③酸化焰	胴部外面縦方向磨削り。内面横方向横なで。底部外面磨削り。

112号住居跡出土遺物観察表 (図34)

番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	土師器 甕	口縁～頸部1/5残 口 (18.2cm)	カマド前 床面上12cm	①細砂を含む。 ②にふいね7.5YR7/4 ③酸化焙	胴部外側横なで焼割り。口縁部内外面横なで、外面には指頭圧痕が残る。
2	土師器 甕	口縁～頸部1/2残 口 (10.0cm)	カマド前 床面上9cm	①細砂を含む。 ②にふいね7.5YR7/4 ③酸化焙	胴部外側縦方向焼割り。内面縦方向焼なで、口縁部内外面横なで。外面には指頭圧痕が残る。

114号住居跡出土遺物観察表 (図36)

番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	土師器 小形甕	2/3残 口 11.0cm 底 5.2cm 高 14.1cm	カマド右脇 床面直上	①緻密 ②橙7.5YR6/8 ③酸化焙・やや硬質	胴部外面上位縦方向焼割り後、下半縦方向焼割り。縦方向焼磨き。底部外面焼割り。胴部内面縦方向焼なで。口縁部内外面横なで。
2	土師器 甕	1/2残 口 (13.6cm) 底 6.7cm 高 16.4cm	カマド前 床面下23cm	①緻密 ②赤褐10R5/4 ③酸化焙・硬質	胴部外面下部斜方向焼割り。上半～中位縦方向焼なで。内面上位斜方向焼割り後、上端の磨りを残して磨なで。口縁部内外面横なで。
3	土師器 甕	完形 口 16.4cm 底 7.2cm 高 29.4cm	カマド前 床面直上	①細砂を含む。 ②明赤褐2.5YR5/8 ③酸化焙	底部外面焼割り。胴部外面上半縦方向焼割り後、縦方向焼磨き。下半縦方向焼割り後、横方向焼磨き。内面斜方向・横方向焼なで。口縁部内外面横なで。
4	須恵器 蓋	体部破片	カマド左脇 床面上3cm	①黒色細粒物を含む。 ②灰7.5Y6/1 ③還元焙・硬質	ロクロ成型。外面にはウキ目風の平行波線が見られる。

115号住居跡出土遺物観察表 (図37)

番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	土師器 杯	1/2残 口 12.6cm 底 丸底 高 4.9cm	北東隅 床面下4cm	①緻密 ②赤褐5YR4/6 ③酸化焙	体部横方向焼割り後、縦方向焼磨き。下位横方向焼割り。内面なでの後、斜方向の細い焼磨き。口縁部横なで。
2	土師器 杯	1/4残 口 (13.4cm) 底 (6.6cm) 高 6.1cm	北東壁付近 床面下5cm	①細砂を含む。 ②にふいね5YR5/3 ③酸化焙	底部外面焼割り。体部外面横方向焼なで後、縦方向焼磨き。内面縦方向・斜方向焼割り後、縦方向焼磨き。口縁部内外面横なで。
3	土師器 甕	口縁～頸部破片 口 (16.0cm)	北東隅 床面上1cm	①細砂を含む。 ②明赤褐5YR5/6 ③酸化焙	外面側の広い工具による焼磨き。内面横方向焼割り。口縁部内外面横なで。
4	土師器 甕	体部下位～底部 底 5.2cm	北東壁付近 床面下3cm	①細砂、石英、赤色細粒物を含む。 ②明赤褐2.5YR5/6 ③酸化焙	底部外面焼割り。指頭圧痕が残る。胴部外面縦方向焼割り後、縦方向・斜方向の焼磨き。内面斜方向焼なで。底部内面焼割り。
5	土師器 甕	頸部～胴部上位 1/4残	北東隅 床面上3cm	①細砂を含む。 ②赤褐5YR4/6 ③酸化焙	胴部外面上部斜方向焼割り後、中位縦方向焼割り。内面横方向焼なで。指頭圧痕が残る。

111号住居跡出土遺物観察表 (図38)

番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	土師器 杯	口縁～体部1/4残 口 (15.2cm)	埋没土中	①細砂を含む。 ②明赤褐2.5YR5/6 ③酸化焙	口縁部～体部外面丁寧な焼磨き。体部内面丁寧なで。口縁部内面横なで焼磨き。
2	土師器 甕	口縁～胴部上位 1/5残 口 (21.8cm)	北東壁 床面上12cm	①中砂、石英、輝石を含む。 ②にふいね5YR5/4 ③酸化焙	胴部外面縦方向焼割り。内面縦方向焼なで。口縁部横なで。
3	土師器 甕	胴部～胴部上位 1/4残 口 (9.7cm)	北東壁付近 床面上5cm	①赤色細粒物を含む。 ②橙2.5YR6/8 ③酸化焙	胴部外面なでの後、横方向焼磨き。口縁～頸部横なで後、長い楕圓状の焼磨き。体部内面縦方向焼なで。口縁部内面横なで後、横方向焼磨き。

111号住居跡出土遺物観察表 (図38)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
4	土師器 甕	口縁～胴部上半 口 (16.0cm)	北壁付表 床面上5cm	①細砂を含む。 ②明赤焼2.5YR5/6 ③酸化焙	胴部外面木炭状工具による縦方向のなで。内面横方向 なで。口縁部内外面横なで。内面に指頭圧痕が残る。

116号住居跡出土遺物観察表 (図39)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	土師器 甕	口縁～頸部1/5残 口 (20.0cm)	南西隅 床面上24cm	①細砂、角閃石、白・赤色 細粒物を含む。 ②明赤焼5YR5/6 ③酸化焙・やや硬質	胴部外面横方向に捩削り。内面横方向なで。口縁部内 外面横なで。

3. 古墳出土遺物

1号古墳出土遺物観察表 (図44・45)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	土師器 杯	4/5残 口 12.2cm 底 4.7cm 高 5.9cm	後内側部東 埋没土中	①細砂、角閃石、赤色細粒 物を含む。 ②焼7.5YR7/6 ③酸化焙	狭小な平底の底面から彎曲して立ち上がる口縁部は上 位外面に弱い稜をもったあと強く外反する。口縁部の 上位は横なで、外面の下半は斜方向の捩削り。内面は なで後横方向に棒状工具による磨きを加えられている。
2	須恵器 杯	1/4残 口 (11.0cm) 底 (6.0cm) 高 3.5cm	西ぐびれ部東 埋没土中	①細砂を含む。 ②灰白5Y6/1 ③還元焙	口縁部は斜め上方に立ち上がり先端は細く尖がる。右 回転ロコ成形成。底部は回転糸切り難し後調整であ る。
3	須恵器 杯	底部3/4残 底 (7.1cm)	西ぐびれ部東 埋没土中	①細砂を含む。 ②灰白5Y7/1 ③還元焙	底部片である。成形は右回転ロコ成形成で、底部は回 転糸切り難し後調整である。
4	土師器 鉢	1/2残 口 (11.0cm) 高 6.5cm	後内側部東 埋没土中	①細砂、石英、輝石を含む。 ②赤褐2.5YR4/6 ③酸化焙	口縁部は先端でぐびれ強く外反する。先端は横なで、 外面は縦方向の刷毛目後下位になでが施される。内面 は斜あるいは横方向のなでが施される。
番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③硬質④刷毛目	成・整形の特徴
5	形象埴輪 人物 男性	現存高 17.5cm 頭部高 14.5cm 帽子径 9.5cm	西ぐびれ部東 埋没土中	①赤色物、灰物、細砂。 ②焼5YR6/8 ③堅緻	顔子を被っている。頭髪は左右を英瓦片にまとめ、胸 に垂下させていると思われる。後髪も一つたばねて背 中にたっていることが割面から確認できる。目、 口はやや開きざまみにあけられている。顔は丁寧にな でられ、顔部下に赤い彩色が施される。帽子の部分と後 頭部に刷毛目を残すが、帽子は文様として、後頭部は 頭髪を表現したものか。
6	形象埴輪 人物 男 左上半身	現存高 21.0cm	西ぐびれ部東 埋没土中	①赤・白色物、灰物、細砂。 ②焼5YR6/6 ③堅緻	背中の中央には後頭部でたばねられた頭髪が長く下 がる。左手は斜め上方にさし上げられ、手のひらは横方 向を向く。着衣の表現はみられず腰に幅2cmの紐また は帯が巻かれている。腕は先端を棒状にし、肩部に柄 を差し込むような接合方法をとっている。肩部から腕 にかけては丁寧になでられているが割部には刷毛目を残 している。9と同一個体と思われる。
7	形象埴輪 人物 肩部		西ぐびれ部東 埋没土中	①赤色物、灰物。 ②赤・白・焼7.5YR6/4 ③堅緻	往甲着装した人物の肩近くから割部にかけての破片で ある。左右の丸味から、背部の可能性がある。縦方向 の沈線で頸部と往甲を表現している。頸部、肩部を区 画する粘土層が割離している。往甲部分で沈線間に赤 彩を施す部分がある。
8	形象埴輪 人物 脇腹	現存高 14.5cm	西ぐびれ部東 埋没土中	①灰物、中・細砂 ②赤・白・焼7.5YR6/4 ③堅緻	7と同一個体と思われる。脇下から割部、腰部にか けて残存する。側面上端に半円形になでが残り、腕を挿 入した調整痕である。腰部に粘土製の刺刺痕がある。 腰部にも一部沈線が残る。側面近くに赤彩がある。

1号古墳出土土物観察表 (図46・47)

番号	器 種	量 目	出土位置	①赤土②赤土調③硬皮④刷毛目	成・整形の特徴
9	形象埴輪 人物 胴部	現存高 18.7cm 胴回り (12.0cm)	西くびれ部埋 埋設土中	①赤・白色物、鉱物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③硬皮	胴部正面の残存である。胴部で一度しまった着衣は下半に向けて緩やかに開く。腰部には幅2cmの紐または帯が巻かれている。上半身に残る刺繍痕は胴部から垂れ下がった左右の美豆貝が固定された痕跡と思われる。外面には縦方向の刷毛目を残す他は特に着衣の表現はみられない。
10	形象埴輪 人物 顔 頸		西くびれ部埋 埋設土中	①赤色物、鉱物、細砂。 ②橙5YR6/8 ③硬皮	口は細く引かれている。顎は弱く表現され、赤い彩色が施されている。頸部から耳下には粘土の刺り付け痕があり、左側に一部残存する状態からは髪を短くたばねた表現がされていたと思われる。または、甲などとの表現の一部とも考えられる。
11	形象埴輪 人物 耳		前縁部埋 埋設土中	①硬皮。 ②橙7.5YR7/6 ③硬皮	顔面に円形の粘土板を貼り、周縁部を高く、環状に盛り上げ耳を表現している。
12	形象埴輪 人物	現存高 11.0cm	西くびれ部埋 埋設土中	①白色物、鉱物、細砂。 ②橙5YR7/8	背、胸のいずれかを表現したものか断定しかねるが、残存右側に垂下する刺繍痕は胸前に結びた美豆貝が表現されていた可能性が高い。頸部には丸玉を連ねた首飾りが表現されている。丸玉には彩色が施されている。
13	形象埴輪 人物 右手	現存高 8.5cm	西くびれ部埋 埋設土中	①赤色物、鉱物、細砂。 ②橙7.5YR7/6 ③硬皮	指先は欠損しているが、指を伸ばした表現である。手のひら全体に刺繍痕がある。小指付近に赤く彩色が施されている。
14	形象埴輪 人物 左手	現存高 7.5cm	西くびれ部埋 埋設土中	①赤色物、中・細砂。 ②橙5YR7/8	指先は欠損しているが親指は開いた表現である。手のひらには接合痕があり、胴部等に接していたと思われる。
15	形象埴輪 人物 右手		周縁 埋設土中	①硬皮 ②橙7.5YR7/6 ③硬皮	右手のみの残存、指も表現されていたが親指を除いて欠失する。指間は丁寧になでられている。手のひらには接合痕がある。
16	形象埴輪 人物 右肩		西くびれ部埋 埋設土中	①赤色物、鉱物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③硬皮	先端を棒状に成形した胴部部にさし込んだ状態が明確である。外面は非常に丁寧になでられている。
17	形象埴輪 人物 足?	幅 3.6cm	前縁部埋 埋設土中	①赤色物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③硬皮	小片であるが、腰かけたり、あぐらをかいている人物の足(つま先)であろう。裏面折れた端部一部刺繍痕がある。
18	形象埴輪 器財 厨		前縁部埋 埋設土中	①赤色物、鉱物、細砂。 ②橙7.5YR7/6 ③硬皮	表面には荒書による刺繍文が区画され赤い彩色が施される。側面にはシャープな平面面がつくられており、円筒状の基部と接合していたと思われる。
19	形象埴輪 人物		西くびれ部埋 埋設土中	①赤色物、鉱物、中・細砂。 ②橙5YR6/8 ③硬皮 ④9本	人物と思われる形象埴輪の着衣端と基部上位の破片と思われる。外面はなで、刷毛目ともに丁寧に施している。
20	形象埴輪 動物 馬 立髪	現存高 4.5cm 現存長 16.6cm	西くびれ部埋 埋設土中	①鉱物、中・細砂、細砂。 ②にぶい橙7.5YR7/4 ③硬皮	立髪の一部で、右端部は立髪先端の円柱表現が接合すると思われる。外面には刷毛目が残っており、胴部と接合する部分はややでている。
21	形象埴輪 動物 馬		西くびれ部埋 埋設土中	①鉱物、中・細砂。 ②にぶい橙7.5YR7/4	右側部から胴部の破片と思われる。幅1cm弱の粘土紐が横行する。外面その他の部分には刷毛目が施される。内面は丁寧なでである。
22	形象埴輪 馬?		西くびれ部埋 埋設土中	①鉱物、中・細砂。 ②にぶい橙7.5YR7/4	胴部の破片か。外面の大半は刺繍しており、部分的に刷毛目を確認できる。内面の調整は複雑なでで、粘土紐の接合痕を消し残している。
23	形象埴輪		西くびれ部埋 埋設土中	①鉱物、細砂。 ②橙7.5YR7/6 ③硬皮	形象埴輪の一部と思われるが部位等については確定できない。指などでより縦方向の微細起を演出させている。残存下部には横なでが施されている。
24	円筒埴輪 朝顔形	口縁〜胴部上位 1/3残 高 18.9cm残	東くびれ部埋 埋設土中	①赤色物、細砂。 ②にぶい橙5YR7/4 ③艶弱 ④8本	口縁部はラック状に外反、肩部の張りあまり認められない。頸部の尖帯はつままれ、断面三角形を呈する。胴部の尖帯は高い。胴部外面には斜方向の刷毛目が施される。

1号古墳出土土物観察表 (図47・48)

番号	器種	量目	出土位置	①粘土②赤褐色硬土③刷毛目	成・整形の特徴
25	円筒埴輪 朝顔形	胴部～胴部1/2残	西くびれ部埋 埋設土中	①赤色物、鉱物、中・細砂。 ②橙5YR6/6 ③壓紋 ④10本	口縁部下半から胴部第一段にかけての残存である。突帯は断面台形であるが幅広い。透孔一对は突帯の下位に位置するが長円形を呈し重んでいる。外面調整の刷毛目は口縁部、胴部とも斜方向に施す。内面は粗雑なようで、上位に刷毛目を残す。
26	円筒埴輪 円筒形	口縁～胴部破片 口 (22.4cm) 高 18.9cm残	後門部東端 埋設土中	①赤色物、鉱物、細砂。 ②にぶい橙5YR6/4 ③壓紋 ④8本	口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。突帯は断面が低い台形状を呈する。透孔は半円形を意識した形状である。外面は縦方向に単位のやや短い刷毛目、内面にも粗雑な刷毛目を残す。
27	円筒埴輪 円筒形	口縁～胴部破片 口 (19.8cm) 高 15.4cm残	後門部東端 埋設土中	①赤色物、鉱物、中・細砂。 ②橙5YR6/8 ③壓紋 ④8本	口縁部から胴部上位の破片である。口縁部先端は強く外反し、外方に向くシャープな平坦面が置り目によりつくられている。突帯は断面台形状、その直下に円形の透孔が残存する。外面の刷毛目は短い刷毛目である。内面は刷毛目の上に粗雑な面を重ねている。
28	円筒埴輪 円筒形	口縁～胴部上位 1/5残 口 (22.5cm) 高 15.4cm残	後門部東端 埋設土中	①赤色物、鉱物、中・細砂。 ②橙5YR6/8 ③壓紋 ④8本	外反する口縁部の先端は内面が削られる。突帯は細いが安定したもので断面台形である。突帯の下位に円形の透孔がある。口縁部の先端は内外面ともやや幅広い横な面である。内面は縦あるいは斜方向に粗雑な面を施す。
29	円筒埴輪 円筒形	口縁～胴部破片 高 12.1cm残	後門部東端 埋設土中	①赤色物、鉱物、中・細砂。 ②橙5YR6/6 ③壓紋 ④10本	突帯は断面台形状を呈するが、幅広く、崩れている。突帯の直下に円形の透孔が配置される。外面は刷毛目内面はなでている。
30	円筒埴輪 円筒形	口縁～胴部破片 高 11.6cm残	前部東端 埋設土中	①赤色物、鉱物、細砂。 ②橙7.5YR6/6 ③壓紋 ④10本	突帯は断面台形状を呈するが、やや狭い。外面は刷毛目後、先端は横な面である。突帯寄り付け後の面が幅広い。内面は上位の一部に刷毛目を残す他はなでている。
31	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 口 (22.6cm) 高 6.5cm残	前部東端 埋設土中	①鉱物、細砂。 ②橙7.5YR6/6 ③壓紋 ④不明	先端は強く外反して外方を向く。内面は弱い受け口状を呈する。外面の一部は赤色化している。
32	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 6.0cm残	東くびれ部埋 埋設土中	①赤色物、鉱物、細砂。 ②赤褐色5YR4/6 ③壓紋 ④8本	緩やかに外反して立ち上がる。器内は全体に薄いが焼成はしっかりしている。外面は刷毛目を斜方向に施す。先端の横な面は幅広く広い。
33	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 口 (22.2cm) 高 5.4cm残	前部東部 埋設土中	①赤色物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③壓紋 ④不明	先端はやや強く外反する。外面は刷毛目、内面は一部に刷毛目を残す他は粗雑な面になっている。
34	円筒埴輪 円筒形	口縁部下半～胴部 上位2/5残	西くびれ部埋 埋設土中	①赤色物、鉱物、中・細砂、 粗砂。 ②橙7.5YR7/6 ③壓紋 ④8本	胴部と肩部に比較的精緻なつくりの突帯がめぐる。肩部突帯下位の一对の透孔は半円形を呈していたか。外面の調整は口縁部がなで、胴部が刷毛目である。内面は口縁部接合時の調整面が残存する。
35	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東くびれ部埋 埋設土中	①赤色物、鉱物、細砂。 ②にぶい赤褐色5YR5/4 ③壓紋 ④9本	突帯は上辺の幅が広い台形状である。突帯直下には透孔がある。外面は刷毛目、内面は指面による面である。
36	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東くびれ部埋 埋設土中	①赤色物、鉱物、細砂。 ②橙7.5YR6/6 ④9本	突帯は断面が低い台形状を呈する。胴部には円形に近い透孔が一对配置されている。外面の刷毛目は斜方向に施される。内面は指面による粗雑な面である。
37	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	前部東端 埋設土中	①赤色物、鉱物、中・細砂。 ②明赤褐色5YR5/6 ③壓紋 ④7本	突帯は断面台形状を呈する。外面は刷毛目、内面はなでである。
38	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	後門部東端 埋設土中	①赤色物、鉱物、粗・中・ 細砂。 ②赤褐色5YR4/6 ③壓紋 ④7本	外面には刷毛目、内面には一部に刷毛目を残し、なでが施される。外面には弧状の発記号が認められる。
39	円筒埴輪 円筒形	胴部1/2残	西くびれ部埋 埋設土中	①鉱物、中・細砂。 ②橙7.5YR7/6 ③壓紋 ④9本	口縁部から胴部にかけての残存か。突帯は断面台形を保つがやや崩れている。突帯の下位に透孔一对があるが半円形を意識した形状か。外面調整の刷毛目は斜方向後縦方向に施したか。内面にも刷毛目が残存する。
40	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	後門部東端 埋設土中	①赤色物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③壓紋 ④9本	突帯は断面台形状を呈するが広くつぶれている。透孔は一部が残存するが半円形を呈していたと思われる。

1号古墳出土遺物観察表 (図48・49)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③硬さ④刷毛目	成・整形の特徴
41	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東くびれ部埋 埋設土中	①赤色物、黏物、細砂。 ②にぶい橙7.5YR6/4 ③堅緻 ④7本	42と同一個体と思われる。透孔は半円形と思われる。突帯は赤色化し、彩色が施されていた可能性が高い。
42	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東くびれ部埋 埋設土中	①赤色物、黏物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻 ④7本	突帯は断面台形状であるが著しく低い。透孔は半円形を呈すると思われる。外面に刷毛目、内面はなでである。突帯と胴部の一部は赤色化しており彩色あるいは本体と異なった胎土を貼り付けたか。
43	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東くびれ部埋 埋設土中	①赤色物、黏物、細砂。 ②赤褐色5YR4/6 ③堅緻 ④9本	突帯は断面三角形であるが、下方にたれさがるような貼り付けである。胴部には透孔の一部が残存する。外面の刷毛目は斜方向に施される。内面は指頭によるなでである。
44	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	西くびれ部埋 埋設土中	①赤色物、黏物、中・細砂、 細礫。 ②橙5YR6/6 ③堅緻 ④不明	口縁部から胴部にいる破片か。突帯は断面台形であるが粗雑な貼り付けである。突帯下位に円形の透孔がある。外面はなで、内面も粗雑ななでを施すが上位には斜方向の刷毛目が残る。
45	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東くびれ部埋 埋設土中	①黏物、細砂。 ②橙7.5YR6/6 ③堅緻 ④9本	突帯の断面は底辺が幅広い台形状を呈する。外面に刷毛目、内面は指頭によるなでが施される。
46	円筒埴輪 円筒形	胴部～底部1/2残 底 (13.9cm) 高 22.0cm残	西くびれ部埋 埋設土中	①白色物、黏物、中砂、細 礫。 ②橙黄褐色7.5YR8/3 ④7本	基底部と胴部第一段の残存である。突帯は低い台形状を呈する。胴部に対一の円形透孔がある。外面は縦方向の刷毛目、内面は指頭による粗雑ななでを施す。基底部の下位に炭素吸着の部分がある。
47	円筒埴輪 円筒形	胴部～底部1/4残 底 (11.2cm) 高 27.4cm残	西くびれ部埋 埋設土中	①赤色物、黏物、中・細砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻 ④9本	基底部から胴部第二段まで残存する。突帯は上段が断面三角形に対し下段は低い台形状を保っている。外面の調整は縦方向にやや単位の粗い刷毛目、内面は指頭による粗雑ななでである。胴部第一段に透孔一箇所が確認できる。
48	円筒埴輪 円筒形	口縁部大型破片 高 11.9cm残	西くびれ部埋 埋設土中	①赤色物、中・細砂、細礫。 ②橙5YR6/8 ③堅緻 ④10本	先端で外反し、外方に向く平面をもつ。突帯の直下に小円形と思われる透孔を穿っている。調整は外面が斜方向の刷毛目である。内面は粗雑ななで、刷毛目や粘土の接合痕を残す。外面に二条の寛記号がある。
49	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 7.0cm残	西くびれ部埋 埋設土中	①赤色物、黏物、中・細砂。 ②橙5YR6/8 ③堅緻 ④8本	調整は外面が縦方向の刷毛目後先端を横なでする。内面はなで後、上位部分に斜方向の刷毛目を施す。先端は横なでである。
50	円筒埴輪 円筒形	口縁部付近破片	東くびれ部埋 埋設土中	①細砂。 ②明赤褐色5YR5/8 ③堅緻 ④11本	外面に三条の寛記号が認められる。
51	円筒埴輪 円筒形	口縁部付近破片	前部埋 埋設土中	①赤色物、細砂、細礫。 ②赤褐色5YR4/8 ③堅緻 ④不明	外面は丁寧になでられ、二条の寛記号が見られる。
52	円筒埴輪 円筒形	口縁部付近破片	後部東端埋 埋設土中	①赤色物、細砂。 ②明赤褐色5YR5/6 ③堅緻 ④11本	外面に二条の寛記号が認められる。
53	円筒埴輪 円筒形	口縁部付近破片	東くびれ部埋 埋設土中	①赤色物、細砂。 ②明赤褐色5YR5/8 ③堅緻 ④12本	外面に一条の寛記号が認められる。
54	円筒埴輪 円筒形	口縁部付近破片	西くびれ部埋 埋設土中	①黏物、中砂。 ②明黄褐色10YR7/6 ④8本	外面に弧状の寛記号が削られている。調整は内外面とも刷毛目が施される。
55	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東くびれ部埋 埋設土中	①細砂。 ②にぶい赤褐色5YR5/6 ③堅緻 ④9本	外面に一条の寛記号が認められる。刷毛目は弱いタッチでなで状を呈する。
56	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	後部東端埋 埋設土中	①赤色物、粗・中砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻 ④12本	外面に二条の寛記号が認められる。
57	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	後部東端埋 埋設土中	①黏物、細砂。 ②橙7.5YR6/6 ③堅緻 ④11本	外面は刷毛目が施され、一条の寛記号が削られている。内面は細い横なで、その下位は縦方向のなでである。

1号古墳出土遺物観察表 (図49・50)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土色調②硬度③刷毛目	成・整形の特徴
58	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東くびれ部埋 埋設土中	①赤色物、細砂。 ②明赤褐5YR5/6 ③堅緻 ④9本	外面に二条の寛記号が認められる。刷毛目は弱くなくて状に施される。
59	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東くびれ部埋 埋設土中	①細砂。 ②明赤褐5YR5/6 ③堅緻 ④12本	外面に二条の寛記号が認められる。
60	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東くびれ部埋 埋設土中	①細砂。 ②橙5YR6/6 ④9本	外面には一条の寛記号が確認される。
61	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周堀 埋設土中	①中砂。 ②にぶい黄橙10YR6/3 ④10本	外面に二条の寛記号が認められる。
62	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	後円部東堀埋 埋設土中	①赤色物、細砂。 ②橙7.5YR6/6 ③堅緻 ④10本	外面に一条、弧状の寛記号が認められる。
63	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東くびれ部埋 埋設土中	①細砂。 ②にぶい橙7.5YR6/4 ③堅緻 ④11本	外面に二条の寛記号が認められる。
64	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	後円部東堀埋 埋設土中	①赤色物、細砂。 ②明赤褐5YR5/5 ③堅緻 ④不明	なで調整を施した外面には寛記号が残存する。
65	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	後円部東堀埋 埋設土中	①細砂。 ②にぶい赤褐5YR5/4 ③堅緻 ④9本	外面には二条の寛記号が認められる。
66	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	後円部東堀埋 埋設土中	①赤色物、紅物、粗砂。 ②明赤褐5YR5/6 ③堅緻 ④9本	外面には工具痕が確認できる。
67	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	後円部東堀埋 埋設土中	①粗・中・細砂。 ②にぶい褐7.5YR5/4 ③堅緻 ④10本	弱いタッチの刷毛目が施された外面には一条の寛記号が確認できる。
68	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周堀埋 埋設土中	①赤色物、紅物、細砂。 ②にぶい橙5YR6/4 ③堅緻 ④12本	外面には一条の寛記号が認められる。
69	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周堀埋 埋設土中	①赤色物、紅物、細砂。 ②内いぶい褐7.5YR5/3 外明赤褐5YR5/6 ③堅緻 ④10本	非常に弱いタッチの刷毛目が施された外面には二条の寛記号が確認される。
70	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周堀埋 埋設土中	①赤色物、細砂。 ②明赤褐5YR5/6 ③堅緻 ④不明	外面に一条の寛記号が確認される。
71	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周堀埋 埋設土中	①赤色物、細砂。 ②明赤褐5YR5/6 ③堅緻 ④6本	外面には弧状の寛記号が確認される。
72	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周堀埋 埋設土中	①細砂。 ②にぶい褐7.5YR5/3 ③堅緻	なで調整を施した外面には寛記号が確認できる。
73	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周堀埋 埋設土中	①赤色物、細砂。 ②明赤褐5YR5/6 ③堅緻 ④8本	外面には一条の寛記号が確認される。
74	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周堀埋 埋設土中	①赤色物、細砂。 ②橙7.5YR6/6 ③堅緻 ④12本	外面に一条、弧状の寛記号が認められる。
75	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東くびれ部埋 埋設土中	①赤色物、細砂。 ②にぶい橙5YR6/4 ③堅緻 ④10本	外面に一条の寛記号が確認される。
76	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 6.2cm残	西くびれ部埋 埋設土中	①赤色物、粗砂、細礫。 ②橙5YR6/8 ④不明	先端は丸味のある平坦面を外方に向ける。外面の調整は丁寧ななでがなされる。内面は斜方向の刷毛目状、先端に横なでを加えている。

1号古墳出土土物観察表 (図50)

番号	器種	量目	出土位置	①粘土②赤褐色硬皮③刷毛目	成・整形の特徴
77	円筒埴輪 円筒形	口縁部大型破片 高 10.2cm残	西くびれ部埋 埋没土中	①赤色物、鉱物、粗・中砂。 ②橙5YR7/6 ③炭粉 ④11本	先端に向かって緩やかに外反して立ち上がる。先端はシャープな平坦面が形成される。外面は斜方向刷毛目、内面はなでを施した後、内外面の先端は横なでを施す。
78	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 4.7cm残	西くびれ部埋 埋没土中	①赤色物、鉱物、中砂。 ②橙5YR6/6 ③炭粉 ④不明	調整は先端が内外面とも横なで、内面はその下位に斜方向の刷毛目を残す。
79	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 11.7cm残	西くびれ部埋 埋没土中	①赤色物、鉱物、中砂。 ②橙5YR6/6 ③炭粉 ④13本	弧状に外反し、先端にはシャープな平坦面が形成されている。突帯は低い台形の断面形である。調整は先端に幅広い横なでがなされ、その下位は外面が刷毛目、内面が指頭によるなでが施される。
80	円筒埴輪 円筒形	口縁～胴部上位残 高 10.3cm残	東くびれ部埋 埋没土中	①鉱物、中・細砂。 ②にぶい橙7.5YR6/4 ③炭粉 ④8本	口縁部は先端で外反し、平坦面をつくる。突帯は断面が低い台形状である。外面の刷毛目はやや粗雑である。内面にも刷毛目が施される。
81	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 7.9cm残	東くびれ部埋 埋没土中	①赤・白色物、細砂。 ②にぶい赤褐5YR5/4 ③炭粉 ④6本	内外面ともクッチの弱い刷毛目が粗雑に施される。外面に置記号の一部が残存する。
82	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 7.8cm残	後円部東端 埋没土中	①赤色物、細砂。 ②にぶい橙5YR6/4 ③炭粉 ④8本	先端は緩やかに外反、平坦面は斜め上方を向く。外面には斜方向の刷毛目が施される。
83	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 3.2cm残	後円部東端 埋没土中	①細砂。 ②明赤褐5YR5/6 ③炭粉	器内は非常に薄い。
84	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 4.4cm残	東くびれ部埋 埋没土中	①赤・白色物、鉱物、細砂。 ②明赤褐5YR5/6 ③炭粉 ④9本	先端は緩やかに外反、内側は弱い受け口状を呈する。
85	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 3.3cm残	東くびれ部埋 埋没土中	①細砂。 ②明赤褐5YR5/6 ③炭粉	先端は屈曲するように外反し、内面は弱い受け口状を呈する。
86	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 3.4cm残	後円部東端 埋没土中	①赤色物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③炭粉 ④8本	先端は断面M字状に近い形状となる。
87	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 5.1cm残	後円部東端 埋没土中	①鉱物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③炭粉 ④16本	先端は平坦面を外方に向ける。調整は内外面とも刷毛目を施し、内面の先端は横なでを重ねている。
88	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	前埴部埋 埋没土中	①細砂。 ②外橙5YR6/6・内橙2.5YR6/6～灰褐10YR5/2 ③炭粉 ④13本	外面に置記号の一部が残存する。
89	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	後円部東端 埋没土中	①赤色物、鉱物、中砂、細砂。 ②橙5YR6/6 ③炭粉 ④12本	突帯は削れた台形を呈する。突帯直下に円形と思われる透孔が穿たれている。調整は外面が縦方向の刷毛目を施した後突帯を貼りつける。内面は指頭によるなで後一部に刷毛目を施す。
90	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	後円部東端 埋没土中	①鉱物、細砂、細礫。 ②橙5YR5/6 ③炭粉 ④8本	円形と思われる透孔の一部が残存する。突帯は断面台形状を呈する。調整は外面が斜方向の刷毛目、内面はなで後上部に斜方向の刷毛目が施される。
91	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	後円部東端 埋没土中	①鉱物、中砂、細礫。 ②橙7.5YR7/6 ③炭粉 ④7本	突帯は断面が三角形を呈する。突帯の下位には円形と思われる透孔を有する。調整は外面が縦方向の刷毛目後突帯を貼りつける。内面は指頭によるなでを施す。
92	円筒埴輪 円筒形	胴部大型破片	西くびれ部埋 埋没土中	①赤色物、鉱物、中・細砂。 ②橙5YR6/8 ③炭粉 ④8本	突帯は断面台形状を呈するが低いものである。突帯は上側の丸みが弱く、半円形を意図した形状となっているか。
93	円筒埴輪 円筒形	胴部大型破片	西くびれ部埋 埋没土中	①鉱物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③炭粉 ④9本	突帯は断面台形状であるが低く、今や崩れている。突帯下に円形の透孔を有する。残存右端下にも小孔が穿たれているか。内面の調整は粗雑で粘土粒の集合体を残す。

1号古墳出土遺物観察表 (図50～51)

番号	器種	部位	出土位置	①粘土②赤色土③硬質④刷毛目	成・整形の特徴
94	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	後円部東端 埋没土中	①赤色物、鉱物、中砂。 ②楕5YR7/8 ③彫削 ④10本	器面は摩耗が著しい。突帯は断面が低い台形を呈し、その貼り付けは粗雑である。突帯の直下に円形と思われる透孔がある。調整は外面が刷毛目、内面がなで。
95	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	後円部東端 埋没土中	①赤・白色物、鉱物、中砂、 細礫。 ②楕5YR7/8 ③彫削 ④7本	器面、割れ口の摩耗が著しい。突帯は低い台形の断面形を呈する。突帯の下段には径7.4cm程の円形の透孔が設けられる。調整は外面が縦方向の刷毛目、内面はなでが施される。
96	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東くびれ部端 埋没土中	①細砂。 ②楕7.5YR6/6 ③彫削 ④10本	突帯は断面台形状であるが、やや崩れる。円形の透孔が配される。内面にも縦方向の刷毛目が配される。
97	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	後円部東端 埋没土中	①赤色物、鉱物、中砂、細 礫。 ②楕5YR6/8 ④14本	断面三角形の低い突帯がつく。この下段には円形と思われる透孔の一部が残存する。外面の調整は縦方向の刷毛目後突帯貼り付けをする。内面は指頭による粗い なでが施される。
98	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	西くびれ部端 埋没土中	①鉱物、細砂。 ②にぶい楕5YR6/4 ③彫削 ④10本	突帯は断面台形状を呈している。穿孔は小円形と思われる。調整は外面が刷毛目、内面は縦方向の指頭による なでが施されている。
99	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	西くびれ部端 埋没土中	①鉱物、中砂、細礫。 ②明黄褐10YR7/6 ③彫削 ④8本	突帯は断面台形状を呈している。調整は外面の刷毛目、突帯貼り付け後のなでとしに粗雑である。内面も指頭による粗雑ななでである。透孔の一部が残存する。
100	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東くびれ部端 埋没土中	①赤色物、細砂。 ②明褐7.5YR5/6 ③彫削 ④9本	突帯は断面台形状を呈する。突帯の下段に透孔が配されている。
101	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	後円部東端 埋没土中	①赤色物、細砂。 ②明赤褐5YR5/6 ③彫削 ④9本	突帯は断面台形状を呈するがやや幅狭くなっている。透孔は円形を呈すると思われる。
102	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	後円部東端 埋没土中	①赤色物、鉱物、中砂。 ②楕5YR6/6 ④7本	口縁部の破片と思われ、上端は外反ぎみに立ち上がる。突帯は断面台形状を呈する。調整は外面が斜方向の刷毛目、内面はなで後、上位に斜方向の刷毛目が施される。
103	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	西くびれ部端 埋没土中	①鉱物、中砂。 ②楕5YR6/6 ③彫削 ④9本	口縁部の破片の可能性もあるが判然としない。突帯の断面形状は低い三角形である。調整は外面が刷毛目、内面がなである。
104	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	後円部東端 埋没土中	①赤・黒色物、鉱物、中砂、 細礫。 ②楕5YR6/8 ④14本	断面三角形の突帯は崩れている。調整は外面が縦方向の刷毛目を施した後突帯を貼り付けている。内面は縦方向の指頭によるなで。一部上位に刷毛目がみられる。
105	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	西くびれ部端 埋没土中	①赤色物、細砂。 ②にぶい楕5YR6/4 ④11本	突帯は断面台形状で小規模な突出である。貼り付けは粗雑である。外面の調整は縦方向の刷毛目である。
106	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	西くびれ部端 埋没土中	①細砂。 ②にぶい楕5YR6/4 ④11本	突帯は崩れ、断面形状は三角形に近い台形を呈する。調整は外面が刷毛目、内面が粗雑ななである。
107	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	後円部東端 埋没土中	①鉱物、中砂、細礫。 ②楕5YR6/6 ④不明	突帯は台形状を呈するが低く、著しく崩れている。調整は外面が丁寧ななで後、突帯を貼り付ける。内面は縦方向に指頭によるなでを施す。
108	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	後円部東端 埋没土中	①鉱物、中砂。 ②楕5YR6/6 ③彫削 ④9本	突帯は低く傾いた台形を呈する。調整は外面が縦方向の刷毛目、内面がやや斜方向の刷毛目である。
109	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	後円部東端 埋没土中	①鉱物、中砂。 ②楕7.5YR7/6 ④10本	突帯は低く、M字状の台形を呈する。調整は刷毛目後、突帯貼り付けのためのなで、内面は指頭によるなで後、部分的に刷毛目を施す。
110	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東くびれ部端 埋没土中	①赤色物、細砂。 ②赤褐5YR4/6 ③彫削 ④7本	突帯は断面三角形で低い。
111	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東くびれ部端 埋没土中	①細砂。 ②明赤褐2.5YR5/6 ③彫削 ④7本	突帯は断面台形状、高いがやや幅が狭い。

1号古墳出土土物観察表 (図51・52)

番号	器種	量目	出土位置	①粘土②色調③硬度④刷毛目	成・整形の特徴
112	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	後円部東端 埋没土中	①赤色物、鉱物、細礫。 ②橙5YR6/6 ③堅緻 ④11本	突帯は台形状の断面が崩れ、三角形に近いものである。調整は外面がやや粗い刷毛目、内面が指痕によるなでである。
113	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	西くびれ部端 埋没土中	①白色物、鉱物、中砂。 ②明黄褐10YR7/6 ③脆弱 ④6本	突帯は断面形状が崩れた台形状を呈する。内面には粘土紐の接合痕が認められる。
114	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	後円部東端 埋没土中	①細砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻 ④13本	突帯は断面台形状であるが、貼り付けが非常に粗雑である。
115	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東くびれ部端 埋没土中	①赤・白色物、細砂。 ②橙7.5YR6/6 ③堅緻 ④10本	突帯は断面台形状であるが崩れ、上面は丸みをおびる。外面は縦方向にやや粗雑な刷毛目を、内面にも上位が斜方向、以下が縦方向の刷毛目を施している。
116	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東くびれ部端 埋没土中	①赤色物、細砂。 ②にぶい橙7.5YR7/4 ③堅緻 ④7本	突帯は幅広く断面三角形形状である。外面はやや単位の粗雑な刷毛目を施す。突帯部分のみ赤色化しており、彩色あるいは本体と異なった粘土を貼り付けたか。
117	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	前方部肩部	①鉱物、細砂。 ②橙7.5YR7/6 ③堅緻 ④14本	突帯は断面台形でしっかりしている。外面には刷毛目、内面にはなでが施される。
118	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東くびれ部端 埋没土中	①鉱物、中砂。 ②にぶい橙7.5YR6/4 ③11本	突帯はやや丸みをおびるが高く、しっかりしている。外面は摩耗が著しいが刷毛目が施される。
119	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	西くびれ部端 埋没土中	①赤色物、鉱物、中砂。 ②橙5YR6/6 ③13本	突帯は断面が低い台形状を呈する。調整は外面は縦方向の刷毛目、内面は縦方向の指痕によるなでが施される。
120	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	西くびれ部端 埋没土中	①白色物、鉱物、中砂。 ②明黄褐10YR7/6 ③脆弱 ④7本	突帯の断面形状は台形が崩れ三角形に近い。調整は外面が刷毛目、内面が指痕によるなでである。
121	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	前縁部端 埋没土中	①赤色物、細砂。 ②にぶい赤褐5YR5/4 ③堅緻 ④8本	突帯は断面矩形状、高くがっしりしている。貼り付けも非常に丁寧である。突帯下位に円形と思われる透孔がある。外面は刷毛目、内面は丁寧になっている。
122	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	後円部東端 埋没土中	①白色物、鉱物、中砂。 ②橙7.5YR7/6 ④7本	円形と思われる透孔の一部が残存する。調整は外面に刷毛目を、内面に指痕によるなでを施す。
123	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周壁 埋没土中	①細砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻 ④11本	円形と思われる透孔の一部が残る。外面は刷毛目、内面にはなでが施される。
124	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東くびれ部端 埋没土中	①細砂。 ②明赤褐5YR5/6 ③堅緻 ④8本	円形と思われる透孔の一部が残存する。
125	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	西くびれ部端 埋没土中	①粗砂、細礫。 ②浅黄褐7.5YR8/4 ③脆弱 ④7本	残存部下位に形骸化した突帯が剥離した部分と突帯貼り付け時の痕などが認められる。器面は摩耗が著しいが、外面の調整は刷毛目、内面のそれは指痕による粗雑ななでが施される。
126	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	西くびれ部端 埋没土中	①白色物、鉱物、中砂。 ②橙7.5YR7/6 ③脆弱 ④7本	調整は外面が縦方向の刷毛目、内面は縦方向の指痕による粗雑ななでである。
127	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	後円部東端 埋没土中	①鉱物、中砂、細礫。 ②橙7.5YR7/6 ③脆弱 ④8本	外面の調整は縦方向の刷毛目である。残存部の下位に突帯貼り付け時のなでが認められる。内面はなで。
128	円筒埴輪 円筒形	基部破片	西くびれ部端 埋没土中	①鉱物、中砂、細礫。 ②明黄褐10YR7/6 ③脆弱 ④6本	基部の破片であるが底面は欠失する。調整は外面に縦方向の刷毛目、内面に指痕による粗雑ななで、押えが施される。
129	円筒埴輪 円筒形	基部破片 高 11.5cm残	前方部 肩直上	①細砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻 ④12本	底面付近は著しく歪む。外面は刷毛目、内面は指痕によるなで、押えが施される。
130	円筒埴輪 円筒形	基部破片 高 9.7cm残	西くびれ部端 埋没土中	①鉱物、中砂、細礫。 ②橙5YR6/6 ④9本	調整は外面が刷毛目、内面が底面直近を除いて指痕による縦方向のなでである。比較的丁寧な調整である。

1号古墳出土遺物観察表 (図52・53)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③硬度④刷毛目	成・整形の特徴
131	円筒埴輪 円筒形	基部大型破片 高 12.7cm残	西くびれ部埋 埋没土中	①粗・中砂。 ②橙5YR7/6 ③脆弱 ④12本	調整は外面が縦方向の刷毛目、内面が縦方向の指頭によるなである。底面近くの彫形は調整時の押圧を受け著しく歪む。
132	円筒埴輪 円筒形	基部大型破片 高 14.6cm残	西くびれ部埋 埋没土中	①赤色物、粗砂。 ②橙5YR7/6 ③脆弱 ④8本	粘土板の高さは約8cmで、残存部の上位に断面台形の突帯が付く。器面は摩耗が著しいが、外面には縦方向の刷毛目を、内面には指頭によるなでが施され、底面真近まで強く押入れられている。
133	円筒埴輪 円筒形	基部破片 高 9.1cm残	後部墳丘上 埋没土中	①紅物、中砂、細礫。 ②橙5YR6/6 ④8本	底面は歪みが著しい。外面は刷毛目調整、内面は斜方向に指頭によるなでを重ねる。
134	円筒埴輪 円筒形	基部破片 高 7.8cm残	西くびれ部埋 埋没土中	①白色物、紅物、粗砂、礫。 ②橙7.5YR7/6 ③脆弱 ④6本	底面近くで屈折、歪む。外面の調整は刷毛目、内面は指頭による粗雑なものである。

104号土坑出土遺物観察表 (図53・54)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③硬度④刷毛目	成・整形の特徴
1	形象埴輪	径 (54.5cm)	104号土坑	①紅物、細砂。 ②橙5YR7/8 ③脆弱	上半身像の着衣の裾部と基部と思われる。着衣は緩やかに外反、先端は丸みのある面をつくる。外面には縦方向の刷毛目を施し、端部のみをなでている。基部には円形の透孔を配し、外面には刷毛目を施す。
2	円筒埴輪 円筒形	基部1/2残 径 13.6cm 高 12.8cm	104号土坑 残直上	①赤・白色物、中・細砂。 ②黄橙7.5YR7/8 ④7本	普通円筒の基部部であれば丁寧な調整が施されている。外面の刷毛目は底面に歪むまで施され、内面のなで細かく器面に施している。
3	形象埴輪 ?	基部破片 高 9.3cm	104号土坑 底面直上	①紅物、細砂。 ②にふい橙5YR7/4 ③脆弱 ④10本	小破片のため器種等は断定できない。突帯は底面の幅広い断面台形状を呈するが貼り付け位置は底面に近い。外面は刷毛目後これをなで消している。
4	円筒埴輪 円筒形	口縁部片 高 6.0cm	104号土坑 底面直上	①白色物、紅物、中・細砂。 ②にふい橙5YR6/4 ③脆弱 ④9本	外反して立ち上がり、先端にシェーブ面をつくる。外面にはやや単位が粗雑な刷毛目を施す。内面にも刷毛目を施す。先端には横なでが施される。
5	円筒埴輪 円筒形	口縁部片 高 4.5cm	104号土坑 底面直上	①紅物、細砂。 ②にふい橙5YR7/4 ③脆弱 ④9本	外面に二箇所、箇所記号が認められる。
6	円筒埴輪 円筒形	口縁部片 高 13.3cm	104号土坑 底面直上	①赤色物、紅物、中・細砂。 ②にふい橙5YR6/4 ③脆弱 ④11本	突帯は断面台形状を呈する。外面の刷毛目は粗雑で一部に二次調整が施される。内面は粗雑ななで、先端の一部に刷毛目を残す。
7	円筒埴輪 円筒形	胴部片	104号土坑 埋没土中	①赤色物、紅物、細砂。 ②にふい橙5YR7/4 ③脆弱 ④9本	突帯は断面台形状を呈するが貼り付けは粗雑である。突帯の上位には瓢状の箇所記号の一部が、下位には形状のやや歪んだ透孔が認められる。外面の調整は刷毛目、内面はなである。
8	円筒埴輪 円筒形	胴部片	104号土坑 埋没土中	①紅物、中・細砂。 ②橙5YR7/6 ④8本	突帯は断面台形状を保つがやや丸味をおびる。内外面に粗雑な刷毛目が施される。
9	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	104号土坑 底面直上	①白色物、紅物、中砂、細礫。 ②橙5YR7/6 ④7本	突帯は断面台形状であるがやや崩れる。突帯の上位には小径の円形と思われる透孔が残存する。
10	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	104号土坑 底面直上	①赤色物、紅物、中砂、礫。 ②橙5YR7/6 ③脆弱 ④9本	突帯は断面台形状であるが崩れ、三角形に近くなる。突帯の上位に透孔が残存する。外面は縦方向に刷毛目、内面にも刷毛目を残す。
11	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	104号土坑 底面直上	①赤色物、紅物、中・細砂、細礫。 ②にふい橙5YR6/4 ③脆弱 ④8本	突帯は低く、崩れている。突帯貼り付け後、その上下を強くなで、おさえているため器面に沈線状をなす。透孔は小径の円形と思われる。外面の刷毛目はやや単位が粗雑である。内面にも刷毛目を残す。
12	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	104号土坑 底面直上	①紅物、中砂、細礫。 ②橙5YR7/6 ④8本	突帯は断面台形状を呈す。外面の刷毛目は斜方向に施される。内面にも刷毛目が残る。
13	円筒埴輪 円筒形	胴部片	104号土坑 埋没土中	①白色物、中・細砂、細礫。 ②にふい橙5YR6/4 ④8本	突帯は断面台形状であるが低い。内外面に施された刷毛目はやや単位が粗雑である。

104号土坑出土土物観察表 (図54)

番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③硬度④刷毛目	成・整形の特徴
14	円筒埴輪 円筒形	基底部片 高 5.8cm残	104号土坑 底面直上	①黒色物、細砂。 ②にぶい黄5YR7/4 ③堅緻 ④5本	粘土板の接合状態が良く観察できる。外面の刷毛目はやや単位の粗いものである。
15	円筒埴輪 円筒形	基底部片 高 8.4cm残	104号土坑 底面直上	①赤・黒色物、鉱物、中砂。 ②明赤褐5YR5/6 ③脆弱 ④6本	内外面の磨減著しい。底面はやや肥厚する。外面は刷毛目、内面はなでである。
16	円筒埴輪 円筒形	基底部片 高 8.3cm	104号土坑 底面直上	①鉱物、中・細砂、細礫。 ②黄5YR7/6 ③堅緻 ④8本	外面に刷毛目、内面は刷毛目後一部を指頭によるなでを施す。

2号古墳出土土物観察表 (図58・59)

番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③硬度④刷毛目	成・整形の特徴
1	形象埴輪 人物 顔 男性	現存高 19.2cm 頸部高 16.0cm 帽子径 (10.5cm)	北堀 埋没土中	①白色物、鉱物、細砂。 ②黄5YR6/6 ③堅緻	顔頂部から放射状に赤彩された帽子を被っている。目は木の葉状、口もやや開ききみである。頭髮は左右の美豆良にまとの、後髪は刷毛目で表現したものの、顔面、額から顎にかけて、線状に赤彩が施される。頸部にも刷毛目が残る。
番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
2	土師器 杯	1/3残 口 (13.7cm)	北堀 埋没土中	①白色細粒物、細砂、石英、角閃石。 ②にぶい赤褐5YR4/3 ③酸化焙	口縁部は底面から緩やかに彎曲、斜上方に立ち上がる。先端は丸みをもち、外側に弱くかえり、整形は先端を横なで、以下の外面は粗雑なでで磨き、内面はなで後斜方向に縦文状の磨きを施す。
3	土師器 杯	口縁一腰部1/2残 口 13.9cm	北堀 埋没土中	①白色細粒状、細砂、石英、角閃石。 ②明赤褐5YR5/8・黄褐5YR6/6・黒褐5YR2/1 ③酸化焙	口縁部は緩やかに斜め上方に立ち上がり、先端は尖る。整形は先端を横なで、以下の外面はなで後斜方向に縦文状の磨きを施す。内面もなで後斜状工具による磨きである。内外面の一部は焼成時の炭素吸着が黒色味をおびる。
4	土師器 杯	口縁一腰部破片 口 (13.2cm)	周堀 埋没土中	①白色細粒物、細砂。 ②黄5YR7/6 ③酸化焙	口縁部の先端はいわゆる内斜に縁状で、以下内側のある丸底の底部に続くものと思われる。調整は先端を横なで、以下はなで後斜状工具による磨きが施される。
5	土師器 杯	口縁一腰部破片 口 (12.4cm)	周堀 埋没土中	①白色細粒物、細砂。 ②内橙5YR6/6・黒褐5YR2/1 外明赤褐5/6 ③酸化焙	小破片であり、形状も歪んでいる。口縁部は丸底と思われる底部から彎曲して続き、先端は斜め上方に立ち上がり尖る。整形は先端を横なで、以下の外面は磨削り後一部に磨き、内面は粗雑なでである。内面は炭素吸着で黒色味をおびる。
6	須恵器 短頸壺	3/5残 底 丸底	東堀 埋没土中	①細砂、白色細粒物を含む。 ②灰7.5Y5/1・灰白7.5Y8/1 ③還元焙	紐作り後口口成形。肩部に1条の沈線のぐらし、その上位に5本1単位の波状文を1段、下位に7本1単位の波状文を1段施している。腰部から丸底にかけては、回転磨削り調整。外面上半と内面全体に自然熱が付着する。
7	須恵器 壺	胴部1/5残	東堀 埋没土中	①中・細砂を含む。 ②灰7.5Y5/1 ③還元焙	肩部にやや張りもち、底部に向かって徐々に径を小さくするものであろう。成形は粘土紐の積み上げと考えられる。外面には幅4cm、長さ6cm以上を一単位とする平行叩き目を残す。底部近くは交差している。この上にはカキ目状の横線がのこる。内面も平行叩き目が残るが、上位を除き丁寧になでている。
番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③硬度④刷毛目	成・整形の特徴
8	形象埴輪 人物 胴部	現存高 11.0cm	東堀 埋没土中	①白色物、鉱物、細砂。 ②黄褐7.5YR7/8	人物の胴部片。残りの良い面は背面から下輪から腹の接合部まで残存する。腕は下がらず、上がりきりで図上奥へ伸びる。外面縦刷毛およびなで。内面縦方向のなで、一部に刷毛目が残る。外面には何の意匠もみられないが、黒く彩色されていた可能性がある。

2号古墳出土遺物観察表 (図59・60・61・62)

番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③硬度④刷毛目	成 ・ 形 形 特 徴
9	形象埴輪 人物 左手		東堀 埋没土中	①紅物、中・細砂。 ②橙5YR7/8	そり返るような形状で、手のひらは何かに接していたか。指の表現も丁寧である。
10	形象埴輪 人物 右腕		東堀 埋没土中	①赤色物、紅物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻	肩節から丸く張り、胸部側面に横するように延びていたと思われる。指先は欠損している。接合痕から肩節には指節を格状に成形して接続していたことが明確におか。外面は全体を丁寧なまでに、手のひらに製履痕がある。
11	形象埴輪 ?	底 (9.8cm) 高 5.5cm残	東堀 埋没土中	①白色物、紅物、中・細砂。 ②橙5YR7/6	小径で、径の変化も少ないものと思われることから馬等動物埴輪の足端部の可能性がある。外面は刷毛目、内面はなでである。
12	形象埴輪 器材 大刀	現存高 8.5cm 幅 5.5cm 厚さ 2.1cm	東堀 埋没土中	①紅物、粗・中・細砂。 ②橙7.5YR7/6	白金の一部で、下溝の可能性もある。外面には径3.1cm、高さ2.5cmの半球形の飾りがついている。表面と側面は赤く彩色がなされ、裏面は黒の彩色が施されている。
13	形象埴輪 器材 大刀	短辺 (8.3cm) 厚 2.0cm	東堀 埋没土中	①紅物、粗・中・細砂。 ②橙7.5YR7/6 ③脆弱	穿り現頭の把頭端部の破片で、中央に2.3cmの小孔が穿ってある。外面には張り線が斜交した痕跡が、内面には把頭との接合痕が顕著である。
14	形象埴輪 馬	現存高 24.0cm 現存長 33.7cm 前輪の高さ 5.5cm	東堀 埋没土中	①赤・白色物、紅物、中・細砂。 ②黄橙7.5YR7/8 外面赤色塗彩	鬃は高さ5cm以上の板状に表現し、先端は高さ約4.5cm、径3cmに巻き上げて飾る。頸には頸線と面頸を止める辻金具の制履痕がある。引手横幅1.5cmの制履痕をとどめる。鞍部は前輪と鞍背を残し後輪は痕跡のみである。前輪は櫛状を呈し、垂面におかれる。鞍背には線突による文様が描かれる。平行する二本の隆起により鞍背の下には厩木が存在していたと思われる。また、前輪の下高の制履痕は胸蓋、腹の表現がぼくもと思われる。
15	形象埴輪 馬	現存高 43.0cm 覆元高 75.0cm 覆元長 63.5cm 覆元長 72.5cm 側面長 19.0cm 前輪の高さ 8.0cm 後輪の高さ 6.0cm 前輪と後輪の幅 12.0cm 蹄元の高さ 15.0cm 蹄の幅 5.0cm 覆 4.3cm	東堀 埋没土中	①赤・白色物、紅物、中・細砂。 ②黄橙7.5YR8/8・橙7.5YR7/6 外面赤色塗彩 ③堅緻	頭部から胴部の左半分は後輪の部分が多い。脚上位も同様である。鬃は高さ2.0cmの高さで櫛と、先端は巻き上げて飾られていたと思われる。頸線、面頸は幅1.5cm程の帯が表現され、幅に2箇所、辻金具が留められている。新の表現から頸にも辻金具が使用されていたと考えられる。櫛板は八稜形を呈し、粘土粒により新質が表現される。手綱も同質同様の表現で引手と連結していたと思われる。胸蓋はやや幅広く、2cm程の粘土板を貼り付け、径2.5cmの飾を飾る。鞍部は前輪、伏輪、鞍、障泥が表現される。前輪・後輪とも帯直で、なでにより覆輪を表現する。両方とも刷毛目を残すが文様は描かれない。覆は輪縁である。後輪から延びた帯には三鈴杏葉が三箇所下がり、尻尾に続く。尻尾は先端が尖り上りに向く。
16	円筒埴輪 朝顔形	口縁～頸部残 口 (32.4cm) 高 17.5cm残	東堀 埋没土中	①白色物、紅物、中・細砂、小・細礫。 ②橙5YR6/6 ③堅緻 ④4本	口縁部の大型破片である。先端は断面M字状を呈する面が形成される。口縁部の中位と頸部に突帯がめぐる。外面の調整は縦方向の磨削り、磨きである。内面にも粗雑ななでが施されている。
17	円筒埴輪 朝顔形	口縁部大型破片 口 (34.0cm) 高 8.2cm残	東堀 埋没土中	①白色物、紅物、中・細砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻 ④不明	外反折し立ち上がり、先端は断面M字状を呈する面が形成される。外面の調整は斜方向の磨削り、磨きである。表面は炭素が吸着しつすんでいる。
18	円筒埴輪 朝顔形	口縁下半部破片	北堀 埋没土中	①赤色物、紅物、細砂。 ②橙5YR6/8 ③堅緻 ④10本	断面台形の突帯の下には疑似口縁状の接合痕が明確に観察できる。外面の調整は縦方向の刷毛目、内面は横あるいは斜方向の刷毛目が施される。
19	円筒埴輪 朝顔形	口縁下半～胴部 上半1/2残	北堀 埋没土中	①白色物、紅物、中・細砂。 ②橙5YR6/8 ③堅緻 ④4本	突帯は三葉が認められ断面台形状を呈する。胴部には半円形の透孔が穿ってある。外面の調整は単位の粗い刷毛状工具によるなでか。内面は口縁部に僅ながら、胴部に指痕によるなでが施される。
20	円筒埴輪 朝顔形	胴部上位～基底部 上位2/3残	東堀 埋没土中	①小・細礫。 ②橙5YR6/6 ④3本	最大径は胴部にあり下位に向かって徐々に細くなる形状である。三葉みられる突帯は断面台形状がやや崩れる。胴部第二段に半円形の透孔が一つある。外面の調整は磨削り状のなでを縦方向に施している。

2号古墳出土遺物観察表 (図62・63・64)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③硬度④研毛目	成・整形の特徴
21	円筒埴輪 胴筒形	胴部→胴部2/3残 口 19.3cm 底 (11.0cm) 高 31.7cm	北塚 埋没土中	①赤色物、鉱物、粗・中砂、 細砂。 ②燈SYR6/8 ③聚織 ④11本	胴部が残存している。胴部は一葉、胴部は二葉の突帯がめぐる。いずれもやや低い断面台形状を呈する。円形の透孔が一對穿れるが一方は楕円形状である。外面は縦方向の刷毛目、胴部は一部二次調整を施すか、内面はなでている。
22	円筒埴輪 円筒形	3/4残 口 19.3cm 底 (11.0cm) 高 31.7cm	北塚 埋没土中	①赤・白色物、鉱物、中・ 細砂、細砂。 ②燈SYR6/8 ③聚織 ④10本	胴部一段で二葉の突帯を有する。口縁部は緩やかに外反、先端は断面M字状を呈する。胴部には円形の透孔が二箇所穿れる。突帯は断面台形状であるが崩れている。外面の調整は刷毛目、内面はなでて口縁部に斜方向の刷毛目を施す。底面には粘土板の接合が明瞭。
23	円筒埴輪 円筒形	口縁→胴部1/4残 口 (21.5cm) 高 24.0cm残	東塚 埋没土中	①白色物、鉱物、中・細砂、 細砂。 ②燈SYR7/8 ③磨削 ④6本	二葉の突帯は断面台形状を呈するが崩れている。胴部には円形の透孔が配置される。外面の摩耗が著しいが刷毛目が残されている。内面は口縁部に一部研毛目を残す。その他はなである。
24	円筒埴輪 円筒形	口縁→胴部1/4残 口 (20.5cm) 高 16.5cm残	北塚 埋没土中	①鉱物、粗・中砂。 ②燈SYR7/6 ③磨削 ④4本	歪みが著しく、透孔も楕円形状に変形している。突帯は断面台形状を呈するが崩れている。外面の調整は27回磨、非常に単位に近い刷毛目が施されている。
25	円筒埴輪 円筒形	口縁→胴部1/2残 口 23.1cm 高 12.2cm残	北塚 埋没土中	①鉱物、細砂。 ②黄燈7.5YR8/8 ③磨削 ④4本	口縁部は緩やかに外反し、先端には断面M字状の面が形成される。突帯は断面M字状の台形を呈するが崩れた片付きである。胴部には円形と思われる透孔が一對ある。外面の調整は非常に粗雑な刷毛目である。口縁部に発記号がある。
26	円筒埴輪 円筒形	口縁→胴部破片 口 (24.0cm) 高 10.2cm残	北塚 埋没土中	①赤色物、鉱物、細砂。 ②燈SYR7/6 ③聚織 ④12本	突帯は断面台形状であるがやや崩れている。外面の調整は刷毛目、内面にも粗雑な縦方向の刷毛目を残している。
27	円筒埴輪 円筒形	口縁→胴部破片 口 (20.0cm) 高 12.7cm残	北塚 埋没土中	①白色物、鉱物、細砂。 ②洗黄燈7.5YR8/6・燈7.5 YR7/6 ③聚織 ④3本	先端で緩やかに外反する。突帯は断面台形状である。外面の調整は荒にちいはいほどの粗い刷毛目である。内面も同様の工具で斜めあるいは縦方向の調整である。
28	円筒埴輪 円筒形	口縁→胴部破片 口 (25.1cm) 高 12.9cm残	北塚 埋没土中	①白色物、鉱物、中・細砂。 ②燈SYR7/8 ③3本	口縁部の先端はややゆがってりたつくりである。突帯も断面台形状がやや崩れている。外面の調整は荒にちいはいの粗い刷毛目である。
29	円筒埴輪 円筒形	口縁部1/5残 口 (23.0cm) 高 8.0cm残	東塚 埋没土中	①鉱物、細砂。 ②燈SYR7/8 ③聚織 ④8本	先端はつままれるように外反、内面は鋭い受け口状を呈する。外面は縦方向の刷毛目、内面は刷毛目を粗雑ななでで消している。内面に二葉の沈線からなる発記号が認められる。
30	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 口 (21.9cm) 高 7.6cm残	東塚 埋没土中	①赤・白色物、鉱物、中砂。 ②燈SYR7/8 ④7本	先端は緩やかに外反、断面M字状の面をつくる。器面の摩耗が著しいが、外面には刷毛目が施されている。
31	円筒埴輪 円筒形	口縁部小破片 口 (21.2cm) 高 9.2cm残	北塚 埋没土中	①鉱物、中・細砂。 ②燈SYR7/8 ④7本	先端は緩やかに立ち上がり、平坦面を外側に向け突る。調整には単位の粗い刷毛目を用いられ、外面は縦方向、内面は縦方向後上位に斜方向の調整を施す。
32	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 口 (22.5cm) 高 6.4cm残	北塚 埋没土中	①鉱物、細砂。 ②燈SYR7/6 ③聚織 ④9本	先端は外反し平坦面を外側に向ける。調整は外面が縦方向の刷毛目、内面が下位且縦方向、上位に斜横方向の刷毛目を施す。
33	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 口 (21.7cm) 高 4.4cm残	北塚 埋没土中	①白色物、中・細砂。 ②燈SYR7/8 ③聚織 ④9本	外面の調整はなで状の刷毛目である。内面には横方向の粗雑ななでが残る。また内面に発記号によると思われる一葉の沈線が認められる。
34	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 口 (22.1cm) 高 3.0cm残	東塚 埋没土中	①鉱物、中・細砂。 ②燈SYR7/8	先端の外縁は丸みをもち、内縁が鋭くつままれたような断面形状である。外面は摩耗しており判然としなないがなでのみの仕上げか。
35	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 口 (19.3cm) 高 4.9cm残	東塚 埋没土中	①白色物、鉱物、細砂。 ②燈SYR7/6 ④不明	先端の外縁は丸みがあり、内縁が鋭くつままれている。外面はなでている。
36	円筒埴輪 円筒形	口縁下部破片	東塚 埋没土中	①鉱物、中・細砂。 ②燈SYR7/8 ④9本	突帯は断面台形状を呈すが貼り付けは粗雑である。突帯の下位に円形と思われる透孔が配置される。

2号古墳出土遺物観察表 (図64・65)

番号	器 種	量 目	出土位置	①粘土②色調③硬度④刷毛目	成・整形の特徴
37	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	北堀 埋没土中	①紅物、中・細砂。 ②橙5YR7/6 ③緻密 ④不明	突帯は斜腹している。突帯の直上には凹形と思われる透孔が残存する。外面は摩耗が著しい。内面には縦方向のなでが施される。
38	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	北堀 埋没土中	①赤色物、紅物、中・細砂。 ②橙5YR7/8 ③8本	突帯は断面三角形を呈する。透孔の一部が残存する。外面の調整は刷毛目、内面のそれも刷毛目である。
39	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	北堀 埋没土中	①白色物、紅物、中・細砂。 ②橙5YR6/8 ③堅緻 ④4本	突帯に接して透孔が穿たれている。外面には単位の粗い刷毛目が、内面には指頭によるなでが施されている。
40	円筒埴輪 円筒形	胴部1/4残	北堀 埋没土中	①赤・白色物、紅物、細砂。 ②橙5YR6/8 ③堅緻 ④11本	突帯は断面台形状を呈するが低く崩れている。突帯の上位に透孔が配置される。外面には刷毛目が、内面には刷毛目、なでが施される。
41	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	北堀 埋没土中	①白色物、紅物、中・細砂。 ②淡黄橙7.5YR8/4 ④4本	胴部から基底部にかけての破片である。突帯は断面台形であるが下辺はやや崩れている。突帯の上位には透孔が配置されている。外面の調整は単位の粗い刷毛目、内面は粗雑ななでである。
42	円筒埴輪 円筒形	胴部1/3残	東堀 埋没土中	①白色物、紅物、中・細砂。 ②橙5YR7/8 ④5本	突帯は崩れ、断面三角形に近い。胴部には円形の透孔が配置される。外面の刷毛目はやや単位が粗い。
43	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	北堀 埋没土中	①白色物、紅物、中・細砂。 ②淡黄橙7.5YR8/4 ③緻密 ④4本	突帯は断面台形状を呈する。外面の調整は単位の粗い刷毛目である。
44	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	北堀 埋没土中	①赤・白色物、中・細砂。 ②橙5YR7/6 ④11本	突帯は断面三角形形である。内外面ともに刷毛目を施している。
45	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東堀 埋没土中	①紅物、細砂。 ②橙5YR6/8 ③堅緻 ④10本	突帯は断面台形状を呈ししっかりとつくりである。外面には刷毛目、内面には刷毛目、なでが施される。
46	円筒埴輪 円筒形	胴部～底部4/5残 底 12.1cm 高 19.2cm残	東堀 埋没土中	①紅物、粗・中・細砂。 ②橙5YR7/8 ③緻密 ④7本	基底部と胴部第一段が残存する。突帯は断面三角形で降り付けはやや粗雑である。胴部には円形の透孔が一對ある。外面は表面が割落、摩耗しているが刷毛目を施した痕跡がある。内面は刷毛目、荒ななである。
47	円筒埴輪 円筒形	胴部～基底部1/5残 底 (11.4cm) 高 27.3cm残	東堀 埋没土中	①紅物、中・細砂、細砂。 ②橙5YR7/6 ④7本	胴部に比較して基底部がやや長いが全体の形状は整然としていて、二条の突帯は断面台形状、高くしっかりと降り付けも丁寧である。胴部には円形の透孔がある。外面は縦方向に丁寧な刷毛目を施す。内面も基底部に至るまで刷毛目が残存している。
48	円筒埴輪 円筒形	胴部～底部1/2残 底 (12.0cm) 高 15.0cm残	東堀 埋没土中	①紅物、粗・中・細砂。 ②橙5YR7/8 ③緻密 ④8本	基底部と胴部第一段が残存する。突帯は断面三角形で崩れている。外面は斜腹、摩耗が著しいが縦方向の刷毛目が施されている。底面には粘土板の接合痕が明確に認められる。
49	円筒埴輪 円筒形	基底部破片 底 (14.0cm) 高 11.2cm残	東堀 埋没土中	①白色物、紅物、中・細砂。 ②橙5YR7/8 ④10本	器内は一定している。外面には刷毛目が施される。
50	円筒埴輪 円筒形	基底部破片 底 (10.0cm) 高 11.2cm残	東堀 埋没土中	①紅物、中・細砂、細砂。 ②橙5YR7/8 ④9本	底面近くは肥厚する。外面は刷毛目、内面は粗雑ななで、粘土柱・粘土板の接合痕を残す。底面には軽石粒がこびりついている。
51	円筒埴輪 円筒形	基底部破片 底 (11.5cm) 高 7.9cm残	東堀 埋没土中	①紅物、細砂。 ②橙5YR6/8 ④12本	底面は歪み肥厚している。外面には刷毛目が施される。
52	円筒埴輪 胴錐形	胴部付近破片	東堀 埋没土中	①紅物、粗・中砂、細砂。 ②明赤橙2.5YR5/6 ③堅緻 ④不明	胴内が厚いわりに、粘土の比重が軽く、全体に粗雑な感じを受ける。外面は荒なで、内面には粗雑ななでを施す。
53	円筒埴輪 胴錐形		東堀 埋没土中	①白色物、細砂。 ②橙5YR7/6 ④不明	突帯上位は凹線部になるか、突帯は断面三角形を呈する。突帯の直下には透孔が残存する。内外面とも荒なでを施すが内面は施道具の圧痕が残るほど強く押しあてられている。

2号古墳出土遺物観察表 (図65・66)

番号	器種	量目	出土位置	①粘土②赤③硬質④刷毛目	成・整形の特徴
54	円筒埴輪 朝顔形	口縁部下半破片	東堀 埋没土中	①灰物、粗砂、細砂、 ②明赤焼2.5YR5/6 ③堅緻 ④19本	内外面に単位の細い刷毛目を施す。
55	円筒埴輪 円筒形		北堀 埋没土中	①白色物、灰物、中砂、 ②に白い煙7.5YR7/4 ③堅緻 ④11本	口縁部の破片か。内面に荒による沈線が横方向に一条これに斜方向の二条が重なっている。
56	円筒埴輪 円筒形		北堀 埋没土中	①赤色物、灰物、細砂、 ②橙7.5YR7/6 ③堅緻 ④11本	口縁部の小破片か。内面に荒による弧状の沈線が認められる。
57	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 6.3cm残	東堀 埋没土中	①赤・白色物、灰物、細砂、 ②橙5YR7/6 ③堅緻 ④12本	先端は強く外反して、平坦面を外側に向ける。内外面とも刷毛目、先端は横なぞを加えている。外面に荒書の二条沈線が残存する。
58	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 6.4cm残	東堀 埋没土中	①白色物、細砂、 ②橙5YR7/6 ④不明	内外面とも丁寧になでている。
59	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 4.5cm残	東堀 埋没土中	①白色物、中・細砂、 ②に白い煙5YR6/4 ③堅緻 ④不明	強く外反か。調整は内外面とも丁寧になでている。
60	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 7.5cm残	東堀 埋没土中	①灰物、細砂、 ②橙5YR7/6 ③堅緻 ④8本	外反して立ち上がる先端には断面形がM字状を呈する面ができる。調整は外面が刷毛目、内面は下位に荒なで、上位に刷毛目後横なぞが施される。
61	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 7.0cm残	北堀 埋没土中	①灰物、中砂、 ②橙7.5YR7/6 ④11本	外面は斜方向の刷毛目、内面は縦方向の刷毛目先端近くを横方向に刷毛目調整を施す。
62	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 5.1cm残	北堀 埋没土中	①白色物、灰物、細砂、 ②橙7.5YR7/6 ④15本	先端は平坦面を外側に向ける。外面は刷毛目を複数回施す。内面にも横方向の刷毛目が認められる。
63	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 5.3cm残	東堀 埋没土中	①赤・白色物、中・細砂、 ②橙2.5YR7/8 ③脆弱 ④5本	調整は単位の粗い刷毛目を施すことから68と同一個体と思われる。
64	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 4.6cm残	北堀 埋没土中	①灰物、細砂、 ②に白い煙7.5YR7/4 ④10本	先端は緩やかに外反、先端は平坦面を外側に向ける。外面は摩耗が著しいが、単位の粗い刷毛目が施されていたと思われる。
65	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 5.0cm残	北堀 埋没土中	①白色物、灰物、中砂、 ②橙5YR7/8 ③脆弱 ④不明	先端は断面M字状の面をつくる。外面はやや斜方向の刷毛目、内面も斜方向の刷毛目が施される。
66	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 5.1cm残	東堀 埋没土中	①赤・白色物、灰物、中砂、 ②橙2.5YR7/8 ③脆弱 ④5本	調整は単位の粗い刷毛目が用いられている。外面はやや斜方向、内面は斜方向後先端のみ横方向である。
67	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	北堀 埋没土中	①灰物、細砂、 ②橙7.5YR7/6 ③堅緻 ④9本	突帯は断面白形、下辺は崩れている。突帯の下位に透孔がある。内面にも刷毛目が施される。
68	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東堀 埋没土中	①赤・白色物、灰物、中砂、 ②橙5YR7/8 ③脆弱 ④9本	突帯は断面が台形状を呈するがやや崩れている。突帯の下位には透孔の一部が残存する。外面の調整は縦方向の荒なでである。
69	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東堀 埋没土中	①赤色物、灰物、中・細砂、 ②橙5YR7/8 ③脆弱 ④8本	突帯は断面台形状を呈する。透孔は一部の残存であるが、上端に平坦部分があり半円形を意図した形状であったか。内面調整のなでは粗緻で、粘土粒の接合痕を残している。
70	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東堀 埋没土中	①白色物、灰物、中・細砂、 ②橙5YR7/8 ③脆弱 ④10本	突帯は断面が低い台形状を呈する。突帯の下位に円形の透孔の一部が残存する。
71	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東堀 埋没土中	①赤色物、灰物、中・細砂、 ②に白い煙5YR6/4 ④12本	突帯は断面台形状を呈するが低い。突帯の上位に透孔の一部が残存する。外面の調整は縦方向の刷毛目、内面は斜方向のなで、一部粘土粒の接合痕を残す。
72	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	北堀 埋没土中	①白色物、中砂、 ②浅黄橙7.5YR8/6 ③脆弱 ④4本	突帯は崩れている。外面は摩耗が著しいが単位の粗い刷毛目が施されている。内面は粗い荒なでである。

2号古墳出土遺物観察表 (図66)

番号	器 種	量 目	出土位置	①粘土②色調③硬度④刷毛目	成・ 整 形 の 特 徴
73	円筒埴輪 円筒形	胴部小破片	北堀 埋没土中	①赤色物、灰物、細砂。 ②径7.5YR7/6 ③堅緻 ④12本	突帯は断面台形であるが、低く崩れている。突帯の下位に透孔が位置する。外面の刷毛目は明瞭である。
74	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東堀 埋没土中	①白色物、灰物、細砂。 ②径5YR7/6 ④11本	突帯は断面台形状を呈するが崩れ、三角形に近い部分もある。突帯の下位に透孔がある。内面は粗雑な刷毛目、なでを施すか粘土様の接合痕を消しきれない。
75	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	北堀 埋没土中	①白色物、細砂。 ②にふい径7.5YR7/4 ③堅緻 ④12本	突帯は断面三角形である。突帯の下位に透孔が配される。
76	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	北堀 埋没土中	①赤・白色物、灰物、中砂。 ②径7.5YR7/6 ③堅緻 ④10本	胴部の破片か。突帯は断面台形状でしっかりしている。
77	円筒埴輪 円筒形	胴部小破片	北堀 埋没土中	①赤・白色物、灰物、粗砂。 ②径5YR6/6 ③堅緻 ④10本	突帯は断面台形であるが低い。
78	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	北堀 埋没土中	①赤色物、灰物、中砂。 ②径7.5YR7/6 ④10本	突帯は断面の台形が崩れ、三角形に近くなる。
79	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	北堀 埋没土中	①白色物、中砂、細砂。 ②径7.5YR7/6 ④10本	突帯は断面台形の形状が崩れ、貼り付けも粗雑になっている。内外面とも刷毛目が施される。
80	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東堀 埋没土中	①赤色物、灰物、中・細砂。 ②径5YR7/8 ③脆弱 ④7本	突帯は低い台形状を呈する。外面の調整は縦方向の刷毛目、内面は縦方向の指痕によるなでである。
81	円筒埴輪 円筒形	胴部小破片	北堀 埋没土中	①白色物、灰物、細砂。 ②にふい径7.5YR7/4 ④14本	円形と思われる透孔の一部が残存する。
82	円筒埴輪 円筒形	胴部小破片	北堀 埋没土中	①灰物、細砂。 ②径7.5YR7/6 ③堅緻 ④12本	円形と思われる透孔がみられる。
83	円筒埴輪 円筒形	胴部小破片	北堀 埋没土中	①白色物、細砂。 ②径7.5YR7/6 ③堅緻 ④13本	透孔の一部が残存する。
84	円筒埴輪 円筒形	胴部小破片	北堀 埋没土中	①赤・白色物、細砂。 ②径7.5YR7/6 ④8本	円形と思われる透孔がみられる。
85	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	東堀 埋没土中	①白・黒色物、灰物、中砂。 ②にふい径5YR8/4 ③堅緻 ④8本	透孔は突帯下位に位置し、円形を呈すると思われるが歪んでいるか、外面には丁寧な調整が施される。
86	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	北堀 埋没土中	①赤・白色物、灰物、細砂。 ②径5YR7/6 ④10本	胴部、突帯直下の破片である。円形と思われる透孔の一部が残存する。
87	円筒埴輪 円筒形	基底部破片 高 4.5cm残	北堀 埋没土中	①白色物、灰物、細砂。 ②にふい径7.5YR7/4 ④不明	胴部の破片である。小破片で判然としないが普通円筒の基底部・底面と思われる。但し内外面とも比較的丁寧ななでが施されており、形象の破片の可能性もある。

3号古墳出土遺物観察表 (図68)

番号	器 種	量 目	出土位置	①粘土②色調③硬度④刷毛目	成・ 整 形 の 特 徴
1	形象埴輪 器射 家形	長さ 5.2cm 幅 2.8cm	東堀 埋没土中	①赤色物、細砂。 ②径2.5YR6/6	両端を切り取られた棒状品である。下面の中央に3cm弱の刺離痕がある。
2	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	西堀 埋没土中	①白色物、細砂。 ②径7.5YR6/6 ④14本	円筒埴輪の胴部小破片を二次利用した円形土板状の遺物の可能性がある。外面の割れ口は丁寧に打ちかかれ、一部に稜状の痕みられる。火熱を受け、赤色化、脆弱になっている。
3	形象埴輪 器射 盾?		東堀 埋没土中	①赤・白色物、細砂。	小破片である。外面に書畫があり、内外面ともなでている。6・7と同一個体か。

3号古墳出土土物観察表 (図68)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③硬度④刷毛目	成・整形の特徴
4	形象埴輪 器財		東塚 埋没土中	①赤・白色物、細砂。 ②明赤褐2.5YR5/6	小破片であるが外面に直線の荒書きがなされ、出土位置等から3等と同様の形状をとるか。
5	形象埴輪 器財		東塚 埋没土中	①赤・白色物、細砂。 ②明赤褐2.5YR5/6	小破片であるが外面に直線の荒書きがなされ、出土位置等から3等と同様の形状をとるか。外面に刷毛目を残す。
6	形象埴輪 器財		東塚 埋没土中	①赤・白色物、紅物、細砂。 ②明赤褐2.5YR5/6	外面は刷毛目を残す。外面に荒書きによる鬚歯文が重ねられる。内面は丁寧なもので、一部に肥厚した部分が見られる。
7	形象埴輪 器財		東塚 埋没土中	①赤・白色物、紅物、細砂。 ②明赤褐2.5YR5/6	板状の破片で両部は外面に肥厚、平坦な側面をもつ。荒書きの鬚歯文が描かれている。外面はなで、内面は刷毛目を残す。

4号古墳出土土物観察表 (図71・72)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③硬度④刷毛目	成・整形の特徴
1	土師器 鉢	2/3残 口 10.8cm 底丸底 高 7.0cm	周塚 埋没土中	①細砂、白色細粒物を含む。 ②にいい橙7.5YR7/4 ③酸化焙 外底部焼戻	口縁部は底部から丸みをもって立ち上がる。口縁部は内外面とも滑んで、底部外面は荒削り、内面はなで後刻あるいは磨削方向に棒状工具による磨きを施す。口縁部外面に赤い彩色が施されている。
2	形象埴輪 人物 顔 男性	現存高 19.2cm 顔部高 10.6cm 鼻子径 11.7cm	周塚 埋没土中	①白色物、紅物、中・細砂。 ②橙5YR7/8	髷のついた帽子の披り物をしてい。左右の美豆良は耳を覆い、顔面に達する。後髪も一本にたばね背中に延びている。目はやや幅広く切つ込まれ、鼻は鉤状に高い。眉線上部から鼻へ傾にかけて赤い彩色がなされ、髷は黒く彩色されている。顔部は首飾りが施されている。
3	形象埴輪 人物 顔 男性	現存高 20.0cm 顔部高 8.3cm	周塚 埋没土中	①赤・白色物、紅物、粗・中・細砂、細糠。 ②内灰褐5YR5/2 外橙5YR7/8	目・鼻は細く切り込まれ、鼻は高くすっきりした顔立ちである。眼高以下は赤く彩色されている。顔部には丸玉珠の首飾りがされるが一部を除き欠落している。肩部からは胸部が軽くと思われるが欠落している。胸部は単純しているがなでが施され着衣の表現は無い。
4	形象埴輪 人物 顔		周塚 埋没土中	①白色物、紅物、中・細砂。 ②橙5YR6/6 ③紫織	顔面は他に比較してやや大きいようである。目と口の一部分の表現を確認できるのみである。
5	形象埴輪 人物 付属品		周塚 埋没土中	①白色物、紅物、中・細砂。 ②橙5YR6/6 ③紫織	細片で部位等が断定しにくい。人物に付属する大刀のつか部分。あるいは、美豆良であろうか。先端が二又状になり、一方は刺落している。二又と反対の端部は折れており、一部に粘土粒で飾り(?)を表現したものが残る。折れた端部片面に一部刺刺がある。
6	形象埴輪 人物 右腕		周塚 埋没土中	①赤・白色物、紅物、中・細砂。 ②橙5YR6/6 ③紫織	顔部は接続していたものが欠損したものである。手の平には粘土の刺刺痕があり、肩部との接合の具合からみて、顔部前に腕をのび、手の平を上に向け、何かをささげつような姿勢が想定できようか。腕部の表面はなで、荒なでがなされ、特別な表現はみられない。
7	形象埴輪 人物 顔 女性	現存高 14.5cm 鼻部長 13.0cm	周塚 埋没土中	①白色物、紅物、中・細砂。 ②橙5YR6/6 ③紫織	鬚髪は烏田髷に結っているが、結の表現は欠落している。顔部全体が丸みを帯びた形状で、目は木の葉状にやや開いてあげられる。眉線上部と鼻の部分がわずかに隆起して表現され、顔に赤い彩色がある。
8	形象埴輪 人物 顔 女性	現存高 12.0cm 顔部高 9.3cm	周塚 埋没土中	①白色物、紅物、中・細砂。 ②にいい橙5YR7/4	顔頂部は欠落しているが烏田髷が表現されている可能性がある。目は木の葉状に、口は細く切り込まれている。右耳はラッパ状に小さく開き、中央に穿孔が施されたと思われるが脱落している。眉線上部、頬に赤い彩色があり、後頭部にも施されている。顔部には丸玉を連ねた首飾りが残る。
9	形象埴輪 人物 顔 女性	現存高 8.5cm 鼻部長 (13.7cm)	周塚 埋没土中	①白色物、紅物、粗・中・細砂。 ②橙7.5YR7/6	顔部は烏田髷にまとめられている。その他顔部は丁寧になでられ毛髪表現はみられない。目は木の葉状にやや開いてあげられる。髷はあらかじめ板状に製作したものを筒状に開放した顔頂部にかぶせ、接合部分で筒状で閉鎖するものである。顔に赤い彩色がある。

4号古墳出土土物観察表 (図73)

番号	器種	量目	出土位置	①粘土②赤色③硬灰④刷毛目	成・整形の特徴
10	形象埴輪 人物 手甲?		周壁 埋没土中	①白色物、灰物、細砂。 ②明赤焼5YR5/6 ③硬灰	細片のため器種、部位等は断定できない。背曲、膨らみをおびる。一部、きれいに仕上げられた端部が残る。外面には寛による縦溝状、あるいは斜格子目状の文様が施されている。人物に付属する手甲であろうか? 11、12、13、は同一である。
11	形象埴輪 人物 手甲?		周壁 埋没土中	①白色物、灰物、細砂。 ②焼5YR6/8 ③硬灰	10と同一破片である。
12	形象埴輪 人物 手甲?		周壁 埋没土中	①白色物、灰物、細砂。 ②焼5YR6/8 ③硬灰	10と同一破片である。
13	形象埴輪 人物 手甲?		周壁 埋没土中	①白色物、灰物、細砂。	10と同一破片である。
14	円筒埴輪 円筒形	口縁~胴部上半残 口 20.7cm 高 19.0cm残	周壁 埋没土中	①赤・白色物、灰物、中・細砂。 ②焼5YR6/6 ③硬灰 ④12本	口縁部は緩やかに外反、先端にはシャープな平直面がつくられる。胴部の突帯は下辺がやや低いがしっかりしている。透孔は円形のものが一対配される。外面は刷毛目、内面は胴部がなで、口縁部に刷毛目を施す。口縁部の外面に弧状の寛記号がある。
15	円筒埴輪 円筒形	口縁~胴部1/2残 口 (18.0cm) 高 16.6cm残	周壁 埋没土中	①赤色物、灰物、細砂。 ②焼5YR6/8 ③硬灰 ④12本	口縁部先端の面はM字状に近い断面形状である。突帯は台形状の下縁が崩れ、断面三角形に近づいている。胴部には一対の透孔がある。内面には粗雑な刷毛目が施され、その上に二条の沈線による寛記号が見られる。
16	円筒埴輪 円筒形	口縁~胴部上位残 口 (19.8cm) 高 10.9cm残	周壁 埋没土中	①灰物、細砂。 ②明赤焼5YR5/6 ③硬灰 ④12本	先端が緩やかに外反し、断面M字状の面が形成されている。
17	円筒埴輪 円筒形	口縁~胴部残 口 (24.2cm) 高 15.7cm残	周壁 埋没土中	①灰物、細砂。 ②明赤焼5YR5/6 ④12本	突帯は断面三角形を呈するがしっかり貼り付けられている。外面の刷毛目は単位が細かいものを弱いタッチで施している。
18	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 口 (22.0cm) 高 8.6cm残	周壁 埋没土中	①灰物、粗砂。 ②焼7.5YR6/6 ④8本	外面の調整はなで状のタッチの弱い刷毛目である。
19	円筒埴輪 円筒形	口縁部1/3残 口 (20.0cm) 高 6.0cm残	周壁 埋没土中	①灰物、細砂。 ②内径2.5YR6/4 ③硬灰 ④11本	先端は緩やかに立ち上がる。外面は斜方向の刷毛目、内面はなで後斜方向の刷毛目を施す。外面に寛記号が認められる。
20	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 口 (22.8cm) 高 4.9cm残	周壁 埋没土中	①赤色物、細砂。 ②外に、内径7.5YR6/4 内径7.5YR4/1 ④9本	先端は強く外反、断面M字状の面をつくる。外面は縦方向の刷毛目、内面も斜方向の刷毛目を施す。
21	円筒埴輪 円筒形	口縁部1/3残 口 (18.2cm) 高 5.1cm残	周壁 埋没土中	①赤色物、細砂。 ②外径5YR6/6 内径5YR6/6~黄灰2.5YR6/3 ③軟部 ④12本	先端でやや肥厚する。外面は刷毛目後、先端をやや幅広く狭くなる。
22	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周壁 埋没土中	①赤色物、灰物、中・細砂。 ②焼5YR6/6 ④12本	突帯は断面台形で、上面の中央が弱く四M字状に近い。突帯下位に透孔がある。調整は内外面とも刷毛目を施す。
23	円筒埴輪 円筒形	基底部破片 底 (12.8cm) 高 7.9cm残	周壁 埋没土中	①灰物、細砂。 ②黄焼7.5YR7/8 ④6本	外面はやや単位の粗雑な刷毛目が施される。底面は肥厚する。
24	円筒埴輪 円筒形	基底部破片 底 (10.0cm) 高 7.6cm残	周壁 埋没土中	①白色物、灰物、中・細砂。 ②外径7.5YR7/6 内径7.5YR6/6 ④9本	外面は粗雑な刷毛目、内面は粗雑なでを施す。
25	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 4.4cm残	周壁 埋没土中	①赤・白色物、細砂。 ②内径7.5YR7/4 ③硬灰 ④9本	先端は緩やかに外反、内側に弱い稜をもうける。外面の調整は斜方向の刷毛目、二条の沈線は意図的なものとは思われず、内面にも斜あるいは横方向の刷毛目を残す。

4号古墳出土遺物観察表 (図73・74)

番号	鈔 種	量 目	出土位置	①粘土②赤③硬皮④刷毛目	成 形 の 特 徴
26	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周壕 埋没土中	①赤色物、細砂。 ②内径7.5YR6/6 ③残片 ④9本	縦方向の刷毛目目、別の細かい単位で部分的に刷毛目を重ねている。蓋記号が残る。
27	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 5.8cm残	周壕 埋没土中	①赤色物、中・細砂、細砂。 ②径2.5YR7/8 ③残片 ④9本	外反して立ち上がる先端は外面に面をなす。調整は外面が縦方向の刷毛目目後先端を横なです。内面には横方向の刷毛目を残す。
28	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 4.2cm残	周壕 埋没土中	①白色物、鉱物、中・細砂。 ②径5YR7/6 ④14本	先端に形成された面は中央がやや凹む。調整は外面が斜方向の、内面は横方向に近い斜方向の刷毛目目で、先端には横なでが重ねられる。
29	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 5.3cm残	周壕 埋没土中	①鉱物、中・細砂。 ②径5YR7/6 ④15本	先端は内側が微砂にそがれ、外反の度合を印象づけている。調整は外面が細かい単位の刷毛目、内面がなで、先端は内外面ともやや幅広い横なでが加えられている。
30	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 3.2cm残	周壕 埋没土中	①赤色物、鉱物、細砂。 ②径5YR6/6 ④13本	先端の内側は割い受け口状の横を有する。調整は先端に横なでが施され、以下は刷毛目目である。
31	円筒埴輪 円筒形		周壕 埋没土中	①白色物、鉱物、中・細砂。 ②にぶい径5YR6/4 ③縦線 ④11本	口縁部から胴部にある破片か。突帯は丁寧な貼り付けであるが断面三角形である。透孔は円形を呈すると思われる。内面には一部に刷毛目を残す。
32	円筒埴輪 円筒形	口縁 - 胴部破片	周壕 埋没土中	①白色物、鉱物、中・細砂。 ②にぶい径5YR6/4 ③縦線 ④10本	突帯は断面形状を意識しているが、貼り付けが粗雑で乱れている。突帯の下位には透孔の一部が残存する。
33	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周壕 埋没土中	①赤色物、細砂。 ②径5YR6/6 ④13本	円形と思われる透孔がある。
34	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周壕 埋没土中	①赤・白色物、鉱物、中砂。 ②にぶい径5YR6/4 ④13本	突帯は低いが断面形状でしっかりしている。突帯の下位に円形と思われる透孔がある。調整はやや斜方向の刷毛目目である。
35	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周壕 埋没土中	①赤・白色物、鉱物、中砂。 ②径2.5YR7/8 ③残片 ④13本	突帯は断面形状を呈していたが、比重の軽い粘土が使用されている。
36	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周壕 埋没土中	①赤・白色物、細砂。 ②内径7.5YR7/6・褐灰10YR4/1 外径5YR6/6 ④12本	突帯は断面三角形を呈する。調整は内外面ともに刷毛目を施す。
37	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周壕 埋没土中	①白色物、鉱物、細砂。 ②径5YR7/6 ③残片 ④不明	突帯は断面形状を呈していたが、摩耗のため角がとれ丸みをおびている。外面の調整はなである。
38	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周壕 埋没土中	①赤色物、鉱物、中・細砂。 ②径5YR7/6 ④19本	突帯は断面三角形である。外面調整の刷毛目目は非常に細かい単位の刷毛目が用いられている。
39	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周壕 埋没土中	①赤色物、鉱物、細砂。 ②外径2.5YR6/6 ③内径赤褐2.5YR5/6 ④10本	突帯は断面三角形である。調整は刷毛目を施す。
40	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周壕 埋没土中	①白色物、鉱物、中・細砂。 ②径7.5YR7/6 ④10本	突帯はやや崩れているが断面形状を呈する。内面にも粗雑な刷毛目を残す。
41	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周壕 埋没土中	①白色物、鉱物、中・細砂。 ②径2.5YR7/8 ③残片 ④10本	大径の透孔は円形を呈すると思われる。外面調整の刷毛目目はやや単位ごとの細かい刷毛目目による。
42	円筒埴輪 円筒形	胴部小破片	周壕 埋没土中	①白色物、鉱物、中・細砂。 ②にぶい径5YR6/4 ③縦線 ④12本	内外面に刷毛目を残す。
43	円筒埴輪 円筒形	基部破片 高 7.9cm残	周壕 埋没土中	①白色物、鉱物、中・細砂。 ②にぶい径5YR6/4 ③縦線 ④11本	歪んでいる。調整は外面が刷毛目、内面が指頭によるなで丁寧である。

4号古墳出土遺物観察表 (図74)

番号	部種	量目	出土位置	①粘土②色調③硬度④刷毛目	成・整形の特徴
44	円筒埴輪 円筒形	基底部破片 高 4.7cm残	周堀 埋没土中	①赤色物、中砂。 ②橙5YR7/6 ③11本	外面は縦方向の刷毛目を残す。

5号古墳出土遺物観察表 (図77・78)

番号	部種	量目	出土位置	①粘土②色調③硬度④刷毛目	成・整形の特徴
1	形象埴輪 動物 馬立梨	現存高 4.6cm 現存長 8.5cm	周堀 埋没土中	①赤物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻	板状を呈し、頭部との接合部分は幅広くになる。引手を表現したと思われる細い粘土が付く。表面には刷毛目が施されるが片面は縦方向、もう片面は縦方向である。緑に赤い彩色がなされている。
2	円筒埴輪 朝顔形	4/5残 口 32.7cm 底 16.6cm 高 52.3cm	周堀 埋没土中	①赤色物、鉱物、中・細砂。 ②明赤燧2.5YR5/6 ③堅緻	口縁部の先端は強く外反し、水平に近いほどゆる。突帯は口縁部と頸部に各一途、胴部に三条がめぐる。突帯は台形状であるが部分的に離れている。透孔は胴部の各段に一对があり、半円形、あるいはハート形を意識している。外面の刷毛目は単位がやや粗雑である。
3	円筒埴輪 円筒形	口縁～胴部1/2残 口 (22.0cm) 高 23.1cm残	周堀 埋没土中	①赤色物、細砂、細礫。 ②橙7.5YR7/6 ④6本	口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。先端の面はやや丸みをおび上方を向く。突帯は形状のやや曲れた断面台形状である。突帯下位に円形の透孔が配置される。外面の調整は単位の粗い刷毛目である。
4	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 口 (21.2cm) 高 13.7cm残	周堀 埋没土中	①赤色物、細砂。 ②橙7.5YR7/6 ③堅緻	口縁部は先端が外反し、内側に受け口の弱い縁がつくられる。突帯は底辺の幅が広い断面台形状である。外面の刷毛目は粗い。内面には同様の刷毛目を横あるいは斜方向に施している。
5	円筒埴輪 円筒形	胴部1/3残	周堀 埋没土中	①赤色物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻	④6本
6	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周堀 埋没土中	①赤色物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻	④6本
7	円筒埴輪 円筒形	胴部1/2残	周堀 埋没土中	①赤色物、細砂。 ②橙5YR6/8 ③堅緻	④6本
8	円筒埴輪 円筒形	胴部1/2残	周堀 埋没土中	①赤色物、鉱物、細砂。 ②橙5YR6/8 ③堅緻	④6本
9	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周堀 埋没土中	①赤色物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻	④5本
10	円筒埴輪 円筒形	胴部～基底部1/2残 底 11.9cm 高 20.0cm残	周堀 埋没土中	①赤色物、中・細砂。 ②橙7.5YR7/6 ③堅緻	④5本
11	円筒埴輪 円筒形	胴部～基底部1/3残 底 (11.8cm) 高 18.9cm残	周堀 埋没土中	①赤色物、細砂。 ②橙7.5YR7/6 ③堅緻	④5本
12	円筒埴輪 朝顔形	口縁下部破片	周堀 埋没土中	①赤色物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻	④6本
13	円筒埴輪 朝顔形	胴部上位破片	周堀 埋没土中	①赤色物、鉱物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻	④6本
14	円筒埴輪 円筒形	口縁～胴部破片 高 19.3cm残	周堀 埋没土中	①赤色物、鉱物、中・細砂、細礫。 ②灰黄燧7.5YR8/6 ④6本	突帯は断面台形であるが低い。突帯の下位には円形と思われる透孔が配されている。外面は縦方向の刷毛目、内面は斜方向の刷毛目である。
15	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 7.5cm残	周堀 埋没土中	①細砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻	④5本

5号古墳出土遺物観察表 (図78・79)

番号	器種	量目	出土位置	①粘土②色調③硬度④刷毛目	成・整形の特徴
16	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 6.6cm残	周壁 埋設土中	①赤色物、鉱物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻 ④5本	内外面とも単位の粗い刷毛目を施す。
17	円筒埴輪 円筒形	口縁部小破片 高 3.7cm残	周壁 埋設土中	①鉱物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻 ④6本	先端は断面が弱いM字状を呈する。
18	円筒埴輪 円筒形	口縁部小破片 高 3.3cm残	周壁 埋設土中	①赤色物、鉱物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻 ④5本	先端は弱いM字状の断面形状を呈する。内外面とも単位の粗い刷毛目である。
19	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周壁 埋設土中	①中・細砂。 ②橙7.5YR7/6 ③堅緻 ④7本	円形の透孔が配されている。
20	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周壁 埋設土中	①赤色物、鉱物、中・細砂、 細礫。 ②橙5YR6/8 ③5本	突帯は断面三角形である。突帯の上位に円形の透孔が認められる。外面の刷毛目はやや単位の粗い刷毛目、内面は外面と異なる工具による刷毛目である。
21	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周壁 埋設土中	①赤色物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻 ④6本	突帯は低く傾いた断面台形である。透孔は半円形を意図しているか。
22	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周壁 埋設土中	①鉱物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻 ④5本	断面台形の突帯の下に透孔が配される。
23	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周壁 埋設土中	①赤色物、鉱物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻 ④7本	突帯は断面が低い台形状を呈す。透孔は半円形であったか。
24	円筒埴輪 円筒形	胴部小破片	周壁 埋設土中	①細砂。 ②橙7.5YR7/6 ③堅緻	突帯の下位に透孔が配される。
25	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周壁 埋設土中	①鉱物、中・細砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻 ④6本	突帯は断面台形であり、その下位に透孔が配される。外面は縦方向の刷毛目である。
26	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周壁 埋設土中	①鉱物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻 ④6本	突帯は断面台形状を呈し、その下位に透孔が配される。外面には刷毛目が施される。
27	円筒埴輪 円筒形	胴部小破片	周壁 埋設土中	①白色物、鉱物、粗・中砂。 ②にぶい橙5YR6/4 ③6本	突帯は低く、その下位に透孔がある。
28	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周壁 埋設土中	①赤色物、鉱物、粗・中砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻 ④7本	突帯は断面台形状であるが下辺は低く三角形に近い。外面は縦方向にやや単位の粗い刷毛目、内面も粗雑な刷毛目である。
29	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周壁 埋設土中	①鉱物、中・細砂。 ②橙7.5YR7/6 ③6本	突帯はつぶれて低い台形状を呈する。外面は単位の粗い刷毛目、内面はなでである。
30	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周壁 埋設土中	①赤色物、鉱物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻 ④6本	突帯はしっかりしている。外面には刷毛目、内面には比較的丁寧ななどで施されている。
31	円筒埴輪 円筒形	基部破片 高 7.1cm残	周壁 埋設土中	①赤・白色物、鉱物、中砂、 細礫。 ②淡黄橙7.5YR8/6 ③5本	外面には刷毛目が施される。内面はなで。底面の調整も粗雑である。
32	円筒埴輪 円筒形	基部破片 高 7.2cm残	周壁 埋設土中	①鉱物、中砂。 ②橙5YR6/8・橙7.5YR7/6 ③6本	外面には単位のやや粗い刷毛目が施される。内面はなでである。

6号古墳出土遺物観察表 (図80)

番号	器種	量目	出土位置	①粘土②色調③硬度④刷毛目	成・整形の特徴
1	形象埴輪 人物 石鏡		H-33G 墳丘上	①鉱物、中・細砂。 ②にぶい橙7.5YR7/4	指も表現されていたが欠損している。器面は丁寧なで整形である。

6号古墳出土遺物観察表 (図80・82・83)

番号	図種	量目	出土位置	①粘土②赤土③硬質④刷毛目	成・整形の特徴
2	形象埴輪 人物輪		周堀 埋没土中	①白色物、紅物、中・細砂。 ②にぶい橙7.5YR7/4	上腕部のみ残存である。肩部への接合は他同様ソケット状であり、粘土片を貼り込み成形している状態が良好におかれる。
3	形象埴輪 器財 大刀	現存高 7.3cm 幅 5.3cm 厚 2.0cm	周堀 埋没土中	①白色物、紅物、中・細砂、 細礫。 ②にぶい橙7.5YR7/4	器頭に装着する勾玉の一部で4と同一個体と思われる。表面側面ともに丁寧に削られている。赤色が側面と表面の斜格子目になされ、裏面は黒く彩色されている。
4	形象埴輪 器財 大刀	現存高 6.2cm 幅 5.4cm 厚 2.2cm	周堀 埋没土中	①白色物、紅物、中・細砂、 細礫。 ③にぶい橙7.5YR7/4	勾玉の一部で、表面に長軸4cm、短軸3.5cmほどの割離痕があり、三輪玉あるいは2号墳の14を削るとすれば円形の玉または鈴が表現されたと思われる。本体部分には割離防止のための刻みがつけられている。表面は赤と黒の彩色がなされ、側面は赤く彩色されている。
5	形象埴輪 器財 盾		周堀 埋没土中	①白色物、紅物、粗・中・ 細砂、細礫。 ②橙5YR6/8 ③軟弱	細片のため断定はできないが、道あるいは観等の器財の埴輪で基部に板状の本体が接続しているものであろう。外面には斜方向の刷毛目が施される。
6	円筒埴輪 ?	口縁部1/2残 口 19.9cm 高 5.4cm残	周堀 埋没土中	①紅物、中・細砂。 ②橙7.5YR7/8 ③10本	先端は外側に突帯が貼り付いたように段を有し突出する。調整は内外面の先端、上面に僅かで行なう。以下は内外面とも刷毛目である。伴出遺物に大刀形の形象があり、これの基台と考えるか、普通円筒形で折り返し口縁の型型の可能性があろうか。
7	円筒埴輪 刺座形	胴部片	周堀 埋没土中	①赤・白色物、粗・中・細 砂、細礫。 ②にぶい橙7.5YR7/4 ③不明	突帯は断面台形である。外面は丁寧に削られている。
8	円筒埴輪 円筒形	口縁部片 高 14.2cm残	周堀 埋没土中	①紅物、細砂、細礫。 ②橙5YR7/8 ③10本	口縁部は緩やかに外反、先端は外側を向く。突帯は原則断面三角形に近いものである。口縁部外面の刷毛目は斜方向に施す。内面にも斜方向の刷毛目が残存する。
9	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 口 (21.1cm) 高 7.1cm残	周堀 埋没土中	①白色物、細砂、細・小礫。 ②橙5YR6/8 ③軟弱 ④不明	緩やかに立ち上がり、断面M字状の先端は斜め外方を向く。外面は緩減が著しいが刷毛目が施される。
10	円筒埴輪 円筒形	胴部大型破片	周堀 埋没土中	①赤・白色物、粗・中・細 砂、細・小礫。 ②橙5YR6/8 ③不明 ④軟弱	全体に緩減が著しい。突帯はやや低い断面台形状を呈する。貼り付けは粗雑である。調整は不明である。
11	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周堀 埋没土中	①赤色物、紅物、粗・中・ 細砂。 ②橙5YR7/8 ③軟弱 ④6本	粘土の粗減さに起因するのか、成・整形全体が粗雑である。焼成温度も低い。突帯は底辺の幅が広い断面台形状である。外面の刷毛目はやや単位が粗い。内面は粗雑な面で刷毛目を多く残す。
12	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周堀 埋没土中	①赤色物、中・細砂、細礫。 ②橙5YR6/8 ③軟弱 ④16本	突帯は低くつぶれた断面台形状を呈する。外面は非常に細かい単位の刷毛目でなでていってよいものである。
13	円筒埴輪 円筒形	胴部大型破片	周堀 埋没土中	①赤色物、紅物、粗・中・ 細砂、細礫。 ②橙5YR6/8 ③軟弱 ④不明	突帯は低くつぶれた断面台形状で、三条以上めくられていた可能性がある。残存段上段に透孔の一部を残す。外面は丁寧に削られている。内面も一部に粘土粒の接合痕を残すものとなっている。
14	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周堀 埋没土中	①紅物、中・細砂、細礫。 ②橙5YR7/8 ③硬質 ④5本	突帯は鋭状を呈する。突帯の上位には透孔の一部が残存する。外面は刷毛目、内面はなでである。
15	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周堀 埋没土中	①赤色物、紅物、粗・中・ 細砂、細礫。 ②橙5YR7/8 ③軟弱 ④6本	突帯は断面台形であるが底辺が幅広い、低い。外面は単位の粗い刷毛目である。内面にも粗雑な刷毛目である。
16	円筒埴輪 円筒形	基底部破片 底 (15.2cm) 高 11.2cm残	周堀 埋没土中	①赤・白色物、紅物、粗・ 中・細砂、細礫。 ②橙5YR6/8 ③軟弱 ④不明	底面は肥厚している。磨減のための調整痕は不明である。

6号古墳出土遺物観察表 (図83)

番号	器種	量目	出土位置	①粘土②色調③硬度④刷毛目	成・整形の特徴
17	円筒埴輪 円筒形	基底部2/5残 底 (12.0cm) 高 17.0cm残	周堀 埋没土中	①紅物、細砂。 ②橙5YR7/8 ③12本	突帯は低い断面台形状を呈する。外面の刷毛目は縦方向に比較的確明に施される。底面には粘土板の接合痕が残る。
18	円筒埴輪 胴部破片		周堀 埋没土中	①赤・白色物、紅物、粗・中砂、細砂。 ②橙5YR6/6 ③脆弱 ④不明	胴部形埴輪の胴上位、肩部にあたるか。突帯の断面は三角形である。外面の調整はなでである。
19	円筒埴輪 胴部破片	胴上位～肩部片	周堀 埋没土中	①白色物、紅物、粗・中砂、 2～7mmの礫。 ②橙5YR6/8 ③脆弱 ④不明	残存部上位は口縁部上位への移行を思わせる。突帯は断面台形状で強い。外面はなで調整を施す。
20	円筒埴輪 円筒形	口縁部破片 高 7.2cm残	周堀 埋没土中	①白色物、紅物、中・細砂。 ②橙5YR7/8 ③脆弱 ④6本	外面の刷毛目は単位の粗雑なものである。内面も同様のものが先端は縦方向、以下は斜方向に施されている。
21	円筒埴輪 円筒形	口縁部付透破片	周堀 埋没土中	①白色物、紅物、中砂。 ②橙5YR7/8 ③脆弱 ④14本	小破片で、外面に弧状の荒書がしるされている。
22	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周堀 埋没土中	①赤・白色物、紅物、中砂。 ②橙5YR7/8 ③脆弱 ④12本	小破片の外面に弧状の荒書がしるされていると思われる。外面の調整はなでである。
23	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周堀 埋没土中	①紅物、粗・中砂。 ②橙5YR7/8 ③脆弱 ④10本	小破片で、外面に弧状の荒書がしるされている。
24	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周堀 埋没土中	①白色物、紅物、中砂。 ②橙5YR7/8 ③脆弱 ④9本	断面台形状の低い突帯の下位には円形の透孔が穿たれている。外面の調整は刷毛目、内面にも一部刷毛目が残存する。
25	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周堀 埋没土中	①紅物、中砂。 ②橙5YR6/6 ③11本	突帯は断面形状が三角形で低い。外面の調整は斜方向の刷毛目である。内面にも刷毛目を施している。
26	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周堀 埋没土中	①白色物、紅物、中・細砂。 ②橙5YR6/8 ③脆弱 ④6本	突帯は断面台形状であるかやや傾いている。外面の刷毛目は粗い。
27	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周堀 埋没土中	①白色物、紅物、中・細砂、 細砂。 ②橙5YR6/8 ③脆弱 ④5本	外面の刷毛目は粗い。

7号古墳出土遺物観察表 (図84)

番号	器種	量目	出土位置	①粘土②色調③硬度④刷毛目	成・整形の特徴
1	形象埴輪 人物		周堀 埋没土中	①白色物、紅物、中・細砂。 ②橙5YR6/8 ③脆弱	頸部直下の胸部破片である。頸部には丸玉を連ねた首飾りが表現されている。
2	形象埴輪 人物	残高 7.6cm 胴部幅 (23.7cm) 径 (23.8cm)	周堀 埋没土中	①赤・白色物、紅物、中砂。 ②橙5YR6/8 ③脆弱	上半身像の密着縮部を表現したものとと思われる。
3	形象埴輪		周堀 埋没土中	①白色物、紅物、中・細砂。 ②橙5YR6/8	小径の筒状を呈する。内面は縦方向になでている。大刀の一部か？
4	不明	破片	周堀 埋没土中	①赤色物、紅物、中・細砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻	器種、部位の確定は困難である。径1.5cm程の小孔が穿たれているか。また、外面には粘土板の貼付痕が認められる他はなでが施される。
5	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	周堀 埋没土中	①白色物、粗砂。 ②橙5YR6/6 ③10本	内外面とも刷毛目を施している。

8号古墳出土遺物観察表 (図86)

番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	土師器 甕	底部片 径 5.7cm	周堀 埋没土中	①中・細砂、赤色顔料物を含む。 ②橙7.5YR7/6 ③酸化窑	胴部は狭小な平底の底部から大きく張り出すと思われ、胴部外面には荒削りを施す。底面外面は成形時の押えを残す。内面には荒のあたっての痕跡がある。
2	内輪埴輪 内筒形	胴部破片	周堀 埋没土中	①胎土②色調③硬度④刷毛目 ①白色物、鉱物、中・細砂、 細砂。 ②明赤焼5YR5/6 ③窯痕 ④5本	突帯は断面台形状、低いがしっかりしている。外面の刷毛目は単位が粗雑なものである。内面にも斜方向の刷毛目を残す。
3	内輪埴輪 胴部形	胴部片	周堀 埋没土中	①赤色物、鉱物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③窯痕 ④6本	突帯は上辺の幅が狭いが断面台形状でしっかりした貼り付けである。外面は斜方向に刷毛目を施している。
4	内輪埴輪 内筒形	口縁部片 高 7.3cm残	周堀 埋没土中	①鉱物、粗・中砂。 ②橙5YR6/6 ③窯痕 ④7本	外面は単位の粗い刷毛目の上に三条の横線による裏記号が刻されている。
5	内輪埴輪 内筒形	口縁部片 高 3.2cm残	周堀 埋没土中	①鉱物、中砂。 ②橙5YR6/6 ③窯痕 ④8本	緩やかに外反、先端には斜め上方を向く平断面がかたづぶらんでいる。
6	内輪埴輪 内筒形	口縁部片 高 5.0cm残	周堀 埋没土中	①中・細砂。 ②橙5YR6/6 ④9本	先端は緩やかに外反し、斜め上方に平断面を向ける。先端は横なで、以下に刷毛目を施す。
7	内輪埴輪 内筒形	胴部片	周堀 埋没土中	①赤・白色物、鉱物、中砂。 ②橙7.5YR7/6 ③焼割 ④6本	突帯は断面三角形、低いものである。外面には刷毛目、内面になでが施される。
8	内輪埴輪 内筒形	胴部片	周堀 埋没土中	①白色物、鉱物、中・細砂。 ②橙5YR6/8 ③焼割 ④6本	突帯は断面三角形に近い。外面には刷毛目を施す。
9	内輪埴輪 内筒形	胴部片	周堀 埋没土中	①鉱物、細砂。 ②橙2.5YR7/6 ③窯痕 ④9本	突帯は断面台形、しっかりしている。外面には縦方向の刷毛目が、内面には横方向のなでが施される。
10	内輪埴輪 内筒形	胴部片	周堀 埋没土中	①白色物、鉱物、中・細砂。 ②橙5YR6/6 ④9本	外面は刷毛目後一部をなでているか。
11	内輪埴輪 内筒形	胴部片	周堀 埋没土中	①鉱物、細砂。 ②橙5YR6/6 ④8本	内外面に刷毛目を残す。
12	内輪埴輪 内筒形	胴部破片	周堀 埋没土中	①鉱物、中・細砂。 ②橙7.5YR7/6 ③焼割 ④6本	外面の刷毛目は単位がやや粗雑である。内面にも刷毛目を残す。
13	内輪埴輪 内筒形	基底部片 高 4.7cm残	周堀 埋没土中	①白色物、鉱物、粗・中・ 細砂、細砂。 ②橙5YR6/8 ③焼割 ④5本	底面は歪み、外面に肥厚する。外面に刷毛目、内面になでが施される。

9号古墳出土遺物観察表 (図88)

番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	須恵器 甕	胴部片	周堀 埋没土中	①細砂、白色顔料物を含む。 ②淡黄5Y7/3 ③還元焰・硬質	外面には平行叩き目の上に5本一単位のオキ目が施される。内面には同心円のなで目が残る。
2	須恵器 甕	胴部片	北堀 埋没土中	①細砂、白色顔料物を含む。 ②内灰白5Y7/2 外灰5Y 4/1 ③還元焰・硬質	外面には平行叩き目が、内面には同心円のなで目が認められる。
3	内輪埴輪 内筒形	口縁部片 高 2.2cm残	周堀 埋没土中	①胎土②色調③硬度④刷毛目 ①赤色物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③窯痕	先端の斜め上方に平断面が向く。外面は横なで、内面には刷毛目を施す。
4	内輪埴輪 内筒形	胴部片	周堀 埋没土中	①白色物、細砂。 ②橙5YR6/8 ④7本	外面には縦方向の刷毛目、内面は斜方向の刷毛目が施される。

9号古墳出土遺物観察表 (図88)

番号	器種	量目	出土位置	①粘土②色調③硬度④刷毛目	成・整形の特徴
5	円筒埴輪 円筒形	基底部片 □ 21.9cm 底 11.2cm 高 35.0cm	東堀 埋没土中	①紅物、中砂。 ②橙7.5YR7/6 ③脆弱 ④5本	外面には単位の粗雑な刷毛目を施す。内面には粘土柱の接合痕が顕著に認められる。

1号円筒埴輪出土遺物観察表 (図91)

番号	器種	量目	出土位置	①粘土②色調③硬度④刷毛目	成・整形の特徴
1	円筒埴輪 円筒形	1/2残 □ 21.9cm 底 11.2cm 高 35.0cm	掘り方内	①紅物、中・細砂、細礫。 ②にぶい橙7.5YR7/4 ③堅緻 ④12本	二条の突帯は断面形が台形を呈する。胴部に円形の透孔が二箇所に配置される。外面は縦方向の刷毛目だが、内面は口縁部の上半に刷毛目を残す他は縦方向に指強によるなでが施されている。底面には粘土板の接合痕が明瞭に残る。
2	円筒埴輪 円筒形	完形 □ 18.0cm 底 11.5cm 高 34.7cm	掘り方内	①赤・白色物、紅物、中・細砂、細礫。 ②橙5YR6/8・浅黄橙7.5YR8/4 ③堅緻 ④8本 外側下吸気	器形は歪みが著しい。また、基底部が長くやや不安定な形状である。二条の突帯は形状が崩れ、貼り付けも粗雑である。胴部に二箇所、円形の透孔が配置される。外面の調整は縦方向の刷毛目、内面は口縁部に刷毛目、その他はなでである。基底部表面の一部に炭素吸着。
3	円筒埴輪 円筒形	口縁～基底部1/2残 □ (20.8cm) 高 (35.2cm)	掘り方内	①紅物、中・細砂、細礫。 ②黄橙7.5YR8/8 ④5本	口縁部の先端の面はシャープさを失っている。外面に一条の沈めがめぐる。二条の突帯も、断面台形の形状がまるくなる。胴部の透孔は半円形を呈している。外面の刷毛目は単位の粗いものでやや粗雑である。
4	円筒埴輪 円筒形	口縁～胴部1/4残 □ (23.1cm) 高 14.5cm残	掘り方内	①赤色物、紅物、中・細砂。 ②にぶい橙7.5YR6/4 ③脆弱 ④9本	内外面とも脆軟、割傷が著しい。突帯も摩耗しているが断面は台形がやや崩れたものと思われる。口縁部外面に寛記号が認められる。
5	円筒埴輪 円筒形	口縁部1/5残 □ (23.3cm) 高 15.8cm残	掘り方内	①紅物、細砂。 ②黄橙7.5YR7/8 ④6本	口縁部は先端が大きく外反する。口縁部先端の面及び突帯の形状のつくり方はいずれも粗雑である。胴部に透孔の一部が残存する。外面の調整には二種類の刷毛目が使用されている。内面は口縁部が刷毛目、以下はなである。
6	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	掘り方内	①紅物、細砂、細礫。 ②黄橙7.5YR7/8 ④5本	突帯は断面台形状を呈する。胴部には透孔の一部が残存する。外面にはやや単位の粗い刷毛目が施される。
7	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	掘り方内	①赤色物、紅物、中・細砂。 ②にぶい橙7.5YR6/4 ③脆弱 ④12本	器内は全体にやや薄い。突帯は細いが断面台形を保とうとしている。口縁部に寛記号の一部が残る。内外の器面には4同様の付着物がある。
8	円筒埴輪 円筒形	基底部1/4残 底 (14.2cm) 高 11.5cm残	掘り方内	①紅物、中・細砂。 ②黄橙7.5YR7/8 ④7本	器形の歪みが著しい。外面はやや単位の粗い刷毛目、内面はなでを施す。

4. 旧河道出土遺物

第1河道出土遺物観察表 (図94)

番号	器種	量目	出土位置	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	土師器 杯	口縁～体部2/5残 □ 16.8cm 高 4.0cm	K-36G 他 第1河道	①中・細砂、白色細粒物、 石英、角閃石を含む。 ②橙7.5YR7/6 ③酸化焰	口縁部内外面横なで。体部から底部外面、斜方向縦方向の寛削り。内面なで。
2	土師器 杯	1/2残 □ (13.2cm) 高 3.3cm	K-37G 第1河道	①中・細砂、白色細粒物、 3mmの小石を含む。 ②橙7.5YR7/6 ③酸化焰	口縁部内外面横なで。底部外面一定方向の寛削り後、縦方向・斜方向の履なで。内面なで、指間圧痕残る。
3	土師器 杯	口縁～体部破片 □ (16.8cm)	埴土 第1河道	①細砂、赤色細粒物を含む。 ②内黒7.5YR2/1 外橙7.5YR6/6 ③酸化焰 内黒	口縁部横なで。体部外面横方向の履なで。底部寛調整。内面なでの後、横方向の寛削り。
4	須恵器 杯	4/5残 □ 12.2cm 底 7.3cm 高 3.6cm	K-41G 第1河道	①中・細砂、白色細粒物、 3mmの小石を含む。 ②灰黒N/0 ③還元焰・硬質	ロクロ成形左回転。切り離し技法不明。底部回転寛削り調整。

第1河道出土遺物観察表 (図94)

番号	器種	量目	出土位置	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴
5	須恵器 杯	3/4残 口 (12.1cm) 底 6.2cm 高 3.5cm	K-41G 第1河道	①粗・中・細砂、白・赤色 細粒物、石英を含む。 ②灰白2.5Y8/1 ③還元焰	ロクロ成形右回転。底部回転糸切り。外面に比べて内面のロクロ痕が弱い。
6	須恵器 杯	完整 口 12.2cm 底 6.3cm 高 4.0cm	K-42G 第1河道	①中・細砂、白色細粒物、 4mmの小石を含む。 ②灰N5/0 ③還元焰・硬質	ロクロ成形右回転。底部回転糸切り。外面に比べて内面のロクロ痕が弱い。
7	須恵器 杯	3/4残 口 12.4cm 底 7.6cm 高 3.6cm	J-42G 第1河道	①中・細砂、白色細粒物を含 含む。 ②灰黄2.5YR7/2 ③還元焰	ロクロ成形右回転。底部回転糸切り。切り難し後、杯 部最下部と底部周縁磨削り調整。
8	須恵器 杯	底部破片 底 (8.9cm)	I-42G 第1河道	①細砂、白色細粒物、3mm の小石数個含む。 ②明赤黄5YR5/8 ③酸化焰が2次焼成	ロクロ成形。底部切り難しは糸切りに見えるが、不明 瞭。内面ロクロ目痕あり。
9	須恵器 杯	口縁部破片 口 (11.0cm)	J-42G 第1河道	①細砂、白色細粒物を含む。 ②灰白2.5Y7/1 ③還元焰	ロクロ痕あり。
10	須恵器 杯	4/5残 口 13.5cm 底 7.5cm 高 3.4cm	J-45G 第1河道	①中・細砂、白・赤色細粒 物、石英を含む。 ②灰白10YR7/1 ③還元されてない	ロクロ成形右回転。底部回転磨削り調整。底部抜き出 しの稜を有する。
11	須恵器 杯	1/4残 口 (14.0cm) 底 (9.0cm) 高 3.2cm	J-47G 第1河道	①中・細砂、2～3mmの小 石含む。 ②灰白5Y7/1 ③還元されてない・軟質	ロクロ成形右回転。切り難し技法不明。底部回転磨削 り調整。底部抜き出しの稜を有する。
12	須恵器 杯	2/5残 口 (13.9cm) 底 (8.4cm) 高 3.1cm	J-49G 第1河道	①中・細砂、白色細粒物を含 含む。 ②灰N6/0 ③還元焰・硬質	ロクロ成形右回転。切り難し技法不明。底部回転磨削 り調整。
13	須恵器 杯	1/4残 口 (12.2cm) 底 (6.0cm) 高 4.1cm	埋没土中 第1河道	①中・細砂、白色細粒物を含 含む。 ②灰N6/0 ③還元焰	ロクロ成形右回転。底部回転糸切り。底部全面磨削り 調整。体部の内外面にロクロ痕あり。
14	須恵器 杯	1/4残 口 (14.1cm) 底 (7.5cm) 高 4.2cm	埋没土中 第1河道	①中・細砂、白色細粒物を含 含む。 ②黄2.5Y8/3 ③還元焰	ロクロ成形回転不明。切り難し技法不明。体部内外面 ロクロ痕あり。底部抜き出しの稜を有する。
15	須恵器 杯	1/3残 口 (13.8cm) 底 (8.5cm) 高 3.5cm	埋没土中 第1河道	①中・細砂、石英を含む。 ②黄2.5Y8/3 ③還元されてない	ロクロ成形回転不明。底部左回転調整あり。底部に 抜き出しの稜を有する。内外面ともにロクロ痕強い。
16	須恵器 杯	1/3残 口 (14.0cm) 底 (7.8cm) 高 3.1cm	埋没土中 第1河道	①中・細砂、石英、3mmの 小石を含む。 ②黄2.5Y8/3 ③還元されてない	ロクロ成形右回転。切り難し技法不明。底部回転磨削 り調整。底部抜き出しの稜を有する。
17	須恵器 椀	口縁～体部1/5残 口 (12.4cm) 高 4.1cm	K-40G 第1河道	①細砂、白・赤色細粒物、 石英を含む。 ②にぶい黄橙10YR6/4 ③還元焰	ロクロ成形回転不明。体部外面ロクロ痕あり。内面の ロクロ痕弱い。
18	土師器 椀	1/2残 口 (13.0cm) 底 (8.2cm) 高 4.3cm	I-45G 第1河道	①中・細砂、赤色細粒物、 石英、角閃石を含む。 ②にぶい赤黄5YR5/4 外橙2.5YR6/6 ③酸化焰・やや軟質	口縁部横で、体部外面横で。底部磨削り調整。内 面などで、外面全体に磨面刺しており、他の調整技法 不明。

第1河道出土土物観察表 (図94・95)

番号	器種	量目	出土位置	①粘土②色調③地成	成・整形の特徴
19	須恵器 高台付椀	底部破片 底 8.0cm	I-42G 第1河道	①中・細砂、7mmの小石を含む。 ②灰白2.5Y8/1 ③還元焰	ロクロ成形回転不明瞭、底部回転差削り調整、付け高台。
20	須恵器 高台付椀	ほぼ完形 口 11.8cm 底 7.3cm 高 5.5cm	I-44G 第1河道	①中・細砂、白色細粒物を含む。 ②灰白7.5Y7/1 ③還元焰・硬質	ロクロ成形右回転、底部回転差削り調整、切り離し技法不明、付け高台。
21	灰釉陶器 皿	4/5残 口 15.5cm 底 7.4cm 高 3.3cm	旧河道 第1河道	①細砂、石英、3mmの小石を含む。 ②灰白7.5Y8/1・灰オリーブ7.5Y6/2 ③還元焰・硬質	ロクロ成形回転不明瞭、底部回転差削り調整、付け高台。体部外面にロクロ痕残り、内面に施釉されており、刷毛の跡が看取される。
22	須恵器 長頸壺	肩部破片	H-38G 第1河道	①中・細砂を含む。 ②灰10Y6/1 ③還元焰・硬質	ロクロ成整形、外面肩部に1条、体部上位に1条沈線あり、その間に懸状工具の端による刻突が施される。外面に自然釉が付着する。
23	須恵器 長頸壺	胴下～底部破片 底 (11.3cm)	I-38G 第1河道	①中・細砂を含む。 ②灰10Y6/1 ③還元焰・硬質	ロクロ成形回転不明瞭、付け高台、胴部外面、高台内外面に自然釉付着する。
24	灰釉陶器 長頸瓶	胴部3/4残	K-36G 他 第1河道	①細砂を含む。 ②灰白7.5Y8/1 灰オリーブ7.5Y5/2 ③還元焰・硬質	ロクロ成整形、切り離し技法不明、付け高台、外面ロクロ痕残り、肩部から胴部中途にかけて施釉されている。内面底部付近に一部釉が付着し、ブクあり。
25	須恵器 瓶	底部破片 底 (12.6cm)	I-38G 他 第1河道	①粗・中・細砂、白色細粒物を含む。 ②灰10Y4/1 ③還元焰	紐作りロクロ成整形、外面横方向の蔑削り、底部蔑削り、内面横方向の蔑削り後、一部に縦方向のなでや、斜方向・縦方向の棒状工具による調整あり。底部近くに円錐状にえぐった小孔あり。
26	須恵器 甕	底部破片 底 14.5cm	K-41G 第1河道	①細砂、白色細粒物を含む。 ②灰白7.5Y7/1 ③還元焰・やや硬質	紐作りロクロ成整形。内外面に接合痕が数見される。底部底面未調整。

旧河道その他の出土土物1観察表 (図96)

番号	器種	量目	出土位置	特 徴
1	碗 (青磁) 磁器	口縁破片	旧河道 埋設土上層	胎土は淡灰色。釉は淡緑青色。地成は磁胎。内面に劃花の蓮弁文が片切彫りで施される。釉の発色は薄く淡く上手ではない。外面に輪轆による磨り目あり。中国鳳泉窯の製品と考えられ、13・14世紀の製作。
2	香炉 (青磁) 磁器	高台部径7.1cm	旧河道 埋設土上層	胎土は淡灰色。釉は厚く淡緑色。地成は磁胎。釉は外面～高台部端と乾目高台内面に施される。釉中に気泡が多く七官様の伊万世青磁、胎土中に微細粒物が含まれる。外面の露胎部は鉄足様に酸化、18世紀。
3	碗 陶器	体部片	旧河道 埋設土上層	胎土は密で淡黄灰色。釉は透明感強く、淡い褐色を呈す。地成は硬く、陶胎。釉は内外に施される。体部外面に回転差削り目あり。胎土の色調はやや酸化し、その緻密さと合わせ京焼系。18・19世紀。
4	袋物 陶器	体部片	旧河道 埋設土上層	胎土は密で酸化気味の淡赤褐色を呈す。釉は化粧藍に白土を用い、さらに透明釉を施す。内面は露胎で錆による輪轆目あり。釉の調子は志野釉のような石英釉のように見えるが、異なる。17～19世紀。
5・6	土瓶 陶器	体部片	旧河道 埋設土上層	胎土は白色気味であるが陶着が少なく陶胎。釉は透明釉と鉄釉による。釉は体部外面下方を除き青色釉、露胎部には煤がおよび土灰として使用されたことがわかる。捺付の調子は益子焼風であるが胎土がやや白すぎる。19世紀。
7	鉢 陶器	体部片	旧河道 埋設土上層	胎土は淡黄灰色でやや粗。夾雜物物わずか含む。釉は外面に青色釉の掛流しあり。内面は露胎となる。青色釉はペロ藍の手で明治以降。器形は大きな鉢物で植木鉢など。19・20世紀。
8	徳利 磁器	体部片	旧河道 埋設土上層	胎土は白く磁胎。釉は内外に透明釉が施される。内面には錆による輪轆目あり。器内は薄く上手な焼き方である。釉の表面光沢は強く新緑をよませる。19世紀以降の製品。
9	徳利か 磁器	体部片	旧河道 埋設土上層	胎土は純白で磁胎。粗地は密。釉は透明釉であるが外面がやや淡緑を呈す。内面に輪轆目あり。釉は薄く透明感と光沢が強い。そのため19世紀以降の製品。全体に薄作である。

旧河道その他の遺物1観察表 (図96)

番号	器種	量目	出土位置	特 徴
10	土器 陶器	口径 8.0cm	I-42G 第2河道	胎土は夾雑物が少なく、質地はやや粗。胎土の色調は淡黄色。釉は淡黄褐色。焼成は硬質。釉は体部外面が露胎となり、他は施釉。器形は小皿であるが下方端に倒り出しが唇の底縁に残る。体部外面回転施釉。17世紀。

第2河道出土遺物観察表 (図101)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・器形の特徴
1	土器器 杯	破片 口 (11.0cm) 底 丸底	L-38G 第2河道	①中・細砂を含む。 ②淡黄褐色7.5YR8/4 ③酸化焙	口縁部内外面横なで、中位に段を有する。体部外面一定方向の施釉。内面なで。
2	土器器 杯	口縁→体部2/5残 口 (19.2cm) 底 丸底	L-38G 第2河道	①中・細砂、赤色細粒物を含む。 ②灰褐色7.5YR5/2・淡黄褐色7.5YR8/4 ③酸化焙	口縁部内外面横なで。体部外面施釉後、内面なで。内面なで。
3	土器器 杯	破片 口 (11.2cm) 底 丸底	L-38G 第2河道	①中・細砂、白・赤色細粒物、石英を含む。 ②橙7.5YR7/6 ③酸化焙	口縁部内外面横なで、中位に段を有する。体部外面斜方向の施釉後、部分的に縦方向の施釉で覆取される。内面なで。
4	土器器 杯	口縁→体部破片 口 (13.6cm) 底 丸底	K-39G 第2河道	①中・細砂、白色細粒物を含む。 ②内橙7.5YR6/8 外橙5YR7/8 ③酸化焙・硬質	口縁部内外面横なで。体部外面横方向の施釉。内面なで。
5	土器器 杯	口縁→体部1/5残 口 (15.2cm) 底 丸底	I-43G 第2河道	①細砂、白色細粒物、石英、2mmの小石数個含む。 ②内橙2.5YR6/8 外橙5YR6/6 ③酸化焙・硬質	口縁部横なで。体部外面斜方向の施釉。内面なでの後、施磨き。
6	土器器 杯	口縁→体部1/4残 口 (14.2cm) 底 丸底	J-44G 第2河道	①細砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②橙5YR4/1 ③酸化焙	口縁部横なで、外面中位に段を有する。体部横方向の施釉後の後、縦方向の施釉。内面なで。
7	土器器 杯	口縁→体部1/2残 口 13.8cm 底 丸底	I-44G 第2河道	①細砂、白・赤色細粒物、角閃石を含む。 ②内橙7.5YR6/4・黒褐色7.5YR5/1 ③酸化焙	口縁部横なで。体部外面横方向に長い施釉。内面施釉なで。外面部分的に磨耗。内面は磨面が剥離して見えている。
8	土器器 杯	ほぼ完形 口 13.9cm 底 丸底 高 4.0cm	I-44G 第2河道	①中・細砂、白色細粒物を含む。 ②橙7.5YR7/6 ③酸化焙	口縁部横なで。底部外面、横方向の施釉。内面施釉なで。
9	土器器 杯	口縁→体部1/3残 口 (13.0cm) 底 丸底	I-44G 第2河道	①粗・中砂、赤色細粒物を含む。 ②橙7.5YR7/6 ③酸化焙	口縁部横なで。体部外面斜方向の施釉後の後、縦方向の施釉。内面施釉なで。
10	土器器 杯	口縁→体部1/3残 口 (16.5cm) 底 丸底	I-44G 第2河道	①中・細砂、白・赤色細粒物2～3mmの小石数個、雲母を含む。 ②淡黄褐色7.5YR8/4 ③酸化焙	口縁部横なで。体部外面不定方向の施釉後の後、上半縦方向の施釉なで。内面なでの後、部分的に不定方向の施磨き。
11	土器器 杯	口縁→体部1/2残 口 11.3cm 底 丸底	I-44G 第2河道	①中・細砂、赤色細粒物、石英を含む。 ②橙5YR6/6 ③酸化焙	口縁部横なで。体部外面斜方向の施釉後の後、上半縦方向の施釉なで。内面なで。
12	土器器 杯	口縁→体部1/3残 口 (15.1cm)	I-44G 第2河道	①中・細砂、赤色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②橙2.5YR6/8 ③酸化焙	口縁部横なで。体部外面横方向の施釉後の後、縦方向の施釉なで。内面なでの後、縦方向の施磨き。内面は磨面が剥離し、見えている。

第2河道出土遺物観察表(図101)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③地成	成 形 の 特 徴
13	土師器 杯	口縁一体部1/4残 口 14.0cm 底 (4.3cm)	J-44G 第2河道	①中・細砂、白・赤色細粒物を含む。②明赤褐色2.5YR5/8 ③酸化焙	口縁部横なで。体部外面横方向の磨削り後、縦方向の磨なで。底部磨削り調整。内面磨なで。
14	土師器 杯	1/2残 口 11.9cm 底 丸底 高 3.6cm	J-44G 第2河道	①中・細砂を含む。②明赤褐色2.5YR5/8 ③酸化焙・やや軟質	口縁部横なで。体部外面、不定方向の磨削り。内面なで。体部外面の磨面、一部割離。
15	土師器 杯	完形 口 12.8cm 底 丸底 高 4.2cm	J-44G 第2河道	①中・細砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石を含む。②内灰褐色7.5YR5/2 ③外淡黄褐色7.5YR8/4 ④酸化焙	口縁部横なで、中位に段を有する。体部外面、横方向に長い磨削り後の、底部付近一定方向の磨なで。内面なで。
16	土師器 杯	ほぼ完形 口 12.9cm 底 丸底 高 4.3cm	J-44G 第2河道	①粗・中砂、白・赤色細粒物、石英、2-5mmの小石多数を含む。②橙5YR7/6 ③酸化焙 外底部吸炭	口縁部横なで。体部外面、横方向に長い磨削り後の、底部付近一定方向の磨なで。内面磨なで。
17	土師器 杯	完形 口 12.8cm 底 丸底 高 4.1cm	J-44G 第2河道	①細砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石を含む。②橙7.5YR6/6 ③酸化焙	口縁部横なで。体部外面磨なで、一部割離し器面荒れている。内面も割離しており、調整技法不明。
18	土師器 杯	3/5残 口 12.3cm 底 丸底 高 3.7cm	J-44G 第2河道	①粗・中砂、白・赤色細粒物、2-4mmの小石を含む。②橙5YR6/6 ③酸化焙	口縁部横なで。体部外面横方向の磨削り。内面なで。体部外面一部割離。
19	土師器 杯	1/2残 口(12.3cm) 底 丸底 高 4.9cm	J-44G 第2河道	①粗・中砂、石英、2-4mmの小石を含む。②にぶい赤褐色5YR4/3 ③酸化焙	口縁部横なで。体部外面、不定方向の磨削り。内面なで。内外面共に、一部器面割離。
20	土師器 杯	2/5残 口(8.8cm) 底(4.1cm) 高 7.8cm	J-44G 第2河道	①細砂、白・赤色細粒物、石英を含む。②橙5YR6/6 ③酸化焙 外体部吸炭	口縁部横なで。体部外面横方向の磨なでの後、縦方向の磨なで。底部外面、磨削り調整か?内面縦方向の磨削り後の、上半磨なで。
21	土師器 杯	口縁一体部1/4残 口 14.0cm 底 丸底	J-44G 第2河道	①中・細砂、白・赤色細粒物を含む。②橙2.5YR6/8・橙7.5YR6/6 ③酸化焙 外底部吸炭	口縁部横なで。体部外面、不定方向の磨削り後、縦方向の磨なで。部分的に縦方向の磨きあり。内面、口縁部に指頭圧痕残る。なでの後、外面同様に縦方向の磨き。
22	土師器 杯	ほぼ完形 口 11.3cm 底 丸底 高 3.8cm	J-44G 第2河道	①中・細砂、石英を含む。②明赤褐色2.5YR5/8・橙7.5YR6/6 ③酸化焙・やや軟質	口縁部横なで、外面中位に弱い段を持つ。体部外面、横方向の磨削り。内面なで。外面全体に割離しており後の調整技法不明。
23	土師器 杯	ほぼ完形 口 11.5cm 底 丸底 高 4.0cm	J-44G 第2河道	①中・細砂、白色細粒物、石英を含む。②明赤褐色2.5YR5/8・橙7.5YR6/6 ③酸化焙	口縁部横なで。内外面共に器面が磨耗して荒れているため、調整痕は不明瞭である。その中で、体部外面に縦方向の磨なでが施されている部分が残る。
24	土師器 杯	完形 口 13.0cm 底 丸底 高 6.0cm	J-45G 第2河道	①中・細砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石を含む。②にぶい橙5YR6/4 ③酸化焙 硬質 外体部吸炭	口縁部横なで。体部外面斜方向の磨削り後の、縦方向の磨なで。体部上半縦方向の磨き。内面丁寧ななでの後、不定方向の磨き。
25	土師器 杯	ほぼ完形 口 11.5cm 底 丸底 高 4.1cm	J-46G 第2河道	①中・細砂、白色細粒物、石英を含む。②内橙7.5YR6/6 ③外明赤褐色2.5YR5/8 ④酸化焙	口縁部横なで。外面中位に段を有する。体部外面横方向の磨なで。内面なでの後、不定方向の磨き。外面の一部、器面割離。
26	土師器 杯	3/4残 口 14.3cm 底 丸底 高 5.3cm	J-47G 第2河道	①細砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石を含む。②橙5YR6/8 ③酸化焙・やや硬質	口縁部横なで。体部外面横方向に長い磨削り後、不定方向の磨なで。内面なでの後、縦方向の磨き。内面の一部器面割離。

第2河道出土遺物観察表 (図101・102)

番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
27	土師器 杯	口縁～体部1/2残 口 (12.8cm) 底 丸底	J-47G 第2河道	①細砂、白・赤色細粒物、 角閃石、2mmの小石数個 含む。 ②橙5YR6/8・淡橙5YR8/4 ③酸化焙	口縁部横で、下位に段を有する。体部外面横方向の 寛がり縁、上半縁方向の寛いで、内面まで、内面全体 にやや稜鈍。
28	土師器 杯	4/5残 口 15.9cm 底 丸底 高 7.3cm	J-49G 第2河道	①粗・中砂、白・赤色細粒 物、石英、角閃石を含む。 ②橙5YR6/8 ③酸化焙	口縁部横で、体部外面一定方向の寛いで、内面横な で、外面の一部部割れ。内外面共に全体に稜鈍。
29	土師器 鉢	口縁～体部1/5残 口 (13.3cm)	I-42G 第2河道	①中・細砂、白・赤色細粒 物、石英、角閃石を含む。 ②橙2.5YR6/8 ③酸化焙	口縁部内外面横で、体部外面上半斜方向の寛いで、 下半部横方向の寛がり。内面までの後、斜方向の磨き が残る部分がある。
30	土師器 鉢	底部破片 底 3.7cm	I-43G 第2河道	①中・細砂、白・赤色細粒 物、石英を含む。 ②内淡黄橙7.5YR8/4 外橙2.5YR7/8 ③酸化焙・硬質	体部外面下半横方向の寛がり。底部外面調整、内面 までの後、放射状の磨き。
31	土師器 鉢	口縁～体部破片 口 (13.2cm)	I-45G 第2河道	①中・細砂、白・赤色細粒 物、石英、角閃石を含む。 ②橙5YR6/8 ③酸化焙・やや硬質	口縁部内外面横で、体部外面横方向の寛いで、内面 まで。
32	土師器 鉢	1/2完形 口 10.4cm 底 4.6cm 高 4.8cm	J-45G 第2河道	①細砂、赤色細粒物、石英、 角閃石を含む。 ②橙5YR6/6・淡黄橙5YR 8/4 ③酸化焙	口縁部から体部の外面まで。輪積み痕を残すような蓋 を作り、底部外面調整、内面横までの後、縦方向の 磨き。
33	土師器 鉢	1/5残 口 (9.2cm) 底 (3.8cm) 高 7.8cm	J-46G 第2河道	①細砂、白・赤色細粒物、 石英を含む。 ②内淡黄橙7.5YR8/3 外橙5YR7/6 ③酸化焙	口縁部内外面横で、体部外面斜方向の寛いで、寛がり 。内面まで。
34	土師器 埴	口縁部破片 口 (16.2cm)	I-43G 第2河道	①細砂、白色細粒物、石英、 角閃石を含む。 ②橙7.5YR6/6 ③酸化焙・やや硬質	口縁部外面手などで、内面横方向の寛いで。
35	土師器 埴	底部破片 底 4.3cm	I-43G 第2河道	①細砂、赤色細粒物、石英、 角閃石を含む。 ②橙7.5YR7/6 ③酸化焙・硬質	胴部外面底部付近不定方向の寛いで、内面手まで。
36	土師器 埴	口縁部破片 口 (13.9cm)	I-44G 第2河道	①中・細砂、石英2～4mm の小石含む。 ②淡黄橙7.5YR8/4 ③酸化焙	口縁部内外面横で、外面下半部に磨き。内面下半 部に寛いで磨取される。
37	須恵器 蓋	口縁部破片 口 (13.2cm)	J-49G 第2河道	①中・細砂、白色細粒物を含 む。 ②灰白2.5Y8/1 ③還元焙・硬質	ロクロ成形石回転。杯部外面下半部は、手持ち寛がり 。
38	土師器 高杯	脚部残	K-39G 第2河道	①細砂、赤色細粒物を含む。 ②橙5YR7/8 ③酸化焙・硬質	脚部は外面にやや張り出す。外面縦方向の調整が一部 に磨取されるが、不明瞭。内面は横方向の寛がり が施され、最上位に削り残しの部分あり。内面上半分 には絞り目痕があり、下半部は縦方向の寛いで、裾部内外 面まで。
39	土師器 高杯	脚部残 裾部1/2 欠損 底 (12.0cm)	J-41G 第2河道	①細砂、白・赤色細粒物、 石英、角閃石、雲母を含 む。 ②橙2.5YR6/8 ③酸化焙	脚部外面縦方向の寛いで、縦方向の磨きあり。脚部 内面絞り目痕あり。裾部との接合部あり。裾部内外面 ともに横まで。

第2河道出土遺物観察表 (図102)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
40	土師器 高杯	3/4残 口 23.6cm 底 15.5cm 高 18.0cm	J-41G 他 第2河道	①粗・中砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②橙7.5YR6/6 ③酸化焰	口縁部内外面横なで、杯部外面下半不定方向の寛なで、脚部外面縦方向斜方向の寛なで、裾部外面中位に段を有し、横なで、杯部内面不定方向の寛磨き、脚部内面上半は手なでか?下半は寛なで、裾部内面、横なで。
41	土師器 高杯	杯部3/4残 口 18.9cm	I-42G 第2河道	①粗・中砂、白色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②橙2.5YR6/8 ③酸化焰・やや硬質	杯部外面上半丁寧なで、下半横方向の寛磨りの後、縦方向の寛なで、内面縦方向の寛なで、底部不定方向の寛なで、杯部底部中央に脚部との接合のための突出が残されている。
42	土師器 高杯	杯部1/3残	I-42G 第2河道	①粗・中砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石、雲母を含む。 ②橙7.5YR7/6褐色7.5YR4/1 ③酸化焰	杯底部外面縦方向横方向の寛磨り後、縦方向の寛なで、内面摩耗し、調整技法不明。
43	土師器 高杯	脚部残 裾部1/2欠損 底 (13.6cm)	J-42G 第2河道	①粗・中砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②内橙5YR7/8 外黄橙7.5YR8/6 ③酸化焰	脚部から裾部外面摩耗し、縦方向の磨き取ることができるが、不明瞭。脚部横方向の寛磨り、裾部内面摩耗。
44	土師器 高杯	脚部残	I-43G 第2河道	①粗・中砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②黄橙7.5YR7/8 ③酸化焰	杯部底部外面縦方向の寛なで、内面刺離して調整技法不明、脚部外面縦方向の磨き。脚部内面縦方向の寛磨り後、指などによる調整。
45	土師器 高杯	杯部破片	I-43G 第2河道	①中砂、白色細粒物、石英を含む。 ②明赤褐2.5YR5/8 ③酸化焰・硬質	杯部外面口縁部付近横方向の寛なでの後、横なで、外面下半は斜方向の寛磨り、内面なでの後、縦方向の磨き。
46	土師器 高杯	杯部~脚部残	I-43G 第2河道	①細砂、白色細粒物、石英を含む。 ②橙7.5YR6/6 ③酸化焰	杯部外面縦方向の寛なで、内面横方向の寛なで、脚部外面縦方向の寛なで、脚部内面、絞り目と粘土紐巻上げ痕残り、無調整。
47	須恵器 高杯	杯部破片	I-44G 第2河道	①粗・中・細砂、白色細粒物、2~5mmの小石多く含む。 ②灰白7.5Y7/2 ③還元焰・硬質	ロクロ成型。口縁部から体部にかけて、すどい段が2条有り、その間に10本1単位の波状文が施される。内外面に自然物が付着する。
48	土師器 高杯	脚部残 裾部欠損	I-44G 第2河道	①粗・中砂、白色細粒物、2~3mmの小石を含む。 ②橙5YR6/8 ③酸化焰	脚部外面寛なでの後、縦方向の寛磨き。裾部外面脚部に続く磨き地されるが、器面摩耗のため、残存部は少ない。脚部内面には絞り目痕あり、下半は横なで、裾部内面に、接合痕残り。
49	土師器 高杯	杯部1/3残 口 (16.4cm)	J-44G 第2河道	①粗・中砂、赤色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②橙5YR6/6・橙7.5YR7/6 ③酸化焰 口縁部焼痕あり	杯部外面上半摩耗のため調整技法不明。下半から底部は横方向斜方向の寛なで、内面口縁部横なで、下半は寛なでの後、縦方向の磨きあり。
50	土師器 高杯	脚部残 裾部1/2欠損 底 (12.8cm)	J-47G 第2河道	①粗・中砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②橙2.5YR6/8 ③酸化焰	脚部から裾部外面は摩耗し、調整技法不明。脚部内面上半指なで、下半横方向の寛なで、裾部内面横方向、斜方向の寛なで。
51	土師器 瓶	胴下位~底部破片 底 6.2cm	I-43G 第2河道	①細砂、白色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②橙5YR6/8 ③酸化焰・硬質 外胴下底炭	胴部下半内外面ともに器面摩耗しており、寛調整不明瞭。
52	土師器 瓶	胴下位~底部破片 底 5.5cm	J-49G 第2河道	①細砂、白・赤色細粒物を含む。 ②内灰褐5YR4/2 外橙5YR6/8 ③酸化焰 外胴下底炭	胴部外面下半不定方向の寛なで、内面不定方向の寛磨り後、一部横方向の寛なで。

第2河道出土遺物観察表 (図103・104)

番号	器 種	量 目	出土位置	①粘土②色調③地成	成・整形の特徴
53	土師器 甕	口縁～胴上位破片 口 (18.7cm)	J-40G 第2河道	①中・細砂、白・赤色細粒物を含む。 ②内ふい赤褐5YR5/4 外褐6.5YR4/1 ③酸化焰	口縁部内外面横なで。肩部外面彫り溝、縦方向の磨きあり。内面なで。
54	土師器 甕	口縁～胴上位破片 口 (16.9cm)	I-42G 第2河道	①中・細砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②明赤褐2.5YR5/8・灰赤2.5YR4/2 ③酸化焰・硬質	口縁部内外面横なで。口縁部外反する。肩部斜方向の磨なで。内面横方向の磨なで。
55	須恵器 甕	胴部破片	I-43G 第2河道	①細砂、白色細粒物を含む。 ②内灰10Y6/1 外灰10Y4/1 ③還元焰・硬質	紐作り叩き成形。外面平行叩き。内面あて具は青海波文。
56	土師器 甕	口縁部破片 口 (16.8cm)	I-44G 第2河道	①細砂、白色細粒物を含む。 ②内黄褐7.5YR8/8 外橙5YR7/8 ③酸化焰	外面中位に段を有する。外面横なで。内面割離。
57	土師器 甕	口縁部1/4残 口 (16.5cm)	I-44G 第2河道	①中・細砂、赤色細粒物、石英を含む。 ②内ふい橙7.5YR7/4 ③酸化焰	内外面横なで。
58	須恵器 甕	肩部～胴部破片	J・K-40G 第2河道	①細砂、白色細粒物を含む。 ②灰N6/0 ③還元焰・硬質	紐作りロクロ成形。胴部外面平行叩き。内面あて具は青海波文。肩部のみ目地される。
59	土師器 甕	口縁～胴上位破片 口 (18.0cm)	J-44G 第2河道	①中・細砂、白色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②橙5YR7/8 ③酸化焰	口縁部内外面横なで。胴部外面縦方向の磨削り。内面不定方向の磨なで。
60	須恵器 甕	口縁～胴下位1/4残 口 (24.4cm)	I-44G 地 第2河道	①粗・中砂、白色細粒物、石英、2～4mmの小石多量を含む。 ②灰N5/1 ③還元焰・硬質	口縁部紐作りロクロ成形。口唇部、口縁部上半と中位に彫削工具の端による刻突を施す。下半部には8本1単位の流状文をめぐらす。頸部には陰帯1条に刻突を施す。胴部紐作り叩き成形。外面平行叩き。内面あて具は青海波文。
61	土師器 甕	ほぼ完形 口 16.9cm 底 6.2cm 高 24.2cm	J-45G 第2河道	①中・細砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石、2～4mmの小石数個含む。 ②橙5YR7/8・淡黄褐7.5YR8/4 ③酸化焰 外体部吸戻	口縁部内外面横なで。外面上半縦方向の磨なで、下半横方向及び斜方向の磨なで。底部彫り調整。内面不定方向の磨なで。
62	土師器 甕	口縁～胴部破片 口 (22.2cm)	J-45G 第2河道	①細砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②橙5YR7/8 ③酸化焰	口縁部中位に段を有する。内外面横なで。胴部内面輪積み筋。指頭圧痕あり。
63	須恵器 甕	3/4残 口 20.0cm 底 丸底 高 33.0cm	J-46G 第2河道	①中・細砂、白色細粒物、2～4mmの小石を含む。 ②灰7.5Y5/1 ③還元焰・硬質	口縁部ロクロ成形。口唇部つまみ出し。外面中位にすくい模を有する。接の上下に1条ずつ13本1単位の流状文施される。胴部紐作り叩き成形。外面平行叩き後カキ目。内面のあて具は青海波文。
64	土師器 甕	口縁部完形 頸部上位 口 15.3cm	J-46G 第2河道	①中・細砂、黒・赤色細粒物、石英、雲母を含む。 ②橙5YR6/8 ③酸化焰・硬質	口縁部外面横なで。内面下半横方向の磨なで。肩部外面斜方向の磨なで。頸部内外面に輪積み筋あり。肩部内面指頭圧痕あり。
65	土師器 甕	口縁～胴上半1/3残 口 (20.4cm)	J-47G 第2河道	①細砂、白色細粒物、石英、角閃石を多量に含む。 ②淡黄褐7.5YR8/4 ③還元焰	口縁部内外面横なで。胴部外面縦方向の磨削り後、横方向の磨なで。内面横方向の磨なで。
66	須恵器 甕	胴部破片	J-47G 第2河道	①細砂、白色細粒物を含む。 ②灰N6/1 ③還元焰・硬質	紐作り叩き成形。外面平行叩き。内面あて具は青海波文。

第 2 河道出土遺物観察表 (図104・105)

番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
67	土師器 甕	口縁～胴上位1/3 残 口 (17.3cm)	I-49G 第 2 河道	①中・細砂、白・赤色細粒 物、石英、角閃石を含む。 ②内橙2.5YR7/8・浅黄橙7.5 YR8/6 ③酸化焙	口縁部内外面横なで、胴部外面木漏状工具による縦方 向のなで、内面木漏状工具による不定方向のなで、
68	須恵器 甕	胴部破片	第 2 河道	①細砂、白色細粒物を含む。 ②内灰10Y6/1 外灰10Y4/1 ③還元焙・硬質	紐作り叩き成形。外面平行叩き。内面あて具は青海流 文。
69	須恵器 甕	胴部破片	埋土 第 2 河道	①細砂、白色細粒物を含む。 ②灰N6/0 ③還元焙・硬質	紐作り叩き成形。外面平行叩き。内面あて具は青海流 文。
70	須恵器 壺	口縁～胴部1/3残 口 (17.6cm)	I-42G 第 2 河道	①細砂、白色細粒物を含む。 ②灰N6/1 ③還元焙・硬質	紐作りロクロ成形。胴部外面平行叩き、内面のあて 具は青海流文。頸部から胴部にかけての外面にカキ目 施される。
71	土師器 甕	口縁部破片 口 (21.6cm)	I-42G 第 2 河道	①中・細砂、白・赤色細粒 物、石英、雲母を含む。 ②橙5YR7/8 ③酸化焙	内外面横なで、外面上端赤く彩色されている可能性あり。
72	土師器 壺	口縁部小破片 口 (17.5cm)	I-43G 第 2 河道	①中砂、赤色細粒物を含む。 ②明赤焼2.5YR5/8 ③酸化焙	口縁部中位に段を有する。外面横なでの後、2段に分 れて縦方向の磨き。内面横なでの後、縦方向の磨き。
73	須恵器 壺	胴部破片	I-43G 第 2 河道	①細砂を含む。 ②灰白10Y7/1 ③還元焙・硬質	ロクロ成形。胴部に5本1単位の流状文をめぐらす。 外面に自然軸付着する。
74	土師器 壺	口縁～胴上位破片 口 (20.0cm)	I-44G 第 2 河道	①中・細砂、2mmの小石散 りを含む。 ②明赤焼2.5YR5/8 ③酸化焙・やや硬質	口縁部上端外面横なで、上端以外縦方向の木漏状工具 によるなで。胴部斜方向の木漏状工具による整形。口 縁部内面なで、胴部内面斜方向の磨なで。
75	須恵器 提瓶小 横瓶	胴部破片	I-49G 第 2 河道	①細砂、白色細粒物を含む。 ②灰N5/1 ③還元焙・硬質	紐作り後ロクロ整形。胴部は粘土円盤を接合し、胴部 成形を行う。外面はカキ目。内面未調整。指挽が残る。

第 3 河道出土遺物観察表 (図112)

番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	土師器 杯	4/5残 口 14.4cm 底 丸底	K-39G 他 第 3 河道	①中・細砂、白・赤色細粒 物を含む。 ②内橙2.5YR6/8 外に濃い赤焼2.5YR5/4 ③酸化焙	口縁部内外面横なで、体部外面横方向の圓削り。内面 なでの後、縦方向の磨き。
2	土師器 杯	口縁～体部1/4残 口 (14.8cm) 底 丸底	J-39G 第 3 河道	①中・細砂、白色細粒物 を含む。 ②内橙7.5YR6/6 外橙5YR6/8 ③酸化焙・硬質	口縁部内外面横なで、体部不定方向の磨なで。内面放 射状の磨き看取されるが、器面荒れて不明瞭。
3	土師器 杯	口縁～体部1/3残 口 (12.0cm) 底 丸底	J-40G 第 3 河道	①中・細砂、白色細粒物 を含む。 ②橙5YR7/8 ③酸化焙	摩耗のため器面やや荒れている。体部外面の磨なで不 明瞭。内面口縁部横なで、体部磨なで。
4	土師器 杯	1/2残 口 (14.5cm) 底 丸底 高 4.6cm	J-40G 第 3 河道	①中・細砂、白・赤色細粒 物、石英を含む。 ②内明赤焼2.5YR5/8 外橙5YR7/8 ③酸化焙	摩耗のため器面荒れ、体部外面磨なでが一部看取され る。内面不明。
5	土師器 杯	1/5残 口 (11.2cm) 底 3.2cm 高 5.4cm	J-40G 第 3 河道	①白色細粒物、石英を含む。 ②内赤10R5/8 外橙5YR6/6 ③酸化焙・硬質 外底部残炭	口縁部内外面横なで、体部外面斜方向の圓削り後、縦 方向の磨なで、内面不定方向の磨なで、底部上り底、 中央部やや凹む。

第3河道出土遺物観察表 (図112)

番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
6	土師砂杯	完形 口 11.4cm 底 5.2cm 高 6.2cm	J-40G 第3河道	①粗・中・細砂、白・赤色細粒物、石英を含む。 ②内赤10R5/8 外赤橙10R6/8 ③酸化焰	器面一部剝離、体部外面横方向の磨削り、底部底磨り。内面、不定方向の磨き。
7	土師砂杯	3/4残 口 14.2cm 底 丸底 高 5.7cm	J-40G 第3河道	①中・細砂、白色細粒物、石英を含む。 ②橙2.5YR6/8 ③酸化焰	口縁部内外面横なで、体部外面磨なでが覗きられるが、器面荒れて不明瞭。内面も荒れており、放射状の磨き一部覗きされる。
8	土師砂杯	口縁部破片 口 (14.9cm) 底 丸底	J-40G 第3河道	①中・細砂、角閃石を含む。 ②内洗黄橙7.5YR8/6 外橙7.5YR7/6 ③酸化焰・硬質	口縁部内外面横なで、体部外面不定方向の磨なで、内面不定方向の磨き。
9	土師砂杯	3/4残 口 7.4cm 底 2.3cm 高 3.1cm	J-40G 第3河道	①白・赤色細粒物、石英を含む。 ②橙5YR6/8 ③酸化焰	口縁部内外面横なで、体部外面横方向の磨削り後、上半不定方向の磨なで、内面不定方向の磨き。底部外面凹む。
10	土師砂杯	口縁一部1/4残 口 (14.6cm) 底 丸底	J-40G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒物を含む。 ②橙2.5YR6/8・橙5YR7/6 ③酸化焰・硬質	口縁部内外面横なで、体部外面不定方向の磨なで、内面なで。
11	土師砂杯	4/5残 口 12.2cm 底 丸底	J・K-40G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒物を含む。 ②橙5YR7/8 ③酸化焰 外体部吸炭	口縁部横なで、体部外面上半不定方向の磨なで、下半横方向の磨削り。内面斜方向の磨なで、口縁部外面に輪積み痕あり。
12	土師砂杯	2/5残 口 (12.4cm) 底 (5.5cm) 高 4.5cm	K-40G 第3河道	①中・細砂、白色細粒物を含む。 ②明赤橙5YR5/8 ③酸化焰 外体部吸炭	口縁部内外面横なで、体部外面斜方向の磨削り。底部外面荒れている。内面磨なで後、放射状の磨き。
13	土師砂杯	口縁部破片 口 (15.4cm)	K-40G 第3河道	①中・細砂を含む。 ②橙5YR6/8 ③酸化焰	口縁部内外面横なで、体部外面横方向の磨なで後、まばらな縦方向の磨き。内面細い放射状の磨き。
14	土師砂杯	完形 口 11.5cm 底 丸底 高 4.5cm	J-41G 第3河道	①中・細砂、赤色細粒物、石英を含む。 ②洗橙5YR8/3 ③酸化焰	口縁部横なで、体部外面横方向斜方向の磨なで、内面なで。外面は全体に摩耗。
15	土師砂杯	口縁一部破片 口 (12.6cm)	J-42G 第3河道	①細砂、白・赤色細粒物を含む。 ②橙5YR6/6 ③酸化焰	口縁部横なで、体部外面、不定方向の磨なで。内面なで。
16	土師砂杯	2/3残 口 13.3cm 底 4.2cm 高 5.1cm	J-42G 第3河道	①細砂、白色細粒物、角閃石を含む。 ②赤10R5/8 ③酸化焰	口縁部横なで、体部横方向の磨削りの後、上半縦方向の磨なで、底部底磨りによって平底を作り出している。内面なで。
17	土師砂杯	12は完形 口 13.0cm 底 丸底 高 5.2cm	J-42G 第3河道	①細砂、白・赤色細粒物、石英を含む。 ②橙2.5YR6/8 ③酸化焰	口縁部横なで、体部外面横方向の磨削りの後、縦方向の磨なで。内面なでの後、上半横方向の磨き。
18	土師砂杯	12は完形 底部一部欠損 口 13.9cm 底 丸底	J-42G 第3河道	①中・細砂、赤色細粒物、石英、雲母を含む。 ②橙5YR6/6 ③酸化焰	口縁部横なで、体部外面、横方向の磨削り。内面磨なで。
19	土師砂杯	口縁一部破片1/2残 口 (14.4cm) 底 丸底 高 6.3cm	J-42G 第3河道	①細砂、白・赤色細粒物、石英を含む。 ②内橙2.5YR6/8 外橙7.5YR6/6 ③酸化焰 外体部吸炭	口縁部横なで、体部外面上半、横方向の磨なで、下半部は、一定方向の磨削り。内面磨なでの後、不定方向の磨き。指環圧痕残る。

第3河道出土遺物観察表 (図112)

番号	器 種	量 目	出土位置	①粘土②色調③地成	成・整形の特徴
20	土師器 杯	口縁～体部破片 口 (16.8cm) 底 丸底	J-42G 第3河道	①細砂、白・赤色細粒物、 石英を含む。 ②総2.5YR6/8 ③酸化焙・硬質	口縁部横なで、体部外面荒削りの後、上半斜方向の荒なで、内面なでの後、縦方向の磨き。
21	土師器 杯	口縁～体部1/4残 口 (15.4cm) 底 丸底	J-42G 第3河道	①細砂、白・赤色細粒物、 石英を含む。 ②明赤焼2.5YR5/6 ③酸化焙・硬質	口縁部横なで、体部外面横方向の荒削りの後、縦方向の荒なで、口縁部内面に指頭圧痕残る。内面荒なで。
22	土師器 杯	口縁～体部破片 口 (16.2cm) 底 丸底	J-49G 第3河道	①粗・中砂、白色細粒物、 石英を含む。 ②総5YR7/8 ③酸化焙	口縁部外反し、内外面横なで、体部外面縦方向斜方向の荒なで、内面なで。
23	土師器 杯	2/3残 口 12.5cm 底 丸底 高 4.0cm	J-43G 第3河道	①中・細砂、赤色細粒物を 含む。 ②内総5YR7/6 外淡黄焼7.5YR8/3 ③酸化焙 外底部反戻	口縁部横なで、体部外面不定方向の荒削りの後、上半縦方向の荒なで、内面なで。
24	土師器 杯	定形 口 11.5cm 底 丸底 高 5.9cm	J-43G 第3河道	①細砂、白・赤色細粒物、 石英、角閃石を含む。 ②内総5YR7/8 外にふい赤焼5YR5/4 ③酸化焙・やや硬質	口縁部横なで、体部外面荒削り後、上半縦方向斜方向の荒なで、内面なでの後、放射状の磨きか施されて いたと思われるが、内外面共に磨面が摩耗しているため、不明瞭。
25	土師器 杯	1/2残 口 13.5cm 底 丸底 高 (4.2cm)	J-43G 第3河道	①粗・中砂、白・赤色細粒 物を含む。 ②総7.5YR6/6 ③酸化焙	口縁部横なで、体部外面横方向に長い荒なで、内面な での後、放射状の磨き。
26	土師器 杯	3/4残 口 12.4cm 底 丸底 高 4.0cm	J-43G 第3河道	①中・細砂、赤色細粒物を 含む。 ②内総5YR6/8 外総7.5YR7/6 ③酸化焙	口縁部横なで、体部外面縦方向の荒なで、指頭圧痕 残る。内面なで。
27	土師器 杯	口縁～体部1/2残 口 (15.8cm) 底 丸底	J-44G 第3河道	①粗・中砂、赤色細粒物、 石英、2～3mmの小石数 個含む。 ②赤10R5/8 ③酸化焙	口縁部横なで、体部外面横方向の荒なで、内面なで、 内面の一部磨面刺刺。
28	土師器 杯	1/2残 口 13.5cm 底 丸底 高 4.1cm	J-44G 第3河道	①粗・中砂、赤色細粒物、 石英を含む。 ②総5YR6/6 ③酸化焙	口縁内面端部、水平に近い。体部外面横方向の荒なで の後、上半横なで、下半縦方向の荒なで、内面なで。
29	土師器 杯	口縁～体部1/3残 口 (15.0cm)	J-44G 第3河道	①粗・中砂、赤色細粒物、 石英、角閃石を含む。 ②内総2.5YR6/8 外総5YR7/6 ③酸化焙	口縁部横なで後、外面縦方向の磨き。体部外面、横方 向の荒削りの後、不定方向の荒なで、内面なでの後、 まばらな縦方向の磨き。
30	土師器 杯	口縁～体部1/3残 口 (12.5cm)	J-44G 第3河道	①中・細砂、石英を含む。 ②総2.5YR6/8・総7.5YR 7/6 ③酸化焙	口縁部横なで、体部外面縦方向の荒なで、内面なで。
31	土師器 杯	口縁～体部1/4残 口 (15.0cm) 底 丸底	J-44G 第3河道	①細砂、白色細粒物、角閃 石を含む。 ②明赤焼2.5YR5/8 ③酸化焙	口縁部横なで、体部外面不定方向の荒なで、その後、 口縁部から底部にかけて縦方向の磨き。内面なでの後、 外面同様に縦方向の磨き。
32	土師器 杯	1/2残 口 (9.6cm) 底 4.2cm 高 6.6cm	J-49G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒 物、角閃石を含む。 ②総7.5YR6/6 ③酸化焙 外底部反戻	口縁部横なで、体部外面上半は横方向の荒削り、底部 付近は縦方向の荒削り、その後縦方向の荒なで、底部 荒削り。内面上半は横方向、下半斜方向の荒なで。

第3河道出土遺物観察表 (図112・113)

番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
33	土師器 杯	口縁～体部破片 口 (15.7cm)	I-49G 第3河道	①細砂、白・赤色細粒物、 石英を含む。 ②赤褐色2.5YR4/8 ③酸化焰 外底部吸灰	口縁部横なで、体部外面縦方向の荒なで、内面なで、 体部外面、全体にやや摩耗。
34	土師器 杯	口縁～体部1/5残 口 (12.6cm)	I-49G 第3河道	①細砂、白色細粒物、石英 を含む。 ②橙5YR6/8 ③酸化焰・硬質	口縁部横なで後、外面は縦方向の荒磨き。体部外面、 荒なでの後、横方向の荒磨き。内面なでの後、縦方向 の荒磨き。
35	土師器 杯	口縁～体部3/5残 口 13.8cm 底 丸底	I-49G 第3河道	①中・細砂、白色細粒物を 含む。 ②橙5YR6/8・灰白7.5YR 8/2 ③酸化焰 外底部吸灰	内斜口縁の杯、口縁部横なで、体部外面縦方向の荒磨 りの後、斜方向の荒なで、内面なで、内外面丸摩耗。
36	土師器 杯	口縁～体部破片 口 (11.8cm)	I-49G 第3河道	①細砂、白・赤色細粒物を 含む。 ②橙5YR7/8・に白い橙2.5 YR6/4 ③酸化焰・軟質	口縁部横なで、体部外面横方向の荒なで、内面荒なで。 外面全体に摩耗。
37	土師器 杯	1/2残 口 (13.4cm) 底 丸底 高 6.3cm	I-49G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒 物を含む。 ②内明赤褐色2.5YR5/8 外 橙2.5YR6/6 ③酸化焰	口縁部横なで、体部外面斜方向の荒なで、内面荒なで。
38	土師器 鉢	1/2残 口 (13.0cm) 底 丸底 高 9.4cm	K-39G 第3河道	①粗・中・細砂、白色細粒 物、石英を含む。 ②内明赤褐色5YR5/8 外橙7.5YR6/6 ③酸化焰	口縁部内外面横なで。外面口縁部から体部上半にかけて 荒なでが施されるが、不明瞭。体部中央縦方向の荒 磨り。下半部斜方向の荒磨り後、斜方向のまばらな荒 なで。底部は横方向に荒磨りが施され、平底状を呈す 。内面不定方向の荒なで。
39	土師器 鉢	ほぼ定形 口 11.0cm 底 丸底 高 9.8cm	K-39G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒 物、石英を含む。 ②内橙5YR6/8 外明赤褐色2.5YR5/8 ③酸化焰	口縁部内外面横なで。体部外面上半部摩耗し、整形不明。 下半部縦方向の細かい荒なで。底部丸底。内面不定方 向の荒なで。指頭圧痕あり。
40	土師器 鉢	口縁～体部下位 1/4残 口 (10.6cm)	K-39G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒 物を含む。 ②内明赤褐色5YR5/8 外に白い赤褐色2.5YR5/4 ③酸化焰 外底部吸灰	口縁部内外面横なで。体部外面斜方向横方向の荒磨り 後、斜方向のまばらな荒なで。内面なでの後、斜方向 の荒磨き。
41	土師器 鉢	ほぼ定形 口 11.8cm 底 5.5cm 高 6.5cm	K-39G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒 物、石英を含む。 ②灰褐色7.5YR5/2・橙5YR 7/8 ③酸化焰 外底部吸灰	外面底部から体部にかけて荒磨り。体部は斜方向の荒 なで。内面荒なで。口縁部内外面横なで。
42	土師器 鉢	1/2残 口 (9.5cm) 高 7.3cm	J・K-40G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒 物、石英を含む。 ②橙7.5YR7/6・橙5YR7/8 ③酸化焰 外口～底部吸灰	口縁部内外面横なで。体部外面不定方向の荒なで。底 部外面形は丸底と思われるが、内面形は平底状なので 平底を意識した作りなのであろうか。内面荒なで及び 荒なで。
43	土師器 鉢	口縁～体部1/3残 口 (10.6cm)	J-40G 第3河道	①粗・中・細砂、雲母、角 閃石2～4mmの小石含む。 ②内淡黄褐色7.5YR8/6 外 橙2.5YR7/6・灰赤2.5 YR4/2 ③酸化焰	口縁部内外面横なで。外面頸部横なで。体部不定方向 の荒なで。内面荒なで。頸部部の跡強く残る。
44	土師器 鉢	定形 口 8.9cm 底 丸底 高 8.0cm	K-40G 第3河道	①中・細砂、白色細粒物を 含む。 ②内橙2.5YR6/8 外橙5 YR7/6・に白い橙2.5YR 6/3 ③酸化焰 外底部吸灰	口縁部内外面横なで。体部外面摩耗し、器面荒れ整形 技法不明瞭。底部丸底一定方向の荒磨り。内面荒なで、 頸部部の跡強く残る。
45	土師器 鉢	ほぼ定形 底部欠 損 口 13.5cm	J-43G 第3河道	①細砂、白・赤色細粒物、 角閃石を含む。 ②橙5YR7/8 ③酸化焰 外1/2吸灰	口縁部内外面横なで。体部外面上半は縦方向の磨き。 下半の底部に近い部分は横方向の荒磨り。内面は、な での後、不定方向の磨き。

第3河道出土遺物観察表 (図113)

番号	器種	量目	出土位置	①粘土②色調③地成	成・整形の特徴
46	土師器 鉢	ほぼ完成 口 12.6cm 底 4.6cm 高 8.2cm	J-49G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②浅黄緑10YR8/3 ③酸化焙	口縁部内外面横なで。体部外面斜方向の荒削り後、中位を横方向に荒なで。内面なでの後、不定方向の荒削り。
47	土師器 鉢	口縁一体部上位 1/5残 口 (22.8cm)	I-49G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒物、角閃石を含む。 ②橙5YR6/6 ③酸化焙	外面は摩耗し、体部の荒削り調整が部分的に着取られる。内面は口縁部体部共に横なで。一部斜方向の荒なで。
48	土師器 鉢	ほぼ完成 口 13.8cm 高 9.2cm	I-49G 第3河道	①細砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②橙5YR6/8・浅黄緑7.5YR8/4 ③酸化焙	口縁部内外面横なで。体部外面斜方向の荒削り、器面摩耗のため、縦方向の荒なで着取できるが、不明瞭。丸底は横方向に荒なでが施され、やや平底状を呈する。内面横方向の荒なで後、横方向の荒削り。
49	土師器 鉢	口縁一体部1/3残 口 (13.8cm)	I-49G 第3河道	①細砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②灰白・5YR8/2 ③酸化焙	口縁部内外面横なで。体部外面不定方向の荒なで。内面なでの後、不定方向の荒削り。
50	土師器 鉢	体部一底部残 底 4.8cm 高 5.2cm残	I-49G 第3河道	①細砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②橙2.5YR6/8 ③酸化焙・硬質 外側下張炭	体部外面下半荒なで。内面なで。底部外面調整。
51	土師器 鉢	口縁一体上位破片 口 (11.2cm)	I-49G 第3河道	①細砂、白色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②橙5YR6/6 ③酸化焙 外側部炭灰	口縁部内外面横なで。体部外面横方向の荒なで。内面荒なで。
52	土師器 埴	胴部2/5残	K-39G 他 第3河道	①中・細砂、白色細粒物を含む。 ②黄緑7.5YR7/8 ③酸化焙・硬質 外側部炭灰	摩耗のため器面荒れ。上半の放射状の荒削り、下半の荒削り、荒なで共に不明瞭。内面横方向の荒なで。底部丸底。
53	土師器 埴	ほぼ完成 口 9.6cm 底 丸底 高 14.3cm	K-39G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒物、雲母、石英を含む。 ②内明赤褐2.5YR5/8 外橙5YR7/6 ③酸化焙・硬質 外側部炭灰	底部丸底。底部の一定方向の荒削りに着取られるが、他外面摩耗のため整形不明。口縁部内面横なで。胴部内面上半は指なで、輪積み残存。下半斜方向の荒なで。
54	土師器 埴	口縁部3/4残 口 11.2cm	K-39G 他 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒物を含む。 ②内ふい赤褐5YR5/4・橙5YR7/8 ③酸化焙 外口縁部炭灰	内外面摩耗のため、器面寛れ整形不明。
55	土師器 埴	胴部1/3残 底 3.8cm	K-39G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒物を含む。 ②内ふい赤褐5YR5/4 外橙5YR7/8・明赤褐5YR5/6 ③酸化焙	外面摩耗し整形不明。底部上げ底、中央やや凹む。内面上半斜方向の指なで。
56	土師器 埴	口縁部1/4残 口 (13.0cm)	K-39G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒物を含む。 ②橙5YR6/6 ③酸化焙・硬質	内外面斜方向の荒なで後、放射状の荒削り。
57	土師器 埴	胴部3/4残 底 丸底	K-39G 他 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒物、石英を含む。 ②明赤褐2.5YR5/8・浅黄緑7.5YR8/4 ③酸化焙・硬質 外側部炭灰	外面上半荒なで。一部に放射状の荒削り着取られるが不明瞭。下半荒削り後、細かい荒削り。底部丸底。内面指なで。輪積みあり。(丸底を丁寧に作った後、輪積みにより胴部成形)
58	土師器 埴	胴部4/5残 底 4.5cm	J・K-40G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②黄緑7.5YR7/8 ③酸化焙・硬質 外側部炭灰	胴部外面上半摩耗のため、整形不明。下半斜方向の荒削り。底部荒なで。内面横方向の荒なで。

第3河道出土物観察表 (図113・114)

番号	器種	量目	出土位置	①粘土色調②構成	成・整形の特徴
59	土師器 埴	胴部3/4残	J-40G 第3河道	①粗・中・細砂、白色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②内黒焼5YR2/1 外橙2.5YR6/8・浅黄橙7.5YR8/4 ③酸化焙・やや硬質	外面上半横まで後、放射状の荒磨き看取されるが不明瞭。下半横方向の磨削り後、不定方向の磨で、内面斜方向の磨削り。胴部は指なで。
60	土師器 埴	胴部完形 底 3.7cm	J-40G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒物、石英を含む。 ②橙2.5YR6/8 ③酸化焙・硬質	外面上半横方向の磨で、下半横方向磨削り後、縦方向の磨で、底部磨削り。
61	土師器 埴	ほぼ完形 口 8.6cm 底 3.0cm 高 10.7cm	J-42G 第3河道	①細砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②明赤焼2.5YR5/8 ③酸化焙・硬質 外胴部破片	口縁部上端内外面横で、口縁部内外面に縦方向の磨きあるが不明瞭。胴部外面上端縦方向の磨削り。中位から下半部縦方向の磨削り。底部外面調整。胴部内面横方向の磨で。
62	土師器 埴	口縁～胴部1/5残 口 (6.9cm) 底 丸底	J-42G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒物、石英を含む。 ②内明赤焼2.5YR5/8 外に白い橙5YR6/4 ③酸化焙	口縁部内外面横で、胴部外面不定方向の磨削り後、縦方向の磨で、内面は広い不定方向の磨で。
63	土師器 埴	口縁部残 口 (9.4cm)	J-42G 第3河道	①中・細砂、赤色細粒物、石英を含む。 ②明赤焼2.5YR5/8 ③酸化焙	口縁部上端内外面横で、口縁部外面斜方向の磨削り後、縦方向の磨で、内面放射状の荒磨き看取されるが、器面摩耗し不明瞭。
64	土師器 埴	口縁部残 口 14.2cm	J-42G 第3河道	①細砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②明赤焼2.5YR5/8・白い橙5YR7/3 ③酸化焙 外口縁部破片	口縁部上端内外面横で、口縁部外面ととも磨面が摩耗し、外面の磨で、内面の磨きか不明瞭。
65	土師器 埴	口縁部破片 口 (14.7cm)	I-49G 第3河道	①細砂、白色細粒物、石英を含む。 ②橙5YR6/6 ③酸化焙・やや硬質	口縁部上端中位に、段を有する。内外面横で、口縁部内外面横で、後、縦方向の磨きあり。
66	土師器 埴	胴部1/3残 底 丸底	J-49G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒物、角閃石を含む。 ②明赤焼2.5YR5/8 ③酸化焙	胴部外面横方向の磨で、下半に一部斜方向の磨で、内面不定方向の磨で。
67	須恵器 埴	胴部破片 底 丸底	J-44G 第3河道	①細砂を含む。 ②暗灰3/0 ③還元焙・硬質	クロコ成整形。胴部中位に2条1単位の花巻を2条めぐらし、中央が隆帯状に表出する。放射状を3段に施し、胴部の段上段の花巻文に沿って磨削工具の端による刺突を施している。内面に頸部の放射状跡あり。
68	土師器 高杯	杯部3/4残 口 19.5cm	K-39G 第3河道	①白色細粒物、石英、2～5mmの小石を含む。 ②橙5YR7/8・白い橙7.5YR7/4 ③酸化焙	口唇部つまみ上げるような横で、杯部外面で、上半部磨削り。下位に横を持つ。内面横で、放射状の荒磨きが施されたようだが、器面磨で不明瞭。杯部底面中央に胴部との接合のための突出が残されている。
69	土師器 高杯	杯部3/4残 口 19.4cm	K-39G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②橙5YR7/8・浅黄橙7.5YR6/6 ③酸化焙	口縁部横で、杯部外面上半横で、後、放射状の荒磨き。下位に横を持つ。底部磨で、一部に荒磨き。内面横で、後、不定方向の磨き。杯部底面中央に胴部との接合のための突出が残されている。
70	土師器 高杯	胴部完形 底 13.4cm	K-39G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②明赤焼2.5YR5/8 ③酸化焙・やや硬質	磨削のため外面全体の整形不明瞭。胴部内面上半横目あり。下半横方向の磨で、底部との接合部分指で、底部内面横で。
71	土師器 高杯	杯部一胴部残	K-39G 第3河道	①中・細砂、白色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②橙2.5YR6/8・浅黄橙7.5YR8/4 ③酸化焙	磨削のため器面が荒れ、杯部内外面胴部外面ともに、荒磨きが施されているようだが不明瞭。胴部内面磨削りによる上半は横で、下半は丁寧な調整。

第3河道出土遺物観察表 (図114)

番号	器 種	量 目	出土位置	①粘土②色調③地成	成・整形の特徴
72	土師器 高杯	脚部ほぼ完成 底 13.6cm	K-39G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②橙5YR6/8 ③酸化焙・硬質	脚部外面縦方向の荒磨り後、斜方向の磨きで部分的に看取される。内面縦方向の荒磨り、輪積み残れる。裾部内外面横なで。
73	土師器 高杯	脚部残 裾部一部 欠損 底 (13.9cm)	K-39G 他 第3河道	①中・細砂、白色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②橙2.5YR6/8・橙7.5YR7/6 ③酸化焙 内外裾部残れる	摩耗のための器面荒れ、外面全体磨きか磨きされているようだが不明瞭。脚部内面紋り目、輪積み残あり。裾部接合部分は磨なで。裾部内外面横なで。
74	土師器 高杯	杯部1/2残 口 (19.3cm)	J-40G 第3河道	①中・細砂、白色細粒物を含む。 ②橙2.5YR6/8・橙7.5YR7/6 ③酸化焙 外口縁部残れる	杯部口縁横なで、外面上半までの後、放射状の磨き。底部横方向の磨なで、内面までの後、放射状の磨きか磨きされているようだが、器面がやや荒れて不明瞭。杯部底面中央に脚部との接合のための突出が残されている。
75	土師器 高杯	杯部1/3残	K-40G 第3河道	①中・細砂、白色細粒物を含む。 ②内黄橙7.5YR7/8 外橙5YR7/8 ③酸化焙・やや硬質	杯部外面上半部横なで後、放射状の磨き。下位に横を持つ。底部まで、内面までの後、細かい放射状の磨き。杯部底面中央に脚部との接合のための突出が残されている。
76	土師器 高杯	脚部残 裾部一部 欠損 底 13.6cm	K-40G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒物、石英を含む。 ②黄橙7.5YR7/8 ③酸化焙	外面横中位のたれ整形不明瞭。一部に磨き看取される。脚部外面中位に1個の透孔あり。脚部内面輪積み残あり。裾部内面横なで。
77	土師器 高杯	脚部残 裾部一部 欠損 底 15.1cm	K-39G 他 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒物、石英を含む。 ②明赤褐2.5YR5/8・橙5YR6/8 ③酸化焙	外面磨き。中位に斜め向きあり。裾部端部つまみ上げるようにした強い横なで。内面縦方向の指なで。輪積み残あり。
78	土師器 高杯	脚部残 裾部1/2 欠損	J-42G 第3河道	①粗・中砂、赤色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②内橙2.5YR6/8 外橙5YR6/6 ③酸化焙	脚部外面縦方向の磨なで。脚部内面指なで、紋り目を消している。裾部内外面までの後、外面横方向の磨き。
79	土師器 高杯	脚部残	J-42G 第3河道	①細砂、白・赤色細粒物、石英を含む。 ②橙5YR7/8・浅黄橙7.5YR8/4 ③酸化焙・やや硬質	杯底部内外面共になで、脚部外面磨なでの後、縦方向の磨き。裾部と脚部の接合部外面は、横なで後、縦方向の磨き。裾部内面横なで。脚部内面紋り目僅あり。
80	須恵器 高杯	脚部残	J-42G 第3河道	①細砂を含む。 ②灰N6/1 ③還元焙・硬質	紐作り後ロクロ成形し、さらに紋りを施した後、ロクロ成形を施す。脚部中に3方に円形の透し有り(直径約10mm)。接合部には掻き破り施し、接合し、内面磨なでにより接合を補助している。
81	土師器 高杯	脚部残 裾部一部 欠損	J-43G 第3河道	①細砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②内浅黄橙7.5YR8/4 外橙2.5YR6/8 ③酸化焙・硬質	脚部外面縦方向の磨き。裾部外面放射状の磨き。脚部内面、紋り目残あり。下半部まで。裾部器面磨し、放射状の磨き看取できるが、不明瞭。
82	土師器 高杯	杯部1/5残 口 (18.0cm)	I-49G 第3河道	①粗・中砂、赤色細粒物を含む。 ②内暗赤褐5YR3/3 外橙5YR6/6 ③酸化焙	杯部外面下半斜方向の磨なで、上半まで、底部横方向の磨なで。内面磨し、調整技法不明。杯部底面中央に脚部との接合のための突出が残されている。
83	土師器 鉢	口縁一部1/5残 口 (31.3cm)	I-49G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒物、角閃石を含む。 ②橙5YR6/8・淡橙5YR8/3 ③酸化焙・やや硬質	口縁部内外面横なで。体部外面縦方向の磨なで。内面横方向の磨なで。
84	土師器 瓶?	口縁部破片	J-40G 第3河道	①中・細砂、白色細粒物、石英を含む。 ②橙5YR6/8 ③酸化焙	口縁部は外面に折り返され、外面に指摺り残れる。内面横なで。割部内外面横なで。

第3河道出土遺物観察表 (図114・115)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
85	土師器 甌	胴下位～底部残 底 3.5cm	J-49G 第3河道	①細砂、白・赤色細粒物、 石英、角閃石を含む。 ②橙5YR6/8 ③酸化焰・硬質 外側外吸炭	胴部外面下半縦方向の磨削り後、寛なで。内面不定方向の寛なで。
86	土師器 甌	ほぼ定形 口 17.5cm 底 4.5cm 高 13.1cm	I-49G 第3河道	①粗・中砂、白・赤色細粒物、 石英、角閃石を含む。 ②内橙5YR6/8 外橙7.5YR7/6 ③酸化焰	口縁部内外面横なで。胴部外面斜方向の寛なで。下半の底部付近斜方向の磨削り。底部外面磨調整。内面寛なで。輪轆み痕あり。
87	土師器 台付甌	台部破片	K-39G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒物、 石英、角閃石を含む。 ②洗灰橙7.5YR8/3 ③酸化焰	胴部下半外面縦方向の刷毛目。内面摩耗。脚部外面刷毛目が一部見られる。内面縦方向寛なで。
88	土師器 小形甌	口縁～胴下半1/3 残 口 (13.1cm)	K-39G 他 第3河道	①中・細砂、白色細粒物、 石英を含む。 ②橙2.5YR6/8 ③酸化焰	口縁部内外面横なで。胴部外面縦方向の寛なで。下半摩耗により器面荒れている。内面寛なで。
89	土師器 小形甌	ほぼ定形 口 11.8cm 底 3.0cm 高 11.2cm	K-39G 第3河道	①中・細砂、白色細粒物を含む。 ②黄橙7.5YR7/8・橙2.5YR6/8 ③酸化焰 外側部吸炭	口縁部内外面横なで。胴部外面斜方向の磨削り後、不定方向の寛なで。底部外面上げ底。内面斜方向の寛なで。指頭圧痕残る。
90	土師器 甌	底部～胴下位破片 底 6.2cm	K-39G 第3河道	①中・細砂を含む。 ②明赤褐2.5YR5/6・黒褐5YR3/1 ③酸化焰	外面斜方向縦方向の寛なで。内面斜方向の寛なで。底部外面上げ底。内面指なで調整。
91	土師器 甌	口縁～胴下半1/2 残 口 (17.0cm)	K-39G 他 第3河道	①中・細砂、角閃石を含む。 ②橙5YR7/8・黒褐5YR3/1 ③酸化焰	口縁部内外面横なで。胴部外面斜方向縦方向の寛なで。内面横方向の寛なで後、胴部指なで。
92	土師器 甌	口縁～胴上位1/4 残 口 (13.1cm)	K-39G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒物、 角閃石を含む。 ②内赤褐5YR4/6 外橙5YR6/6 ③酸化焰	口縁部内外面横なで。胴部外面磨削り看取される。内面横方向の寛なで。輪轆み痕あり。
93	土師器 甌	口縁～胴下位2/5 残 口 (14.0cm)	K-39G 他 第3河道	①中・細砂、角閃石を含む。 ②明赤褐2.5YR5/8・橙7.5YR6/6 ③酸化焰	口縁部内外面横なで。胴部外面不定方向の寛なで。内面横方向の寛なで。
94	土師器 甌	口縁～胴中位1/3 残 口 (15.4cm)	K-39G 他 第3河道	①粗・中砂、白・赤色細粒物、 石英を含む。 ②橙5YR6/8・暗赤褐5YR3/2 ③酸化焰	口縁部内外面横なで。胴部から胴部にかけて寛なで。内面横方向の寛なで。
95	土師器 甌	口縁部破片 口 (17.1cm)	J-40G 第3河道	①中・細砂、角閃石を含む。 ②橙5YR6/8・黄橙7.5YR8/4 ③酸化焰・硬質	外面中位に段を有する。内外面横なで。胴部内面に輪轆み痕あり。
96	土師器 甌	口縁～胴下位2/4 残 口 (17.5cm)	J・K-40G 第3河道	①中・細砂、石英、角閃石を含む。 ②内橙5YR6/8 外橙2.5YR6/8 ③酸化焰 外側部吸炭	口縁部内外面横なで。胴部外面木槌状工具による縦方向の削り。胴部外面一部に木槌状工具による斜方向の刷毛目状整形痕があるが、斜方向の寛なで。内面斜方向縦方向の寛なで。
97	土師器 甌	底部～胴下位破片 底 10.0cm	K-39G 第3河道	①粗・中・細砂、白・赤色細粒物、2～3mmの小石を多く含む。 ②内灰黄橙7.5YR8/6 外橙5YR7/6 ③酸化焰	外面斜方向の磨削り。内面横方向の木槌状工具による刷毛目状の整形。底部外面中央に浅い凹みあり、木葉痕残る。
98	土師器 甌	胴部～胴中位1/2 残	J-39G 他 第3河道	①中・細砂、白色細粒物、 石英、細礫を含む。 ②橙5YR6/8 ③酸化焰	胴部外面斜方向の磨削り後、不定方向の寛なで。内面器面荒れて不明。胴部胴部に輪轆み痕あり。

第3河道出土遺物観察表 (図116・117)

番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
99	土師器 甕	口縁部～底部 3/5残 底 7.5cm	K-20G 地 第3河道	①粗・中砂、赤色細粒物、 石英、角閃石を含む。 ②浅黄橙7.5YR8/4・灰褐 7.5YR4/2 ③酸化焙 外胴部残炭	口縁部内外面横なで、胴部外面上半は器面寛れている。 下半横方向の差削り後、斜方向の寛なで、底部外面横 なで、内面本端状工具による刷毛目状の整形、輪積み 痕あり。
100	土師器 甕	口縁～胴上位破片 口 (16.6cm)	J-42G 第3河道	①細砂、赤色細粒物、石英 を含む。 ②橙5YR6/6 ③酸化焙・硬質	口縁部内外面横なで、胴部外面斜方向の寛なで、内面 横方向の寛なで、内面輪積み痕あり。
101	土師器 甕	口縁～胴中位1/4 残 口 (30.0cm)	J-42G 第3河道	①中・細砂、石英、角閃石 を含む。 ②内黄橙2.5YR7/8 外明赤褐2.5YR5/8 ③酸化焙 内外胴部残炭	口縁部内外面横なで、外面に指頭圧痕が残る。胴部外 面不定方向の差削り後、上半横なで、内面不定方向の 差削り後寛なで。
102	土師器 甕	口縁～胴上位1/4 残 口 (14.8cm)	J-42G 第3河道	①細砂、赤色細粒物、石英 を含む。 ②明赤褐2.5YR5/8・橙5 YR7/6 ③酸化焙・硬質 外胴部残炭	口縁部中位に段を有する。内外面横なで、胴部斜方 向の寛なで、内面斜方向の寛なで、輪積み痕、指頭圧 痕あり。
103	土師器 甕	頸部破片	J-42G 第3河道	①中・細砂、白色細粒物、 石英、角閃石を含む。 ②浅黄橙7.5YR8/4・にぶ い褐7.5YR5/3 ③酸化焙	口縁部中位に段を有する。内外面横なで、頸部縦方向 の寛なで、内面横方向の寛なで。
104	土師器 甕	口縁～胴上位破片 口 (14.0cm)	J-42G 第3河道	①粗・中砂、白色細粒物、 石英、角閃石、2～4mm の小石多数、雲母を含む。 ②浅黄橙7.5YR8/3 ③酸化焙	口縁部内外面横なで、胴部外面横方向斜方向の寛なで、 内面横方向の寛なで、指頭圧痕残る。
105	土師器 甕	3/4残 口 10.3cm 底 4.2cm 高 12.2cm	J-43G 第3河道	①細砂、白・赤色細粒物、 石英、角閃石を含む。 ②橙5YR7/8・黄橙7.5YR 8/6 ③酸化焙 外1/2残炭	口縁部内外面横なで、胴部外面横方向斜方向の寛なで、 底部外面調整、内面斜方向の差削り。
106	土師器 甕	4/5残 口 19.1cm 底 6.7cm 高 7.5cm	J-43G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒 物、石英、角閃石を含む。 ②橙5YR7/8 ③酸化焙 外胴部残炭	口縁部外面横なで後、丹彩が施されている可能性あり。 内面器面削刺。胴部外面上半横方向・斜方向の差削り 後、縦方向の寛なで、下半部横方向・斜方向の差削り後、 部分的に上半部から横・縦方向の寛なであり、内面横 方向・斜方向の寛なで、底部調整。
107	土師器 甕	口縁～胴上位1/3 残 口 (16.8cm)	J-43G 第3河道	①細砂、白・赤色細粒物、 石英、角閃石を含む。 ②橙5YR7/6 ③酸化焙	口縁部内外面横なで、胴部外面縦方向斜方向の寛なで、 内面横方向の寛なで、器部内外面に輪積み痕あり。
108	土師器 甕	1/2残 口 12.9cm 底 7.2cm 高 23.0cm	J-44G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒 物、石英を含む。 ②橙2.5YR6/8 ③酸化焙 外胴部残炭	口縁部内外面横なで、胴部外面差削り後、斜方向の寛 なで、内面器面削刺し、差調整不明瞭。輪積み痕あり。 胴部内外面に指頭圧痕残る。
109	土師器 甕	口縁部定形 口 15.3cm	J-49G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒 物、石英を含む。 ②橙5YR6/8 ③酸化焙・硬質	口縁部内外面横なで、頸部に差削りの端部が覗取され る。内面指頭圧痕残る。
110	土師器 甕	口縁～胴下位1/5 残 口 (18.0cm)	J-49G 第3河道	①粗・中・細砂、白色細粒 物、石英、繊維を含む。 ②橙7.5YR7/6 ③酸化焙	口縁部内外面横なで、胴部外面上半斜方向の本端状工 具による刷毛目状の整形。下半は横方向の寛なで、内 面横方向斜方向の寛なで、内面中位に輪積み痕、指頭 圧痕あり。
111	土師器 甕	胴中位～底部残 底 8.3cm	J-49G 第3河道	①細砂、白色細粒物、石英、 角閃石を含む。 ②内明赤褐2.5YR5/8 外黄橙7.5YR8/6・赤10R 4/8 ③酸化焙 外胴下残炭	外面本端状工具による縦方向・斜方向の刷毛目状の整形 が施された後、横方向・斜方向の刷毛目状の整形 が施された後、横なで、内面中位に輪積み痕、指頭 圧痕あり。

第 3 河道出土遺物観察表 (図117・118)

番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成 形 の 特 徴
112	土師器 甕	口縁～胴上位1/2 残 口 20.0cm	J-49G 第 3 河道	①粗・中砂、白・赤色細粒物を含む。 ②赤10R5/8・浅黄橙7.5YR8/4・灰褐7.5YR4/2 ③酸化焰 内口縁部吸炎	口縁部内外面廣んで、外面に整形時に1条の沈線残る。胴部外面斜方向の廣んで、内面横方向の廣んで。
113	土師器 甕	口縁～頸部破片 口 (17.9cm)	I-49G 第 3 河道	①細砂、白色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②内浅黄橙7.5YR8/4 外橙5YR7/6 ③酸化焰 内口縁部吸炎	口縁部内外面廣んで、胴部内面に横方向の廣んで看取される。
114	土師器 甕	口縁～底部1/2残 口 (15.7cm) 底 4.0cm 高 29.0cm	I-49G 第 3 河道	①中砂、白色細粒物、石英、角閃石を多量に含む。 ②橙5YR7/6・にぶい赤褐5YR4/3 ③酸化焰 外胴部吸炎	口縁部内外面廣んで、胴部外面摩耗し、莖調整不明瞭。頸部及び下半部に荒んで看取される。底部摩耗のためかやや丸味を帯びる。内面横方向の荒削り。輪積み痕あり。
115	土師器 甕	口縁～頸部破片 口 (19.0cm)	I-49G 第 3 河道	①細砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②内灰白7.5YR8/2 外にぶい褐7.5YR6/3 ③酸化焰	口縁部内外面廣んで、胴部外面木端状工具による刷毛目状の整形。内面荒んで。
116	土師器 甕	口縁～頸部破片 口 (18.6cm)	I-49G 第 3 河道	①細砂、白色細粒物を含む。 ②明赤褐2.5YR5/8・灰赤2.5YR4/2 ③酸化焰 硬質	口縁部内外面廣んで、胴部外面木端状工具による刷毛目状の整形。内面荒んで。輪積み痕あり。
117	土師器 甕	口縁～胴上位破片 口 (10.6cm)	I-49G 第 3 河道	①細砂、白・赤色細粒物を含む。 ②橙5YR6/6 ③酸化焰 硬質	口縁部内外面廣んで後、外面縦方向の荒磨き。胴部外面不定方向の荒削り。内面横方向の荒削り。輪積み痕あり。
118	土師器 甕	口縁～胴上位破片 口 (19.3cm)	I-50G 第 3 河道	①細砂、白・赤色細粒物、石英を含む。 ②橙2.5YR6/8 ③酸化焰 硬質	口縁部内外面廣んで、胴部外面斜方向の廣んで、内面横方向の廣んで。
119	土師器 甕	口縁～胴上位破片 口 (17.6cm)	I-50G 第 3 河道	①細砂、赤色細粒物、石英を含む。 ②橙5YR6/6 ③酸化焰 硬質	口縁部内外面廣んで、胴部外面斜方向の廣んで、内面横方向の廣んで。胴部内外面に輪積み痕あり。
120	土師器 壺	口縁～胴部1/2残 口 18.5cm	K-39G 第 3 河道	①粗・中砂、角閃石を含む。 ②橙5YR7/8・橙7.5YR6/6 ③酸化焰	口縁部内外面廣んで、内面指頸圧痕、輪積み痕あり。胴部外面上半斜方向の廣んで、下半横方向の荒削り後、斜方向の廣んで、内面上半部指頸圧痕残る。頸部は指などで、輪積み痕内外面にあり。
121	土師器 壺	口縁～頸部4/5残 口 20.4cm	K-39G 他 第 3 河道	①中・細砂、石英を含む。 ②橙5YR6/8・にぶい橙7.5YR7/4 ③酸化焰 やや軟質	口縁部内外面廣んで、胴部外面荒んで、内面荒んで。
122	土師器 壺	4/5残 口 16.3cm 底 6.0cm 高 27.3cm	K-39G 第 3 河道	①粗・中砂、赤色細粒物を含む。 ②浅黄橙7.5YR8/6・橙2.5YR6/8 ③酸化焰 外胴部吸炎	口縁部内外面廣んで、内面に指頸圧痕残る。胴部上半面で、下半横方向の荒削り後、棒状の工具での磨き痕がまばらに看取される。内面横方向の荒んで。輪積み痕指頸圧痕あり。底部外面荒削り調整。
123	土師器 壺	口縁～胴上位1/3 残 口 17.7cm	K-39G 他 第 3 河道	①中・細砂、白色細粒物、石英を含む。 ②浅黄橙7.5YR8/6・橙2.5YR6/8 ③酸化焰 外胴部吸炎	外面摩耗し、器面荒れて不明。口縁部内面廣んで、胴部内面横方向の荒んで、頸部から胴部にかけて輪積み痕あり。
124	土師器 壺	口縁～胴上位1/5 残 口 (18.1cm)	K-39G 第 3 河道	①粗・中砂、白色細粒物、角閃石を含む。 ②橙5YR7/8・浅黄橙7.5YR6/6 ③酸化焰	摩耗により器面荒れ、整形不明。口縁部外面中に段を有する。

第3河道出土遺物観察表 (図118)

番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成 形 の 特 徴
125	土師器 壺	口縁-頸部1/2残 口 (15.9cm)	I-49G 第3河道	①細砂、石英を含む。 ②橙7.5YR6/6 ③酸化焰・硬質	口縁部内外面横なで、内面中位に段を有する。肩部内外面輪縁み痕、指頭圧痕あり。
126	土師器 壺	口縁-頸部1/2残 口 (21.7cm)	I-49G 第3河道	①中・細砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②橙5YR6/6・明赤褐2.5YR5/8 ③酸化焰	口縁部外面中位に段を有する。内外面横なで。肩部外面斜方向の荒なで。内面横方向の荒なで。
127	土師器 小形瓶製 土器	口縁-体部1/4残 口 (5.0cm)	K-40G 第3河道	①中・細砂、石英、角閃石を含む。 ②橙5YR6/6 ③酸化焰	いわゆる手づくおの土器。体部外面不定方向の荒なで。内面なで。
128	土師器 小形瓶製 土器	4/5残 口 (4.7cm) 底 3.5cm 高 2.3cm	J-42G 第3河道	①細砂、白色細粒物を含む。 ②橙2.5YR6/8・暗赤灰2.5YR3/1 ③酸化焰 外2/3硬質	いわゆる手づくおの土器。体部内外面横なでによる整形。底部は寛調整か。
129	土師器 小形瓶製 土器	底部破片 底 3.5cm	J-42G 第3河道	①中・細砂、石英を含む。 ②橙5YR7/8 ③酸化焰	いわゆる手づくおの土器。内面なで。外面は荒なで。
130	土師器 小形瓶製 土器	ほぼ定形 口 6.8cm 底 5.0cm 高 3.6cm	J-43G 第3河道	①中・細砂、白色細粒物、角閃石を含む。 ②淡黄橙7.5YR8/4・褐7.5YR4/3 ③酸化焰 外底部硬質	いわゆる手づくおの土器。体部外面横なで。内面放射状の指なで。底部肩に荒の端部があつた跡あり。底部寛調整か。
131	土師器 小形瓶製 土器	定形 口 4.7cm 底 3.5cm 高 3.7cm	J-44G 第3河道	①細砂、白色細粒物、石英を含む。 ②橙2.5YR6/8・淡黄橙7.5YR8/4 ③酸化焰	いわゆる手づくおの土器。体部内外面荒なで。底部外面荒なで。
132	土製 紡輪車	3/4残 上径 (4.3cm) 下径 3.5cm 厚 3.8cm 孔径 0.8cm	J-44G 第3河道	①細砂、白・赤色細粒物を含む。 ②明赤褐2.5YR5/8・暗赤灰2.5YR3/1 ③酸化焰	上面・下面・側面共に荒なで調整。孔の形状は不整形。

番号	器 種	出土位置	石 材	長さ	幅	厚さ	重 量
133	石製模造品 反孔円板	J-43G 第3河道	蛇紋岩	3.4cm	2.4cm	0.5cm	3.9g
134	石製模造品 朝形	J-43G 第3河道	蛇紋岩	3.5cm	1.3cm	0.3cm	2.1g
135	石製模造品 朝形	I-49G 第3河道	蛇紋岩	3.4cm	2.0cm	0.4cm	4.8g
番号	器 種	出土位置	量 目	特 徴			
136	鉄滓物 缸滓	K-40G 第3河道	厚さ 1.6cm	朝形の鉄滓滓で、底面が残される。が体側に含まれた細塵が多く付着。			

旧河道その他の出土遺物2観察表 (図119)

番号	器 種	出土位置	石 材	長さ	幅	厚さ	重 量
11	コア	J-49G 下層	黒色頁岩	5.8cm	6.4cm	4.2cm	210g
12	燧石	J-49G 下層	粗粒安山岩	8.2cm	6.7cm	4.3cm	310g
13	凹石	J-47G 下層	粗粒安山岩	12.3cm	7.3cm	4.5cm	510g
14	石鏃	K-42G 下層	チャート	2.7cm	1.6cm	0.4cm	0.9g
15	石鏃	J-43G 下層	チャート	4.4cm	1.7cm	0.4cm	1.7g
16	石鏃	旧河道 下層	チャート	2.5cm	1.3cm	0.3cm	0.3g
17	石鏃	J-49G 下層	チャート	7.1cm	3.2cm	1.1cm	25.3g
番号	器 種	量 目	出土位置	①胎土②色調③硬度	成 形 の 特 徴		
18	縄文土器 深鉢	胴部破片	H-38G 旧河道下層	①繊維及び、長石黒色不透明、透明の岩石粒を含む。 ②橙7.5YR6/6 ③硬質	L { $\frac{r}{r}$ } と R { $\frac{r}{r}$ } の羽状縄文を施文。黒派式		

旧河道その他の出土遺物2観察表 (図119)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③硬度	成・整形の特徴
19	縄文土器 深鉢	胴部破片	I-38G 旧河道下層	①少量の繊維と細かな岩石粒を含む。 ②燈7.5YR7/6 ③堅緻	無筋Rの斜縄文を施文。黒灰式
20	縄文土器 深鉢	口縁部破片	K-36G 旧河道下層	①少量の繊維と、長石等の岩石粒を含む。 ②にふい黄燈10YR7/3 ③堅緻	L R斜縄文を施文。黒灰式
21	縄文土器 深鉢	胴部破片	K-36G 旧河道下層	①長石を初め大粒の岩石粒を大量に含む。 ②燈7.5YR7/6	曲線の沈線による文様を展開する。加曾利E式
22	縄文土器 深鉢	底部破片	K-38G 旧河道下層	①大量の繊維と細かな岩石粒を含む。 ②燈7.5YR7/6	無筋Lの斜縄文を施文。底部みげ底。黒灰式
23	縄文土器 深鉢	胴部破片	K-39G 旧河道下層	①繊維と大粒の岩石粒を、多く含む。 ②燈7.5YR6/6	2mmから3mm間隔の斜行する沈線を施文。黒灰式
24	縄文土器 深鉢	口縁部破片	J-39G 旧河道下層	①細かな岩石粒を大量に含む。 ②淡黄燈10YR8/3	口縁部下に横に走る隆起状の突起が走る。隆起の下には縄文R Lの斜縄文が走る。加曾利E式
25	縄文土器 深鉢	胴部破片	J-39G 旧河道下層	①長石と細かな岩石粒を多く含む。 ②燈7.5YR6/6	半数斜行による条状が斜行する。加曾利E式
26	縄文土器 深鉢	胴部破片	L-39G 旧河道下層	①大粒の黒色と赤色を初め、大量の岩石粒を含む。 ②褐9C10YR5/1	細い条状が斜行する。加曾利E式
27	縄文土器 深鉢	胴部破片	Bトレンチ 旧河道下層	①細かな岩石粒の中に黒色不透明な大粒の岩石粒が混じる。 ②淡黄燈10YR8/4・褐灰10YR4/1	沈線による文様が走るが、その一部が下層部に観察できる。L Rの斜縄文に羽状縄文が展開している。加曾利E式
28	縄文土器 深鉢	口縁部破片	I-49G 旧河道下層	①細かな岩石粒を大量に含む。 ②内いふい燈7.5YR7/4 外燈5YR7/8	隆起文欠落。沈線による区画間で文様が構成されている。区画内には縄文が充填されるが形状は不明。加曾利E式
29	縄文土器 深鉢	胴部破片	埋没土中 旧河道下層	①細かな岩石粒を大量に含む。 ②燈7.5YR6/8	L R斜縄文を施文。加曾利E式
30	縄文土器 深鉢	胴部破片	埋没土中 旧河道下層	①細かな岩石粒を大量に含む。 ②にふい燈7.5YR6/4	曲線の沈線による文様を有し、区画内は、L R Lの斜縄文で充填する。加曾利E式

5. 溝出土遺物

22号溝出土遺物観察表 (図120)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	土師器 壺	口縁部破片 口 (20.3cm)	22号溝 埋没土中	①中・細砂、白色細粒物、4mmの小石を含む。 ②内燈2.5YR5/5 外いふい燈7.5YR7/3 ③酸化焰・硬質	口縁部内外面積なで。肩部外面調整不明。内面なで、胴部に接合痕がわずかに着取される。

25号溝出土遺物観察表 (図121)

番号	器種	量目	出土位置	特 徴
1	埴利 陶器	体部片	25号溝 埋没土中	胎土は灰色で陶胎地は密。輪は外面に暗褐色の鉄軸が施される。外面に飛輪の施文あり。内面は平滑で薄作。器形は埴利の体部下半片と考えられる。胎土からすると地方製製品か。19世紀以降の製作。

29・30号溝出土遺物観察表 (図125)

番号	器種	量目	出土位置	①粘土②色調③硬さ④刷毛目	成・整形の特徴
1	形象埴輪 人物		29号溝 埋没土中	①赤・白色物、鉱物、粗・中・細砂。 ②橙5YR7/6	左右の断面はつきかねる。先端を棒状に成形し、肩部へソケット状に接合したと思われる。
2	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	29号溝 埋没土中	①白色物、鉱物、中砂、細砂。 ②浅黄橙7.5YR8/4 ③堅緻 ④8本	突帯は低いが断面台形状を呈する。外面には刷毛目を施す。
3	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	29号溝 埋没土中	①白色物、鉱物、中砂、細砂。 ②浅黄橙7.5YR8/4 ③堅緻 ④10本	突帯は断面台形状であるが低い。突帯下位に小径の円形と思われる透孔が配されている。外面は刷毛目、内面はなで、口縁部の一部に斜方向の刷毛目を残す。
4	円筒埴輪 朝顔形	口縁部付近破片	30号溝 埋没土中	①赤・白色物、鉱物、粗・中砂、細砂。 ②橙5YR7/8 ④不明	突帯は低くつぶれている。外面はていねいなで、内面は縦方向になでを施す。
5	円筒埴輪 円筒形	胴部破片	30号溝 埋没土中	①赤色物、鉱物、中砂。 ②橙5YR7/8 ④6本	突帯は断面台形がくずれ三角形に近い。外面には単位の粗雑な刷毛目を施す。
6	円筒埴輪 朝顔形	頸部～胴上位大型破片	30号溝 埋没土中	①赤・白色物、鉱物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③堅緻 ④20本	頸部の突帯は断面M字状をなす台形でしっかりしたものである。あまり重りの無い肩部には単位の細かい刷毛目がていねいに施される。内面も同様の工具であるが非常に粗雑で削りに近い刷毛目である。

6. 土坑出土遺物

99号土坑出土遺物観察表 (図135)

番号	器種	量目	出土位置	①粘土②色調③硬さ④刷毛目	成・整形の特徴
1	円筒埴輪 朝顔形	口縁部片 口 (31.5cm) 高 12.3cm残	99号土坑 埋没土中	①白色物、鉱物、細砂。 ②黄橙7.5YR7/8 ④不明	器形は著しく歪んでいると思われる。施成も不完全で焼き損じの感がある。突帯の断面は底辺のりろがった台形で粗雑な貼り付けである。内外面ともなでている。
2	形象埴輪 動物 馬 蹄	底 (8.5cm) 現存高 10.5cm	99号土坑 埋没土中	①細砂。 ②橙7.5YR7/6 ③堅緻 ④12本	足の先端部分である。床面はほとんど欠損している。蹄の後側を表現するための窪によりV字状の切り込みが施されている。外面は縦方向の刷毛目である。

96号土坑出土遺物観察表 (図138)

番号	器種	量目	出土位置	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	土師器 鉢	3/4残 口 (11.7cm) 底 2.7cm 高 7.7cm	96号土坑 床直	①中・細砂、白・赤色細粒物、石英、角閃石を含む。 ②内ふい橙5YR6/4 外橙2.5YR6/8・赤黒2.5YR2/1 ③酸化焙	口縁部細なで。体部外面削り後の、上半棒状工具による縦方向のなで。底部に粘土紐の巻き上げの痕跡残る。内面横方向のなでの後、棒状工具による横方向のなで。
2	土師器 鉢	体部1/4残	96号土坑 底面±11cm	①中・細砂、石英を含む。 ②内灰青5YR5/2 外橙7.5YR6/6 ③酸化焙 外底部成炭	杯部外面上半横方向のなで、縁に接合痕残る。下半は寛なり。内面横方向のなでの後、頸部付近横方向の棒状工具による磨き。

E類の土坑出土遺物観察表 (図143)

番号	器種	量目	出土位置	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	須恵器 杯	底部破片 底 7.9cm	79号土坑 埋没土中	①中・細砂を含む。 ②内ふい黄橙10YR7/3・黒褐10YR3/1 ③還元焙	ロクロ成形右回転。底部外面削り調整。底部焼き出しの痕を有し、縁の底部寄りには長削りが施されている。
2	土師器 高杯	胴部破片	79号土坑 埋没土中	①粗・中・細砂、白・赤色細粒物、石英を含む。 ②内灰青5YR4/1 外橙5YR6/6 ③酸化焙・硬質	外面縦方向の長削り。内面上部には絞目あり、下部は粘土紐のままで、部分的になでが施されているのが看取される。杯部内面なで。

E類の土坑出土遺物観察表 (図143)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③地成	成・整形の特徴
3	土師器 鉢	口縁～体部破片	80号土坑 底面上10cm	①粗・中・細砂、白色細粒物、石英を含む。 ②内黒7.5YR2/1 外淡黄緑7.5YR8/4 ③酸化焰 内黒	口縁部内外面横溝で、体部外面縦い溝方向の彫削り調整。内面なで。
4	須恵器 杯	2/3残 口 12.5cm 底 6.2cm 高 3.9cm	117号土坑 底面上10cm	①白色細粒物を含む。 ②暗緑灰10GY4/1 ③還元焰・硬質	ロクロ成形石回転。底部回転糸切り。外面に比べて内面のロクロ痕が弱い。底部内面にロクロ痕あり。
5	須恵器 杯	ほぼ完形 口 13.6cm 底 6.5cm 高 3.9cm	117号土坑 底面上4cm	①緻密。 ②灰白5Y7/2 ③還元焰	ロクロ成形石回転。底部回転糸切り。外面に比べて内面のロクロ痕が弱い。底部内面ロクロ痕残る。
6	須恵器 杯	3/4残 口 (13.2cm) 底 6.0cm 高 3.8cm	117号土坑 底面上6cm	①緻密。 ②にふい焼7.5YR5/3 ③酸化焰か?	ロクロ成形石回転。底部回転糸切り。体部の内外面にロクロ痕あり。
7	須恵器 甕	胴部破片	117号土坑 底面上10cm	①細砂、白色細粒物を含む。 ②暗オリーブ灰2.5GY4/1 ③還元焰・硬質	外面格子叩き目文。内面あて具は青黄流文。
8	須恵器 甕	底部 底 14.8cm	117号土坑 底面上10cm	①細砂を含む。 ②灰7.5GY6/1 ③還元焰・硬質	ロクロ成形回転不明瞭。切り難し技法不明。底部未調整。胴部下半不定方向の荒なで。内面ロクロ痕あり。
9	須恵器 甕	胴部破片	117号土坑 底面上10cm	①細砂、白色細粒物を含む。 ②暗オリーブ灰2.5GY4/1 ③還元焰・硬質	7と同一個体と思われる。
10	須恵器 甕	胴部破片	117号土坑 底面上10cm	①細砂、白色細粒物を含む。 ②黄灰2.5Y5/1 ③還元焰・硬質	紐作り叩き成形。外面叩き後なで。内面のあて具は黄文。内面割い彫削り後、なで。

9. 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物観察表 (図148)

番号	器種	出土位置	石 材	長さ	幅	厚さ	重量
1	彈器	4区ローム層	黒色頁岩	7.4cm	8.2cm	3.5cm	260g
2	剥片	D-8G	黒色頁岩	3.1cm	1.2cm	0.5cm	1.0g
3	石鏃	H-36G	黒曜石	2.6cm	1.6cm	0.5cm	1.16g

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③硬度	成・整形の特徴
4	縄文土器 深鉢	胴部破片	H-27G	①細砂を多量に含む。 ②明赤黒5/6	縦に区画する沈降間に擦糸Lを施文。加増利E式
5	縄文土器 深鉢	胴部破片	H-33G	①繊維と長石を初めとする 岩石粒を含む。 ②内明焼7.5YR5/6 外にふい焼7.5YR6/3 ③堅緻	L $\left\{ \frac{f}{f} \right\}$ の斜織文を施文。黒浜式
6	縄文土器 深鉢	胴部破片	H-33G	①少量の繊維と、大粒の長 石粒を含む。 ②内焼5YR 外黒焼10YR3/1 ③堅緻	R L斜織文を施文。黒浜式
7	縄文土器 深鉢	胴部破片	K-45G	①繊維を多量に含む。大粒 の石英及び黒色・赤褐色 不透明の石を含む。 ②焼7.5YR6/6	R L斜織文施文。黒浜式
8	縄文土器 深鉢	胴部破片	K-44G	①細砂粒を多く含む。 ②にふい・黄緑10YR7/4	L R L斜織文。縄文中期

遺構外出土遺物観察表 (図148・149)

番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③硬度	成・整形の特徴
9	縄文土器 深鉢	胴部破片	K-44G	①細砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色10YR7/3	R.L.斜線を全面施文したあとに竹管による区画文をつくる。区画はU字形を主体とし、一部形を変化させている。U字形の内面を残し、他部分はすり消されている。称名寺式。
10	縄文土器 深鉢	胴部破片	K-44G	①細砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色10YR7/3	9・11と同一個体。
11	縄文土器 深鉢	胴部破片	K-44G	①細砂粒を多く含む。 ②にぶい黄褐色10YR7/3	9・10と同一個体。
番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③硬度④刷毛目	成・整形の特徴
12	形象埴輪 人物部		周堀 埋没土中	①灰物、粗・中・細砂。 ②橙7.5YR7/6 ③彫痕	頸部に丸玉を連ねた首飾りが表現されている。
13	形象埴輪		周堀 埋没土中	①灰物、中・細砂。 ②黄褐色7.5YR7/8	細片のため器種等の確定はできないが動物等の胴、腹部であろうか。外面は刷毛目、内面は粗雑な面である。
14	形象埴輪		周堀 埋没土中	①灰物、中・細砂。 ②橙7.5YR7/6	細片のため器種等は確定はできない。動物等の胴、腹部となろうか。外面には刷毛目が施される。
15	円筒埴輪 円筒形	口縁～胴部片 口 (20.6cm) 高 26.0cm残	H-29G 埴輪集積	①白色物、灰物、細砂。 ②橙5YR6/6 ③彫痕 ④9本	先端は緩やかに外反、斜め上方を向く面をつくる。二条の突帯は断面台形状であるが崩れている。脚部には透孔が配置されている。外面は口縁部の先端を横なで、以下は刷毛目を施す。内面は指頭による面である。
16	円筒埴輪 円筒形	口縁～胴部1/4残 口 (19.1cm) 高 11.5cm残	H-29G 埴輪集積	①赤・白色物、中・細砂。 ②橙2.5YR7/6 ④9本	器面は磨減が著しい。突帯は断面台形状を呈する。外面には刷毛目が施される。
17	円筒埴輪 円筒形	口縁部片 口 (22.0cm) 高 4.0cm残	H-29G 埴輪集積	①赤色物、灰物、細砂。 ②明赤褐5YR5/6 ③彫痕 ④12本	先端は外反、器内をやや薄くする。内外面に刷毛目を残す。
18	円筒埴輪 円筒形	胴部下位～基部 1/4残 底 (13.0cm) 高 19.7cm残	H-29G 埴輪集積	①赤色物、灰物、中・細砂。 ②明赤褐5YR5/6 ④11本	突帯は断面台形状を呈するが低い。外面には刷毛目、内面にはなでが施される。
19	円筒埴輪 円筒形	胴部下位～基部 1/5残 底 (12.0cm) 高 13.1cm残	H-29G 埴輪集積	①赤・白色物、灰物、細砂。 ②明赤褐5YR5/6 ④8本	突帯は断面台形状を呈するが取り付けは粗雑である。外面は磨減が著しいが刷毛目を施す。内面はなで、底面は丁寧になでている。
20	円筒埴輪 円筒形	基部1/3残 底 (10.4cm) 高 8.0cm残	H-29G 埴輪集積	①赤・白色物、灰物、細砂。 ②橙5YR6/6 ④11本	外面は刷毛目、内面に下位を丁寧になでたあと縦方向に粗雑な指頭による面を施す。
番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③硬度	成・整形の特徴
21	瓦 平瓦	破片	周堀 埋没土中	①白色物、細砂。 ②橙7.5YR7/6・暗灰黄2.5YR5/2 ③彫痕	表面に布目痕を、裏面に格子状の取目を残す。側面は磨削り、なでである。
番号	器種	量目	出土位置	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
22	須形御 鏡	1/2残 口 (12.9cm) 底 7.4cm 高 3.8cm	埋没土中	①細砂、白色細粒物を含む。 ②にぶい橙5YR6/4・褐灰5YR4/1 ③還元焰・硬質	ロクロ成形右回転。底部回転車切り。回転磨削り。体部の内外面にロクロ痕あり。

写 真 图 版



1. 調査区遠景 南東から



2. 3区全景 南東から



1. 4区北半全景 北西から



2. 4区南半全景 南東から



1. 58号住居遺物出土状態 西から



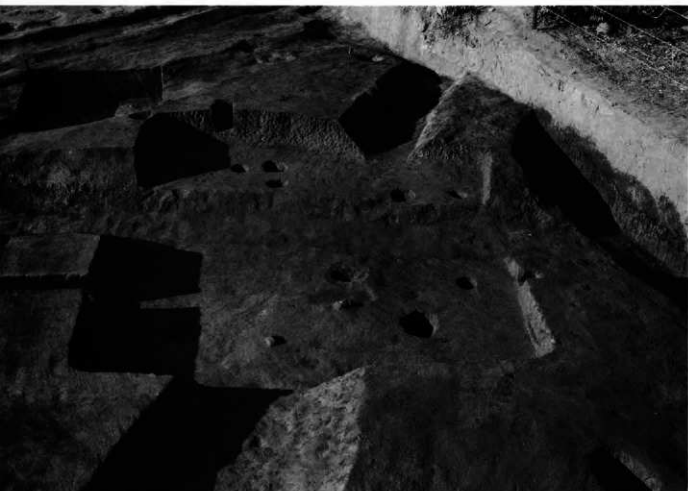
2. 58号住居遺物出土状態 北から



3. 58号住居力マド 西から



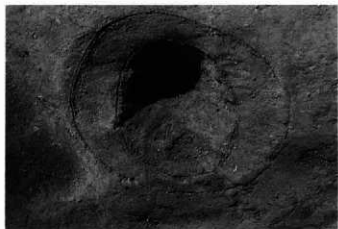
4. 58号住居全景 西から



1、123号住居全景 南東から



2、123号住居埋没土断面 南東から



3、123号住居炉 北東から



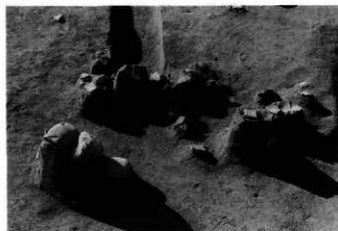
4、123号住居遺物出土状態 東から



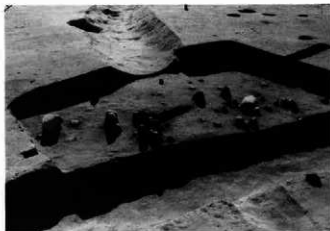
5、123号住居遺物出土状態 西から



1. 123号住居遺物出土状態 南東から



2. 123号住居遺物出土状態部分 南東から



3. 123号住居遺物出土状態部分 北から



4. 123号住居遺物出土状態部分 東から



5. 123号住居遺物出土状態部分 南東から



1. 106号住居遺物出土状態 南西から



2. 106号住居遺物出土状態 東から



3. 106号住居全景 南西から



4. 106号住居貯蔵穴埋没土断面 南西から



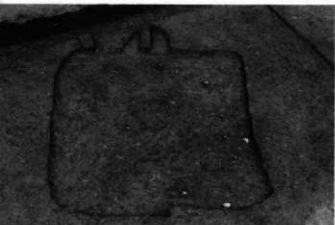
5. 106号住居カマド 南西から



1. 107号住居全景 南西から



2. 107号住居掘り方 南西から



1. 108号住居全景 西から



2. 108号住居炉 南東から



3. 108号住居遺物出土状態 西から



4. 109号住居埋没土断面 南西から



5. 109号住居遺物出土状態 南西から



1. 109号住居遺物出土状態部分 北西から



2. 109号住居貯蔵穴遺物出土状態 北から



3. 109号住居カマド 北東から



4. 109号住居床面 西から



5. 109号住居全景 南から



1. 117号・118号
住居全景 南東から



2. 120号住居全景
南東から



3. 120号住居掘り方
東から



1. 3区住居跡群全景 東から



2. 117号住居カマド 東から



3. 117号住居床下土坑 南から



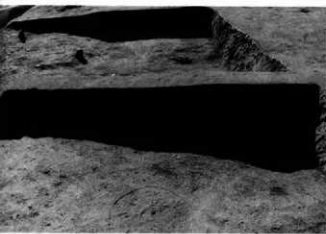
4. 117号住居貯蔵穴 南東から



5. 120号住居全景 東から



1. 121号住居全景 東から



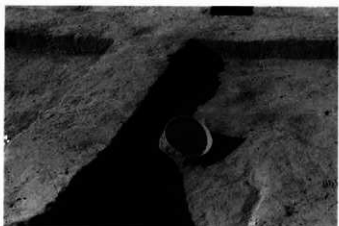
2. 121号住居埋没土断面 北西から



3. 121号住居遺物出土状態部分



4. 121号住居掘り方 北から



5. 121号住居掘り方遺物出土状態 北東から



1. 122号住居全景 北東から



2. 1号掘立柱建物跡 南東から



1. 5区全景 北西から



2. 5区埋没土断面 南から



3. 5区埋没土断面 西から



4. 5区埋没土断面 北から



5. 5区埋没土断面 東から



1. 110号住居カマド 西から



2. 110号住居遺物出土状態部分 北西から



3. 110号住居全景 北西から



4. 110号住居掘り方 西から



5. 110号住居カマド掘り方 西から



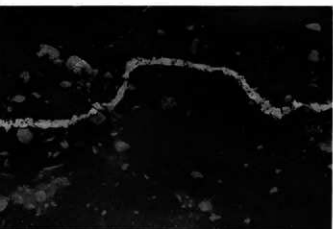
1. 113号住居全景 西から



2. 113号住居遺物出土状態部分 西から



3. 113号住居カマド 西から



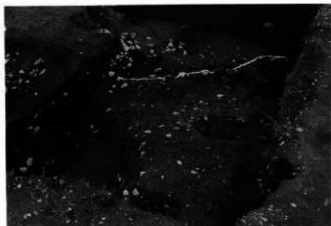
4. 113号住居カマド掘り方 西から



5. 113号住居掘り方 西から



1. 111号住居全景 西から



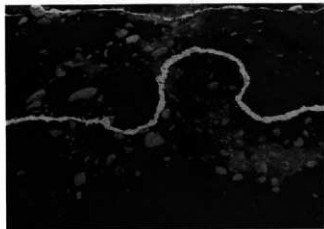
2. 111号住居掘り方 西から



3. 112号住居全景 南から



4. 112号住居掘り方 南から



5. 112号住居力字ド 南から



1. 114号住居全景 北から



2. 114号住居遺物出土状態部分 北から



3. 114号住居カマド 北から



4. 114号住居遺物出土状態部分 北から



5. 114号住居カマド掘り方 北から



1. 115号住居全景 南から



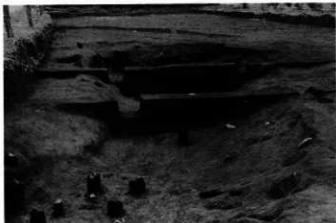
2. 116号住居掘り方 南西から



1. 1号墳全景(H11年度調査) 北から



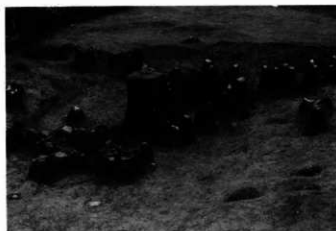
2. 1号古墳全景(S63年度調査) 北から



1. 1号古墳埋没土断面 南東から



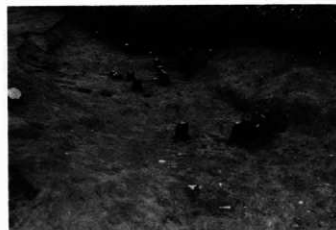
2. 1号古墳埋没土断面 北東から



3. 1号古墳東くびれ部堀遺物出土状態 南東から



4. 1号古墳西くびれ部堀遺物出土状態 北から



5. 1号古墳後円部東堀(S 63年度調査) 北から



6. 1号古墳後円部東堀(H 1年度調査) 北から



7. 1号古墳前方面部全景 北西から



8. 1号古墳後円部全景 北から



1. 2号古墳埋没土断面 東から



2. 2号古墳埋没土断面 南から



3. 2号古墳全景 北から



4. 2号古墳東周堀遺物出土状態 北から



5. 2号古墳北周堀遺物出土状態 西から



1. 2号古墳馬形埴輪出土状態 東から



2. 3号古墳全景 北西から



1. 4号古墳全景(S63年度調査) 北西から



2. 4号古墳遺物出土状態 北西から



1. 4号古墳埋没土断面 東から



2. 4号古墳埋没土断面 南東から



3. 4号古墳遺物出土状態部分 北西から



4. 4号古墳遺物出土状態部分 東から



5. 4号古墳全景(H 2年度 調査) 西から



1. 5号古墳埋没土断面 北東から



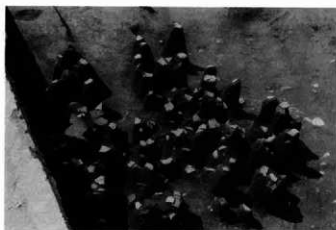
2. 5号古墳全景 北西から



3. 5号古墳全景(H2年度調査) 北東から



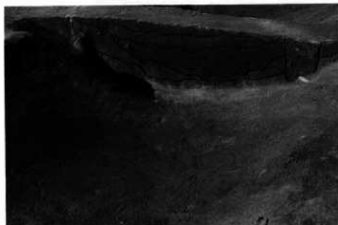
4. 5号古墳周堀(H1年度調査) 東から



5. 5号古墳遺物出土状態 南から



1. 6号古墳埋没土断面 南東から



2. 6号古墳埋没土断面 南から



3. 6号古墳全景 北から



4. 6号古墳遺物出土状態 南から



5. 6号古墳遺物出土状態 東から



1. 7号古墳全景 南から



2. 8号古墳全景 北から



1. 9号古墳本墓 北東から



2. 8号古墳埋没土断面 南東から



3. 9号古墳埋没土断面 東から



4. 8号古墳埋没土断面 北から



5. 9号古墳埋没土断面 東から



1. 1号円筒棺全景 北から



2. 1号円筒棺全景 東から



3. 1号円筒棺全景 西から



4. 1号円筒棺出土状態(復元)



1. 2区・3区旧河道全景 北東から



2. 2区旧河道全景 南東から



1. 3区旧河道 南東から



2. 2区旧河道 東から

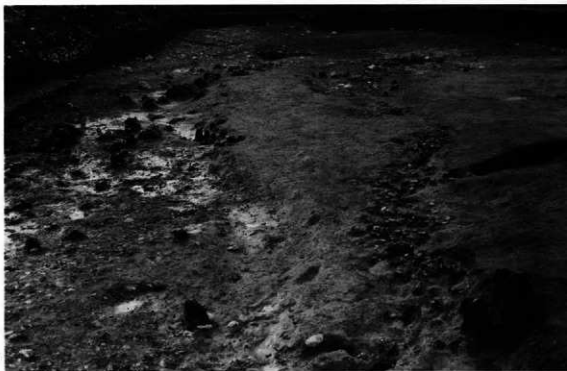


3. 2区旧河道 北西から

1. 2区旧河道1面 南東から



2. 2区旧河道2面 南東から



3. 2区旧河道 北から





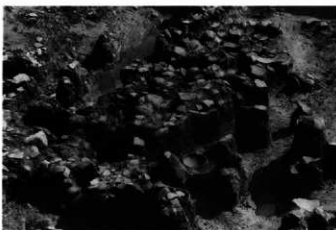
1. 旧河道埋没土断面 南東から



2. 旧河道埋没土断面 東から



3. 旧河道K-39グリッド遺物出土状態 西から



4. 旧河道J・K-40グリッド遺物出土状態 北西から



5. 旧河道J-41・42グリッド遺物出土状態 南東から



6. 旧河道J-44グリッド遺物出土状態 南東から



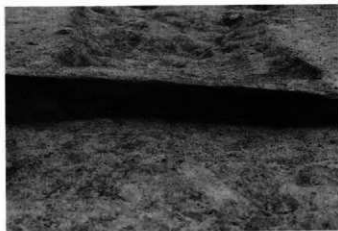
7. 旧河道J-46・47グリッド遺物出土状態 東から



8. 旧河道I-49グリッド遺物出土状態 北東から



1. 22号・24号溝全景 北西から



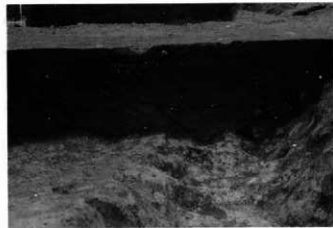
2. 24号溝埋没土断面 東から



3. 23号溝全景 南東から



4. 28号溝全景 東から



5. 23号溝埋没土断面 南東から



1. 29号溝全景 北東から



2. 29号溝埋没土断面 西から



3. 30号・31号・32号・33号溝全景 北東から



4. 31号・32号・33号溝埋没土断面 南西から



5. 35号溝全景 南から



1. 34号溝全景 東から



2. 34号溝断面 東南から



3. 37号溝全景 南東から



4. 34号溝埋没土断面 東から



5. 39号溝全景 南から



6. 38号溝(S 63年度 調査) 北西から



7. 38号溝(H 2年度 調査) 南から



1. 105号土坑埋没土断面 東から



2. 106号土坑埋没土断面 東から



3. 105号土坑 西から



4. 106号土坑 東から



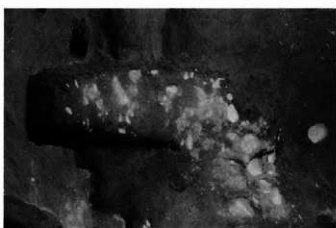
5. 110号土坑 南から



6. 102号土坑 西から



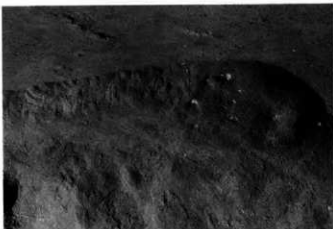
7. 109号土坑 北東から



8. 109号土坑 南西から



1. 95号土坑 南から



2. 97号土坑 西から



3. 99号・100号土坑 東から



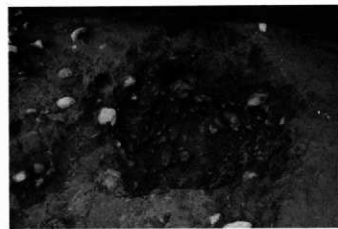
4. 101号土坑 北東から



5. 104号土坑 北から



6. 77号土坑 南から



7. 83号土坑 西から



8. 96号土坑 西から



1. 76号土坑 南から



2. 92号土坑 南から



3. 98号土坑 東から



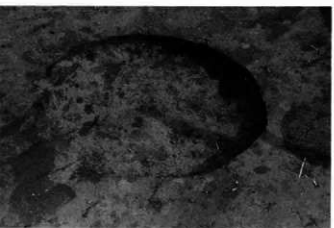
4. 107号土坑 南から



5. 111号土坑 北から



6. 87号土坑 南西から



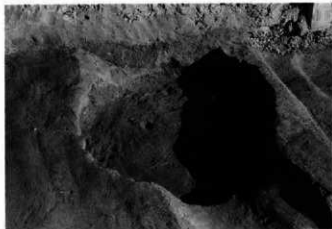
7. 89号土坑 北から



8. 90号土坑 南西から



1. 91号土坑 北から



2. 103号土坑 西から



3. 113号土坑 東から



4. 86号土坑 北西から



5. 80号・81号・82号土坑 北西から



1. 88号土坑 北東から



2. 93号土坑 北から



3. 94号土坑 西から



4. 117号土坑 南から



5. 108号土坑 東から



6. 116号土坑 東から



7. 114号・115号土坑 北西から



1. 78号土坑・7号井戸 南西から



2. 6号井戸 北西から



3. 9号井戸 東から



4. 8号井戸 西から



5. 9号井戸 北から



1. 1号道路状遺構 北から



2. 1号道路状遺構 南から



3. 成塚石橋遺跡説明板



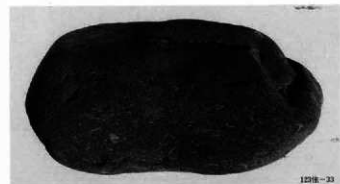
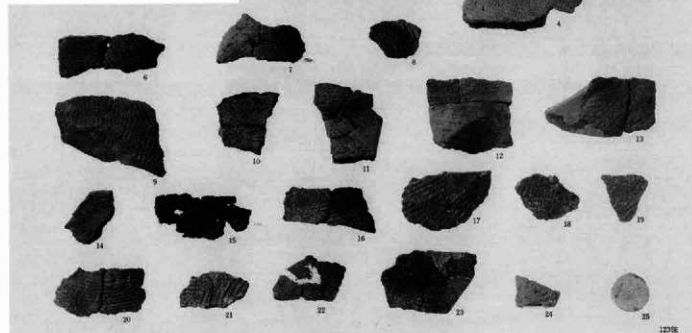
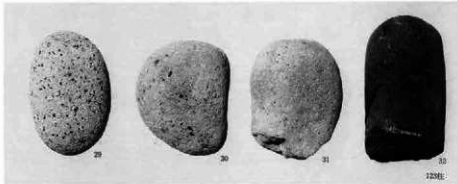
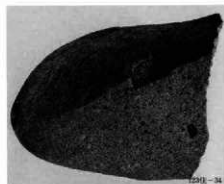
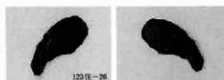
4. 成塚石橋遺跡説明板設置状況 南から



5. 成塚石橋遺跡説明板設置状況



6. 成塚石橋遺跡説明板設置状況 北から





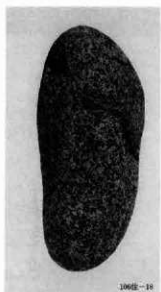
1061E-15



1061E-16



1061E-8



1061E-18



1061E-12



1071E-7



1061E-17



1071E-5



1071E-6



1061E-1



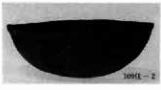
1061E-4



1061E-3



1061E-5



1061E-2



1061E-6



1061E-9



1061E-1



1061E-2



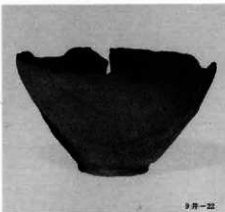
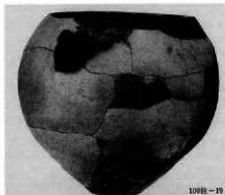
1091E-13



1091E-12



1091E-17





117B-4



117B-5



117B-6



117B-7



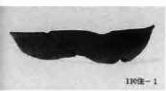
117B-8



120B-1



121B-3



119B-1



119B-3



119B-4



121B-2



119B-5



119B-2



119B-6



121B-1



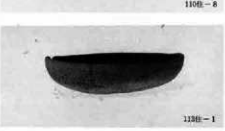
110B-8



110B-11



110B-7



112B-1



113B-2



113B-5



113B-6



113B-9

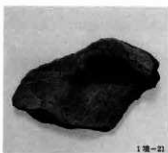




1號-19



1號-12



1號-21



1號-10



1號-8



1號-7



1號-20



17



黑豆片



帽子?



11



1號-27



31

1號-31



15



18



帽?

1號的鑄印



1號-46



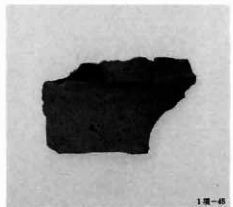
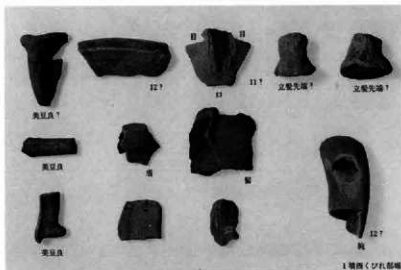
1號-34

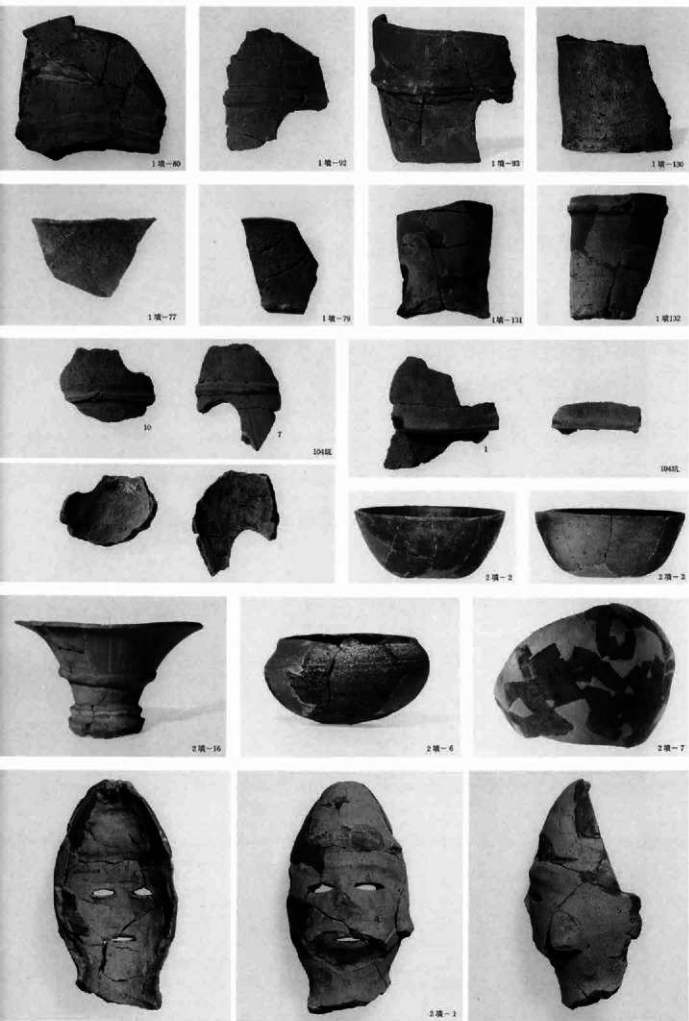


1號-25



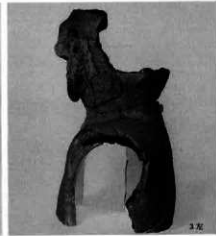
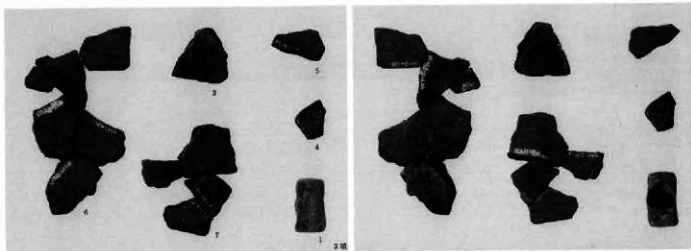
1號-36













4 號-7



4 號-8



4 號-9



4 號-6



4 號-14



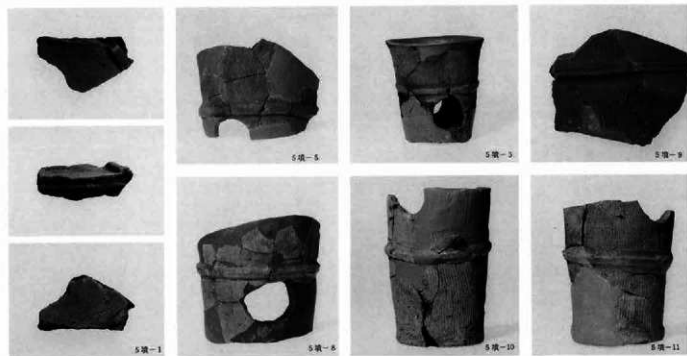
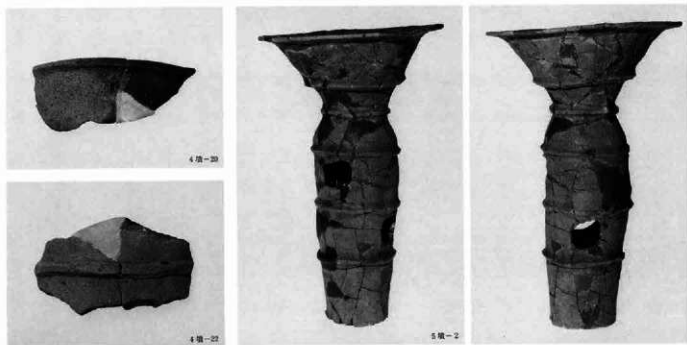
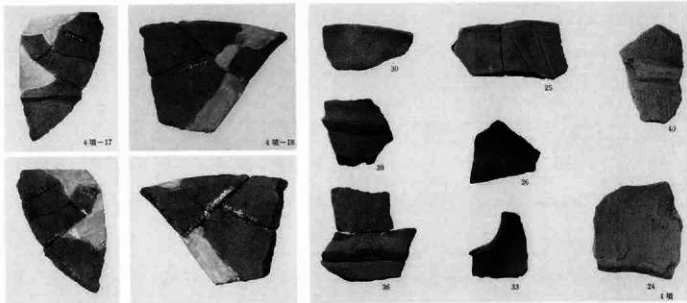
4 號-10

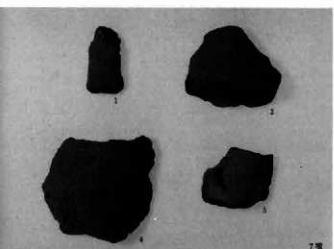
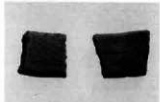
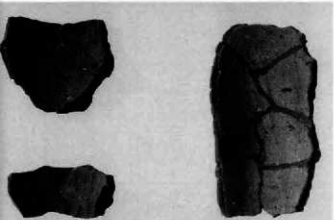
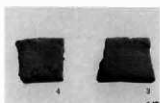
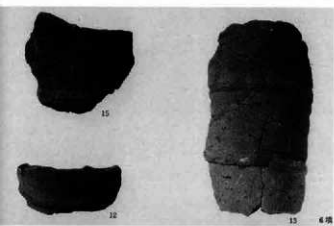
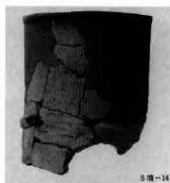
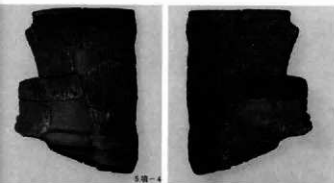


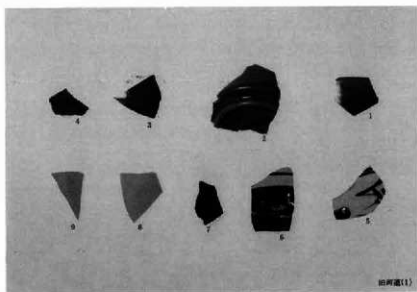
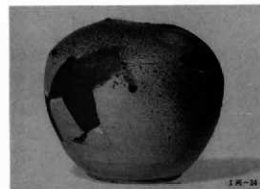
4 號-19



4 號-21









2 河-7



2 河-8



2 河-9



2 河-10



2 河-11



2 河-12



2 河-14



2 河-17



2 河-18



2 河-22



2 河-23



2 河-25



2 河-24



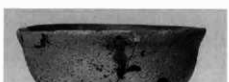
2 河-26



2 河-27



2 河-30



2 河-28



2 河-32



2 河-36



2 河-60



2 河-43



2 河-33



2 河-39



2 河-41



2 河-46







3 河-66



3 河-67



3 河-68



3 河-69



3 河-70



3 河-71



3 河-72



3 河-73



3 河-74



3 河-75



3 河-76



3 河-80



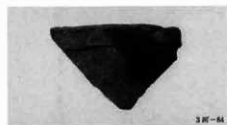
3 河-78



3 河-81



3 河-83



3 河-84



3 河-85



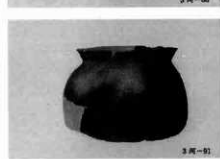
3 河-86



3 河-88



3 河-89



3 河-91



3 河-93



3 河-94



3 河-96



3 甲-08



3 甲-09



3 甲-105



3 甲-101



3 甲-106



3 甲-108



3 甲-110



3 甲-112



3 甲-114



3 甲-111



3 甲-120



3 甲-121



3 甲-122



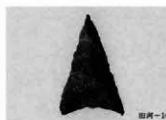
3 甲-123

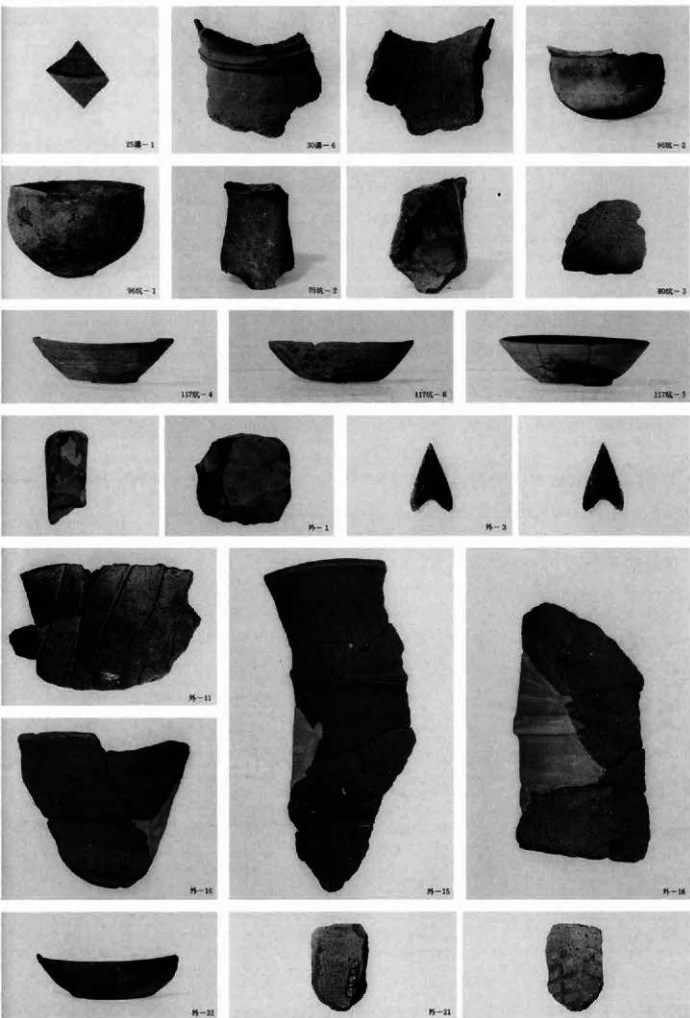


3 甲-124



3 甲-126





成塚石橋遺跡Ⅱ

一級河川鮎川河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

平成3年3月22日 印刷

平成3年3月27日 発行

編集／群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

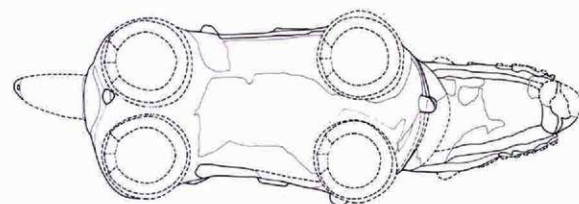
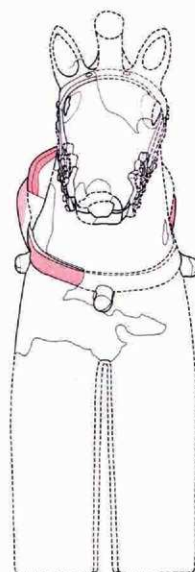
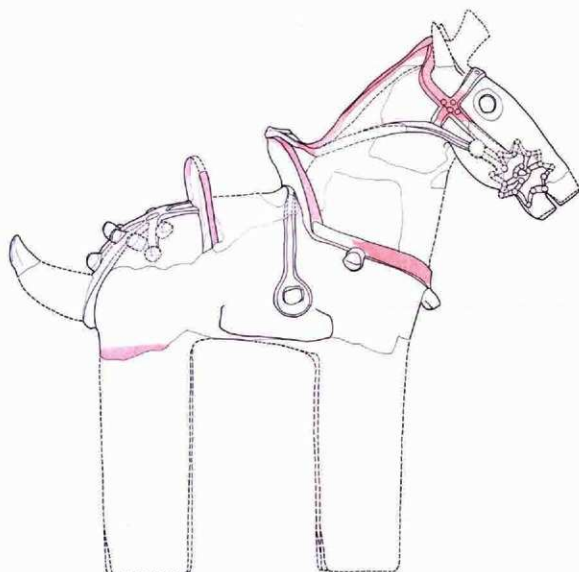
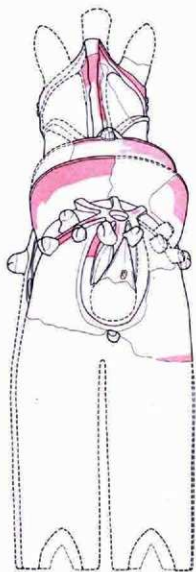
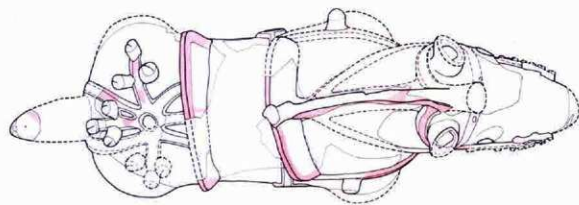
電話 (0279) 52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会

勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話 (0279) 52-2511(代表)

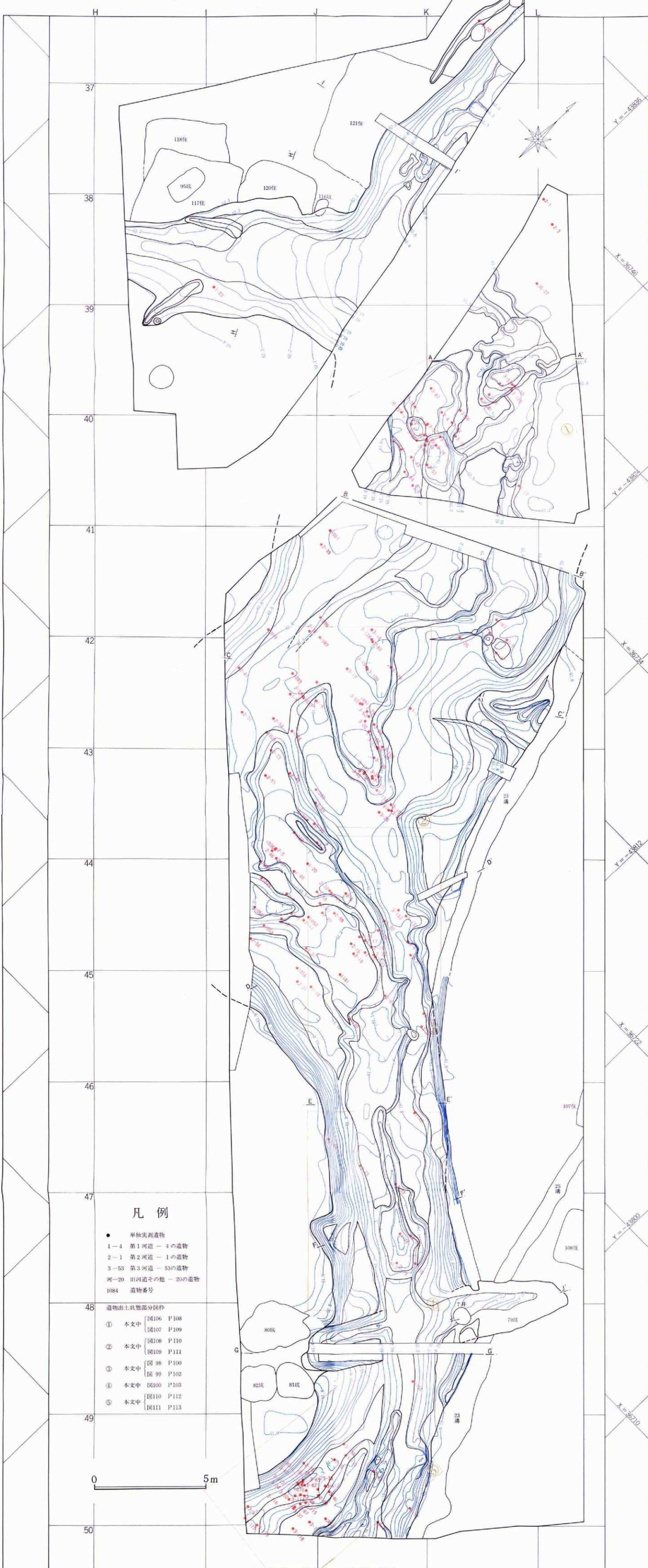
印刷／上毎印刷工業株式会社



付図1 成塚石橋遺跡
2号古墳馬形埴輪展開図

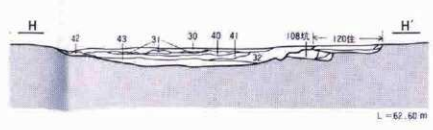
赤彩は、肉眼で判断できる部分に限った。復元線は破線で表わした。
脚の長さは、時期的にも地域的にも近い、塚廻り古墳群出土の馬形埴輪を参考にし、鞍轡から尻尾の付け根までの長さが4に對して、
腹から膝までの長さを3として復元した。蹄の形状は、本文図135
-2からの復元である。

付図2 成塚石橋遺跡旧河道平面図

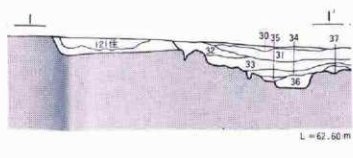


凡例

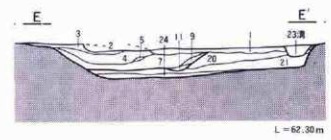
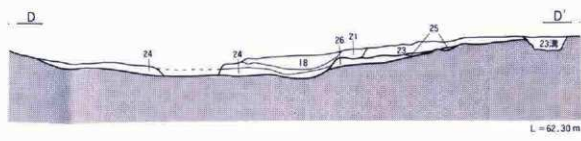
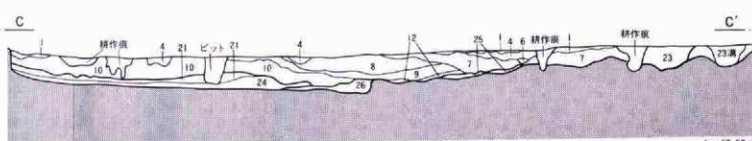
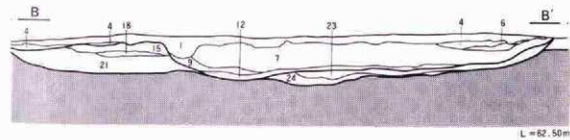
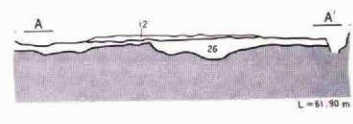
- 単独実測遺物
 - 1-4 第1河道 - 4の遺物
 - 2-1 第2河道 - 1の遺物
 - 3-53 第3河道 - 53の遺物
 - 河-20 旧河道その他 - 20の遺物
 - 1084 遺物番号
- 遺物出土状態部分図
- ① 本文中 { 図106 P108
図107 P109
図108 P110
図109 P111
 - ② 本文中 { 図98 P100
図99 P102
 - ③ 本文中 { 図100 P103
図110 P112
図111 P113



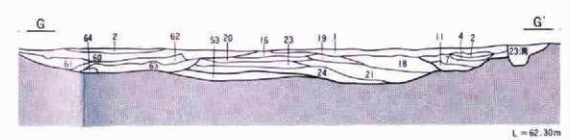
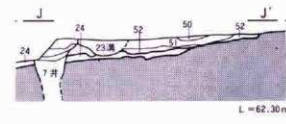
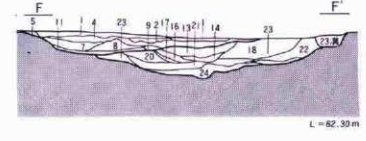
- 旧河道
- 30層 黒褐色土。砂質土。As-Bを多量に含む。
 - 31層 淡黄褐色砂層。As-Bを多量に含む。
 - 32層 暗褐色土。粒子細かく、粘性やや低い。小礫・ローム小ブロックを少量含む。
 - 33層 明褐色土。粒子細かく、粘性高い。ローム小ブロックを少量含む。軽石を少量含む。
 - 34層 黒褐色土。粒子細かく、粘性高い。ローム小ブロックを少量含む。
 - 35層 暗褐色土。粒子細かく、粘性高い。
 - 36層 暗褐色土。粒子やや粗く、粘性やや高い。砂利を含み、ローム小ブロックを少量含む。炭化物が中に薄く堆積。
 - 37層 褐色土。粒子粗く、粘性やや高い。砂利やローム小ブロックを多く含む。
 - 40層 黒褐色土。粒子細かく、粘性高い。
 - 41層 黒褐色土。粒子細かく、粘性やや高い。小礫を含む。
 - 42層 明褐色土。粒子細かく、粘性低い。ロームブロックを多く含む。
 - 43層 暗褐色砂礫層。中礫が多い。ロームブロックを多く含む。



第3河道
25層 茶褐色土。軽石散点する。軟らかく、粘性あり。
26層 砂礫層。



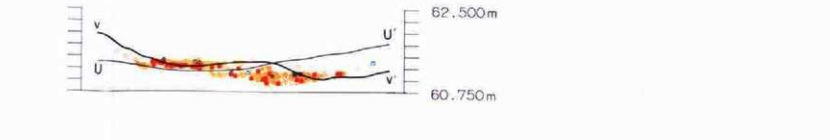
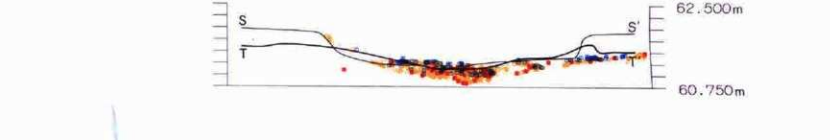
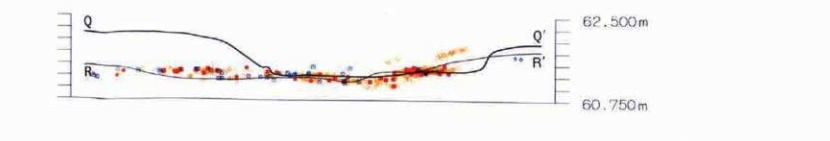
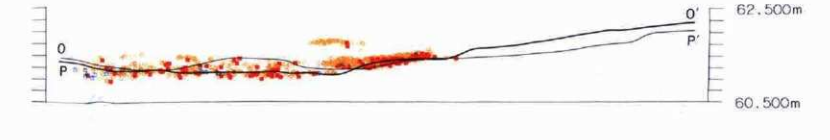
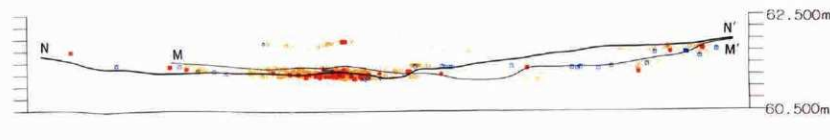
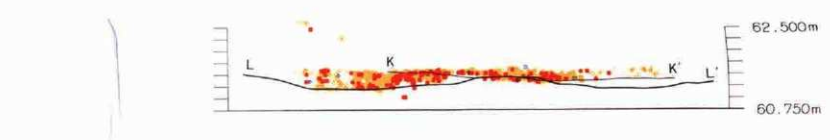
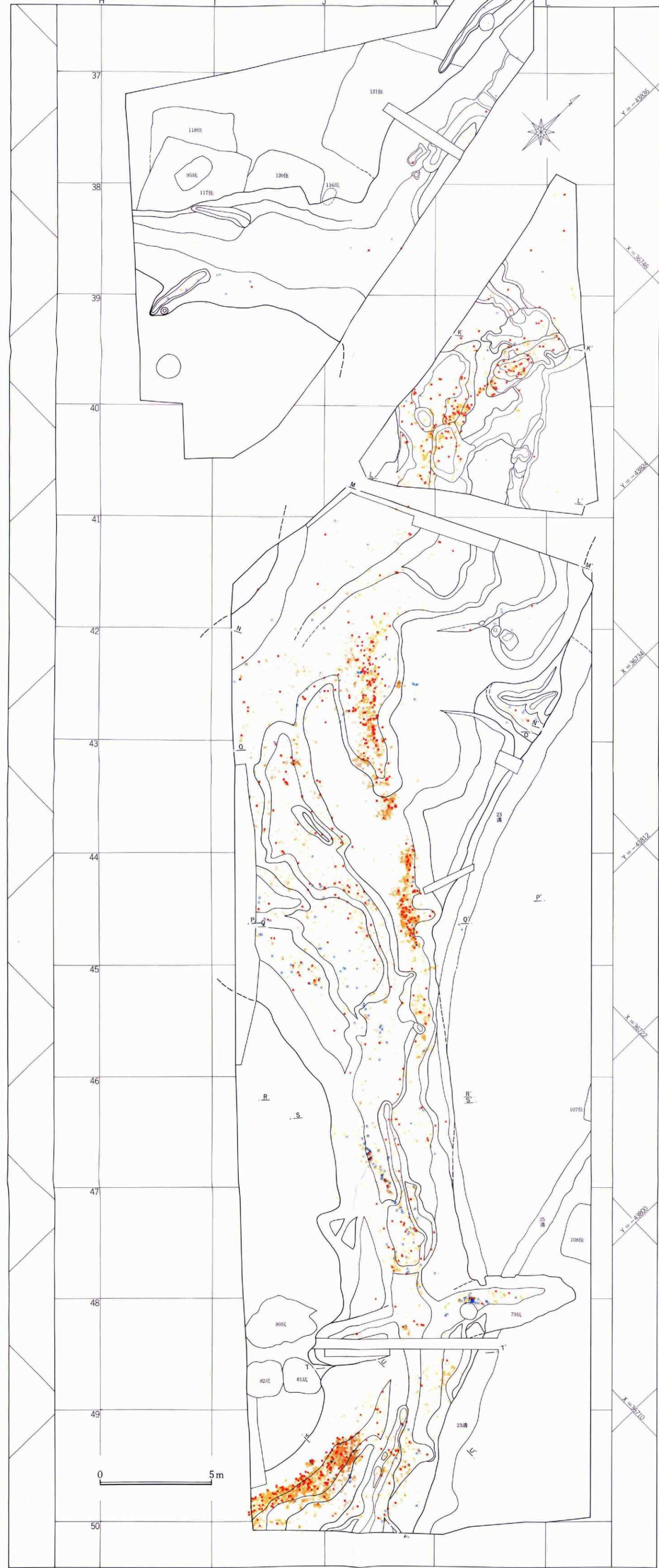
- 79坑
- 50層 茶褐色砂質土。軽石を多量に含む。しまり強い。
 - 51層 黒褐色土。炭化物粒、焼土粒、細バミスを含む。しまりない。
 - 52層 茶褐色土。黄褐色砂質土小ブロックを混じる。
- 80坑
- 60層 黒色土。白色粒を含む。
 - 61層 黄褐色土。ロームブロックを含む。
 - 62層 褐色土。ロームブロックを多量に含む。
 - 63層 暗褐色土。小礫、砂、ロームブロックを含む。
 - 64層 茶褐色土。砂質。



- 第1河道
- 1層 灰褐色土。As-Bを混入した土。
 - 2層 As-B。
 - 3層 灰褐色土。
 - 4層 黒色土。粘性大。しまっている。
 - 5層 黒色土。4層に似る。
 - 6層 暗灰黒色土。粘性が強く、軽石が僅かに入る。
 - 7層 暗褐色土。砂質。軽石を含む。
 - 8層 暗灰褐色土。砂質が強い。軽石を僅かに含む。
 - 9層 暗灰黒色土。ラミナ状堆積。
 - 10層 暗褐色土。白色軽石を多量に含む。ややしまる。
 - 11層 暗褐色土。白色粒を僅かに含む。粘性がある。
 - 12層 砂礫層。

- 第2河道
- 13層 黒褐色土。白色粒を含む。
 - 14層 暗褐色土。白色粒を含む。
 - 15層 暗灰黒色土。僅かに黒い粘性土が入る。
 - 16層 茶褐色土。砂質。白色粒を含む。
 - 17層 黒褐色土。粘性が優かにあり、白色粒を含む。
 - 18層 茶褐色土。ラミナ状堆積。
 - 19層 暗灰褐色土。砂質が強い。軽石を僅かに含む。
 - 20層 暗褐色土。粘性がある。炭化物を僅かに含む。
 - 21層 暗褐色土。10層より軟らかく、粘性あり。軽石散点する。
 - 22層 黒色土。僅かに白色粒を含む。粘性が強い。
 - 23層 褐色土。ロームブロックを僅かに含む。
 - 24層 砂礫層。

付図3 成塚石橋遺跡旧河道遺物分図



凡 例

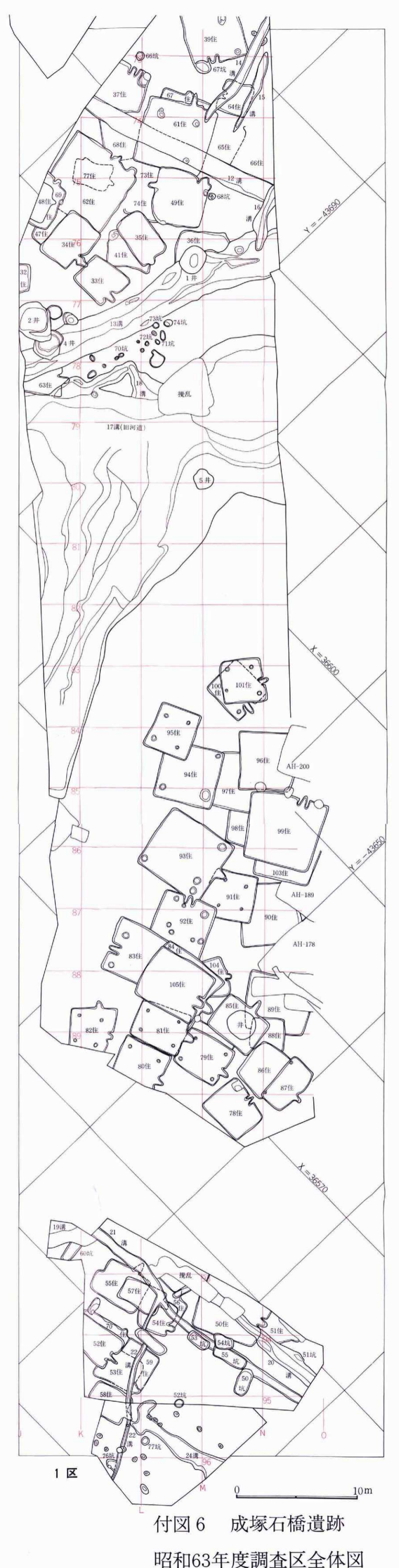
<ul style="list-style-type: none"> ◆ 石製模造品 ● 埴 ■ 高 杯 □ 須 恵 器 ◇ 縄 文 土 器 × 土 師 器 ○ 埴 輪 ● 紡 錘 車 	<ol style="list-style-type: none"> 1. エレベーション 太線 下流側 例 { K-K' 細線 上流側 } { L-L' 2. 垂直分布図は、各ポイント間 (ex. K-L) の遺物の垂直出土状態である。 3. 2本のエレベーションより下位に表現されている遺物は、凹地に堆積していたことを表す。 4. U-V間は、U-U'より下流側の全遺物を載せている。 v-v'は、U-U'に平行する範囲の最下流地点である。それ以南 (下流側) の遺物は、エレベーションの下位に出るものもある。
--	---

付図4 成塚石橋遺跡旧河道土師器遺物分布図

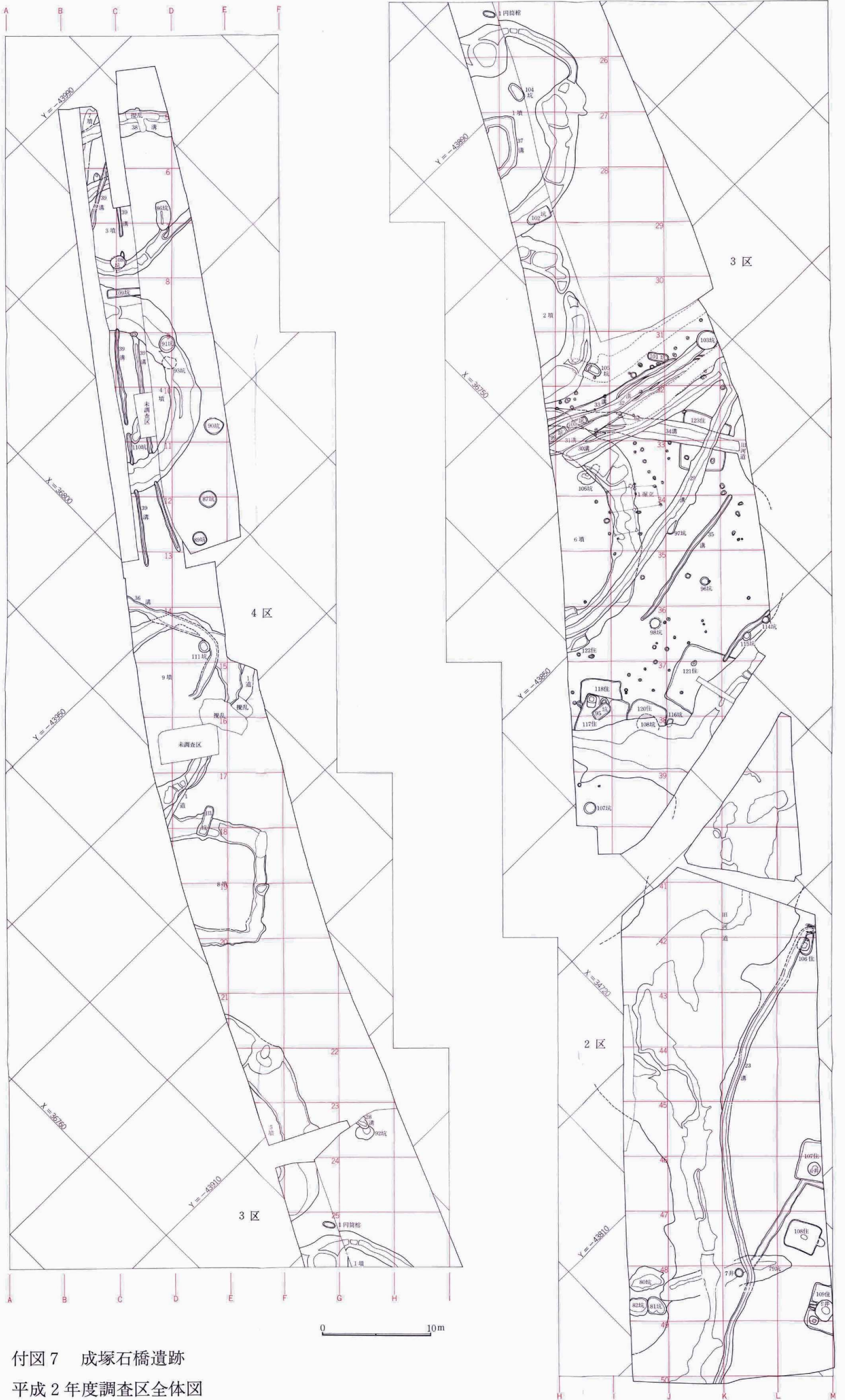


凡例

- 土師器 器種別マーク
- △ 壺
 - ◇ 甗
 - × 埴
 - ★ 手づくね
 - 鉢
 - 楕
 - ▲ 杯
 - ⊗ 高杯
 - 甕
 - 甕
 - 台付甕



付図6 成塚石橋遺跡
昭和63年度調査区全体図



付図7 成塚石橋遺跡
平成2年度調査区全体図